三大社会病（結核、アルコール中毒、梅毒）と自然主義期の小説

課題番号 19520240

平成１９～２１年度科学研究補助金（基盤研究(C)）

研究成果報告論考

平成２２年３月

研究代表者　寺田光徳
熊本大学文学部教授

【目次】

はしがき　pp.　2-　4
第１編　１９世紀のフランス文学と結核
　第一部 バルザックとロマン主義作家たち（デュマ・フィス、ミュルジェール）の肺癆　pp.　5- 30
　第二部 アブーの『ジェルメーヌ』とゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』の肺癆　pp.　31- 42
　第三部 「ルーゴン=マッカール叢書」の肺癆　pp.　43- 72
第２編　「ルーゴン＝マッカール叢書」のアルコール中毒［改訂版］pp.　73-126
第３編　その後の梅毒　pp.　127-135

【初出一覧】

１．19 世紀のフランス文学と結核
　第一部 :『熊本大学文学部論叢』第 100 号、熊本大学文学部、2009 年 3 月、
　第二部 :『熊本大学社会文化研究 8』、熊本大学大学院社会文化科学研究科、2010 年 3 月
　第三部 :『熊本大学文学部論叢』第 101 号、2010 年 3 月
　（旧稿に若干の加筆修正を施した）

２.「ルーゴン=マッカール叢書」のアルコール中毒［改訂版］
　『熊本大学文学部論叢』第 98 号、2008 年 3 月、「前編」
　『熊本大学社会文化研究 6』、2008 年 3 月、「後編」
　（ただしこの旧稿前編、後編に対しては大幅な改訂を施した）

はしがき

病気をテーマにした文化史をのぞいてみると、ヨーロッパについてはその時代を代表する疫病つまり流行病があったと記されるのが常だ。具体的には中世のハンセン病、そして特に 14 世紀に猛威をふるったペスト、ルネサンス期の梅毒、それから 20 世紀初頭のスペイン風邪などのことである。これらの病気は、たとえば村上陽一郎の『ペスト大流行』（岩波新書、1983 年）では「ヨーロッパ中世の崩壊」という副題が付けられているように、常日頃われわれが体験するような医者と患者の枠を越えて、人類社会にとって脅威となるとともに、社会全体をそれへの対処に走らせて、ついには社会構造まで変貌を余儀なくさせてしまうほどの甚大な影響力を行使する。このような歴史の変貌に加担する病気こそ社会病の名にもっともふさわしい。

それでは 19 世紀のフランスで社会病の名を冠することのできる病気とは何であろう？歴史の証言を拾うと、1905 年にルイ・レノンが前世紀を見渡したところで、「社会医学」的な観点から『国民病 —— 性病、アルコール中毒、結核』という書を公刊している。特に 19 世紀末から 20 世紀初めにかけての時期、フランスがこのように「国民病」を通して自らの現状と将来を意識するのは、イギリスを始めとする他のヨーロッパ列強と競い合ってアフリカやアジアなどの植民地獲得競争に乗り出そうとしていたからである。そしてそこには国家や民族の発展に阻害要因としてはたらきかねない病気が当然のこととして含まれていた。レノンが恐れる性病の中でもっとも恐れられたのはもちろん梅毒である。フランスの未来に対して梅毒、アルコール中毒、結核を標的として警告を発したのはレノンだけにとどまらない。1907 年にはエミール・ピエレが『民族の脅威』として、やはり梅毒、アルコール中毒、結核を名指しでねらい打ちしようとしている。それから 10 年あまりたった 1918 年にも医者の J・エリクールが同じように結核、梅毒、アルコール中毒の三大社会病に不妊を加え、その名も『社会病』と銘打った啓蒙書を公刊し、「社会病というのは質と量の両面から社会の連帯を脅かしその結果として社会の将来を危うくするものだ」と危機感を繰り返し露わにする。[1]

我々の対象とする 19 世紀の後半のフランスというのは地理的、歴史的に縁遠いフィールドなので、声高に社会に対する危機感を煽られてもなかなか想像しがたい。そこで結核、梅毒、アルコール中毒という社会病がもたらす危機的な状況を具体的に把握しておかなければなるまい。それには統計上の単純な数字が間違いなく最大の説得力を持つであろう。

フランスの近代的な統計としてはもっとも信頼を置かれているもののひとつで、19 世紀末フランスの人口動態を探るためによく引用されるのが、医者で統計をよくしたジャック・ベルティヨン（1853-1914）の報告である。そこで今回の研究対象の文学作品が舞台に設定しているパリの 19 世紀最後の四半世紀を中心にして具体的な数字を挙げておこう。

まず 1880 年のパリの人口は 2,269,000 人であった。これに最も近い時期（1874~1878）の死亡率は 1000 人当たり 23 人とされている。[2] ついでベルティヨンはフランスで死亡率を高める要因として当時死病であった結核の歴然たる影響を明瞭な数字で示している。「1885 年に住民 100,000 人当たりの死者」の内訳では「肺癆（肺結核の旧名）」による死者数は 453 人であった。肺癆の死者数だけでは評価が困難なので、死因となった他の病気を

比較のために挙げてみると、ジフテリア 79 人、麻疹 70 人、腸チフス 63 人と続く。さらに百日咳 12 人、猩紅熱 9 人、天然痘 9 人が表中に付け加えられている。　この統計表に従えば、おもだった死病による死亡者 695 人中肺結核によるものが断然群を抜いており、実に 65 パーセントを占める。翌年にも前年の 1886 年について同じ統計が取られているのでそれを覗くと、事情は大差無く、肺癆 470 人、以下ジフテリア 73 人、麻疹 56 人、腸チフス 46 人、百日咳 25 人、猩紅熱 18 人、天然痘 10 人であり、死亡者 698 人中再び他を圧倒して肺結核は全体の 67 パーセントになっている。[3] 当時の人々にとって病気の中で肺結核がいかに恐怖の的となっていたかはこの数字が如実に物語っているだろう。

肺結核がその犠牲者数によって脅威を示しえたのに対して、それに比肩するような数字でもってアルコール中毒や梅毒の恐ろしさを表すことは難しい。アルコール中毒について具体的な統計数字を探してみると、「フランスの国立精神病院における患者 100 人中のアルコール中毒患者数」は 1881~1885 年期では男性 21.9 人、女性 5.0 人、男女合計した平均値で 14.4 人に上る。[4] 当時アルコール中毒患者は精神病院に収容されていた。結核死亡者数の信じがたい数字を見せられた後ではわれわれの想像力は麻痺しているが、それにしても精神疾患を患う入院患者の男性のうち 5 人に 1 人強がアルコール中毒というのはやはり驚くべき数字だろう。それとは別に『19 世紀ラルース大辞典』の「アルコール中毒」の項には殺人、自殺、重大事故でアルコールそのもののもたらす危害の深刻さが叫ばれている。1876 年にはフランスの自殺者の 25 パーセントがアルコール中毒者だとされる。以下はフランスではなくドイツの統計だが、1874 年に有罪判決を受けた者のうち、殺人の 46 パーセント、過失致死の 63 パーセント、重症事故の 74 パーセントがアルコール中毒患者が犯したものだという。このような数字から見ると、アルコール中毒がもたらす危険というのは、アルコール痛飲者の死亡数そのものに加えて、というよりむしろそれ以上にアルコール中毒者が他者に与える危害の方が甚大で、社会的反響が大きかったことが判る。

梅毒に関してはフランスやパリの被害状況を直截に表す数値は見いだしがたいが、その代わりに先ほどのルイ・レノンの著書から参考となる数字を挙げておくと、1895 年にフランス陸軍を調査したところでは 489,785 人の兵士中 4,355 人が梅毒患者で、率にして 1000 人中 8 人が梅毒を罹病している。そして 2 名の下士官と 8 名の兵士がそれで犠牲になり、16 名の除隊者が出た。これは実数として 1000 人中 8.25 人の腸チフス患者とほぼ同じだという。[5] J・エリクールの場合はもっと極端で、根拠となる資料は明示せずに、「1900 年フルニエ教授はパリの 100 人の男性についてすくなくとも 20 パーセントが梅毒を罹患していると見積もっていた。1914 年にはゴーシェ教授がこの割合を 30 パーセントに持っていく。1916 年になると彼は最近のその数字を 3 分の 1 あるいは半分にまで増やさなければならないと考え、1917 年にはこの病気は 3 分の 2 まで増加したと断言する。」[6] この時代、梅毒は遺伝すると考えられて、「晩発性梅毒」、「疑似梅毒」という概念を手がかりに変性・奇形や精神異常などあらゆるところに梅毒の影を突きとめようとしたから、[7] とんでもない数字が踊ることになった。いずれにせよ、これだけでも 19 世紀末から 20 世紀初めにかけてフランスで梅毒がもたらした危機感の大きさだけはわれわれにも想像がつくであろう。

ところで、社会に甚大な影響を及ぼし歴史を動かす重大な要因のひとつとなったこうした社会病は、文学特に小説作品ではどのような現れ方をするのだろうか。小説家が作品中

に病気を取り込もうとするとき、登場人物の生活中の単なるモチーフとしてでなく、彼らの生を長い間混乱させ、方向転換を余儀なくさせるほど影響力の大きいものであればあるほど、小説家はリアリストとしてまず何をおいてもその病理学に忠実でなければならないだろう。科学としての病理学というのは、原理的には、病気という現象を対象にするリアリズムの実現に他ならない。それは病理学が科学であろうとするかぎりそれが依拠する考え方にはリアリズム以外ありえないからだ。しかしこの病理学はまた科学であるからこそ真理を目指して前進しようとする科学の歴史に支配されざるをえない。時代を代表とする様々な病気が存在するのと同様に時代の限界を示す病理学もまた存在するのである。

したがって小説家が病気の記述にあたってリアリズムに徹して、同時代の病理学に忠実に従おうとすれば、そうした時代の限界を露わにする病理学のために後世の読者の眼の前に滑稽な姿をさらすことも時には出てくるだろう。さらにまた小説家は彼らの作品において病気を記述する際に病気の論理であるこのような病理学に可能な限り従おうとするであろうが、すくなくともそれも小説の説話の論理に矛盾しないかぎりにおいてであることは言うまでもない。説話の論理が支配しているからこそ文学作品は独立した一個の虚構世界として成立しているのだとすれば、いわば外的な現実としてある病理学はそれとどこかで矛盾を来すことも起こってくるであろう。そのような意味では病気をテーマにした文学作品は説話の論理と病理学との矛盾と葛藤の場だとも言えるのである。

そこで以下の論考では、自然主義を中心とするフランス文学作品中で 19 世紀の三大社会病（結核、アルコール中毒、梅毒）がどのように描写されているかを、病理学と説話法の観点から考察することになろう。

【注】

1. Louis Rénon, *Les Maladies populaires. Maladies véniériennes, alcoolisme, tuberculose*, Masson, 1905; Émile Pierret, *Le péril de la race. Avarie, alcoolisme, tuberculose*, 1907; J. Héricourt, *Les Maldadies des Sociétés. Tuberculose, Syphilis, Alcoolisme et Stérilité*, Ernest Flammarion, 1918, p. 2.
2. Jacques Bertillon, «Les mouvements de la population de Paris», *Revue d'hygiène et de la police sanitaire*, 1886, pp. 608 et 614. ちなみにマクミラン（『新編世界歴史統計 1750~1993 欧州編』東洋書林、2001）も、これとと同じ人口数を挙げている。
3. Jacques Bertillon, «État sanitaire comparé des principales villes d'Europe en 1885», *Ibid*., p. 841 et «État sanitaire comparé des principales villes d'Europe en 1886», p. 468.
4. Jacques Bertillon, *L'Alcoolisme et les moyens de le combattre jugés par l'expérience*, Victor Lecoffre, 1904, p.63. J-Ch・スールニアの引用する別の統計数字では「フランスで収容された 8 万人の精神異常者のうち、25 パーセントはアルコール中毒が原因」であるとされた（『アルコール中毒の歴史』法政大学出版局、1996 年、p. 147）。
5. Louis Rénon, *Ibid*., p. 109.
6. J. Héricourt, *Ibid*., pp. 124-125.
7. A・コルバン、「先天性梅毒の歴史」『時間・欲望・恐怖　歴史学と感覚の人類学』所収、小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳、藤原書店、1993 年、pp. 143-170。

第　１　編

１９世紀のフランス文学と結核

第一部

バルザックとロマン主義作家たち（デュマ・フィス、ミュルジェール）の肺癆

はじめに

結核を作中に取り込んだ小説家として日本人読者にすぐ思い浮かぶのは堀辰雄だろうか。彼はまず『美しい村』（1934）の中で、軽井沢に点在する別荘や小川沿いの散歩道とそこで出会ううら若い女との交感の模様を想起を交えた時間の輻輳する意識に載せて描いて、プルーストの『失われた時を求めて』にあるコンブレーの散歩道に関する描写を彷彿させているが、そこには「クレオゾオルのぷんぷんする」「サナトリウムの赤い建物」が何度も現れては不安な影を投げかけている。

続いて堀は『風立ちぬ』（1938）で、結核との自らの闘病体験に基づいて、サナトリウムにおける療養生活の中にまで踏み込む。そこでは、婚約を交わしたカップルを主人公にして、一方の女性がサナトリウムにおける闘病生活の果てに亡くなり、その 1 年後二人が闘病生活をした軽井沢を他方の男性が再び訪れて、とある別荘で二人の体験を文章化しようとするところまでを描いている。作中で結核との闘病生活を生々しく想起させるのは、診断に利用されるレントゲン写真とそこに写った結核の病巣、サナトリウムでの療養で重視されたベランダでの日光浴、それから結核患者の症状として典型的な乾咳（からせき）、微熱、血痰、喀血である。しかし、それらは比較的淡々と表現され、むしろ死を間近に控えた女性とそれに付きそう男性の穏やかだが悲愴感を帯びた交情が小説の全体を覆っている。

サナトリウム文学あるいはもっと広く結核文学と名付けうる文学作品について日本やフランスに限定しないで考えるとすれば、トーマス・マンの『魔の山』（1924）を最高傑作とすることにだれも異論はなかろう。この小説はドイツ人技師ハンス・カストルプ青年を主人公にして、スイスのダヴォス郊外にある国際サナトリウム「ベルクホーフ」におけるヨーロッパの人々のいわば隔離社会の人間模様を描いているのだが、時は第 1 次世界大戦を控えて人文主義者ゼテムブリーニと急進的カトリックのスコラ学者ナフタという二人のイデオローグによって果てしなく繰り返される論争や、美貌のロシア婦人ショーシャと主人公で小説の視点人物であるカストルプとの「ヴァルプルギスの夜」の昂揚を軸に構成された二人の恋愛劇の顛末と、同時代の社会的現実の一断面が逆にサナトリウムという隔離社会故に魔術的に浮き彫りにされて、赤裸に展開されている。

『魔の山』は大作だけに結核に関する医療的関心の点からしても他の作品の追随を許さない。そもそも高山地帯のサナトリウムというのが当時特効薬を持たない結核に対して大気療法をもっとも効果的に実現する目的で 20 世紀初めから欧米で競って建てられた医療施設であり、『魔の山』の舞台となったダヴォス周辺は高山の新鮮な空気を売り物にした「サナトリウム産業」のメッカとして知られていたのである。[1] 小説中には結核の症状や診断・治療の具体的な様子、そして当時の結核病理学の基本に関わる考え方が散在している。その中で我々の目を引くものを挙げると、まず治療法ではサナトリウム療法に付随する長時間に及ぶベランダでの日光浴、質量とも豊かな 4 回の食事（これにお茶の時間も加

わる)、外科治療としては、胸郭内に人工的にガスを入れ肺とそこにある結核性空洞を縮小させ、治癒効果を高めようとする人工気胸術、肺切開やそれに伴う肋骨切除術があげられる。結核診断法では聴診や打診の他に、小説の終わりの方でカストルプの熱を結核ではなく「連鎖球菌」のせいだと明らかにする血液検査、それからレントゲン写真がある。レントゲン写真に対しては作者のマンが特別に関心を持っていたらしく、ショーシャがサナトリウムを発つとき、その形見にガラス板に入った彼女のレントゲン写真をカストルプにもらい受けさせて、朦朧とした上体の輪郭や骨格、胸腔の諸器官を眺めさせたり、また彼が彼女に対する愛を告白する際には自分のレントゲン写真の結核痕をさしてショーシャに対する愛が彼女と出会う前からすでに始まっていたことの証だと述べさせたりしている。そのほかカストルプが叔父に自らの病状を述べる際に、結核形成、病巣の乾酪化、そして空洞化から肺の破壊にいたる過程について専門的な病理学的説明をするくだりや、院長のベーリングが説く血液中に結核菌が存在していても結核性疾患を引き起こさない健康な保菌者が存在するという近代的な病理学の主張は、現代の病理学と食い違うところはない。

ところで今言及した、結核の文学作品として有名な『風立ちぬ』や『魔の山』は、出版年からして明らかなように、症候、診断、治療を含む結核の病理学がおよそ完成の域に近づいて、あとはストレプトマイシンという特効薬の開発を待つばかりになった頃の小説である。そこでこの時期までの結核の医療に関する歴史を瞥見しておいた方がよかろう。

I 章　19 世紀の結核

１．結核の医療史瞥見

結核の病原菌をコッホ菌（bacille de Koch）と発見者コッホ［1843-1910］の名を冠して言うことがあるように、コッホの結核菌発見（1882）は画期的出来事であり、それに触れずして結核の歴史を語ることは許されない。その当時結核は、死亡原因の中では 4 分の 1 を占めると言われ、人類にとっては最大の災厄であった。その病因が突き止められたのであるから、結核に関する病因論を皮切りに、結核の病理学や、ことに患者に対する診断・治療に飛躍的な進歩が遂げられるという期待が一挙に高まった。

その後 1895 年のレントゲン［1845-1923］によるＸ線の発見、1907 年のピルケ［1874-1929］による結核診断法としてのツベルクリン反応の開発があり、まず結核診断の分野に著しい進歩があった。いま予防法としてなじみ深いカルメット［1863-1933］とゲラン［1872-1961］の開発した弱毒結核菌ワクチンのＢＣＧ（**B**acillus　**C**almette-**G**uérin）接種が成功したのは 1921 年のことであった。このように診断と予防法が確立されたとしても結核そのものを退治することができなければ、いったん感染してしまった患者にとっては結核はいぜんとして不治の病であることに変わりはない。残るは結核菌本体に直接作用し患者を結核から治癒させることのできる薬剤の開発である。それは 1944 年になってワクスマン［1888-1973］の抗生物質ストレプトマイシン開発によって実現を見る。こうして結核は近代の医学に多大の恩恵を蒙り、今では、先進諸国に限ってみると、死亡原因の第 1 位を占める病気ではなくったのである。

このような結核の脅威の後退は統計的数字によればいっそう明らかである。「はしがき」

とは別の数字を挙げると、医学者で統計をよくしたブルーアルデール［1837-1906］によれば、「19 世紀の終わりは結核がすべての災厄の中でもっとも多くの死者を出していた。［・・・］フランスでは年間 70 万人の死者のうち 15 万人が死亡率の第 1 要因である結核に帰すことができる。結核は腸チフスあるいはジフテリアの 10 倍近くもの死者を出している」。[2] 比較のために歴史家ピエール・ギヨームが彼の著書で採用している「1 万人あたりの肺結核による死亡者数」で見てみると、1888-1897 年ではおよそ 36 人だと算定される。しかしこの数字は当時すでに 250 万人余りの人口を擁するパリだけを取り上げると、大都市の不衛生な雑居状態が影響して 57.7 人に跳ね上がる。[3] ギヨームはこれに続けて 1906 年から 1961 年までの 「10 万人当たりの肺結核による死亡者数」をグラフ化している。それによると「20 世紀の最初の 20 年間は、おそらくスペイン風邪による 1918 年の災難をのぞくと横ばい」で、18 人前後で推移する（1 万人当たりに換算。以下も同じ）。「続く 1920 年代から 30 年代は、第 2 次世界大戦で中断はあるもののほぼ一貫して減少し」、その数値は 17 人から 11.5 人程度まで低下する。第 2 次大戦中の 1941 年に戦争の影響で 13 人強の反発のピークを迎えた後、また急激に死亡率は減少を示し 1950 年には 5 人まで落ち込んでいる。[4] これはワクスマンのストレプトマイシンの急速な普及を始めとして、結核制圧のための予防から診断・治療にいたる近代的な医療体制が国民的規模で公的に整備されたからだと考えられる。ギヨームの統計の最終年度に当たる 1961 年では、1.5 人強で、55 年間の最低値となり、フランスでも結核との格闘がめざましい成果が収められたことが統計的に証明されている。

ただしＷＨＯの統計によれば、結核による死亡者数は発展途上国がその 90 ％を占めるにしても、現在でも依然として人類の死亡原因の第 1 位を占めている。日本でも 1990 年から 1999 年の 10 年間の年平均死亡者数は 4000 人を超えており、しかもいくつかの集団感染の発覚や抗生物質に対する耐性菌の出現など、結核をめぐる状況には新たな要因が加わるとともに結核感染者数が微増傾向を示したため、結核問題の再認識が叫ばれているようである。[5]

２．初版『19 世紀ラルース大辞典』の「肺癆」

ところで、コッホの結核菌発見が結核の近代的医療史の出発点にあったことを確認することで、それがいかに画期的であったかを証明できるにしても、それとは反対に時間をさかのぼって結核の病理学がそれ以前にはどのように説かれていたのかを検討することでいっそうその出来事の重要性が示されるであろう。

当時の知識の様態を推し量るものとして貴重な『19 世紀ラルース大辞典』（以下『19 世紀ラルース』と略記）を紐解いてみると、コッホの発見に触発された結核の医学的知識のめざましい転換が明白に表現されている。

現在では結核（tuberculose）は、肺を中心とする結核菌による感染症で、結核結節（tubercule）によって組織が壊死し、肺などの機能が破壊されてしまう疾患だとみなされている。ところが『19 世紀ラルース』（1866-1879 年発行）は「結核 tuberculose」について、「結核結節を生じる疾患ないし疾病素性」というはなはだ簡単な定義を与えているだけである。その《tuberculose》に代わって、当時最大の脅威であった結核を詳述する役割を負わされていたのは《phthisie》である。この《phthisie》、正確に言うと《phthisie pulmonaire》

を現代の結核と区別するために、以下では「肺癆」という古い名称をあえて利用しようと思う。[6]

その「肺癆」の項は「極端な痩せ、緩慢で漸進的な組織消耗」という語源的定義を与えた後、病気としての肺癆について、「肺の結核性疾患（affection tuberculeuse）で、多少とも緩慢な組織消耗を常に伴う」と定義している。その後には例によって「百科解説」が長々と付随する。だがその解説は結核菌が発見される以前のものなので、病因論を中心に現代的な「結核」のそれと様相を大いに異にしているのは言うまでもない。

ここでその解説をすこしのぞいてみると、問題の「病因」の欄では「遺伝は明らかに結核性疾患の原因の一つである。ただしそれがどのくらいの割合で遺伝感染しているのか証明することは容易でない。父母が結核で死去した子供についてはとりわけ用心しなければならない」と遺伝が病因の一つであることが強調される。さらに遺伝以外の病因を探って「一時期、接触感染（contagion）によってこの病気が伝染すると信じられたが、一般的にこの説は今日では顧慮されていない」と断言しているが、その後患者を看病する近親者の感染例を見て、この時代にいろんな病気の元凶として名指された「瘴気 miasme」説がやはりここでも引っ張り出され、上述の断言が打ち消される結果となっている――なるほどこの項の筆者が認めるように、病人から発した瘴気で感染することも一種の接触感染にちがいない。そのほか病因には日当たりや風通しの悪い住環境、過剰な性行為や自慰行為、疲労が挙がっている。

「解剖病変」という病巣の病理解剖学的記述には、結核結節（tubercule）、空洞（caverne）、外殻（coque）など現代の我々にもなじみのある用語が見られて違和感はない。「症候」欄でも、咳、痰、寝汗、喀血、熱、胸の痛み、病的痩せ等、その後にもほぼ受け継がれていく内容であり、これらについては近代医学の観点からしてもすでに完成されていると見なせる。「診断」欄は「症候」欄の症状を繰り返すだけで、結局はこれらの外部に示された症候があれば肺癆という診断をくだすということを言っているに過ぎない。

病因論が確立されていない以上、「治療」欄は当然不十分なものにとどまる。「肺癆の進行を押しとどめる効果のある薬品は皆無である」と断言すると同時に、その当時よく処方された薬品として「鱈の肝油」、「温泉水」などが言及されている。間接的な療法としては滋養豊かな食事、寒冷地から温暖な土地への転地療養が勧められ、ローマ、ヴェネツィア、ピサなどイタリアの都市の名が挙がる。転地療養にはそうした都市の他、もちろん清浄な大気を呼吸できる田舎での生活、さらには温泉治療が推奨される。

３.『19 世紀ラルース』補遺の「結核」

『19 世紀ラルース』は 2 回にわたって補遺を追加出版する。1890 年発行の「第 2 補遺」には「結核」が内容を一新して詳述される。そこでは医学界でこの結核の主題ほど短期間のうちに多くの研究、実験、論争をにぎわしくさせたものはないという書き出しで始まり、結核が当時もっとも蔓延している病気であり、またその犠牲者も多いことが強調される。それは、結核がたんに肺癆だけでなく、気管支炎、肋膜炎、髄膜炎、腹膜炎、腸炎、骨や関節の病変、冷膿瘍（abcès froids）などとしても発現する病気であること、そして「結核はコッホ菌という細菌（microbe）によって引き起こされる感染症で、伝染することが確証された」からだ、と理由が述べられる。

つまり結核は、コッホの発見した結核菌を病原とすることが確認されたことでもっとも症例の多い肺癆のみならず、これまで本来の気管支炎、肋膜炎などと混同されていた病気の一部までを結核の名称のもとに統一的に把握できる病気として立て直され、疾病単位として新たに再確立されて、その結果として実は当時多大の犠牲者をだす恐ろしい病気だとして認識を新たにされるにいたったのである。ちなみに上述の引用にある「細菌」ということばが病原微生物の総称的名称として初めて使用されたのも『19 世紀ラルース』初版発行直後にあたる 1879 年のことであり、[7] これもまたフランスのパストゥール［1822-1895］やドイツのコッホに率いられた細菌学の当時の急速な発展とそれに影響された感染症病理学の一大転換を指し示す証拠である。

内容を一新した「結核」の百科解説では、最初に「バチルス」として一括した欄で、コッホの業績をたたえながら、結核菌の形態や菌の巣くう患部、培養に関しての説明がある。

続いて「病因」欄ではまず感染経路を取り上げて、結核菌が呼吸器、胃腸などの消化器、性器、皮膚を経る場合、それから特に集団感染の場合の住環境について述べる。次にこの結核菌を保菌していても結核にかからない場合、つまり健康な保菌者の例もあるので、結核に対する「疾病素質」について触れられる。「遺伝結核」（hérédo-tuberculose）という語が見出しに用いられて、これについてはおおむね否定されるが、まれに母親の胎盤を媒介として発生することがあると述べる。ただしこの症例は、現代的な定義では遺伝病というより先天性結核症に該当する。それに対して「疾病素質」のほうは遺伝するとみなされ、そのことによって結核にかかりやすいものとそうでないものとの相違を説明する合理的な理由に利用される。

「予防」では痰壺の利用が進められ、結核患者の母乳や結核汚染された牛肉の摂取に注意が喚起されている。上述したいわゆる遺伝性の結核を避けるため、進行中の結核患者との結婚は断念するべきで、特に患者同士の結婚は厳に戒められている。ただしすでに回復した結核患者なら何ら問題はないとされる。

「予後」については、結核は治癒すると明言されている。

「診断」は後の治療の有効性にかかわるので、早期発見に努めること、結核菌の有無は顕微鏡かモルモットに対する移植で確かめ、病巣に結核菌が発見された場合は患部を摘出するよう説かれている。

「治療」については、病巣の外科治療が最初に記される。続いて肺結核の場合には気道を経由した結核菌に直接作用するとみなされた殺菌治療が近年もてはやされていること、使用される殺菌剤としてタール、クレオソート、フェノールを利用し、それらを気化させたり、霧状にして吸入させることが語られる。結核菌も細菌の一種なのでこのような一般の化学消毒剤が効果を発揮するのではないかとみなされたからである。しかしそれらの薬剤で結核が治ったという話はとんと聞かれず、そのためそれらに比して最良の殺菌剤は何と言っても清浄な空気であり、それを呼吸するには換気が重要であること、特に高山の空気が推奨されることになる。これが後に高山のサナトリウムにおける結核療養法へと繋がっていく。

＊

以上のように『19 世紀ラルース』における結核の記述の変遷を見ただけでも、コッホの結核菌発見が結核の歴史に画期となった理由をうかがい知ることができる。したがって

冒頭で見てきた堀やマンによる作中での結核の言及も、近代的な結核の病理学がほぼ確立されてからのことであり、当然のことながらそれ以前のいわゆる結核文学とは趣を異にしているという予測が成り立つであろう。そこでコッホの結核菌発見以前の文学作品において結核はどう描写されたのか、これから我々の本題に取りかかろうと思う。

Ⅱ章　肺癆とメタファー：バルザックの『あら皮』

１.『あら皮』の肺癆

19 世紀フランスの何人かの小説家が作品の中で結核を取り上げている。その中の一人バルザック［1799-1850］は、人生に絶望した青年ラファエルを主人公にして、彼が骨董屋でふと見つけた「あら皮」が彼の欲望をかなえるかわりに寿命を縮ませ、その縮んだ寿命を表すようにあら皮そのものも縮んでいく『あら皮』（1831）というミステリアスな小説を書いている。

小説は一方でラファエルの金持ちになりたいという欲望をかなえさせる。そこには夢みたいなことだが、あり得なくはないと感じられる程度の合理性が存在している。最初は偶然のたまもので、人生に絶望して自殺を考え始めた青年ラファエルのなけなしの金を友人のラスティニャックが代わりに賭博に投じて大金を持ち帰る。次いで今度はあら皮の魔力のせいにされているにしても、伯父の莫大な財産が転がり込んでくる。この程度の話なら起こり得ないこともないと小説の読者は納得するだろう。他方、その代償とされた彼の命はひとえにあら皮の不思議な魔力によって縮んでしまうというのは何とも荒唐無稽な話だ。そこであら皮の不思議な魔力を解き明かそうと当代一流の動物学、力学、化学の専門家があらゆる方面から分析を試みるが、いずれも歯が立たない。

バルザックはあら皮に象徴される未解明の神秘的な威力とそれを前にした近代科学の無力を対比させたのだ、というのはよく見られる解釈である。だが神秘的と言えば聞こえはいいものの、我々現代人はいうに及ばず、当時のかなりの読者もまたそこに非合理のみならず不合理でもあるような現象を見いだしたのではないかと想像される。しかしそうは言うものの、読者は実際に小説中のラファエルの早すぎる死ならばあまり違和感なしに受け入れることができたし、現代の我々も受け入れることができるのではないだろうか。それはラファエルの死が表向きあら皮のせいにされながら、その影に隠れてあまり目立たないけれども、彼を確実に死に赴かせる不治の病が進行しているから、言い換えれば物語には主人公の死出（しで）の旅がその実合理的なものであることを読者に納得させる仕組みが働いているからである。

その仕組みである説話上の装置として機能しているものこそ当時不治の病であった肺癆である。

最初、この死病がラファエルの人生につきまとっていることはさりげなくほのめかされている。友人ラスティニャックが賭博で稼いできた金のおかげでラファエルは放蕩の限りを尽くしたのだが、その後には無力感にさいなまれ、そんな時に「老兵ならば肺癆にむしばまれ、外交官ならば動脈瘤のせいで死が糸一本によって心臓にぶらさがる。ぼくの場合はおそらく肺病（pulmonie）に『さあ、出かけよう！』と言われる」と教訓話のようにし

て述べられる。[8] ここには肺癆と並んで「肺病」という語が用いられているが、『19 世紀ラルース』にも明確に記されているように、この時代の典型的な肺病は肺癆であることをよく承知していたであろう。

ところでそれはラファエルがあら皮を入手する以前のことなので、不思議なあら皮の方は読者の眼を引きつけておくカムフラージュの類で、彼の寿命を左右するのは実のところ肺癆ではないかという疑いを抱かせるに十分である。『あら皮』の中で肺癆のもつ意義を評価するには、ラファエルがいつ死病を罹患したのかという点は重要な点である。しかし上述の引用の肺癆は未来に起こりうる可能性をラファエルが語ったにすぎないと片づけられるかもしれない。

ラファエルが死病に言及する次の場面は、霊験あらたかなあら皮のせいで伯父の莫大な遺産が突然転がり込んできたので、そのあら皮の縮み具合を確認して欲望の代償に自らの寿命を縮めたことを見定めた直後のことである。

> 世界はいまや彼のものであり、彼は何でもできたが、もはや何も欲しなかった。砂漠の旅人のように、彼には渇きをいやすための水がわずかしかなく、どれだけ飲むかによって残りの命を測らなければならなかった。何かを欲すれば、それで命を何日縮めることになるのか、ラファエルは見きわめようとしていた。彼はあら皮の作用を信じはじめていたから、自分の呼吸に耳をすまし、自分が病気になっているように感じた。そして「僕は肺病じゃないだろうか？母は胸の病で死んだのではないだろうか？」と思うのだった。（『あら皮』p.209［p.248］）

もっぱらあら皮のせいで寿命が縮まるなら、ここで唐突に出てきて死の影をちらつかせている肺病は不必要ではなかろうか。このようなわれわれの疑問を別の方向に向かわせるように、ラファエルはこの病気について母親から受け継いだ病気ではないかとわざわざ付け加えて語っている。こうしたことを考慮して、上述の引用を無理なく解釈しようとすれば、ラファエルは母親から受け継いだ慢性病の肺病を、このところの乱れた生活からとみに悪化させてしまった、この上は死病をこれ以上悪化させないためにおとなしくしていよう、とならないか。だとすれば、あら皮は読者の目をくらますデコイのようなものではないのか。

やがてラファエルは欲望の象徴で蕩尽の対象であったフェドラの幻惑から醒めると、相思相愛の恋人となった可憐なポーリーヌと結婚することになった。そんなとき二人の幸福な未来に不吉な影をもたらすのはあら皮であり、ラファエルはいまや自分たちの不幸の元凶となったあら皮の秘密を解くために 3 人の科学者に分析をたのむ。だがすでに述べたようにそれはむなしい結果に終わった。

そのあら皮に関する無益な奔走と入れ替わるように、他方でラファエルはやはり彼の命をむしばむ死病についても当代の 3 人の名医に相談している。最初のブリセは、脳や胃などの内臓器官の炎症によって彼の生命は危ぶまれる状態に陥っていると語り、病名については偏執狂という診断を下す。2 番目のカメリスチュスは生命の原理が何らかの衝撃で損なわれた、という生気論に則った抽象論を展開する。3 番目に発言するモーグルディは折衷論者で、病気に関する理論はともかく、「腸の炎症とノイローゼが見られるという点で

は、われわれは同意しているのだから、それを鎮めるため病人に蛭を当て、湯治に行かせましょう。そうすれば、二つの体系的理論にしたがうことになりますから。それに肺病なら、どのみち助かる見込みはほとんどないのだし・・・」（『あら皮』p.262［p.338］）と主張する。

この場面は『あら皮』の中では評者によく注目される個所で、代表的なものとしてはバルザックの疾病論を論じたル・ヤウアンクとカバネスがそれぞれ当時の医学の理論的背景に基づいて、彼ら 3 人の医者の主張に関して詳細な論証を展開している。[9] 特にカバネスはモデルとなった現実の医師をはっきりと名指して、ブリセは炎症論で有名なブルセー［1772-1838］を、カメリスチュスは王政復古期に活躍した王党派の医師で、生気論的な考え方をするレカミエ［1774-1852］を、モーグルディは理論的にはバルザックに「ある種のふざけた折衷理論」の代表と見られているが、体系医学を排して実験、観察を重視した実証医学の草分け的存在として今では医学史上で評価され、クロード・ベルナールの師としても知られているマジャンディ［1783-1855］を代弁していると見なす。[10] だが彼ら 3 人はいずれにしてもラファエルの病気について肺病だいう明確な診断を下しているわけではない。

それでは上述の引用中で「肺病なら、どのみち助かる見込みはほとんどないのだし・・・」というおぼつかない診断と死ぬしかないという悲観的な予後をモーグルディに言わせたのはどのような事情か。それは、ラファエルの友人で「数日前から治療をほどこして」いる新米医者のビアンションが、3 人の高名な老大家のそばに控えていて、「肺癆（phtisie pulmonaire）だと思われるという診断を、ときには執拗なほど先生たちに対して繰り返し説明していた」（『あら皮』p.257［p.329］）からである。

ビアンションは『あら皮』から晩年の『従兄ポンス』（1847）まで、「人間喜劇」の他の作品にも再三登場してくる医者で、作者のバルザック自身が彼においていた絶大な信頼は一貫して揺らぐことはなかった。特に『ゴリオ爺さん』（1834）、『ラ・ラブイユーズ』（1842）、『従妹ベット』（1847）に登場してきた際の彼の病気の診断は的確であった。的確であるというのは当時の医学のレベルに応じた、現実的な対応をしているという意味もあるが、それよりも重要なのは彼が合理性を備えている、言い換えれば後の説話の展開に矛盾しない診断を与えているということである。つまりビアンションはバルザックの小説中で説話的に重要な役割を負った人物としてたびたび登場してきて、ある意味では作者の説話的な意図を体現しようとしていると言えるのだ。『あら皮』についてもこうした状況は変わらない。現実のモデルを背後に想定できる高名な 3 人の医者たちは、自らの信奉する当時の体系的な理論に則ってラファエルの病状に対し三者三様の診断を下して互いに自説を譲ろうとしない。

バルザックは当時の肺癆の病理学的混乱を十分承知しており、多少の差はあるにしてもそのどれにも与することはない。ところでビアンションは紛れもない虚構上の人物であり作者の自由な創意を託せる点、モデルを背負うが故に拘束を受けざるをえない 3 人の名医とは立場が異なる。そのビアンションが 3 人の名医の混迷ぶりを尻目に、肺癆説を主張して医師としての慧眼ぶり発揮する結果となった。このようなビアンションの扱い方を見ると、バルザックはすでにこの時点で彼の将来の輝かしい地位――『従兄ポンス』参照――を約束させるような才能を彼に付与していたと推論することも可能である。[11]

しかしラファエルが肺癆であることを疑うのはビアンションだけでなく、ラファエル本人がそうであったし、また彼のそばにあって病状を熟知していたポーリーヌもそれを確信していた。

> 「[・・・] ねえ、ラファエル！　寝ているとき、あなたの呼吸は自然じゃないわ。あなたの胸の中で何か響くものがあって、あたし怖かったの。眠っているあいだも、あなたすこし乾咳してるし、それが肺癆で死にかかっているあたしの父の咳によく似てるの。あなたの肺から出る音にはこの病に特有の奇妙な兆候がいくつか見られるのよ。それに、あなたはきっと熱があったわ。手が湿っていて、燃えるように熱かったもの。[・・・]]（『あら皮』p.255［p.327］）

素人の目だが愛するものを見るポーリーヌの目は、呼吸音、咳、熱、寝汗と主治医も顔負けするほど的確にラファエルの症状を捉えて､それが肺癆であることを言い当てているし、そうであることを具体的に読者に告げている。結局、3 人の名医たちだけが彼らの体系的な理論によって逆に目をくらまされているのであり、それに対してビアンションはラファエルやポーリーヌの側に立って、彼らの素人判断を今度は専門家の立場から保証する役割を果たしていると言えるだろう。

ラファエルの肺癆をめぐる医者たちのあいだの紛糾は、炎症を鎮める効果があるとされた蛭治療と気力を高めるための湯治療法を採用することで 4 人の医師たちの意見が一致を見ることによって終結している。蛭は瀉血と同じですべての病気を炎症に由来するとみなすブルセー=ブリセにとっては万能の治療法の一つであった。ブルセーの炎症論はコレラの流行（1832）に無力であったためにその後急速に支持を失うが、それとともに蛭による治療も効果を疑問視されるようになってくる。それに対してレカミエ=カメリスチュスの湯治療法は、最初体力増強という一般的な説明から、その後硫黄泉はカタル性の疾患にも有効だと効果が具体的に説かれるようになって、有効な治療法としての評判がいっそう高まる―― 19 世紀後半のモーパッサン『モントリオール』（1887）はその最盛期の頃の湯治場の模様を描写している。二人の対立意見の持ち主から提案されたこれら二つの治療法については、折衷論者であるモーグルディはもとよりそれに異論はなく、また肺癆であることを主張したビアンションにしても、特別に効果的な治療法があるわけではないので彼らに同調する。

このラファエルの病気に関する議論の場面を終えると、物語は不治の病である肺癆の病理をたどるように進行していく。

ラファエルはその後医師たちの提案した治療法を受け入れて、エクスの温泉に逗留するだろう。しかしエクスでは他の湯治客からつまはじきにあい、彼はそこを発つことを余儀なくされる。つまはじきにされたのは他の客たちと親しくしようとしなかったことが原因だとラファエル自身は思っているのだが、実は「あの人の病気はうつるのよ」、「あれほどの病気なら、湯治に来るもんじゃない」という湯治客のラファエルに対する反発が存在し、それには治療法上の根拠のある理由が存在する、という背景が控えている。

当時の治療法に関して言及するとすれば、バルザックの時代に定評のあった『医科学辞典』（*Dictionnaire des sciences médicales*, 60 vols）を紐解くに如くは無かろう。上述したバ

ルザックの研究家ル・ヤウーアンクによれば、何せこの辞典は医術に関心を持っていたバルザックの父親が予約購読をした代物でもあり、バルザック自身がそれを直接参考にした可能性もあるから。[12] この辞典は全 60 巻に及ぶ医学専門辞典の名にふさわしく、「肺癆 phthisie pulmonaire」の項目にも病気の定義から始めて治療法にいたるまで総計約 170 ページを費やしている。そこで治療法として筆頭に掲げられているのはやはり昔から試されていた瀉血である。しかしそれが肺癆に特別効果があるからというわけではなく、すでに述べたように肺癆もまた一種の炎症による疾患だとみなされていたため、他の治療法に比べて瀉血が比較的効果があると信じられていたからである。高山の大気療法については湿気の多い地域で感染した患者に効果をもたらすとされる転地療法の一環としてあげられいるが、病気の初期でないとむしろこの療法は病状を昂進させる結果しかもたらさないと記される――高山の低気圧が呼吸器にいっそう負担を与えるために、肺の機能が損なわれている重症患者には悪影響を及ぼすというのがその理由である。

結局ラファエルの肺癆はすでに初期段階を過ぎていて、逆に高山のせいで病状が昂進され、その結果としてまわりの療養患者に対してもせっかく治りかけている病気をかえってぶり返させ、重篤化させる恐れさえあるから、彼らから反発を食らったというのが真相であろう。その後のラファエルの衰えが急であることが彼の病状の重さを裏書きしている。

サヴォワのエクスを追われたラファエルが次に訪れるのは、エクスと並んで湯治で有名なオーヴェルニュ地方のモン=ドールである。なぜ彼がこのように温泉療法にこだわるのかというと、おそらく大気に多く含まれた酸素や硫黄分などの吸入および入浴治療（『医科学事典』では、全身浴より半身浴や部分浴が推薦されている）が肺癆にも効果があると言われていたからであろう。

だが最初から他の湯治客に毛嫌いされたので、彼は人里離れた山中の一軒家で「無為の生活」を、「植物のような穏やかな生活」を送ろうと決意する。それは呼吸する空気こそ異なるが、以前ある医者の話にあった「10 年間ひとことも口をきかず、味をきわめて薄くした食餌療法を守りながら、牛小屋のこもった空気のなかで 1 分間に 6 回しか呼吸しないで、」「肺病を治してしまった」（『あら皮』p.217［p.262］）スイス人の療法に似ている。彼はスイス人と異なって刺激の少ない澄んだ空気を吸って、できるだけ肺に負担を掛けないような生活を心懸けようとしているように見える――吸い込む空気も呼吸の仕方も肺の負担を軽減するという点ではむしろラファエルの方がスイス人より一貫性があるようだが、「牛小屋」の濃密な空気を吸うことも肺癆の立派な治療法として当時は認められており、『医科学事典』にも堂々と記されている。

しかしながらこうした治療のための奔走もむなしく、ラファエルは瀕死の状態でパリに戻らざるをえなくなって、最後は欲望をむき出しにしてポーリーヌの乳房に噛みついたまま死を迎えるだろう。臨終にあたって今生の最後の願いとばかり欲望に身を任せたのか、欲望に負けたために死を余儀なくされたのか、ともかくラファエルの寿命とそれを表示するあら皮も縮んでなくなる。あら皮よりも問題の肺癆について言うと、肺癆が欲望を昂進させるというのはこの病気にまつわる神話の一つとして知られているところではあり、またラファエルの死があら皮のせいと言うより不治の病の必然的な結果として我々読者にきわめて論理的な結末を提供していることはもはや多言を要さないであろう。

２．肺癆と隠喩

ところで肺癆に依存したラファエルの寿命とあら皮の関係は修辞的な観点からするとアナロジーの関係にあたり、あら皮はラファエルの寿命を示すアナロゴンである。もっと厳密にパースの記号論に照らして言うと、寿命の長さがあら皮の大きさに歴然と現れるので、あら皮は類似性に依拠したイコンだと規定できる。読者がバルザックの『あら皮』に魅せられるのは、一つにはイコンとしては卓抜なオリエントのあら皮が選ばれている点にあるかもしれない。だがこのような明々白々な、その点では単純なアナロジーの卓抜さだけが『あら皮』の魅力を語っているとはもちろん言いえない。端的に言うと、それよりはむしろこうした不思議なあら皮に操られて、言い換えればあら皮がイコンでアナロゴンである以上、実態的には我々がすでに見てきたように肺癆に制約されて、ラファエルが悲劇の生涯を送らざるを得なかったこと、あるいはむしろ肺癆にもかかわらず残された命を短期間で燃やし尽くしたこと、[13] そのような短命に終わったラファエルの生涯を読者に生彩に富んだ、印象的な文章によってバルザックが読者に提示できたところにある。

我々はここまで『あら皮』の肺癆を説話との関係から見てきた。つまりこのラファエルの悲劇の物語を合理的に規制するものとして、因果関係の観点から肺癆を検討してきた。しかし『あら皮』における肺癆が説話に対して合理性やリアリズムを保証するだけにとどまるわけではないし、そうであったとすればむしろ文学作品の中に現れた肺癆のような病気に関する興味を半減させてしまうだろう。そこで『あら皮』のような文学作品における病気の意味を考えなおしてみると、ラファエルの寿命とあら皮のように因果関係におさまりきらない修辞的な関係、言い換えれば語源的な意味でメタファーの関係――メタファーは語源的に「転移」、「置き換え」を意味する――が大きくクローズ・アップされてくる。実は我々が『あら皮』の中の肺癆に注目したのも、肺癆という病気が単に因果関係を中心とする病理学的な合理性を物語に導き入れただけでなく、またそれと密接に絡みながら、それに巧みに乗じて文学の表現性を高め、生彩に富んだ印象的、説得的な文章を産みだすことに貢献しているからにほかならない。

このような観点から『あら皮』における肺癆をあらためて見たとき、印象的かつ少々衝撃的で、しかもバルザック後の文学史上でも重要な意味を持つと思われる場面は、ラファエルが最後に自らの欲望をむき出しにしてポーリーヌの胸に噛みついたまま死に果てる場面である。結核のような病気が原因で死ぬとき、常識からすれば人はこのように欲望を昂進させることはない。病理学的に見たとき、ということは合理性を意識してということだが、結核と欲望の昂進は因果関係であるよりもそれとは反対に相反の関係にあるようにみえる。つまりラファエルは肺癆のために死に瀕したからポーリーヌに対する欲望をむき出しにできたというのはまったく理屈に合わないと考えられるので、肺癆のために死に瀕したにもかかわらずラファエルのポーリーヌに対する情熱は激しく、死ぬまで彼の欲望が消滅することがなかったというあたりが妥当な考え方だろう。

だが、それまで読者がたどってきたラファエルの「欲望と蕩尽の生涯」からすれば、後者の合理的で常識的なラファエルの臨終よりも、むしろ肺癆を患ったがゆえに欲望は昂進して彼の生涯にふさわしい欲望むき出しの最期を迎えたとする非常識な考え方のほうが、説話論上では論理的ではないかと感じさせられるようなところもある。そこで常識と説話

の論理との間に何とか折り合いをつけようとすれば、両者は相容れない、矛盾の関係にあるのではなく、肺癆の病状が進んでも、欲望は費えることはない、ラファエルは死に臨んで最後に生命力を振り絞って欲望を爆発させたのだ、とみなすことができるだろうし、これがバルザック的に好個な解釈かもしれない。

いずれにしても肺癆と欲望との関係について決定的な解釈を逡巡させるような状況がここでは提示されているわけだが、そのような状況自体を考えてみると、バルザックのテクストはあくまでも合理的な肺癆の病理学に依拠しながらも、いわばそれと戯れて微妙なずれを享受しながら説話を展開していると言うことが可能だろう。そこであえて大雑把に図式化を試みてみると、我々は一方で病理学的な合理性に依拠した解釈、他方ではそのような合理性には抵触するが説話的論理では考えられなくもない解釈、それから最後にそれら両者をなんとか両立させられる解釈と、とりあえず三つの解釈を入手できることになろう。バルザックの『あら皮』の場合、3 番目の解釈がもっとも妥当だと見なしたのであるが、別の小説家の手にかかれば 1 番目の病理学的な合理性を遵守して説話を展開することができるし、もちろん病理学的には非常識だが説話上の合理性さえ整えば 2 番目の肺癆をゆえに欲望が昂進するような小説さえ書くことができるだろう。こうした説話によって文学のなかで展開を許されるような論理、それを我々はメタファーの論理と呼んでおきたい。

そこで、先にラファエルの寿命をそのアナロゴンとして指し示すあら皮についてパースの記号論では類似性に基づいたイコンと見なせる指摘したが、『あら皮』も含めてそれ以降の肺癆にかかわる文学作品も念頭に置いて考えたときには、そのような記号論にはおさまりきらない、修辞学の広い射程をもったメタファーの論理がやはり肺癆と欲望の間に働いていることに気づかされる。しかしあら皮の時と同じくともかく最初は、文学におけるメタファー中にどのような論理が機能しているかを明快に語ってくれる記号論の観点から考察を始めてみると、『あら皮』では肺癆患者ラファエルが欲望をあからさまにするのだから主人公ラファエルを媒介にして、肺癆と欲望の関係は隣接の関係にあるので、肺癆は隣接関係に基づくアンディス（指標）だとみなせる。

パース流の記号論ではイコンやアンディスに契約に基づくサンボル（象徴）も加わるが、いずれにしても 19 世紀にはこのような記号論の枠内を越えて肺癆のメタファーが拡大していったことは先程述べた通りである。そのような病気に関わる広範なメタファーをＳ・ソンタグが『隠喩としての病』というこよないエッセーなかできわめて自在にしかも説得的な仕方で展開したことは周知のことだろう。そのなかで著者は文学における結核の隠喩について縦横に語りながら、結核を含めて病気にまつわる隠喩自体が科学的論理とは言い難い、その点ではいわばメタファーの論理にしたがって変遷することを指摘するのを忘れない。ソンタグは病気の隠喩に関する 19 世紀の変化を一般的に示した後で、特に問題の結核を取り上げてこう述べている。

> 過剰な感情が肯定されるにつれて、それを貶めるために恐ろしい病気になぞらえることはもうなくなる。その代わりに、病気の方が過剰な感情の媒体とみられるようになる。結核は熾烈な欲望を白日のもとにさらし、人が公開したくないと思うことでも、その人のためらいなどお構いなしに公開してしまう病気であるとされるようになる。［・・・］病気はおそらく患者も気づかなかった欲望を開示する。病気は――そして

患者は解読されるべきものとなる。そしていまや、隠された情熱こそ病気の元凶と考えられるにいたるのである。[14]

ソンタグはいみじくも「病気は――そして患者は解読されるべきものとなる」と言っている。繰り返すが、それは決して病理学に基づいた因果関係だけに限定されるわけではなく、記号論的な関係（イコン、アンディス、サンボルの関係）から広い意味でのメタファーの関係をも指し示す。因果関係という科学的な合理性に依拠した関係のみならず、結核を含む病気について他の記号論的、修辞学的関係をも読みとろうとするのが 19 世紀文学に顕著になった傾向というわけだ。すると病因論的な関係の仕方、つまり科学的に厳密な関係の仕方は、こうした病気のメタファーのなかでは簡単に乗り越えられてしまうだろう。バルザックの『あら皮』に即して言うと、「肺癆を患ったがゆえに欲望は昂進する」という多少とも病理学的な因果関係の衣をまとって合理性の影をかろうじて感じさせる説話の論理すら、メタファーの世界では「欲望を昂進させたが故に肺癆にかかった」という逆の関係に転化することすらも容易に起こるであろう。

続いて検討するのはこうした肺癆のメタファーが『あら皮』以上に展開していった例である。

Ⅲ章　ロマン主義の肺癆神話：『椿姫』と『ボヘミアンの生活情景』

1.『椿姫』の肺癆

『あら皮』で若きラファエルに幸せな結婚生活を断念させ、悲劇の死を遂げさせたのと同じように、デュマ・フィス（1824-1895）の小説『椿姫』（1848）の主人公マルグリットもまた肺癆のために早すぎる死を迎えた。肺癆は青年だけでなく、妙齢の美しい女性も犠牲にしてしまう。人口に膾炙した「佳人薄命」という神話の元凶としてよく名指しされるのは結核だが、その神話形成にもっとも貢献した作品に数えられるのが『椿姫』である。

デュマ・フィスの最初の著作であった『椿姫』は、文学のジャンル中では当時もっとも大衆を動員できた演劇の台本に書き改められ、1852 年に舞台で演じられるや、サラ・ベルナール（1844-1923）など後の人気女優が次々とマルグリットに扮して大当たりをしたこともあって、19 世紀ではもっとも人気の高い演目の一つとなった。またこの時期の最大のオペラ作家ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）がそれをオペラに改作し、『ラ・トラヴィアータ』と題して 1853 年に世に送り出して以来、もっとも人気の高い演目として今も上演され続けているのは周知のことであり、それに伴って佳人薄命と結核とが緊密な関係で結ばれて神話として流布していった経緯は今更繰り返す必要もないかもしれない。

小説『椿姫』には比較的はっきりと日付が記されていて、二人の恋物語は肺癆の療養から帰ってきていたマルグリットに 1844 年の 4 月頃アルマンがヴァリエテ座で再会するところから始まる。マルグリットは当時 20 歳だが、高等娼婦という職業柄老公爵が彼女のパトロンについているし、ほかにも男出入りが激しい。それでもアルマンの純情にほだされたマルグリットはやがて夏になると二人でパリ郊外のブージヴァルに移り住むと、パトロンの庇護もなげうつ決心までして冬になるまでの間二人だけの甘美な生活を送ることに

なる。ただしアルマンはまだ若干 24 歳で弁護士の資格を持っているにしても定職に就いているわけではなく、親の仕送りで生活している身分であった。その後も二人の生活を続けるためにはどこかから必要な費用を工面してこなければならない。一方のマルグリットは自分の家財を次々と手放していくがそれにも限度がある。他方でアルマンはなくなった母親が残してくれた遺産を父親には内緒でマルグリットに譲り渡そうとする。

そこでついに父親が田舎から上京してきて、娼婦のマルグリットに母親の遺産すらつぎ込んでしまうほどのぼせ上がっている息子アルマンをいさめて、彼女と分かれるよう説得を試みる。もちろんこうした物語の常で、アルマンの方はどんなことをしてでも自分の一途な恋心を守り通そうとするから、尊敬する父親の意見や忠告にもいっさい耳を貸さない。

父親は息子の説得が不可能だと見るや今度は相手のマルグリットの方から身を引かせるように一計を案じて、息子と彼女が相談できないような状況を作り出し、一人彼女だけを対象に分かれることを承諾させようとする。アルマンの父親の説得の仕方は巧妙であった。

まずマルグリットの息子アルマンに対する愛情を金銭ずくでないと認めたうえで、きっとわけも分からず娼婦と一緒になったと悪評をたてる口さがない世間のせいできっと息子の出世が妨げられるから、息子をほんとうに愛しているなら彼の将来性を考えて別れて欲しい、また現在アルマンとは別のもう一人の子供である娘の結婚話も進んでいる、しかし娼婦と生活をするほどの彼女の兄の不品行ぶりを憤って婚約相手の家からは破談の申し入れすら受けている。愛する娘が幸福になるかどうかはマルグリットの決断にかかっているし、アルマンのことは別としても、果たしてマルグリットに何の罪もない娘の幸福までぶちこわす権利があるのか、と半ば脅迫めいた説得をする。

そこまで言われるとマルグリットは自らを犠牲にせざるをえず、またアルマンの家族の敵となるよりも尊敬される友人となる道を選ぶのだと自らも納得して身を引く決心をする。別れた後のアルマンとマルグリットに関する後日談はあるが、二人の悲恋の物語にとってそれは文字通り後日談に過ぎない。最終的にマルグリットは 1847 年 2 月 22 日に肺癆で痩せ衰えたまま死去し、臨終の時にも傍らにアルマンの姿はなかった。

バルザックの『あら皮』とデュマ・フィスの『椿姫』における肺癆の利用のされ方を検討してみると、前者のラファエルは肺癆のせいでポーリーヌとの蜜月を断念して温泉地に療養に発たねばならず、また二人の変わらぬ愛を確認させる最終場面でもラファエルのポーリーヌに対する激しい欲望の最後の発露を彼の死でもって中断させてしまう、要するに肺癆は恋愛の主題に直接介入してきて、それを妨げるように機能しているのだ。これに対して、アルマンとマルグリットの恋愛物語がラファエルとポーリーヌのそれのように肺癆のせいで短期間に終わることを余儀なくされているにしても、その他の点では『椿姫』は『あら皮』とは異なる様相を見せていると言える。マルグリットのことばのなかに表されているように、肺癆という不治の病に冒されて先の命も残り少ないのだから愛情だけを頼みにアルマンと二人きりの田舎暮らしを思う存分楽しみたいと、むしろ恋愛の推進力となりえてもそれを阻止するようには機能していない、ただしその介入の度合いは軽度の干渉という程度に過ぎない。

すでに我々は前章の「２．肺癆と隠喩」のところで、『あら皮』の肺癆と欲望の関係には病理学的合理性でなしに説話の論理に依拠する合理性を見出せると述べてきた。『椿姫』における肺癆と恋愛の関係を同じ観点から検討してみると、肺癆と恋愛の主題は直接的な

関係を構成することなく、それぞれ別の論理によって進行しているように見える。病理学的には肺癆と恋愛が因果関係のような関係性を持たないのは言うまでもないのだから、『椿姫』においては肺癆の扱い方は説話の論理に影響を与えない病理学だけに関わる合理性のレベルに戻ったと言える。したがって一見すると『椿姫』の肺癆はきわめて「自然」なように見える。そのことはおそらく『あら皮』と『椿姫』の発想の次元に関わる相違に起因するであろう。

『椿姫』には作者のデュマ・フィスと実際に交際のあったマリー・デュプレシスというモデルがいたことが小説の出版時からよく知られていた。彼の伝記を紐解くと、小説と同じようにデュマ・フィスは 1844 年にヴァリエテ座でそのモデルと出会い、彼女のために負債をこしらえ、そのため高名な作家であったあの父親デュマ・ペールに金の無心をする。その後 1845 年夏にデュマ・フィスとマリーは不仲になり、やがてマリーは音楽家リストの愛人におさまったという。1847 年 2 月 3 日にマリーは肺癆によって若くしてこの世を去り、当時マルセイユにいたデュマ・フィスがその訃報に接したのは 2 月 10 日になってからであった。1848 年になって彼は『マノン・レスコー』を読み直し、彼の体験に基づいて『椿姫』を書いた、ということである。[15]

小説の本文でもアルマンとマルグリットの関係については上述した実際の日時をほぼ踏襲しており、またマルグリットの死因となった肺癆と二人の恋愛の顛末についても大部分事実に依拠していると想像しても差し支えないだろう。とりわけ我々の関心事である肺癆と恋愛の関係は現実を引き写したせいか「自然」に見えるし、病理学に照らしてみても異論を差し挟む余地はないようである。したがって、すくなくとも肺癆と恋愛の関係から見る限りでは、デュマ・フィスの『椿姫』はバルザックの『あら皮』よりもリアリズムに徹している、と言うよりもバルザックが肺癆に対して説話上の機能を担わせようと様々な工夫を凝らしたのに対し、デュマ・フィスの方はモデルのかかっていた病気をそのまま写実的に描いたと言った方がいいのかもしれない。

しかし、写実的に描かれていると思われる『椿姫』の肺癆が、すでに結核の病理学が確立されている現代の我々から見ると、いささか奇異に映る個所がある。それはもちろん時代の限界に起因するのだが、これからそれを考察の俎上に載せて、肺癆が『あら皮』とは別の側面でやはり小説の説話に影響を及ぼしていることを見ておこう。

小説『椿姫』の最初の方は作者の代弁者である語り手が高等娼婦マルグリットに関するうわさ話を主人公の紹介のためにまとめて語っており、その中でこんな肺癆の意味づけを行っている。

> 生来熱しやすいマルグリットがその頃病気だったことを言い落としてはならない。彼女は自分の病気の主な原因が一つにはどうやら過去の生活にあるような気がしていた。それで一種の迷信から、もし悔い改めて神の御教えに従ったなら、その代わりに神様が美と健康とをお授けになるだろうと思ったのである。[16]

ここではマルグリットの娼婦という職業が肺癆の病因に掲げられ、ただしそんな生活を悔い改め道徳的に正しい生活を送ればその病気からも癒される、と彼女が信じていたという語り手の指摘がある。後に主人公マルグリットが老いた公爵の庇護を脱してアルマンと

の「純愛」に生きようとしたり、また庶民的な道徳感情に訴えて息子との仲を清算するようアルマンの父親から説得されたとき、自らの幸福を犠牲にしてそれに応じてみせたところにも、こうした彼女の迷信的考え方の反映を見ることができるかもしれない。だとすればこうしたマルグリットの信ずる非科学的な病因論も『椿姫』の説話の展開に間接的に一定程度の影響を与えていると見ることができるが、マルグリットの口から直接語られることばからすれば――「あたし、アルマンとは別れないわ。あの人と一緒に暮らすのに今さら逃げ隠れもしないわ。正気のさたじゃないと言われるかもしれないけど、あたしあの人に惚れてるのさ！［・・・］その上、あたしもそう長くは生きられないんだから、顔を見ただけでこっちまで年を取ってしまいそうなおじいさんのご機嫌をとって、不仕合わせに暮らすなんかまっぴらだわ。」『椿姫』pp.200-201[p.199]――、むしろ彼女は自らに残された命が残り少ないことをはっきりと自覚し、そのような迷信的考え方によって不治の病から癒えることができるなどとはすこしも思っていないようなので、それは語り手の想像ともすこし違って主人公のマルグリットにとってはときおり頭をかすめる過去の反省の類にすぎないだろう。

それよりも上記の引用で注目しておきたいのは、冒頭の文にある語り手自身によるマルグリットの病気の解説の方である。そこでは、マルグリットの熱しやすい性格、情熱的な性格が病気と今にも結びつきそうな趨勢を示している。

先に『椿姫』はマリー・デュプレシスをモデルにして、悲劇的な結末を遂げた恋愛を主題にした小説であることを述べたが、その中で語り手は二人の恋愛に関して他方の当事者であるアルマンの証言を引き出す聞き役として明確な位置を占めていると同時に、この恋愛譚を作者の代弁者として読者に伝える報告者の役割も兼ねている。その時語り手は、自らが報告する二人の恋愛譚を読者に対してできるだけ真実らしく、説得的に語るために、マルグリットの性格や行動に対して注釈を加える権利を当然有しているから、そこには我々の関心の的である肺癆に関わる論評が動員されるのもしごく当然のことだろう。

このような語り手の特に踏み込んだ肺癆に関する主張が見られるのは、一時的に病気から癒えて療養地からパリに帰ってきたマルグリットに、またかつての乱脈な情熱的性行が頭をもたげてきたと説明しているときである。

> その上に、旅から帰ってきたマルグリットはこれまでにないほど美しくなっていた。年齢はちょうど二十歳である。それに、病気はなおりきったのではなく一時おさまっただけなので、胸の病にはつきものの**あの**激しい欲情を絶えず起こさせた。
> （同上、p.30[p.18]。傍点は引用者）

語り手はここでもうはっきりと「胸の病にはつきものの**あの**激しい欲情」と語っている。残念ながら邦訳の吉村訳からは省かれているが、原文の「激しい欲情 désirs fièvreux」に付加された指示形容詞《ce》は「あの」や「例の」というテクスト外の情報を喚起させる指向的（デイクティック）作用を担い、そのため同時代の読者には肺癆と欲望の密接な関係はすでに常識的なものになっていることを証している。つまり、肺癆が欲望を昂進させる、という神話がこの時代に成立していたことを、語り手がはっきりと言い残しているのである。先ほど引いたソンタグの考え方からすれば、文学における病気のメタファーがすでに人口に膾炙し

ているという証明になるだろう。だがもっぱら文学だけに許される非科学的なメタファーではないかという我々の抱きがちな先入観に反して、先ほどの『医科学辞典』においてもこの神話は神話としてでなく科学的言説として堂々と提示され、当時ならではの「科学的」根拠に基づいて肺癆と欲望の昂進の因果関係が実際に合理的な装いをほどこされて説明されているのである。

その『医科学辞典』の記述によれば、肺癆患者が性的快楽に大変熱心であるのは説明しやすい。なぜなら――と言っても因果関係が逆転して説明されているが――生殖器官と呼吸器官は他の身体器官に比べて密接な関係にあり、とりわけ思春期の生殖器官における過大な熱がたとえば女性の生理として適切にコントロールされれば問題ないが、それがうまくいかないと呼吸器に悪影響を及ぼして炎症を起こすからである。[17] どうやらこの記述は、そもそも欲望過多の人物は肺癆に罹りやすいのだから、肺癆患者が欲望を燃やすのは当然である、と主張したいようだ。

肺癆患者であるがゆえに激しい性的欲望を抱くのか、それとも逆に性的快楽の追求が激しいために肺癆に陥るのか、当時の肺癆に関する科学的言説ですら曖昧なままなのだが、ともかく肺癆と欲望の密接な関係が当然のこととして当時通用していたことだけは間違いない。結局現代人にとって突飛に見える肺癆と欲望の結びつきも、『椿姫』の語り手にとっては当時の医学知識に沿って考えた結果にすぎないようである。

２.『椿姫』と肺癆のメタファー

ところでそれよりも我々にもっと奇妙に見えるのは、マルグリットの肺癆がアルマンと知り合う前からかなり進行していたことが知らされ、またアルマンが初めてマルグリットの私邸で彼女と食事のテーブルに着いた日でも、激しく咳き込んだあげく喀血して彼を驚かせ、それが日常的で病状が深刻であることを窺わせているにもかかわらず、周囲も肺癆を患う彼女本人も病気をあまり重大視する風もなく、ましてやアルマンはそのような肺癆を心配するどころかブージヴァルでマルグリットと思うさま愛欲に耽溺して熱烈な同棲生活を送り、肺癆に関して患者としてのマルグリットや感染を恐れるべき自らの立場もいっさい顧慮していない点である。ここに当時の肺癆の病理学と現代の結核の病理学との明白な相違が現出している。つまり結核菌という科学的な病因がまだ明らかにされていないため――すでに述べたようにコッホの結核菌発見は『椿姫』の出版から 35 年後の 1882 年の出来事である――、肺癆は細菌による感染症とみなされていなかったのである。

ただし結核の病理学が当時確立されていないとは言っても、もちろん時代に見合った形で肺癆の病理学は存在した。そこでテキストからそのあらましを拾い出してみれば、肺癆の病理学が『椿姫』の説話をどのように、どの程度に支配しているかが明らかになろう。

まず肺癆の病因論については、細菌が病因だとされていないかわりに、遺伝病説が唱えられている。

> あたしはいずれはこの病気で死ぬのでしょう。何となく若いうちに死んでしまいそうな気がいつもしていたのですもの。あたしの母さんも胸の病で死にましたし、それにこれまでのような調子で暮らしていた日には、母が残してくれたたった一つの遺産といってもいいこの病気をなおのこといっそう悪くするばかりでございます。

（同上、p.281[p.284]）

それから予後については、今の引用を始めとしてこれまでにも示してきたように、長生きはできないことが再三マルグリットの口から語られている。そしてそのような予後が想定されるからこそ、それに後押しされて彼女は残る命を惜しまず思うさま自由に生きようと決断して、これまでの生活を捨ててブージヴァルでアルマンと二人きりで暮らす道を選択するのである。

肺癆と診断するための病気の症状については、現代の結核の際と変わらずに、喀血、微熱、咳の発作が記述されている。死期が近づくとそれにひどい発熱やうわごとが加わってくる。

言わずもがなのことであるが、時代のせいで病因が明白でなかったことが治療法には大きな影響を与えていた。『あら皮』の時と同じで、やはり医者が頼ろうとする治療法は瀉血である（同上、pp. 49 et 304［37 et 311］）。が、それは膏薬（p. 297［302］）と同じく対症療法にすぎない。それからまた湯治がある（pp. 27 et 84［15 et 75］）。

マルグリットがアルマンに再会する前に肺癆を癒しに赴いた湯治場がバニェールであった。バニェールは正式な名をバニェール・ド・ビゴール（Bagnères de Bigorre）と言い、ピレネー山脈のオート=ピレネー県にあってローマ時代の昔から知られていた温泉地である。『椿姫』の語り手はマルグリットとパトロンの公爵とのなれそめについて、湯治場として知られていたバニェールに肺癆もすでに重篤な「第 3 期」になっていた娘の療養のために外国の公爵が来ていて、そこで娘を亡くしてしまったので、彼女と瓜二つでまるで娘の再来かと見まごうマルグリットに愛情を注ぎ始めたと小説中で解説を加えている（pp. 27-28[15-16]）。またフォリオ版『椿姫』の注釈によると、小説中でマルグリットが出会った「老公爵」というのは、彼女のモデルになったマリー・デュプレシスのパトロンで、彼女の葬儀にも列席したスタッケンベルク公爵だということである（p.358）。

そのほかマルグリットは、ブージヴァルにアルマンと隠棲した際には牛乳を飲もうと言って――これは当時肺癆のための食餌療法として認められていた療法の一つである――、愛する男の前で自らの病んだ体にも配慮しようとする殊勝な一面をのぞかせている（p. 156[155]）。

以上のような『椿姫』に現れた肺癆の病理学に関するあらましは、我々が依拠してきた当時の医学的知識の集大成とも言える『医科学辞典』の記述と矛盾するところはない。したがって『椿姫』における肺癆の病理学に関わる叙述は時代のエピステーメーに沿っており、その意味ではソンタグの言う病気のメタファーとして『椿姫』から特に取り上げなければならない要素は見いだせない。現代の我々から見たとき病気のメタファーとして問題にするべきは『椿姫』の叙述よりむしろ当時の肺癆に関する医学言説のほうであろう。

観点をすこし変えてみよう。今我々の目の前に肺癆に関する『椿姫』のテクストと『医科学辞典』に代表される医学のテクストがある。『椿姫』自体は当時の医学言説と矛盾するところはないから、病気のメタファーに関して問題なのは医学テクストであると言った。我々も当時の医学が文学であるという主張を時々耳にすることがあるが、その時代に身を置いてみればいつの時代においても医学テクストは常に科学的真理を追究しようとした成果であり、説得的効果つまり修辞的効果を多少狙うことはあっても自らが科学的真理だと

想定するものをさしおいて美学的効果を追求しようとする文学テクストまがいのものを目指すことなどありえないだろう。医学テクストが文学テクストであると説くのは我々にしか許されない考え方であり、つまりそれは歴史の到達点としての現代の高みから過去を振り返る回顧的視点に必然的に随伴してくる我々の傲慢で不遜な考え方であろう。

さて、『椿姫』のなかで我々の目からは奇異に思われ、ソンタグからはメタファーの最たるものの一つとみなされてきたのは、先に指摘した肺癆と欲望の因果論的な関係であった。[18] しかしこれはすでに我々が述べたように、同時代の医学が主張した見解でもあり、文学だけに許されたメタファーではなかった。当時の医学に現代人からメタファーだと断じられるような過誤が生じてくるのはもちろん結核菌という病因が明らかにされていないなどの当時の医学上の限界が原因であることは言うまでもないことだが、こうした科学的な過誤の問題には医学的ないし科学的言説なりのメカニズムが含まれているので、デュボスの『白い疫病』に頼ってすこし検討を加えておこう。

デュボスは我々の目から見れば滑稽で誤った肺癆の治療法についてそのよって来たるところを次のように指摘している。

> 論理的思考によるがゆえに合理的だとされる治療法を定式化しようとする誘惑はいつの時代にも強いのである。病気について詳細な科学的説明がうまくでき、その論理を厳密に医療上に適用できるような具体的知識が十分に揃った症例は不幸にしてまれであるのに、論理の誘惑は、しばしば証拠も不十分なのに結論を出し、患者にとっては害あって益のない治療法が考え出されたのである。[19]

引用で非難の的になっているのは治療法だけであるが、それを我々の文脈では治療法に限らず肺癆の病理学全般に敷衍できる。換言すればここでは、ドゥルーズが『意味の論理学』で取り上げたような、言説の対事物に関する指示作用（désignation）の次元で問題となる真偽と言説内の要素間に関する記号作用（signification）の次元で問題となる合理・不合理の混同から惹起されてくる過誤が問題なのである。つまり全面的にそうだとは言えないにしろ、当時の肺癆の医学的言説は誤りを含んだ、後に否定されてしまうような「真理」に基づいて構築されているにもかかわらず、自らの言説の合理性を追求するあまり、治療法を始めとして滑稽な医学的知識を流布させるにいたったということである。先に取り上げた肺癆患者が性的快楽の追求に熱心であるという『医科学辞典』の憶説はさしずめこうした過誤の典型であろう。

肺癆と性的欲望の因果関係という問題はこのようにおおよそ当時の医学言説の問題として解消できる。だが『椿姫』をめぐってそれとは別に肺癆についてよく問題にされるのは「佳人薄命」というアフォリズムに代表されるロマン主義的な神話で、今度こそそれは医学的言説の問題ではなく、文学上の問題として検討されなければならない。

３．ロマン主義文学と肺癆の神話

「ロマン主義の人々は、新しい角度から死の品性を高めることに成功した。つまり、下卑た肉体を解体し、人格を霊化し、意識を広げる結核を利用した。結核をめぐる空想を通して死を美化することができたのである」（『隠喩としての病』、 p.20［p.28］）とは、ソン

タグの主張だ。議論を簡潔にするために、このソンタグの主張を仮説として利用し、『椿姫』のテクストがそれに添うのかまず検証しておこう。語り手は若くして死んだマルグリットを惜しむと同時にその死に対しては次のように肯定的に評価もしている。

> 私はこれらの品［死後に競売に付された家具調度など］をつくづくながめわたした。どれもこれも女の賤業をしのばせるよすがである。そして私は人知れず神の慈悲を思った。なぜなら、神はこの女を普通の懲らしめの時まで生きながらえさせず、娼婦たちにとっては第一の死とも言うべきあの老齢に達せぬうちに、栄華と美しさのなかで死なせたもうたからである。（『椿姫』、p.18[p.6]）

マルグリットの無類の美しさについては語り手やアルマンの証言、それから彼らのほかにも入れ替わり立ち替わり彼女に言い寄ってくる上流人士たちの数からしても今更言うには及ぶまい。肺癆はその美しさを保ちながら、その美しさがついえる前に死ぬことをマルグリットに許したと語り手は評価しているのである。

愛にまつわる死病を取り上げた小説の中では、たとえば梅毒（バルザックの『従妹ベット』やユイスマンスの『逆しま』など）や天然痘（ラクロの『危険な関係』など）に比べて、肺癆は外に現れる病気の症状が目立たず、特に女たちについて言うならその美しさを損なうことがもっと少ない死病だろう。むしろ「白い疫病」と言われるくらい患者の外観の白さを際立たせる肺癆は、その症状の白さによって患者の美しさを表現するという逆転現象さえ起こるほどであった。

マルグリットが死に臨んで自らの手で書いた手記ではさすがに容色の衰えを嘆く文章が見られるが、それでもアルマンに会えずに死別することの無念さに対しては最愛の恋人に美しいままの姿を記憶にとどめさせることができると自ら納得しようとする彼女のけなげさのなかには、死によって美しさが救われるという考え方をはっきり窺うことができる。

さらに『椿姫』の語り手はキリスト教的道徳の観点から、マルグリットをイエスに仕えたマグダラの娼婦マリアと比較して、彼女の死を次のように裁いてもいる。これは『椿姫』の特徴というよりは、むしろ逆に『椿姫』が他の凡百の作品と同じように伝統的なキリスト教的道徳観を共有していることを示すものである。

> 母でもなく、娘でもなく、さりとて人の妻でもない女、こういう女をさげすんではいけない。［・・・］神は過去にただの一度も罪を犯したことのない百人の正しい人々よりも、一人の罪人の悔い改めることのほうをいっそう喜びたもうがゆえに、われわれは神を喜ばせるようにしようではないか。そうすれば神は厚くわれわれに報いたもうであろう。地上の愛欲のために身を誤ったが、神を信じさえすれば救われそうな人々に遇ったときには、彼らを親切にゆるしてやるとしよう。（同上、p.40[pp.26-27]）

マルグリットは死の床で売春という悪徳を悔い改め、キリスト教徒として終油の秘蹟を受けて死んでいく。キリスト教的な道徳観からすれば、彼女の死は悪徳の汚れをぬぐい去ってくれる重大な契機で、彼女のような女たちにとって死は救いの意味を持つ。ただし救いとしての死は肺癆による死に限らず、死一般に拡大することが可能である。

このようにマルグリットの夭折には肺癆ゆえの、キリスト教的文化ゆえの意義が見いだされるのだが、それだけでは肺癆が「佳人薄命」神話にもっともふさわしい病気として特殊化されていくにはまだ不十分かもしれない。そのためには歴史が語るように、何よりもこの作品がデュマ・フィス自身の小説や演劇を通じて人口に膾炙すること、それからその作品の人気に便乗するように、ヴェルディがすぐにオペラに仕立て上げることが必要不可欠であった。しかしそれでもなお同一主題の繰り返しという量的な問題だけに肺癆の神話化の原因を帰すことはできまい。デュマ・フィスの小説からヴェルディのオペラへと原作の改作される過程で肺癆神話の醸成に寄与するものが他になかったか、もうすこし検討を加えてみよう。

デュマ・フィスの小説とヴェルディのオペラの間で際立つ相違は作品構成である。小説の方は、語り手がアルマンから彼のマルグリットとの恋愛譚を聴取するという、いわゆる額縁小説の構成を採用している。それに対してオペラ『椿姫』（*La　Traviata*）ではアルマンとマルグリットがイタリア人のアルフレードとヴィオレッタに変わったうえに、3 幕構成である。第 1 幕は「パリのヴィオレッタの屋敷」でアルフレードとヴィオレッタの出会いを描く。第 2 幕第 1 場「パリ郊外の家」は二人の同棲生活とアルフレードの父親ジェルモンが息子とその恋人に別れるよう個々に説得を試みる場面からなる。続く第 2 場「フローラの屋敷」は小説とはすこし別の展開が用意されており、アルフレードはみんなの前でヴィオレッタを侮辱し、それに激怒した彼女のパトロンと決闘になる。第 3 幕「ヴィオレッタの寝室」はヴィオレッタ臨終の場面。小説のマルグリットが寂しい死を迎えたのに対して、オペラの方ではヴィオレッタのもとにジェルモンやアルフレードが駆けつけ、彼らのあいだの誤解がいっさい解けてからヴィオレッタに死が訪れ閉幕となる。[20]

さて、小説がオペラへ改作されたとき、肺癆神話を浸透させるために有利に働いたもの、言い換えれば先にソンタグが指摘したように、ロマン主義的な死の美化をいっそう強化するような方向で働いたものがなにかあるだろうか。

『椿姫』の本題は何をおいてもマルグリットとアルマンの二人の恋愛である。そこでオペラとして構成するのに余分だと考えられる小説の額縁部分、つまり語り手がマルグリットとアルマンの悲恋の物語に対して第 3 者として立ち会い、それを報告するために背景としての事情を述べた部分、それがすっかりあとかたもなくオペラの台本から切り捨てられている。ところで小説の語り手は二人の恋愛に直接顔を出すわけではないので、何らその展開に影響を及ぼすことはない。しかし近代小説の典型的な語り手のように中性的な報告者としてのみ二人の恋愛に関係しているのではない。とりわけ小説の始めの 6 章まではマルグリットとアルマンとも同列にある一人の登場人物として個人的にもマルグリットやアルマンを見知っていること、二人の恋愛譚をどのように知るにいたったかということを事細かに語っている。またさらに注目すべきことには、この語り手が、これまでのテクストの引用からも判断できるように、主人公の二人の恋愛を読者に伝達するのに直接話法的でなく間接話法的に語って、自らの解説や注釈・評価を付け加えていた。その部分がオペラではばっさりと切り捨てられたのだ。こうして小説では語り手が自らの意見を付け加えてマルグリットとアルマンの悲恋を報告し、それについての読者の解釈を一定の方向に誘導していたのが、オペラにおいては二人の恋愛譚だけが観客の眼に直接提示され、彼らに自

由な解釈が許されることになった。

オペラで切り捨てられてしまったが、デュマ・フィスの原作の語り手による際立った解釈と何か。端的に言うとそれは、マルグリットの死にキリスト教道徳による救いを見いだそうとした点である。しかもオペラにおけるレチタティーヴォやアリアの内容もこの方針に添うように、ヴィオレッタの臨終に際して神の加護を頼む以外はキリスト教的な解釈はまったく削除されたし、臨終の場に司祭の姿も見あたらない。

だがオペラではこうしたキリスト教文化の削除と入れ替わって顕著な特徴として前面に出てきたものがある。それはヴィオレッタがアルフレードのために果たす「犠牲」、ジェルモンについては「誇りと名誉」の要請（第 2 幕 1 場）、アルフレードの関心は「恥辱」を拭い去ること（第 2 幕 2 場）、ジェルモンが最後にヴィオレッタを娘と認めて「犠牲」に対する代償を払うこと（第 3 幕）、といずれも市民道徳の論理である。

結局、ヴェルディのオペラにおける市民道徳の全面的な展開で最終的に救い出されて勝利を得ることになったのは、ヴィオレッタのアルフレードに対する「真実の恋」であろう。なぜなら、小説では一人寂しく未練を残しながらこの世を去っていくマルグリットに対して、ヴィオレッタは臨終の場に駆けつけたアルフレードには結局彼への深い愛があればこそ恥辱も犠牲も生じたのだということを理解してもらい、ジェルモンからは娘と認めてもらうと同時に二人の仲を引き裂いたむごさに対して許しを請われた、つまり、ヴィオレッタは一方で自らには最終的に自らの払った犠牲が報われたことを死の直前に知って慰謝を与えられ、また他方でアルフレード、ジェルモンの父子や観客に対しては彼女の死が愛に殉じた死であることを、すなわち彼女の愛は死として永遠化されたことを明白に印象づけられたからである。

では問題の肺癆は？「肺癆 tisi」というイタリア語は、オペラでは医者がヴィオレッタの臨終の床で致命的原因として使用されるにすぎない。致命的な病気と言われるものの、それはむしろ漠然とほのめかされるにとどまり、ある時はあの「乾杯の歌」で歌われる快楽追求の動機となったり、またアルフレードがヴィオレッタに接近する口実を提供し、それに呼応して彼の優しさに彼女が心を動かされる理由となったり、さらには終局のヴィオレッタの死因となって機能しているのだが、彼女の死そのものが愛に殉じた死と愛の昇華という意味合いを持つため、その不吉な牙をまったく抜かれてしまっていると言うほかない。つまりソンタグの言うように、肺癆による死はとりわけヴェルディのオペラで決定的に美化されたと言ってよいだろう。

４.『ボヘミアンの生活情景』と肺癆　『椿姫』と同工異曲と言える恋物語を書いたのはフランス文学史に『ボヘミアンの生活情景』（1848 年刊。以下書名を『ボヘミアン』と略記）の作者としてかろうじて名をとどめているアンリ・ミュルジェール（1822-1861）である。[21] 彼の名が今でも語り継がれるのは、『椿姫』などと並んで世界中でもっとも人気のあるオペラの一つで、無名の青年詩人ロドルフォとお針子ミミのあいだの青春の恋物語を描いたプッチーニ（1858-1924）の『ラ・ボエーム』（1896）の盛名に負うところが大きいだろう。[22]

ところでこの名作オペラの恋物語の大半は、ボヘミアンと呼ばれる無名の芸術家たちの生活情景を描いた原作の 23 ある断章中で、18 番目に位置する「フランシーヌのマフ」と

いう章を下敷きにしたものである。

> 彼女はジャックに出会い彼を愛した。二人の関係は半年続いた。彼女と彼は春に結ばれ秋に別れた。フランシーヌは胸を患い、そのことが分かっていたし、また恋人のジャックもそれを承知していた。一緒になって２週間してから、医者だった友人の一人が彼にそのことを教えてくれたからだ、枯葉とともにあの子は逝ってしまうよ、と。[23]

同宿の隣人同士であった若い彫刻家ジャックとお針子フランシーヌのカップルが貧しい暮らしの中で愛を懸命にはぐくみ、それでもわずか半年という短い期間の後悲しい別れを余儀なくされたのだが、それはフランシーヌの肺癆のせいであった。タイトルの「マフ」は二人の愛情の象徴で、病状が重篤になるにつれ部屋の寒さに耐えきれなくなったフランシーヌがジャックに買ってくるように依頼したものであり、彼が何とか金を工面して買ってきたそのマフを死の床でも彼女は決して手放そうとしなかった。

『椿姫』のマルグリットと境遇は異なるものの、フランシーヌもまた肺癆によりあらかじめ運命づけられた死を前に、ジャックとの愛を味わい尽くそうと生き急ぐ。そうして『ボヘミアン』は『椿姫』とは別のロマン主義的傾向を見せて、肺癆神話の形成に寄与する。ここでもソンタグの指摘を利用すると、「悲しみを感じとるには――とは、つまり、結核にかかるにはという意味でもあるが――『感受性の強い』人間であることを必要とする。結核の神話は古くよりある憂鬱症――四つの体液説によればこれも芸術家の病気であった――この憂鬱症の観念の長い歴史のほとんど最後を飾るものである。憂鬱症にかかるのはというか、結核にかかるのは、すぐれた性格の持ち主であった。感受性が鋭く、創造力に富む、独特の人物であった」（『隠喩としての病』、 pp.32-33［p.48］）。

フランシーヌの場合、まことにロマンチックな感傷と形容すべきか、彼女のはかない命は木の葉に象徴されている。二人の出会いの頃木の葉は青々としている（p.281）。それが田舎に遠出した 7 月には黄色く色づき始め、この不幸な予兆にジャックは胸を痛める（p.282）。最後に彼女が死去する 11 月 1 日の万聖節の前日、中庭の一本の木から死の床に一枚の枯葉が枕元に舞い落ちた。窓を開けると、木には葉が一枚も残っていなかった（p.284）。

『椿姫』についてはオペラと小説の間に主人公の肺癆の死をめぐって解釈の異同があり、オペラにおいては市民道徳をてこにロマン主義的な死の美化の方向が強調されていた。ここでもオペラ『ラ・ボエーム』と小説『ボヘミアン』の異同は顕著で、とりわけ原作小説の断章「フランシーヌのマフ」からオペラになると、彼女の死の後日談に当たる後半部分がまったく省かれてしまっている。

プッチーニのオペラもやはり甘いロマン主義的感傷の傾向を鮮明にしようとしたのかここでは詳しく問うことをしないが、ともかく小説の方にはロマン主義的な死の美化をいくぶんゴシック・ロマンス的な方向に推し進めた少々毒気のあるエピソードが存在する。それは恋人のジャックがフランシーヌのデスマスクを取ろうとするエピソードで、彼が才能豊かな彫刻家であることによってそれがいっそう迫力をまして描かれる。

> フランシーヌはジャックのために理想を具現した人間のイメージを残そうとして、

死んですでに冷たくなっていたにもかかわらず、いまだに愛の喜ばしい輝きと青春の麗しさのことごとくを示す表情をまとっていた。彼女は美術作品の蘇りであった。（p.289）。

ジャックがデスマスクを取ろうとして石膏を流すと、それにかすかな痙攣で応じるフランシーヌは死からよみがえってくるような錯覚を彼に与えた。ミュルジェール自身が言及するように、これはピグマリオン神話を彷彿とさせる。ピグマリオンはこのうえない美しさをたたえた象牙の女像に恋し、アフロディーテの祝福を受けてその像ガラテイアをよみがえらせると自らの妻とした。

ただしその後のジャックのゴシック的ロマンスは神話とは別の方向をへ向かい、リアリズム的な展開をみせる。ジャックは自らの悲しみを別の恋によって慰めようと試みるのだが、フランシーヌの魅惑から自らを解き放つことは不可能で、新しい恋人マリーにも自らの理想とするフランシーヌのイメージを押しつけようとする。当然この新しい恋は実らず、結局ジャックは最終的に失意のうちに、肺癆を疑わせる病気のせいで早世する。

それでもなお、オペラにはないこのような後半部でのフランシーヌの死は、オペラのミミの死と同じく、肺癆によって美化され、先に見た『椿姫』のロマン主義的神話のパターンをそのまま踏襲しようとしている。原作『ボヘミアン』の語り手が、ジャックの手になるフランシーヌのデスマスクについて、「彼女は美に殉じて死んだようだった」（p.289）と明言するのは、「佳人薄命」というロマン主義神話をよくよく意識してのことだったであろう。

【注】

1. 福田眞人、『結核という文化』中公新書 1615、2001，p. 197.
2. Pierre Darmon, *L'Homme et les microbes*, Fayard, 1999, p. 299［ピエール・ダルモン『人と細菌』寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005 年、p.416］.訳文は上記邦訳を利用した。
3. Pierre Guillaume, *Du désespoir au salut: les tuberculeux aux 19e et 20e siècles*, Aubier, 1986, p. 149.
4. *Ibid.*, pp.152-153.
5. 福田眞人、前掲書、pp.12-14.
6. 訳語については肺結核の漢方名である「労痎」を利用することもできるが、ここではルネ・デュボス、ジーン・デュボスの名著『白い疫病――結核と人間社会』（北錬平訳、財団法人結核予防界、昭和 57 年［Rene and Jean Dubos, *The White Plague. Tuberculosis, Man and Society*, Little Brown and Company, Boston, 1952］）の訳語を採用した。
7. Pierre Darmon, *Op. cit.*, p.168.
8. Honoré de Balzac, *La Peau de Chagrin* in *La Comédie humaine*, t. X, coll. Pléiade, Gallimard, 1979, p.262［邦訳『あら皮』小倉孝誠訳、藤原書店、2000 年、p.232］. 以下本書からの引用については書名の後にページ数を付すにとどめる。訳文は文脈に不都合のない限り上記邦訳を利用した。

9. Moïse Le Yaouanc, *Nosographie de l'humanité balzacienne*, Maloine, 1959, pp.179-220. Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la Maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, 2 vols, Klincksieck, 1991, pp.95-156.
10. Jean-Louis Cabanès, *Ibid.*, pp.96-97.
11. Cf. Hiroshi Matsumura, 《Balzac et la médecine de synthèse: le point de vue médical dans *La Peau de chagrin*》, *Études de langue et littérature françaises*, n° 74, Société Japonaise de Langue et Litérature Françaises, 1999. pp.36-40.
12. Moïse Le Yaouanc, *Op. cit.*, p. 15.
13. 『あら皮』の訳者小倉孝誠は『作品解説』を「情熱と蕩尽の物語」と題してこの小説を紹介している。
14. Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Penguin books, 1991（1st publishing in 1978）, p.46［邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982 年、p.68］. なお今後本書からの引用に際しては書名と引用ページを本文中に略記するにとどめる。訳文は（以下も含めて）上記邦訳を利用した。
15. 《Vie d'Alexandre Dumas Fils, 1824-1895》 et 《Mademoiselle Marie Duplessis par Jules Janin》, *in La Dame aux Camélias*, coll. folio classique, Gallimard, 1975, pp.313-339.
16. Dumas fils, *La Dame aux camélias*, *Ibid.*, p. 29[邦訳『椿姫』吉村正一郎訳、岩波文庫、1971 年改版、p.16]. 以下本書からの引用については書名の後にページ数を付すにとどめる。なお引用の訳文は（以下も含めて）おおむね上記邦訳を利用した。
17. 《Phthisie pulmonaire》in *Dictionnaire des sciences médicales*, t. 42, Panckoucke, 1812-1822, pp. 59-61. 以下同書への指示は『医科学辞典』というタイトルとページ数を本文中に表記するにとどめる。
18. Susan Sontag、*Ibid.*, 「かつて結核とは情熱過多から来るもので、官能に惑溺する人々を悩ますものと考えられた」（p.22［p.30］）など、諸処でこの種の指摘がある。
19. ルネ・デュボス、ジーン・デュボス、前掲書（注 6）、p.157.
20. ジュゼッペ・ヴェルディ『椿姫』（DVD: ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、1992 年、音楽：ジュゼッペ・ヴェルディ、台本：フランチェスコ・マリア・ピアーヴェ）、魅惑のオペラ第 2 巻、小学館、2007 年。
21. Henry Murger, *Scènes de la vie de bohème*, coll. Folio, Gallimard, 1988.
22. ジャコモ・プッチーニ『ラ・ボエーム』（DVD: コヴェント・ガーデン王立歌劇場、1982 年、音楽：ジャコモ・プッチーニ、台本：ジュゼッペ・ジャコーザ、ルイージ・イッリカ）、魅惑のオペラ第 15 巻、小学館、2008 年。
23. Henry Murger, *Ibid.*, p. 281. 以下本書からの引用についてはページ数を付すにとどめる。

第二部

アブーの『ジェルメーヌ』とゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』の肺癆

IV章　アブーの『ジェルメーヌ』とゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』

１．エドモン・アブーの『ジェルメーヌ』

19 世紀後半に多彩な文筆活動を展開しヴォルテール二世と称えられたこともあったエドモン・アブー（1828-1885）という作家のことを知っているものは、フランス文学の専門家でもあまり多くはいまい。その彼が肺癆を患う妙齢の女性を主人公にした『ジェルメーヌ』（1857）という小説を書き、それがまたサスペンス感を盛り込んだバルザック風のおもしろい作品だったことを知るものはもっとまれであろう。絶版の書物を再度世に送り出そうとしているアメリカの「ビブリオバザール」というコレクションがその『ジェルメーヌ』を最近復刻したので、フランス語さえ読めればわれわれもまたこの作品を楽しめるようになった。[1] 今まであまり知られていなかったこの小説を、肺癆に関わる事項を交えて、手短に紹介しておこう。

物語は 1853 年 1 月に始まるという設定である。ドゥ・ラ・トゥール・ダンブルーズ公爵家の令嬢ジェルメーヌは、主治医の所見では、肺癆のせいで余命も 4 か月ほどだろうということであった。またその主治医によると、彼女の病気はそもそも遺伝性ではなく、流感を軽視してこじらせてしまい、あげくに一家の貧窮も加わって、寒い部屋に病人を置き去りにされ、必要な手当もされなかったからであった。もしも一家の主である公爵が娘ジェルメーヌの状態を危険だと見てただちに財産の濫費を自ら改め、どこかで金を工面して

きて、半年前から医者たちが勧めていたように、エジプトかイタリアに転地療養をしていれば、彼女はこのように手遅れにはならなかったであろう。それでも公爵は自分のこと以外には無関心で、金のことも娘のことも何とかなる、なるようになるとしか考えていなかった。今では主治医ル・ブリスの気がかりは、ジェルメーヌのいくばくもない余命もさることながら、娘に始終付き添って看護していた公爵夫人が娘の病気に感染して、娘と同じ病気の兆候を見せ始めたことであった。しかし小説に描かれたその日も公爵夫人は家に一サンチームも見つけることができずに、なけなしの結婚指輪を宝石屋に買い取ってもらって、何とかその日の食べ物と、娘の病気治療のために鱈の肝油を手に入れたのである。

そんな公爵家の絶望的な状況に、5 万フランの年金を義父に付けるから余命幾ばくもないジェルメーヌを嫁にくれないかと、パリに住むスペイン人の大富豪ド・ヴィラネラ伯爵から奇妙な結婚話が舞い込む。なぜなら、この伯爵は社交界では美貌で評判のシェルミディ夫人との間に子供をつくってしまい、彼女には商船の船長である夫がいるので、そのことを表沙汰にできない。そこでジェルメーヌと結婚すれば、伯爵の方は身分のうえでもふさわしい結婚をすることになり、子供も正式に認知できる。またジェルメーヌを嫁にすれば結婚後すぐにも死んでしまうだろうし、シェルミディ夫人と関係も続けられるし、万事好都合だろうというわけである。

いくら自分のことしか考えないというダンブルーズ公爵でもそれは拒否するが、話を聞いたジェルメーヌ自身が、家の窮状と母親の病気療養費のことを考慮し、残る命を家族のために犠牲にしようと自ら申し出たため、その話はまもなく成立する。すぐに結婚式が行われ、翌日になると新婦の療養のためにという理由で、あたふたと新郎のドン・ディエゴ、その息子でもう 2 歳になったゴメス、そしてドン・ディエゴの母親である伯爵夫人からなる一家が転地療養に旅立つ。彼らはニース、ローマ、ナポリなどに滞在するがいずれもあまりジェルメーヌのためにはならないと判断し、最終的にはイオニア海の島でギリシアのコルフ（コルキュラ）島を療養地として選択した。コルフ島で療養して肺癆を治したという何人かに出会ったからだった。

コルフ島での療養の効果、それから奇縁で結ばれたドン・ディエゴの新婦に対する誠実で思慮深い対応、義母の手厚い看護、すぐに新しい母親のジェルメーヌになついてきたゴメスなどの周囲の暖かい愛情もあって、ジェルメーヌの肺癆は奇跡的に快方に向かう。

パリで今か今かとジェルメーヌの死を待っていたシェルミディ夫人は、病気で帰ってきた伯爵家の召使いの代わりに腹心の部下マントゥーを送り込む。この召使いは一計を案じて砒素によって密かにジェルメーヌの死を早めようとするのだが、暗殺計画が露見しないようにと少量づつ砒素をジェルメーヌに飲ませたため、逆にそれが肺癆に対して治療効果を発揮してしまう。

当初は警戒し合っていた夫婦も病気の介護を通じて互いの人柄を認め合うようになり、ついにドン・ディエゴはシェルミディ夫人よりもジェルメーヌの方に妻としての愛情を抱くにいたる。ジェルメーヌは晴れて自分たちの愛情が夫婦の間で共有されたことに感激し、病気からの快復を早めて一刻も早い幸福の実現を得ようと、いつもやっていた治療法のヨード吸入でヨードの量を増やして人事不省に陥ってしまう。しかしジェルメーヌは 1 週間後に一家や彼女の介護のためにコルフ島まで付いてきた医者のル・ブリスの努力のおかげでこの危機から脱出できた。

物語の最後にはジェルメーヌがいまや確実に病気からの快復の途をたどり、それと対照的にシェルミディ夫人の方は腹心の部下だったはずのマントゥーにも裏切られ殺されて、この小説は終わりを告げる。

２．アブーと医学的知識

『ジェルメーヌ』の作者エドモン・アブーはフランス文学史中では写実主義の作家として位置づけられ、多彩な活躍ぶりから「才気にあふれた」と形容されたりするが、それは『プティ・ロベール固有名詞辞典』（*Dictionnaire universel des noms propres. Le Petit Robert 2*）で紹介されているように、「科学の進歩に触発された」フィクションを書いたからでもあった。ところでこれまで見てきた肺癆に関するいくつかの代表的な物語と比較してみると、アブーの『ジェルメーヌ』だけは、うら若き女性主人公が肺癆から癒えるというハッピーエンド仕立てになっており、一見すると底の浅い物語だとの恨みが残らざるをえまい。だが、結論を先取りして言うなら、物語を支配する病理にのっとった肺癆の進行や、基本的には肺癆の治療法に依拠した説話の展開を追うと、作者アブーが当時の先進的な医学に明るく､むしろハッピーエンドもそのような該博な知識から要請されて出てきた結果であり、安直な仕立てだと単純に言い切ることはできないようである。

われわれが先立つ章で、バルザックの『あら皮』やデュマ・フィスの『椿姫』を検討する際に参照した医学の専門的文献は『医科学辞典』（1812-1822）であったが、それは『ジェルメーヌ』の出版時点から振り返ると 35 年前にさかのぼる文献で、おそらく才気煥発なアブーにすれば、すでに古色蒼然とした代物でとても参考にしたくなるような専門書ではなかったであろう。その証拠に『ジェルメーヌ』に抗肺癆治療薬として挙がっていた砒素やヨードというのは、その『医科学辞典』では見いだすことができない。『ジェルメーヌ』とほぼ同時代に発行され、おそらくその時代の医学的知識の水準を具体的に表していると推測されるものを挙げるとすれば、『ジェルメーヌ』が出版された 1857 年の 7 年後にあたる 1864 年から 1889 年にかけて出版されたドゥシャンブルらによる 100 巻本の『医学百科辞典』[2] が適当かもしれない。それというのも、ちょうどそこには砒素とヨードが肺癆のための薬剤として推奨されているからである。

その砒素の薬効は、相対的ながらも傷害に直接働きかけ、病原体を撃退し、傷害された組織を修復する効果がある、とみなされている。[3] また『19 世紀ラルース大辞典』の砒素の項目では、この砒素というのは古くから知られた毒薬で、薬効は認めらるが危険であるという理由で長い間薬剤としては遠ざけられていた、しかし最近、ということは１９世紀になってから、慎重に少量ずつ投与すればとりわけ肺癆を含む慢性病にはめざましい効果を発揮することが明らかになった、と記されている。このようにアブーは、肺癆の治療法から見る限り、『ジェルメーヌ』を書くに際していち早く最近の科学的な研究成果を自らの小説に取り込んだということになるだろう。

実際に『ジェルメーヌ』では、シェルミディ夫人の送り込んだ召使いのマントゥーがジェルメーヌを暗殺しようと数グラムの砒素を買い込み、二人分の致死量に当たる一つまみを大きなガラスのコップで水に溶かしておいて、それを病人が毎日飲んでいる砂糖水に数滴垂らすという方法でゆっくりと殺していこうとしたことが語られている（*Germaine*, p.120）。どうして彼が女主人をひと思いに毒殺しなかったかというと、肺癆が快方に向か

っているさなかにジェルメーヌが急死でもすれば、すぐにも毒殺が露見してマントゥー自身疑われる危険があり、それを避けるには少量ずつ砒素を摂取させ、それがやがて体内に蓄積されて致死量に達して病人が死ぬように細工すれば問題は生じないと考えたからであった。しかし、語り手に言わせれば、それが砒素についての歴史や薬理学を知らない素人の浅はかさで、マントゥーは砒素が体外に排泄されることや砒素には肺癆に対する薬効のあることなど思いも及ばなかった。そのため彼の期待とは裏腹に、砒素は結局ジェルメーヌの肺癆に治療効果を発揮してしまったのである。さらに語り手は「薬剤の微粒子が肺にはいると外部の空気に触れて燃焼し、そして人為的な呼吸作用を発生させる」（*Ibid.*, p.132）、すなわち砒素がとりわけ肺癆患者の呼吸困難を解消させる働きをすると、いかにもそれらしい薬理学的見解を披露し、その後に熱を抑え、食欲を増進させ、睡眠をもたらし、体を太らせ、しかも他の薬剤の治療効果を高めることすらあるとまで言って、砒素の利点をひとかたならず強調することさえしている。

その砒素との相乗効果でジェルメーヌに急速な快復を促したのが、他方のヨードという「新しい薬品」であった。われわれにはヨードチンキという殺菌剤でおなじみのヨードまたはヨウ素は、『19 世紀ラルース』によると、1811 年にクルトワが発見した新しい化学物質で、自然界にはひばまたに代表される海藻類、また海綿や海に生息する軟体動物に含まれる。このヨードには強力な殺菌作用が存在することが明らかになり、急速に薬剤として普及していったようである。ただしこれまた危険な薬剤で恒常的に摂取するとヨウ素中毒に陥ったり、誤って経口摂取した場合 2~3 グラムの量で死にいたる。[4] ジェルメーヌは毎朝医者のル・ブリスが付き添って 1 日 1 回、毎朝 3~4 分かけて辛抱強く吸入療法を施している（*Ibid.*, p.133）。しかしジェルメーヌは自らの恋する思いが夫のドン・ディエゴに通じた感激から自制力を失い、自分の病の快復を早めようとル・ブリスに無断で許容量を超えてヨードを吸入し、急性中毒に倒れたことはすでに記した通りである（*Ibid.*, p.141）。ジェルメーヌはこのヨード中毒の危険からも脱してついに肺癆からの快癒を果たすのであるから、危険を承知で慎重に処方すれば肺癆に対するいわばヨードの霊験はあらたかだとアブーが考えていたことになろう。

肺癆治療の観点からこのアブーの小説をまとめてみると、ジェルメーヌが肺癆から快復しえたのは結局ギリシアのコルフ島で転地療養をし、そこでヨードという新たな薬剤の治療を受け、さらにそこに砒素という相乗効果をもたらす薬剤が加わったからであった。われわれの参考にしたドゥシャンブルの『医学百科辞典』はまた、ジェルメーヌの肺癆の転地療法にふさわしい療養先としてコルフ島を挙げており、既に見たように砒素とヨードの効用も説いていた。そこでアブーが小説に利用した医学的知識は同時代においては最新のものであったと言ってよかろう。

ところでこの辞典は 1864 年から 1889 年にかけて出版されたので、コッホの結核菌発見（1882）という結核史における画期的事件を肺癆の病因論の項では当然ふまえている。だが病因論における一大発見がすぐにも肺癆の予後や治療法に影響を及ぼして明るい展望を繰り広げるというわけにはいかない。この辞典の肺癆に関する予後の記述は相変わらず「語の絶対的な意味において、結核の傷害は不治である。なぜならそれは必然的に乾酪変性や硬化にいたり、どちらの場合にも程度の差こそあれ一定の領域や割合で肺の組織とその機能の破壊を生じさせるからである」（p.777）と悲観的な意見をはっきりと述べている。し

たがって、この辞典に掲げられている転地療法や、砒素、ヨードの化学療法も、あくまでも病状の進行を阻止するか、あるいはその症状を軽減するためのものであり、こうした療法に従えば病気から快復するとは決して主張しているわけではないのである。

要するにアブーは、後世のわれわれから見ると、時代の先端的な知識をいち早く自らの作品に取り入れて彼の才気煥発な性格を遺憾なく発揮しているが、その反面あまりにも科学を無批判的に信仰して楽観的な世界観をのぞかせていると言うことができるだろう。

ただしことはそう単純に割り切れないかもしれない。なぜなら、文学における医学的知識ないしは科学的知識の利用というこの問題は、アブーのみならずどの時代の作家にも通有の普遍的な問題として浮上してくるだろう。とりわけアブーと同時代の作家にとって目覚ましい発展を示した先端的医学の知識は、彼らの衒学性を誇示するために利用された衣装であるよりも、優れて彼らの説話法の構成原理として役立っていたし、その点では彼らの標榜するリアリズム世界を保証するための不可欠の要素の一つとしてあったからである。作家が自らの虚構世界を作り出すのにリアリズムの保証として医学的な知識ひいては科学的な知識をこのように積極的に利用しようとすると、おうおうにして作家の意図とは裏腹に科学的知識のこうした利用がかえってあだになって、自ら意図したリアリズムを裏切り、とりわけ後世の読者の眼には荒唐無稽な世界の出現を許してしまうということが起こりうる。

先の章でもすこし触れた医学テクストと文学テクストとの関係について、ここで J-L・カバネスの意見を紹介して、この点についてすこし検討を加えておこう。

カバネスはフローベールの『ブヴァールとペキュシェ』に言及して、「この小説の虚構については科学的な観念によって伝達されてきた、デフォルメされた現実のイメージのなかに起源を見いだせる。科学的な知識というのはまさしく虚構的なものなので虚構を養うのだ。」徹頭徹尾リアリズムであれという科学者の意図はどうであれ、現実的にかつ歴史的に見て科学的な知識もまた本質的に虚構であることを余儀なくされている。こうした科学的な知識の本質を見抜いているので、「『ブヴァールとペキュシェ』の作者の態度は［・・・］まさにゾラのそれとは正反対である。フローベールは未来を見越すどころか、それとは反対に過去を探索する。なぜなら彼にとってはどのような思考も時代遅れになることを証明することが重要なことだからである。」[5]

作家がリアリズムを標榜して世界の解釈に本質的にもっともリアリズムを徹底させている科学を利用しようとすると、皮肉なことに必然的に時代遅れにならざるをえない科学的な知識そのものに今度は裏切られてしまう。結局リアリズムの保証を最新の科学に頼ろうとする作家は誰しも時代遅れになることを覚悟しなければならないのだろう。それだから作家は誰しも、フローベールが戯画化したブヴァールとペキュシェとなることを多少とも免れることはできないであろう。

『ジェルメーヌ』においてアブーは、当時最先端を行く肺癆の医学的知識に説話の展開を依拠させ、そこに読者の関心も多分に引きつけることに成功した。そうだとすれば『ジェルメーヌ』の評判もこうした医学的知識の消長と軌を一にするだろう。すなわち『ジェルメーヌ』の魅力がもっぱらそうした医学的知識に支えられていたとしたら、それがまもなくコッホの結核菌の発見などによって乗り越えられて時代遅れに堕し、ことに肺癆の病因論や治療法が大幅な見直しを必要とされるようになると、作品自体も医学的な知識の失

効に引きずられて歴史の闇に忘れ去られてしまったと考えられるのである。ちなみに、先のカバネスのフローベールに関する主張に引き寄せて言えば、フローベールとアブーは医学的な知識の扱いに関して対極的な位置にあると言えるだろう。

３．ゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』

『ジェルメーヌ』の出版から 12 年後の 1869 年に写実主義の代表的作家であるゴンクール兄弟［エドモン 1822-1896、ジュール 1820-1870］が、『ジェルヴェーゼ夫人』という、肺癆で斃れる女性を主人公にした作品を書いている。彼ら兄弟作家はその『ジェルヴェーゼ夫人』以外にも、『ジェルミニー・ラセルトゥー』（1865）では肺癆ないし肺炎を併発しているヒステリー症の女性を登場させ、弟ジュールの死後にも、兄であるエドモン一人でまたヒステリー症の女性の悲劇的な死を描いた『娼婦エリザ』（1877）という作品も書いている。そのことからすれば、「写実主義作家」というものの、彼らが医学的な知識を体系的に活用して小説を作り上げた点では、むしろ彼らには後のゾラなどと同じく自然主義作家という名称を冠した方がよさそうである。

『ジェルヴェーゼ夫人』という小説の題名の元になった主人公のジェルヴェーゼ夫人は、ゴンクール兄弟が名高い彼らの『日記』の中で告白しているように、[6] 彼らの叔母であるネフタリー・ド・クールモン［1802-1844］をモデルにしている。ゴンクール兄弟は日記で見る限り、この叔母に対しては深い敬愛を抱いていたようである。だが、小説になると一転して、兄弟は皮肉に満ちた冷徹な視線を持った小説家として振舞い、ローマで客死したジェルヴェーゼ夫人の死因である肺癆と神秘主義的狂信との関係を暴き出すことになる。

小説のジェルヴェーゼ夫人のモデル、ネフタリー・ド・クールモンは 1802 年生まれで、旧姓はル・フェーヴル、1823 年にジュール・ド・クールモンと結婚してクールモンを名乗ることになった。アルチュールとアルフォンスの二人の男児を設け、長男は精神遅滞児で 1841 年に 10 歳で亡くなる。その頃かなり重症な肺癆に罹っていたネフタリーは長男の喪の悲しみを癒すことと自らの病気療養のため、残った当時 7 歳のアルフォンスを連れてローマに旅立つ。アブーの『ジェルメーヌ』の時もそうだったが、当時転地療養は肺癆の有効な治療法とみなされていた。ローマは温暖湿潤な地中海気候が肺癆によいとみなされて、療養地として『19 世紀ラルース』にも名があがっているし、『ジェルヴェーゼ夫人』の中にも、先例としてシャトーブリアンとボーモン夫人が療養のためにローマを訪れたことが記されている。[7] ローマに移住したネフタリーはやがて神秘主義的カトリック信仰に傾倒していき、それと並行して以前の合理主義的な性格を失ってしまう。その熱狂的な信仰熱が高じるにしたがって、肺癆の方も重篤化していく。そうして彼女は 1844 年 5 月に死去するにいたる。[8]

ゴンクール兄弟が敬愛する叔母を小説に取り上げた最大の動機を探ると、ガブリエル・ド・ブロイが語っているように、[9] 彼女が転地療養に訪れたローマで早くも 3 年後に死去したことに加えて、それがパリ時代からは想像できないカトリックの神秘主義に溺れ込んだあげくの死がそれであったと想定される。したがって作品を書く目的が叔母の神秘主義への回心と早すぎる死を解明することにあるとすれば、当然のことながらゴンクール兄弟の代弁者として語り手の向ける小説の主人公に対する分析的視点は冷静で批判的なものに

なっていくだろう。そのときわれわれの主題である肺癆は、神秘主義に対する最も有効な批判的分析対象としてある。

端的に言うと、小説の語り手が展開しようとするのは、肺癆という病気が主人公のジェルヴェーゼ夫人をして自らの生命を文字通り賭すまでに傾倒させた神秘主義を異常に昂揚させた、という主張である。すると肺癆というのはこれまでそれが担っていた不治の病、つまり絶対的な死因という役割のほかに、ジェルヴェーゼ夫人に関しては神秘主義への傾倒を助長させるという役割を担うようになる。『ジェルヴェーゼ夫人』の神秘主義と病気の関係については、肺癆のほかにもヒステリーが関係してきてなかなか一筋縄ではいかないのだが、[10] ここでは肺癆に焦点を絞って議論を進めよう。

1 章でジェルヴェーゼ夫人の肺癆に対する最初の言及がある。そこではイタリアとフランスの肺癆に関する民間の病理学思考の相違が透けて見える。

> 「あら、奥様は体の具合がお悪いのかしら？」と貸し主の婦人はゆっくり言った。彼女の心中には胸の病気がうつるのではないかというローマの間貸しの女たちが一般に持っている恐れが忍び込んできたからだった。それはシャトーブリアンがド・ボーモン夫人のためにローマで最後のすみかを求めていたとき経験済みのことだった。[11]

間貸しの婦人に代表されるようにイタリア人たちが肺癆がうつるのではないかと恐れているに対して、肺癆を患っているジェルヴェーゼ夫人はもとより、彼女の周囲のフランス人の方はいっこうにこの病気を恐れている気配がない。この小説にジェルヴェーゼ夫人のパリにおける主治医として登場してくるガブリエル・アンドラールは実在の高名な医学者であり［1797-1876］、『19 世紀ラルース大辞典』の「肺癆」の項にも登場している。実はそこで彼は肺癆患者と同居を避けるよう助言している、つまり肺癆の感染説を唱える医学者として紹介されているのだが、実際にはクールモン夫人の主治医として、また虚構上のジェルヴェーゼ夫人の主治医としてあるときには、自説に固執することなく、二人の夫人がそれぞれとりわけ感染の危険を恐れなければならない息子をローマに同道していくことに関して、何の心配もしていないようである。

『ジェルヴェーゼ夫人』は 111 章からできている。章の数が異様に多いのは、唯美主義を標榜するゴンクール兄弟のもくろみから、前半のローマの情景描写を中心に散文詩のような短い章でもって小説を構成しようとしたからである。

ところでこの小説の丁度真ん中に位置する 56 章は、「ジェルヴェーゼ夫人の内部では密かに転換が完成されつつあった。知性に支えられた自尊心、分析的、探求的、批判的精神、しっかりとした判断力、女性には珍しい固有の考え方をしようとする意欲、それらが気質（tempérament moral）の変転、つまり一種の性格反転の影響で次第に彼女のうちで衰えていったのである」[12] 、という文章で始まる。そしてそこまでジェルヴェーゼ夫人の回心の観点からすれば比較的緩やかに、表だった急激な変化も見せずに展開してきた物語が、ちょうどこの章を境に神秘主義的信仰の異様で過激な記述が目立つようになる。すなわち小説自体は形式的にも内容的にもここからがはっきりと後半だと見なせるような意図的な構成になっている。

すでに触れたように、小説の冒頭でローマに来て宿探しをするジェルヴェーゼ夫人が肺

癆を患っていることは読者にすでに告げられていた。それから 2 章で「水薬」に関する記述があるのだが、それ以降後半部になるまで肺癆については直接言及されることがない。小説の登場人物ジェルヴェーゼ夫人の立場で考えると、前半部でおよそ 2 年近く時間が経過するのにローマの間貸し人から恐れられた「胸の病気」がほとんど話題にならないのは、病状がほとんど進行していないか、あるいはそれよりもっと可能性がありそうだが、病気そのものは自らの内部で密かに進行しているにもかかわらず、ジェルヴェーゼ夫人がそれを意識することがないほどほかのことに気を取られていた、と作者のゴンクール兄弟が想定したのであろう。だがこれは小説の登場人物ジェルヴェーゼ夫人の立場に立って考えたときの話である。

小説の基本的構造の審級には登場人物のほかに語り手の立場が考えられる。作者のゴンクール兄弟には、主人公のジェルヴェーゼ夫人を通して神秘主義的カトリックへの回心と肺癆に起因する彼女の早すぎる死、およびそれら両者の関係を解明することがこの小説を書く重大な契機としてあった、というのがわれわれの当初の見解であった。そのため作者の小説中の代弁者たる語り手には、主人公と別の立場にたって、具体的には小説の主人公の思考や行動を論理的に追っていこうとする観点があってしかるべきだと考えられるし、それはこのような分析的な意図を持った小説にあってはことのほか重要な意味を持つであろう。

そのような語り手の立場から見たとき、前半部で問題にされているのは肺癆よりもむしろヒステリーだと言える。だが端的に言うと、ヒステリーがジェルヴェーゼ夫人を死に追い込むことはないし、当時の病理学に照らして考えてみてもそのようなことはありえないことである。ヒステリーについては別稿を参照してもらうとして、[10] 小説の構成に絡めてヒステリーと肺癆の関係についてだけここで簡単に振り返ると、前半部で顕著なヒステリーは主人公を神秘主義に誘導する重要な要素の一つであったと考えられるが、しかし彼女を死に至らせる決定的な死因とはなりえなかったので、語り手の分析的な立場から後半部においては当時の死病であった肺癆に焦点を当て、それと神秘主義との関係を考察することに力点を置いたと見なすことができる。

４．肺癆の自然主義的考察と神秘主義

後半部で初めて持病の肺癆に触れているのは 89 章であり、そこでは主人公の立場から彼女の信仰と関連づけて病気に対する考え方が述べられる。以下はいわばゴンクール兄弟の肺癆に関する自然主義的考察と言って差し支えないだろう。

> ジェルヴェーゼ夫人は何日かかなり体の具合が悪いと感じたが、そのまま病気を受け入れて、進行するにまかせた。それは厚い信仰を持った女性にしばしば見られる、あの敬虔な諦めの気持ちに由来するものであった。つまり彼女は、自らの健康が神の御手の中にあり、本当のキリスト教徒ならそれに心を砕く必要はないと考え始めていたのである。苦しみは一種の精神的進歩であると彼女の目に映るようになった。彼女はどの医者にも、モンテローネ博士にも見てもらおうとしなかった。[13]

「ヨブ記」のヨブを典型として、キリスト教に関係する文学作品には、病気を神の課す試

練や贖罪と見なす考え方があり、ジェルヴェーゼ夫人が自らの病気を上記の引用のように考えることも取り立てて言うほどのこともないであろうし、いよいよ彼女の信仰が神秘主義的な傾向を強めてきたとすれば、それに神秘主義的信仰というのがそもそも神を絶対的存在として仰ぎ世の中の森羅万象をそれに従わせて考える考え方であるから、むしろ彼女のような考え方をすることがきわめて当然のことであろう。

それよりもここではジェルヴェーゼ夫人の病気に対する意識の変化そのものに注目しておきたい。ここまでの物語の進行を追うと、彼女の意識は詳述されているように神秘主義的カトリック信仰に次第に集中していくに対して、持病についてはほとんど関心を示すことがなかった。それでもわれわれが想像するに、それまでの彼女はローマ移住の動機からして病気については何とか直せないものかと思っていたであろう。すなわち、信仰を深めることと病気を治すこととの間には何の関係もないし、両者が呼応や背離するような密接な関係にはない、と考えるのが一般的であろう。

しかし神秘主義的信仰への傾斜が深まると、すべてがキリスト教との関係によって解釈し直され、あらためて判断を下されるようになる。つまり、ジェルヴェーゼ夫人が持病の肺癆を自らの信仰と密接に関係し、それと一体をなすものと考えるようになったのは、ここで彼女の神秘主義的思考がいよいよ深まったからだ、と言い換えることができるのである。そしてその結果として、彼女が神秘主義的信仰を深めようと意識するのとは対照的に、彼女の病気の方は病気としての現実性を失い、彼女にとっては信仰の一種のメタファー的役割を果たすだけになるのである。神秘主義的傾向がいっそう深まれば、先の「ヨブ記」やユイスマンスの『スヒーダムの聖女リドヴィナ』のように、病気の深刻さこそ神の与える試練の意義深さを示すものとみなして、ジェルヴェーゼ夫人が以前の考え方とは全く逆に病気の進行を歓迎するようになるかもしれないであろう。ここでわざわざ指摘するまでもないかもしれないが、病気をメタファーとみなす考え方は、聖書の時代からキリスト教によって慣らされてきた、根の深いものである。

したがって、一方でたとえば病気を放置しておいて何のために信仰に救済を求めるのかというような常識的な考え方からすると、ジェルヴェーゼ夫人のローマで顕著になってきた性行は信じがたい、奇異なものとして映るので、彼女の周囲では彼女のことが心配になって医者や旧知の人たちが親身になって忠告をする。ところが、他方のジェルヴェーゼ夫人の方でそれに一向に耳を貸す気配が無く、彼らを逆に遠ざけるようになるのは、彼女の立場からすれば、一方の信仰の深まりと他方の持病の重篤化の放置とのあいだに一体的で整合的な関係が認められるため、自らが論理的に一貫した行動をしており、そこに論理的破綻や矛盾など無いという確信があるからであろう。

だがそれとは別に、小説には彼女とは立場を異にする彼女の性行に分析的な視線を投げかける語り手が存在していた。それはゴンクール兄弟の代弁者として語り手が、今見てきたジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的性行を、彼女とはまったく別の視点から冷静に判断しようとする、つまり作者の医学的な知識を体系的に活用して批判的に分析しようとする立場である。われわれはそれに 93~94 章で出会う。そこでは、先の引用と同様夫人の肺癆と信仰に関して、だが今度は語り手の医学的な観点から分析が試みられている。その意味でこの個所は、作者のゴンクール兄弟が小説を書く動機になった、神秘主義的カトリックへの回心と肺癆による早すぎる死という疑問を解明するための重大な局面を構成している

と言える。そこで語り手=ゴンクール兄弟は、その疑問について生理学的考察をするのだが、しかし現代の眼から見ると彼らの推論が不器用で、突飛に見えてしまうのは、時代の限界のせいもあって致し方のないことかもしれない。

> 夫人の精神や想像力を錆び付かせたり、体液そのものをも濁らせたりするような、身体の下部にある卑しい器官がかかる病気に対して、人間の上部にある高貴な部分のかかるこの肺癆という病気は、患者のなかに、好もしくて、心を動かす、昂揚させるような何かを、善や美、理想のうちに物事を見ようとする感覚を、言い換えればこの世ではほとんど感じ取れないような、一種の人間の崇高な状態を生じさせるという特徴を持っている。[14]

ソンタグが指摘していることだが、[15] 人間の生命維持にとってきわめて重要な器官である肺を病座にしていることによって、肺癆は西洋では精神性を帯びた病気だと考えられてきた。それから先の章で見てきたように、肺癆はゴンクール兄弟の直前の時代にロマン主義によって美学的に洗練されるという歴史を経てきた。こうした傾向はもちろんゴンクール兄弟の時代にも続いており、この小説の語り手自身も別の個所で「この病気、ほとんど目立たぬようにジェルヴェーゼ夫人の生命を消し去っていく肺癆というのは、精神と成り変わった肉体が精神の超常的状態を希求しようとする神秘主義を、法悦状態への志向を、不思議と助長する」[16] と重ねて述べて、肺癆の霊的性質や神秘主義との深い結びつきを強調することで、作者や語り手もまたそのような西洋の伝統を引き継いでいることを証している。

だがそれに加えて、われわれがゴンクール兄弟を自然主義作家と呼ぶにふさわしいような肺癆に関する考察がこの小説に存在していることも強調しておかなければならない。今度はジェルヴェーゼ夫人の肺癆に起因する神秘主義を生理学的に説明しようとしているくだりである。

> 消耗熱から体が痩せるとともに筋肉も弱って、落ちてしまい、この病気特有の空洞がもたらす荒廃から肉もだんだんと死にかけてきている。このように身体的存在が次第に非物質化してくると、それと反対に彼女は宗教的な愛のせいで聖なる狂気へと、幻覚性の法悦境へと徐々に引き上げられていくのであった。[17]

ここでわれわれが注目するのは、語り手が訴えている生理学的考察の不器用な内容ではなく、先程来の引用にも現れているように、語り手が肺癆と信仰の関係を何とか科学的に、生理学的に解き明かそうとする対処の仕方に関してである。つまり語り手は、ますますあらわになってきた異様なジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的信仰を、客観的、科学的な立場から病的行為として解釈しようとしている点である。語り手は要するに肺癆が生理学的に神秘主義を大いに助長していると見なすのだ。

さらに語り手は踏み込んで、夫人の神秘主義を精神病理学の側面から分析しようとする。これもまた 93 章からの引用である。

しかし肺癆はとりわけその特徴ある作用をジェルヴェーゼ夫人の脳に及ぼしたので、彼女の思考の原型が信じがたいような変貌を遂げてしまったのである。[・・・]彼女の脳は元の純粋な状態まで縮小してしまい、脳の実質として必要とされるものだけしかそこには残らず、しかも病気による衰弱と消耗でこれまで蓄積されてきた抽象的観念や経験的知識が頭から漏れ出て空っぽになってしまった。その結果、子供の最初の頃に戻った、胸を患う 40 歳の女性の脳には、12 歳の少女が最初の聖体拝領の時に抱くような純粋な考えがよみがえってきていた。[18]

ここで語り手=ゴンクール兄弟は、肺癆という病因から説き起こし、精神病理学的推論によってジェルヴェーゼ夫人の神秘主義を何とか説明しよう努めている。だが、素人目から見ても、それにはかなり無理があると断じざるをえまい。ただし、ネフタリー・ド・クールモン=ジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的カトリックへの回心と肺癆による早すぎる死という疑問を解明するというゴンクール兄弟=語り手の側に立ってみれば、この小説の所期の目的は曲がりなりにも達成されたと言ってよかろう。そういう意味では、この個所は作者にとってかなり小説の成否を左右する決定的な個所であったし、また読者にとっても小説を判断する上で重要な個所の一つかもしれない。

考察が不十分であるとの多少の恨みは残るかもしれないものの、肺癆と神秘主義の関係を登場人物の立場からも、語り手の立場からもそれなりに解き明かしてしまえば、この小説に残るのは信仰と病気が一体となって終局へと向かうことだけである。つまり、ジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的信仰の究極目的はキリストとの永遠のコミュニオンを成し遂げることだし、それはとりもなおさず彼女の肺癆による死を意味する。かくして小説は神秘主義的信仰と肺癆の相乗効果のせいで主人公のジェルヴェーゼ夫人に早すぎる死を迎えさせるのだが、それは主人公の立場からすれば神秘主義的信仰の成就として捉えられたであろうし、また語り手の立場からすれば当初は不分明だった神秘主義的カトリック信者の迎える病理現象としての結末となる。

【注】

1. Edmond About, *Germaine*, BiblioBazaar, 2007. 以下本書からの引用については書名とその後にページ数を付すにとどめる。
2. *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, sous la direction de Raige-Delorme et A. Dechambre, Victor Masson, 100 vols, 1864-1889.
3. *Ibid*., vol. 24, pp. 805-807.
4. 『最新医学大事典第２版』、医歯薬出版、1996 年。
5. Jean-Louis Cabanès, *Le corps et la maladie dans les récits réalistes*, Klincksieck, 1991, pp.215 et 216.
6. Edmond et Jules de Goncourt, *Journal* III（1887-1896）, pp. 752-753.
7. Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, édition présentée, établie et annotée par Marc Fumaroli, coll. Folio, Gallimard, 1982, pp. 68-69 ou *Œuvres Complètes*, t. XXX-XXXI, Slatkine Reprints, 1986, p. 9.

8. ネフタリー・ド・クールモンの伝記については下記に詳しく述べられている：«Nephtalie de Courmont» de Gabriel de Broglie, *Cahiers E. & J. de Goncourt*, n° 1, 1992, pp. 6-12.
9. *Ibid.*, p. 9.
10. 『ジェルヴェーゼ夫人』における病気と主人公の神秘主義との関係の詳細については、別の拙論（«Les maladies dans *Madame Gervaisais* »、印刷中）を参照されたい。
11. Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, *Op. cit.*, pp. 68-69 [Folio] ou p. 9 [Slatkine Reprints].
12. *Ibid.*, p. 176 [Folio] ou pp.150-151 [Slatkine Reprints].
13. *Ibid.*, p. 228 [Folio] ou p.219 [Slatkine Reprints]. ところでゴンクール兄弟は女性の信仰に関して『ジェルヴェーゼ夫人』以前から特殊な見方をしていた。以下の引用は『日記』の一節で、小説の出版から 15 年も前に記されたものであるが、女性嫌い（misogynie）で評判だった彼らの面目を躍如させる主張であろう。

    女性にとって宗教というのは男性が従うような行動基準としてあるのではない。それは愛情の吐露や、小説で見るような献身的行為の機会となる。若い女性ならだれはばかることなく真情を吐露できるし、精神を高揚させたり、神秘的な愛の冒険をすることを許されるからだ。また聴罪司祭があまりにも優しく、あまりにも人間的であれば、彼女たちは厳格な司祭のところに飛び込んでいって、微温的な生活を、人為的な感動からなる生活に取り替えて、彼女ら殉教者たちの目にも、何かしら魅力のある、超人的なものを感じさせてくれる苦難を味わおうとする。［1854 年 5 月 20 日, *Journal* I, Texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Robert Laffont, 1956, p. 100.］

14. *Ibid.*, p. 241 [Folio] ou p.237 [Slatkine Reprints].
15. 「結核は体の上部の霊化された部分にある肺が持つとされる性質を引き受ける」（Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Penguin books, 1991（1st publishing in 1978）, p. 18［邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982 年、p. 25］「隠喩的な意味では、肺の病気は魂の病気である」（*Ibid.*［p.26］）。訳文は上記邦訳による。
16. *Op. cit.*, p. 241 [Folio] ou p.236 [Slatkine Reprints].
17. *Ibid.*
18. *Ibid.*, p. 241-242 [Folio] ou p.237 [Slatkine Reprints].

第三部

「ルーゴン=マッカール叢書」の肺癆

V 章　ゾラの肺癆病理学

エミール・ゾラの 20 巻の小説からなる「ルーゴン=マッカール叢書」［以下「叢書」と略記］には、肺癆に関する記述を第 1 巻から第 20 巻にわたって相当数見出すことができる。ところで驚くことに、スーザン・ソンタグのあの『隠喩としての病』は多数のヨーロッパの作家を登場させ、彼女の博捜ぶりをいやと言うほど見せつけているにもかかわらず、そこにはゾラの名前がまったく見いだせない。しかしそのことはソンタグにかぎらない。フランス文学にも触れながら結核の歴史を叙述する、高名な細菌学者ルネ・デュボスの名著『白い疫病』やフランスの歴史家ピエール・ギヨームの『絶望から救済へ。19 世紀と 20 世紀の結核患者』は、たとえばゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』にかなりのページを割きながらも、ゾラの「叢書」に一言も言及していないのだ。[1] それは、実証性を本分とする結核の歴史研究からすると、ゾラの「叢書」に先輩作家ゴンクール兄弟の作品をしのぐに足る価値がないと彼らが見なしたからであろうか。われわれにはそれは信じがたいことだ。

そこで実際にゾラの作品を検討してみると、歴史家にとっての実証的な価値を云々する以前の問題として、彼の「叢書」が厄介な事実を抱えていることが判明する。ゾラは「叢書」を 1869 年頃から 1893 まで実に 20 年以上の歳月をかけて書き継いできたため、結核の病理学史に大転換を記す 1882 年のコッホの結核菌発見というような画期的な出来事を考慮せざるをえず、結果的に彼の肺癆病因に関する考え方が長い間に矛盾を来してしまったという事実である。すると、ゾラにひいきめな見方だとは言え、われわれは歴史家たち

の実証的な批評眼にゾラがかなわなかった理由を次のように推測できるだろう。ゾラは自然主義作家として同時代の医学の情況にだれよりも敏感に反応しようとした作家であり、それは肺癆に関しても例外ではなかった。しかしながら医学史家たちがそのようなゾラに言及しようとしても、肺癆に関する限りまとまった考え方を提示できない。それで概論的な肺癆に関する歴史研究の中ではゾラを敬遠せざるえなかったのだろう、と。

したがってゾラに関してここで最初に取り組まねばならないのは、ゾラの「叢書」における肺癆の病理学がどのように変化していったのか、われわれ自身が歴史家の実証的な眼でもって整理を試みることである。またそうすることで、ひいては今後のゾラの肺癆に関する議論において、病理学的思考内容の異同に起因する無用の混乱を回避できるようになるだろう。

１．遺伝病としての肺癆

肺癆病理学の上でコッホの結核菌発見が持つもっとも重大な意義というのは、それまで遺伝病と見なされていた肺癆が、実際は結核菌という病原菌によって引き起こされる疾病だと確認されたことである。それは肺癆の病因論の分野で革命的な転換が生じたことを意味する。

ゾラは肺癆の病因に関して遺伝が原因であるといったいいつ頃まで考えていたのであろうか。「叢書」の中で肺癆を遺伝のせいだとする見解が最後に語られているのは第 14 巻『作品』（1886）においてである。この小説の主人公である画家クロードが友人の小説家サンドーズと連れだって、かつては建築家志望だった旧友のデュビューシュのところを訪れる。今では肺癆に悩む一家の世話に没頭する旧友デュビューシュの悲愴な姿を目の当たりにして、サンドーズが肺癆の遺伝病説を表明しながら状況説明を試みている。

> マルガイヤンの奥方［デュビューシュの義母］だが、彼女は蒼白い顔をし、ナイフの刃のように細くなって、肺癆で死んだ。それにこれは遺伝病（mal héréditaire）で、変性症（dégénérescence）だった。それというのも彼女の娘のレジーヌ［デュビューシュの妻］自身、結婚以来咳がずっと止まらないからだ。今、彼女はモン=ドール［オーヴェルニュ地方の有名な湯治場で、バルザックの『あら皮』にも出てくる］で温泉治療をしているけど、そこに子供たちを一緒に連れて行く勇気が出なかったんだ。子供たちが去年の湯治ではあまりにも厳しい大気にひ弱な体では耐えられず、すっかり体をこわしてしまったから。[2]

デュビューシュが結婚した相手は肺癆で死去した母親を持つレジーヌで、その妻自身が肺癆を患っているばかりか、さらにまた彼女とのあいだにできた二人の子供ガストンとアリスも瘰癧（scrofule）と肺癆に苦しんでいたのである。[3]

サンドーズのせりふに現れた肺癆の遺伝病説をそのまま作家ゾラの見解と見なすことはできないかもしれない。また『作品』の時代考証を考慮に入れなければならない。この場面は最後から 2 番目の章に当たる第 11 章に挿入されているので、その時代背景はゾラの「準備書類」では 1870 年、その後の執筆時に行われた変更から推測すると 1875 年頃になると想定される。[4] 『作品』が 1885 年から 1886 年にかけて執筆されたとして、その時点

でゾラが 1882 年のコッホによる結核菌発見を承知していたとしても、時代設定からしてとても肺癆の細菌病因論は説けまい。しかしながら『作品』の執筆時期までゾラが細菌病因説に与した直接の証拠は見いだせないから、たとえサンドーズという架空の人物を通してのことだとは言え、彼のせりふは少なくともゾラが肺癆を遺伝病と見なしていたことの消極的な証明にはなるだろう。

ゾラが「叢書」のなかで、肺癆は遺伝疾患にあらずという見解を初めて明確に述べるのは、最終巻の『パスカル博士』（1893）においてである。そこでは作品の主人公で医者のパスカル博士がつぎのように語る。

> 「ねえ、私はちょうどギロードさんの家へ行くところなんです。この女性のことはご存じでしょう。鞣し皮職人だった夫は 5 年前に肺癆でなくなりました。二人の子供がいました。ソフィーはもうすぐ 16 歳になる娘で、運良く、父の死の 4 年前に、近くの田舎に住むおばのところへ送ることができました。息子のヴァランタンは 21 歳になったばかりで、母親には恐ろしい結果になるからと強くたしなめたんですが、それでもその子を溺愛しているせいで、そばに置きたがっています。もちろん、肺癆が遺伝ではないというわたしの主張の正しさはおわかりでしょう。ただし肺癆の親は変性した体質（terrain　dégénéré）を子供に残すので、ちょっと感染（contagion）するだけで病気は進行してしまいます。今になってみればヴァランタンは父と日常的に接触して暮らしてきたために肺癆に苦しんでますが、逆にソフィーの方は太陽を一杯に浴びて育ち、素晴らしく健康なんです。」[5]

現代の確立された結核病理学では、結核の病原体は結核菌である。しかし結核菌は少量の感染であれば結核を発病させることなく、逆に感染者は知らないうちに結核に対する免疫力を獲得して、それ以降は感染を恐れる必要がなくなる。結核感染の診断法としてよく知られているツベルクリン反応は結核感染の有無と同時に免疫力が備わっているかどうかを判断できるので､結果が陰性の場合はＢＣＧ接種をして人為的に免疫能力を付けられる。ところでゾラの活躍した 19 世紀最後の四半世紀における医療の状況を見てみると、結核菌の発見はもとより、抗原抗体反応を軸とした免疫メカニズムの解明はベーリングと北里の抗毒素、メチニコフのマクロファージによって 1890 年代からやっと緒につき始めたばかりであった。治療法に関わるツベルクリン反応は 1907 年、ＢＣＧ接種にいたっては 1921 年になってやっとその効果が確認されるのだから、パスカルの念頭にあった肺癆の病理学がもちろん現代ものとはかけ離れていたことは言うまでもない。

さて、上記の引用に表されたパスカルの病理学的考察は、①肺癆は遺伝疾患ではないが、②肺癆に罹りやすい体質かどうかは遺伝に左右され、そして③肺癆は外因性の、感染を介する病原体が原因である、と簡単にまとめられる。『パスカル博士』の物語内容は、「準備書類」[6] や「ルーゴン=マッカール家の家系樹」［以下「家系樹」と略記］のパスカル博士の生没年によると、1872~73 年に時期設定がなされている。虚構上ではコッホの結核菌よりも 10 年前に遡る時代のことが叙述されているのだ。その結果として、作者のゾラは、『パスカル博士』を執筆する際には肺癆の細菌説を意識していながら、それでも作品の時代的制約からそのことを表現できないでいる、というまことに微妙な立場に立たされているこ

とになる。こうした情況については、肺癆の病因についてもっと深入りして述べた別の個所から推論することができる。

> それに彼［パスカル］は肺癆に関する研究で、肺癆が遺伝病でないこと、ただ肺癆を患うどの子供も肺癆を例外的に進行させやすい変性した体質を生まれつき持っているだけだと結論づけていたので、もはや彼は遺伝によって弱体化した体質を強化して、寄生体（parasites）というか、むしろ破壊の酵母（ferments destructeurs）に対する抵抗力を付けさせることしか考えなかった。その破壊の酵母について、彼は細菌理論（théorie des microbes）よりもずっと前からそれが人体に潜んでいるのではないかと疑っていたのだった。(『パスカル博士』、p.948［邦訳 p.39］)

医学史から見ると、ここで使用されている「細菌」ということばがまた時期的にかなり微妙な問題を含んでいる。なぜなら「細菌」(microbe)がフランスで使用され始めるのは 1879 年のことであり、[7] 小説の語り手は、時代考証からすると、勇み足をしたと断ぜざるをえない。ところで、ここまでわれわれは肺癆の細菌説に訴える際、もっぱらコッホが結核菌を発見した 1882 年を援用してきたのだが、フランスの医学者 J・A・ヴィルマンは 1865 年にすでに実験によって肺癆の伝染性を確証するとともに、体質や遺伝による病因論に反論している。この時病原体は「病毒」（virus）と名付けられたにしても、概念的には細菌理論に近い病因論が提起され始めていた、という新たな事情も存在していたのである。[8] したがって、細菌ということばを別にすれば、パスカルが最新の医学研究の動向に通じた医者という設定であれば、細菌に近い病原体のことを「ずっと前から」意識していたと言っても何ら問題はないのかもしれない。

２．肺癆の病原体

肺癆の病原体をどう呼ぶかという問題は、実はその病原体をどのように定義づけるかという問題に依存している。それに肺癆を遺伝病と定義する際に、生殖を介して親から子に遺伝される何らかの因子があり、それが親と同様子に肺癆を発病させるのだと考えても何ら不思議ではない。すると肺癆が遺伝病であるか否かは、ひとえに病原体がそのような遺伝によって伝達される内在的な因子なのか、それとも人体とは独立して存在する外的な因子なのかにかかっている――その上当時は先天性疾患と遺伝性疾患のあいだで概念的な区別がなされず、両者ひっくるめて遺伝病と見なされていたことも念頭に置いておかなければならない。ゾラが肺癆の遺伝説を転換させたのはいつかという問題は、実はその時肺癆の病原体がどう定義されていたのか、はたしてその病原体が細菌説にふさわしい外的なものだったのかということを確認することでもあろう。

ゾラは 1874 年発行の「叢書」第４巻『プラッサンの征服』［以下『征服』と略記］で、パスカル博士の７歳下の妹である狂信家のマルト・ムーレの臨終に際して、ルーゴン家の主治医ポルキエに次のようなせりふを言わせている。

> 「［・・・］ムーレ奥様［マルト・ムーレ］はきっとお若いときから咳をしておいでになったのではありませんか。わたしはあの方が何年ものあいだ病原体（germes du mal）

を宿していたと思います。最近、それも特に 3 年前からでしょうが、肺癆は体内で恐ろしく進行していきました。［・・・］」[9]

ここで用語として使用されている «germe du mal» であるが、現在なら「病原菌」という明快な訳語を当てられても、「細菌」理論が確立されていないこの時代では、やはり一般的な「病原体」とかあるいは生硬な「病原種細胞」という訳語を当てざるをえまい。この病原体は患者にとってはたして内在的か、それとも外在的なのか。

この場面は小説の最終章 23 章に出てくる。『征服』は 1858 年から 1864 年の出来事を想定している、とH・ミットランが推定している。[10] ゾラが時代考証をきちんとしていることを前提にするなら、1865 年のヴィルマンのきわめて先駆的な肺癆伝染病説にも先行して、1864 年頃にプラッサンの名士たちを顧客に持つポルキエ医師までもがすでに外因性の「病原体」に肺癆の病因を見いだしていたとはまったく信じがたいことである。したがって «germe du mal» を遺伝疾患としての肺癆を媒介する内在的因子と取る方が妥当であろう。

上記の推論は状況証拠に依拠しているにすぎない。だが、「病原体」（germe）を内因性のものだとする考え方が、ゾラの有力なアスクレピオスの一人である遺伝学者モロー・ド・トゥール（1804-1884）によってなされている。彼は『歴史哲学との関係から見た病的心理あるいは知的活動力に及ぼす神経障害の影響について』［通称『病的心理』］（1859）の中で、「病原体」を遺伝疾患の根元的要素としてこんな風に提示しているのである。

自然はその産物の中で自らを模倣し、自らを繰り返し、自らを複製している、それ故に遺伝は模倣の法則と呼ばれてきた。したがって、病原体（germe maladif）を託された器官や器官系は、形成原理そのものから紛れもない異常状態にあると見なさなければならない。[11]

これで当時は «germe» が遺伝病説と親和的関係にあったと証明可能である。したがって «germe» の使用は、ゾラが肺癆に関して遺伝病説を放棄し、伝染病説を採用したことの証拠にはなりえない。

「叢書」の中には、その他に、肺癆の病因を現に指し示しているか、あるいは機会さえあればそうする可能性がありそうな単語が存在する。まずパスカル博士に関する引用文中で «parasite»、«ferment» にはすでに出くわしているが、それに加えて、ゾラは先のヴィルマンが肺癆の病因に持ち出した «virus» という語も使用している。この点について『19 世紀ラルース大辞典』［以下『19 世紀ラルース』と略記］の定義に依拠しながら、どれが肺癆の病原体を表す表現としてもっとも適切かを考えてみると、それが引き起こす病気との関係で感染性の原理をはっきり打ち出しているのは «parasite» と «virus» の二つである。そのうち前者が引き起こす病気はたとえばゾラ自身が例示しているように「輪癬（teigne）や疥癬（gale）」[12] などの皮膚病と親和性があるに対して、後者の方は『19 世紀ラルース』中で天然痘、コレラ、チフス、赤痢、梅毒など、その後細菌やウイルスが病因だと確認されるにいたる主だった感染症と関係づけられている。結局、ゾラの時代に許される肺癆の病因を指し示す用語として «virus» がもっとも適切なものとして浮上してくる。しかし残念

ながらそのような使用例はゾラの「叢書」中には存在しない。しかも厄介なことに、われわれの期待に水を浴びせるように、「遺伝の病原体（virus　héréditaire）を泡のようにはきだしている獣」という使用例すら、叢書も終わりに近づく第 18 巻の『金』（1891）の最終章中に見いだされる始末である。[13] この発言の主はカロリーヌ夫人なので、彼女がゾラの肺癆に関する病理学的思考に責任を持つ必要はない。だがそれにしても、まったく反対に内在性を意味する彼女の発言内容をもって、ゾラが «virus» を外因性と捉えていたという証拠にできないことは明白である。結局ゾラの «virus» の使用もまた、«germe» の時と同じく、ゾラの肺癆伝染病説転換のための証明にはならない。

これまでの検討結果から、いつからゾラは肺癆の病原体を外因性のものであると考え始めたか、そしてその結果としていつから肺癆が遺伝病だという考えを放棄したのかという問題に対して一応の決着を付けておこう。「叢書」が第二帝政期の 1852 年から 1870 年という時代枠を設定しているため、ゾラが実際に作品執筆をした 1869 年頃から 1893 年の期間とは 20 年あまりの差が生じている。そのため、暗々裡に虚構上の年代を頼りにしていると思わぬ過ちを犯しかねない。そこで「叢書」の虚構上の年代設定を棚上げにして考えてみると、彼の考えの転換を明白な形で表しているのは結局『パスカル博士』しかない。ここまで挙がった反証をすべてそのまま取り上げ、「叢書」中で最後のカロリーヌ夫人の «virus» 遺伝説をそのまま採用すると、もっとも遅い時期としては、『金』を書き終わった 1891 年から『パスカル博士』を書き始めた 1893 年の間が転換の時期として想定されるだろう――後出の注(32)も参照。だが繰り返し言っておくと、ゾラがカロリーヌ夫人を古くからの遺伝説にとらわれている人物だと設定しても何ら差し支えはない。残念ながらゾラの遺伝病説放棄の時期を判断する資料は今のところこれ以上手元にないのだが、彼が 1891 年よりももっと早い時期に遡って肺癆の感染病説に与していたという可能性が完全に消えたわけではなかろう。

ところで、これは医学史的な観点からすれば価値のない問いなのだが、ゾラの医学思想をもっとも忠実に代弁するパスカル博士について、彼が虚構上の人物であるにせよ肺癆の遺伝病説をいつ頃撤回したとゾラが想定したがっていたのかを問うことができる。それについてＹ・マリナスが 1863 年まで遡らせることができると推論をしている。[14] マリナスの推論は、『パスカル博士』が 1872~73 年に時代設定されており、パスカル博士はプラサンに引きこもって肺癆を含む遺伝の研究を「20 年以上も前から」（『パスカル博士』p. 944［邦訳 p.35］）行ってきたという記述に依拠しているようだ。パスカルの肺癆感染病説採用について最も早い時期を考えるとマリナスのような想定も成り立つようにも思えるが、ただしいくら何でも 1865 年のヴィルマンによるきわめて先駆的な肺癆伝染病説を、当のヴィルマン自身も含めた専門家の医者たちに先駆けて、パスカルが 1863 年にすでにいち早く採用したというのは想像しがたいことではある。

３．肺癆体質の遺伝

肺癆が遺伝病であるか否か、病因は内因性か外因性かというこれまでの議論のほかに、先のパスカル博士の引用でまとめた論点の中には、②遺伝によって肺癆に罹りやすい体質を受け継いでいるという肺癆体質の問題があった。ところで医学史の観点からすると、この肺癆体質の問題がまた古くからの側面と新しく脚光を浴びる側面を抱えていたようであ

る。

ゾラの「叢書」中でここまでに見てきた肺癆の症例では、『作品』のデュビューシュ家、『パスカル博士』のギロー家の 2 例はともに家族病として提示されていた。ちなみに文学史の上から見ると、この点は「結核が病める自我の病気」（スーザン・ソンタグ）[15] とする肺癆のロマン主義的見方に対して、ゾラの特徴をなすものであろう。それはともかく、肺癆について、病因が遺伝によるにせよ感染によるにせよ、家族病としての特徴はだれの眼にも歴然としていた。それにこの特徴に依拠するなら、当時の一般人にとっては、肺癆が眼に見えない微細な細菌を通じて伝染すると考えるよりも、遺伝によって親から子へと受け継がれたと考える方がよほど説得性があっただろう。なぜならそのような細菌説を唱える細菌学そのものがまだ緒に付いたばかりで、専門家の医者のあいだにすら普及するにはまだまだこの先相当な時間を必要とするような状況だったからである。

このような時代状況の中で、パスカル博士は遺伝が直接肺癆を伝達するという従来の見解を、体質を介して間接的に影響を与えるという新たな見解に変えた。そこで古くからの側面というのは、肺癆の家族病という特徴が体質を通してであれ遺伝という考え方を介するのでなければ理解できないというところに現れている。また新しい側面というのは、家族病としての肺癆が体質の遺伝に依存すると仮定すれば、その感染のばらつきが理解可能になるという点である。

ギロー家の感染情況を見ると、同じ家族として暮らしながら、ギロードは夫ギローの肺癆に感染せず、また子供たちのなかで娘の方は肺癆を克服して結婚までこぎ着けたのに対して、息子の方はついに肺癆で父親と同じ運命を余儀なくされた（『パスカル博士』pp.1081-1082［邦訳 p.211］）。こうした家庭内での感染のばらついた情況をどのように解釈するべきか。ギロードが夫の肺癆に感染しないのは罹りにくい体質を遺伝によって受け継いだからだ。また肺癆に感染した二人の子供は父親から肺癆体質を受け継いだと考えられる。それでも、娘ソフィーの場合のように、元々の虚弱さに配慮して肺癆の病原体がはびこる環境から遠ざけ、体力を増強させるため転地療法のような適切な対処の仕方をした場合には、病気を克服できることがある。ところが息子ヴァランタンのようにそうした配慮を欠いた場合、不幸な結果にいたるしかない。肺癆の家族病という性質と感染のばらつき具合という事実を前にして、パスカルの示した体質遺伝という見解はこのように解釈の合理性と妥当性を確保させていたのである。

結核の診断・治療は現代では免疫機構の機能に依拠したツベルクリン反応―ＢＣＧ接種という一連の手続きによって行われている。免疫機構がまったく想定されていない時代にパスカル博士の提示した肺癆体質というのは、実は肺癆に対する親和性の有無を左右している点で免疫機構と同じ機能を果たしていることになる。肺癆を受けつけにくい体質というのは、肺癆に抗する免疫が確立された人体と同じ状態を指すからだ。それ故肺癆感染における体質遺伝という問題は、一方で肺癆の病理学に過去の遺物のように残る遺伝説の名残として否定的な評価を与えられる一方で、免疫という外因性の病原体に対する生体の防御機構を機能的に先取りしたものとして一定の評価を与えることもできるのである。[16]

VI 章　ルーゴン=マッカール家の肺癆

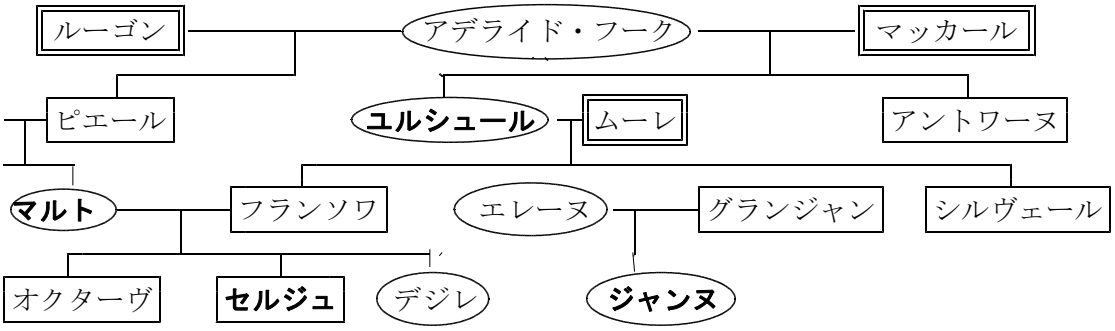
スーザン・ソンタグの卓抜なエッセイ『隠喩としての病』は、たとえば「結核は人を性欲過剰にし、異常なまでの性的魅力を付与する」（p.13［邦訳 p.18］）、「結核は生をせき立て、際立たせ、霊化する」（pp.14-15［邦訳 p.20］）、「結核とは病める自我の病気である」というような、結核に関する数々の名言を含んでいることでよく知られている。その中でも文学における結核をもっとも際立せ、包括的に表現するのは「結核はロマン主義的な世界観につかえるものであった」（p.70［邦訳 p.104］）という一文であろう。ところでこうしたソンタグがゾラの作品に一言も言及しなかったのは、ゾラの結核には彼女の結核観と相容れない、対立するものがあり、結局そこに評価に値するようなものを見いだしがたいと彼女が判断していたからであろうか。ソンタグ自身も認めるように、19 世紀後半になると結核に関する表現からはロマンティックな病気崇拝の側面が影を潜め、それとは反対に病気に対する写実的な見方が色濃くなってくる。ゾラの自然主義文学というのはそうした病気の実証的な観点を前面に掲げた文学の謂であろう。したがってゾラの「叢書」の肺癆には、ロマン主義的な結核観とは別の形で機能し、まさしく自然主義的な結核観と名付けるにふさわしいような、新たな肺癆の利用のされ方が見いだされるのではないかと想像してもおかしくない。

そこで次にわれわれは、ソンタグの明らかにしたロマン主義的結核観を念頭に置きながらも、ゾラの「叢書」の肺癆が今までの文学作品にないどのような特徴を持っているか、とりわけ小説の説話論的な側面に焦点を当てて検討を試みたい。

１．家族病としての肺癆

第 V 章で見てきた肺癆の症例というのは、デュビューシュ一家やギロー一家といういずれもルーゴン=マッカール家には属さない患者たちに関するものであった。「叢書」の根幹を構成しているルーゴン=マッカール家の中にも、肺癆の症例が見られる。しかもその患者たちはすべてムーレ家に属し、すでに述べてきた肺癆の家族病という特徴を如実に示している。そこでまずルーゴン=マッカール家にはどのような肺癆患者たちがいたのか、系図の形式で示そう。

【ムーレ家の系図】［肺癆患者はゴシック体で表示］



「叢書」で最初に肺癆患者として言及されているのは、第 1 巻『ルーゴン家の繁栄』［以下『繁栄』と略記］に登場するユルシュール・マッカール（後に結婚してムーレを名乗る）である。彼女は、ルーゴン=マッカール家の始祖アデライド・フーク（ディードおば）を母に彼女の愛人マッカールを父に持つ、ルーゴン=マッカール家の第 2 世代で、異父兄のピエール・ルーゴンがルーゴン家、実の兄アントワーヌがマッカール家を相続するのと並んで、叢書中ではムーレ家に嫁ぐことによって第 3 の家系の起源となる人物の一人である。ムーレ家の名は叢書名から省かれているとは言え、20 巻からなる叢書では小説の主人公となる人物を輩出するので、ルーゴン、マッカールの 2 家系と同様、重要な 3 本の幹の一つを「ルーゴン=マッカール家の家系樹」中で構成している。

> ユルシュールは 1839 年に死んだ、それで兄の不吉な予言を現実のものにしてしまった。母親の神経症（névrose）が彼女にあってはゆっくり進行する肺癆に変わり、それが彼女を徐々にむしばんでいったのである。彼女は三人の子供を残した。18 歳になる娘はエレーヌといい、勤め人のところに嫁いでおり、二人の息子のうち長男のフランソワは 23 歳、末っ子はかわいそうにわずかに 6 歳で、名前をシルヴェールといった。[17]

この引用にある「母親の神経症が彼女にあっては・・・肺癆に代わり」という文は、現代では常識的に受け入れがたい。ゾラは同様にわれわれにはにわかに信じがたいような遺伝の症例をこのほかにも別の登場人物のところで展開している。たとえばルーゴン=マッカール一族の第 4 世代に属し、ユルシュールの孫に当たるセルジュ・ムーレの場合、「家系樹」[18] には、「遺伝によって神経症は宗教的偏執（manie religieuse）［78 年版］／神秘主義 mysticisme［93 年版］に変化」、同じくその妹デジレ・ムーレの場合は「遺伝によって神経症は痴愚（imbécilité）に変化」と記される。それでも、この時期の代表的な疾病分類学を紹介している当時の病理学の権威グリゾルによれば、「偏執」や「痴愚」はともに「知的障害」として大項目の「神経症」に属するので、[19] 今の二人の場合は神経症の現象形態における個人差と解されて、当時は専門家の間ですらあまり問題にされなかったのではないかと推測されるかもしれない。

しかし、マッカール家の『居酒屋』の主人公ジェルヴェーズの子供たちのことになると話は別だろう。「家系樹」で、長男のクロードは「神経症が天才に変化」、二男ジャック［93 年版］（および三男エチエンヌ［78 年版］）は「アルコール中毒が殺人狂（folie homicide）に変化」、また彼らと異父兄妹にあたるナナは「酩酊癖がヒステリーに変化」［78 年版］、「アルコール中毒が身体および精神の上で性倒錯（perversion）に変化」［93 年版］とそれぞれ記される。先のグリゾルによれば「アルコール中毒」は特に「中毒」疾患なので、アルコール中毒が当時いくら遺伝する可能性があると考えられていたとしても、それが別の疾病カテゴリーである「神経症」中の「狂気」、「性倒錯」に変化するというところまでいくとなると、われわれはどうしても荒唐無稽だと考えざるをえまい。

２．「変性症」遺伝

ところがゾラの時代には、彼が示したような一見非科学的な飛躍を保証する遺伝理論が

実際に存在していた。ゾラが叢書のために参考に供したと言われる遺伝理論でしばしば取り上げられるのは P・リュカ（1808-1885）の『神経系の健康および病気状態における自然的遺伝に関する哲学・生理学概論』［通称『遺伝に関する哲学・生理学概論』、以下『遺伝概論』と略記］（1847）であり、ゾラ自らが「叢書」に利用するためにその内容をまとめた大量のノートを残しているうえに、「家系樹」にはリュカの遺伝類型を直接利用していることから、その歴然たる影響がかねてから言われてきた。しかしアルコール中毒や肺癆などに関する遺伝の病理が「叢書」の説話法の一端を担っているという観点からするなら、ゾラのノートに示されたリュカの遺伝理論が「叢書」に与えた顕著な影響は、これまで強調されてきた遺伝類型だけにとどまらない。遺伝とは何よりも病気の遺伝として現出すると考えられていたこと、それから「身体的遺伝は神経系を介して伝達される（神経支配）」[20] という言明や、なによりも「神経病（maladies nerveuses）は遺伝によって親から子に伝わるとともに患部や性質を変化させる。性病が突然停止し神経病に変わる」[21] という指摘は、もっと強調されてしかるべきであろう。

もちろん今日ではそのような遺伝理論は科学的根拠を欠いているとだれもが認める。しかしながら小説の評価は何もこの種の科学的真理によって決まるというわけでもない。また物語の説話法は科学的論理ではなく、神話的論理にしたがって展開されることは言うまでもない。ある科学的な理論が当の科学の中ではつとに失効しているとしても、それが適用された文学の中では説話的価値を依然として保持していることはよくあることだ。それがゾラの「叢書」におけるリュカの遺伝理論というわけである。そうして、このような「科学的」遺伝理論の裏付けがあったからこそ、先に引用した「母親の神経症が彼女にあっては・・・肺癆に代わり」という一節のように、現代のわれわれには荒唐無稽に見える飛躍もゾラに可能になったのである。

さらに J・ボリー、J-L・カバネスや I・ドラモットが、ゾラ作品の医療的側面を集中的に研究するなかで、[22] リュカの遺伝理論とほぼ同時代の B・モレル（1809-1885）の『人類の身体、知性、道徳の変性症とその病的変種発生の原因に関する概論』［通称『変性症』］（1857）やモロー・ド・トゥールの『病的心理』（1859）もそれに劣らず重要な役割を果たしているという指摘を繰り返している。[23] 特にモレルが唱道した「変性症」（dégénérescence）という遺伝理論は、単純・明快に「叢書」の説話的方法論を指し示す指標的価値を有する。モレルが『変性症』の序論で提出している定義によると、組織や細胞の退行性病変を表す際に使われる「変性」（dégénération）と異なり、「変性症」というのは、人が内に抱えるようになった病的要素が遺伝を介して次第に変化・増幅していき、最終的には数世代経過するあいだに、遺伝性欠陥のために早世や生殖不能を引き起こして人々を滅亡に導くというものである。

モレルは第 1 世代のアルコール中毒に始まり第 4 世代で白痴（idiotisme）の子孫によって絶滅する家系を変性症の実例に挙げているが、[24] 「叢書」中で遺伝の悪影響を蒙った子孫がほとんどすべて第 4・5 世代で絶えることを想起するとき、背景となった第二帝政期中にいくつかのルーゴン＝マッカールの血筋を絶やそうと意図した場合に、変性遺伝論はゾラに恰好の「科学的」根拠を提供したことは間違いなかろう。[25]

ところでこうした変性遺伝論の一環として捉えられた肺癆観ほど、たとえばソンタグが「結核は病める自我の病気である」とみなしたロマン主義的な結核観と対立するものはあ

るまい。ソンタグの結核観をさらにより詳しく説いて見せたジョルジュ・ギュスドルフは、病気は病人のものであるとして結核に代表される病気の個人性を強調し、病気を病人から独立させて問題にする実証主義的医学に対置させている。[26] なるほど実証主義を旨とする近代医学は、病人や医者の主観とは独立した、科学的で客観的な医学を目指していたからである。そして、ゾラの標榜する自然主義もまたこのような実証主義と実験からなる科学に由来していたことは言うまでもない。しかも「これ［マルガイヤン夫人の肺癆］は遺伝病で、変性症（dégénérescence）だった」（『作品』）というサンドーズの説明や、「肺癆の親は変性した体質（terrain　dégénéré）を子供に残す」というパスカル博士の断言が語るように、ゾラにあっては肺癆は個人的な側面よりも遺伝を通した家族的、集団的側面をより強調されていた。このようなゾラの肺癆の異なった見方は、ロマン主義的肺癆観とは別に自然主義的肺癆観という命名を与えることをわれわれに許すに十分な理由となろう。

さらにゾラの肺癆観をロマン主義的肺癆観と対置してみると、興味深い両者の傾向の相違が浮かびあがってくる。ロマン主義は個人の側面を強調するため、患者個人の心理的な解釈が優勢になる傾向を持つ。それに対して自然主義は集団的な側面、なかでも肺癆による変性的遺伝を浮き彫りにするため、社会的危機、ひいてはイデオロギー的な側面に訴える傾向を持つ。ソンタグは病気のロマン主義的な見方によって隠喩がはびこったため、病気が本来持っている現実的危険が骨抜きにされることを非難していた(『隠喩としての病』、p.3[p.6])。ところで社会的な危機を煽りイデオロギー的な主張に走る自然主義的肺癆観にも同じように危険が予想される。それは自然主義的肺癆観がもっぱら変性的遺伝の危険を叫ぶとしたら、優性思想を普及させるのにもっとも好都合な論拠として利用されうるからである。

３．肺癆と蕩尽の情熱

ムーレ家にあって、ユルシュールに次いで肺癆を患うのは、ユルシュールの長男フランソワ・ムーレのところに嫁いできた、彼の従妹マルト・ルーゴンである。「叢書」第 4 作目に当たる 1874 年発行の『征服』の最終章で、肺癆を患った末に 44 歳で臨終を迎えるマルトの様子が描写されている。

> 「ご臨終です」と彼［ポルキエ医師］はさらに声を低くして続けた、「ずっと前からわたしはこの悲しい結末を予期しておりましたことを、今日奥様［マルトの実母ルーゴン老婦人］に打ち明けなければなりません。おかわいそうに、ムーレ奥様は肺を二つともやられており、その肺癆は神経病（maladie nerveuse）を併発しておりました。」
>
> ［・・・］「最悪の結果は予想されていたのですが、日々の状況がそれを早めたのかも知れません・・・。ムーレ奥様はきっとお若いときから咳をしておいでになったのではありませんか。わたしはあの方が何年ものあいだ病原体を宿していたと思います。最近、それも特に 3 年前からでしょうが、肺癆は体内で恐ろしく進行していきました。それにつけても何という信仰心、何という熱情（ferveur）でしたでしょう！
> わたしはあの方が聖女のようにお亡くなりになるのを目の当たりにして感動を覚えました。致し方ありません。神の思し召しは測りがたいもので、科学はたいていの場合無力ですから。」（『征服』、p.1201［邦訳 pp.417-418］）

医者のポルキエが信仰心と並べて「熱情」と言った時、プラッサンではフォージャ神父を取り巻くだれもが彼に対するマルトの激しい恋情を知っているので、彼のそのことばには信仰に引っかけた皮肉を感じとったであろう。恋愛と肺癆が密接な関係にあることは、バルザックのラファエル、デュマ・フィスのマルグリットの例を引き合いに出すまでもなく、ロマン主義的肺癆神話の最たる特徴の一つであった。恋愛と肺癆とを結びつけるのにもっとも強力に働いた一方の熱情と他方の消耗熱（fièvre hectique）は、自然主義文学になるとむしろ比重が生理学的な方向に傾くことによって、身体の喚起する異常性が感情の異常性を際立たせるように働く。マルトが終章の 23 章で死出の旅に発つ前から、肺癆故の病的異常は神経を介して精神や感情に大きな悪影響を及ぼしていたようである。

第 17 章は「マルトの健康状態はポルキエ医師を不安にさせた」という文によって始まり、そこではマルトの肺癆の病状がいよいよ進行して「喀血」を呈する危機的な段階までいたったことを明らかにしている（p.1098［邦訳 p.276］）。そのすぐ後で、肺癆にもかかわらず恋ゆえに魅力を増したマルトの矛盾に満ちた姿が描写される。

> 「ムーレ夫人は若返ったわね」と感嘆してド・コンダマン夫人が言うのだった。
>
> 「そうです、」とポルキエ医師はうなずきながらつぶやいた。「彼女は人生を遡っているんです。」
>
> マルトは前より細くなり、頬はバラ色に色づき、熱をおび、黒々とした、はっとするような眼をして、その数か月は不思議な美しさをたたえていた。顔は照り輝き、生を蕩尽する様子が存在全体から発し、彼女を熱いおののきで包み込んでいた。忘れられていた若さが 40 歳になってから彼女の体の中で輝かしい炎をあげて燃えているかのようだった。（『征服』 p.1102［邦訳 p.281］）

「結核の場合、外にあらわれる熱は内なる燃焼の目印とされた。結核患者とは情熱に、肉体の崩壊につながる情熱に＜焼き尽くされた人＞とされたのである」というソンタグの文は、マルトの情況を的確に表現しているようだ（『隠喩としての病』、p.21［邦訳 p.29］）。ただしそれはロマン主義的な肺癆患者の立場から見た場合のことであって、自然主義的な『征服』の語り手は激しい情熱の印の影に隠れて確実に進行していく病理的現象を見逃さない。そこで 17 章におけるマルトの病的症状の展開は急である。

マルトは聖体拝領の最中に法悦のあまり気を失う。フォージャ神父が自らの前で告解することを許すと、感動のあまり泣き崩れ、神経発作を起こす。それが何度か繰り返されて、やがて深夜に大きな叫び声を発しながら、自傷行為をまじえた狂気の発作に襲われる。また女中のローズは錯乱（délire）や強硬症（catalepsie）を発症させているマルトを目撃する。臨終の場面でポルキエ医師が示したように、彼女の肺癆は神経症を併発していたというから、それが悪化して狂気にいたったとしても不思議はない。肺癆の併発症に狂気（aliénation mentale）を含める当時の病理学の権威すら存在している。[27] それはともかく、肺癆にせき立てられるような情熱は、まさしく病的異常さのゆえに決して幸福な未来を約束されることはなかろう。果たせるかな、マルトのフォージャ神父に対する情熱は報われない。それどころか 20 章では、彼女が決死の覚悟で断行した愛の告白は神父の手ひどい

拒否にあい、それがきっかけの一つとなって彼女は病をいっそうこじらせたあげく死去するのである。

ここで再びソンタグの示唆に富んだ文を引用しよう。彼女曰く、「結核の神話によると、たいがい何かの情熱的な感情がまずあって、それが結核を誘発し、結核となって外化するのだという。」（『隠喩としての病』、p.23［邦訳 p.32］）ここでは結核と情熱の関係が新たな角度から問われている。熱を生理学的に解釈して、それが肺癆故の結果だと捉える場合は、上述したように身体の異常性が精神に反映して情熱の異常性を際立たせていることになる。それに対してロマン主義文学のように、熱を心理的に優先させて捉えた場合には、情熱過多ゆえに、あるいは情熱を抑圧するがゆえに、それが身体に悪影響を及ぼして結核を発症させているのであり、したがって先とは逆転した形で因果関係の論理が働いていることになる。マルトの場合、肺癆の発症と恋愛感情の発生は時間的に後者の方が先んじているので、ゾラもまた肺癆と恋愛の関係をロマン主義的な発想に基づいて考えていたと見なせる。しかしあまり早急にこのような結論を下してはなるまい。マルトの恋愛のきっかけにはロマン主義的な単純無垢な恋心を見ることを憚られる点が窺えるからだ。

マルトの恋愛対象のフォージャ神父というのは、パリのナポレオン派が対立する王党派や共和派の影響力を排して南仏の要衝プラッサンでその支配を確実にしようと派遣してきた、権謀術数に長けた人物であった。彼がプラッサンにやって来てフランソワとマルトの夫婦のところに寄宿したことから、以前は幸せであったフランソワ一家の悲劇が始まる。またマルトが 40 歳になってから、幸せそうなブルジョワ一家を破滅させてしまうほど恋に狂うのは、フォージャ神父が彼女の恋心を刺激して、自らの野心に役立てようと目論んだからだ。フォージャ神父は最初にマルトの気質を見抜いて、それにつけ込んでいる。

> 彼女は自ら言うように、確かに幸せだった。しかし彼は、40 歳に近づいて安定した、神経質な彼女の性質（nature）の中には、昔からの葛藤があることを見抜いたように思った。顔の似通った妻と夫によるこの家庭劇のことを想像してみると、二人は互いのことをよく知っているから互いにうってつけだと判断されるのだが、二人の存在の奥底では、私生児の酵母や、もつれ合い、反目をいつも繰り返す血のせいで、両者の異なった気質（tempérament）が対立を募らせている、と思った。
> （『征服』、p. 971［邦訳 p.101］）

ゾラの記している「気質」とは、人間の性質を生理学的に規定したもので、自然主義にふさわしい概念の一つに数えられる――これについては後で詳述する。その気質は定義に見合って遺伝に支配される。遺伝類型とともに「家系樹」に摘記されているマルトの気質的特徴を見ると、彼女の場合は「一世代を飛び越えた回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」（78 年版）となっているが、93 年版になるとこれに「ヒステリー患者」という記述が加わる。これらに先立つ未公開の 69 年版「家系樹」の記述では、「彼女は祖母アンリエット［アデライド・フークの旧名］と同じく頭がいかれている（toquée）」。アデライド・フークと言えば、「叢書」のルーゴン=マッカール一族の始祖であるとともに、「起源の神経症」を患って一族に変性的遺伝疾患を拡散させた元凶でもある。そしてそのアデライド・フークの奔放な恋愛関係こそ問題で、当のマルトは彼女の一方の嫡子ルーゴンの

娘、その夫フランソワは庶子ユルシュールの息子であった。つまりマルトの気質とその性質は遺伝のせいで因縁めいており、フォージャはそれを見抜いて彼女に働きかけ、一方で夫に対する反発を募らせ、他方で自らに対する恋愛感情を触発させることに成功したのである。

肺癆と恋愛の因果関係の問題をここで問い直せば、マルトの場合ロマン主義的肺癆観のように確かに時間的には恋愛が肺癆を誘発させるように叙述されている。しかしその恋愛や肺癆は本を正せばいずれも変性的遺伝を支配する神経症に通じており、マルトの場合は肺癆も恋愛も、ロマン主義的解釈とは異質な、やはり自然主義的な解釈にゆだねられていると言えるであろう。

４．肺癆と神秘主義的信仰

マルトの肺癆についてはもう一つ､恋愛と表裏一体の宗教的情熱という問題が見られる。先に引用したマルトの臨終の場面は小説の最終章に当たる 23 章で描写されている。そこで言われていたマルトに肺癆の症状が露わになる 3 年前というのは、15 章あたりで描かれている時期のことで、ここで初めてマルトの病気に関する言及が見いだされる。

> しばらく前からマルトが彼［フォージャ神父］を不安にさせていた。彼女を燃やす信仰熱（fièvre de dévotion）を鎮めることは不可能だと彼は感じていた。［・・・］彼女は内に抱えた炎（flamme）のせいで、体はぐったりし、肌は黒ずみ、目には隈を付けていた。それはまるで病気が拡大し、全身が恐慌を来して、脳も心臓も徐々に侵されてきたかのようだった。顔は恍惚とした表情に満たされ、手を伸ばせばそれは神経質に震えた。ときどき乾咳（toux　sèche）が頭から足にいたる全身を揺すぶることがあるのだが、彼女は引き裂くようなその痛みを感じていないようだった。そして彼の方はいっそう手厳しくなって、彼に差し出される愛を退け、サン=サチュルナン教会に来ることを彼女に禁止した。
>
> 「教会は凍えそうです」と彼は言うのだった。「あなたの咳はひどい。あなたの病気がもっと悪くなってはいけませんから。」（『征服』、pp.1074-1075［邦訳 p.244］）

恋愛の際と同じように信仰の情熱についても、熱を生理学的に捉えることができる。生理学的に捉えられた熱というのは、言うまでもなく肺癆の典型的な症状に数えられる発熱症状のことである。引用中に現れたマルトの中で燃えている「信仰熱」は、最初彼女の信仰の度を超した熱心さを表す比喩として書かれているのだが、それがいつのまにか生理的な熱と化し、彼女の肺癆を具体的に現す症状に変化している。後で付け加えられた「乾咳」が、その熱は比喩でなく明確な病状の表現であることを念押ししている。

フォージャ神父のマルトの容態に対する心境はかなり複雑で、信仰熱ならむしろ歓迎すべきところだが、そこに彼に対する危うい情熱も感じ取れるため、マルトの熱をもっぱら病気の症状と見なそうとしている。こうした信仰と肺癆の熱として表現された心理的、生理的異常さの同時的発生については、あるいは同一現象に関わる心理的、生理的解釈については、『征服』の「草案」中で「マルトは宗教に心を奪われる」と「彼女はすでに肺癆を病んでいる」とが並んで記されていることから窺えるように、[28] ゾラは最初から意識

していたようである。

信仰熱をこのようにいわば隠喩的でなしに生理的に解釈することは恋愛のところですでに検討してきたことと通底する。信仰についてもゾラはまた医者の視線を通して自然主義的理解を徹底しようとしていたようだ。医者のポルキエは、「その肺癆は神経病を併発しておりました」と言った。それに、マルトに見る異様な信仰行為、ゾラにとっては神秘主義的信仰が神経病のカテゴリーの中に入ることは、ポルキエのみならず『征服』以前からすでにゾラにとっては暗黙の前提だった。そのことは、ゾラが参考にしたモロー・ド・トゥールの『病的心理』（第二部 3 章 1 節）にはっきりと書かれている。それ以上に直截に、ゾラ自身が 1869 年の「家系樹」中で当初から神秘主義的信仰を遺伝病の一種と見なしていた。[29] その後もこの点についてゾラの考え方は一貫していて、セルジュについて 1878 年版「家系樹」の「神経症（névrose）の遺伝は宗教的偏執（manie）に変化する」から、1893 年版では「神経症の遺伝は神秘主義的信仰（mysticisme）に変化する」へと若干の異同はあるが、少なくともマルトやその子セルジュの狂信的信仰が神経病のカテゴリーに属する病気と見なされていることに変わりはない。

前節で見てきたように、変性的遺伝疾患を唱える当時の亜流の病理学理論は神経症が肺癆に変化すると主張していたが、今度はそれがマルトの身でもって明らかにされたように、肺癆から神秘主義的信仰に変貌するにいたる。ルーゴン=マッカール家の始祖アデライド=フークに端を発する神経症はこのようにして、世代を経るにしたがってそのプロテウス的変貌能力をしだいに発揮し始め、マッカール家のアルコール中毒と並んでムーレ家の肺癆から神秘主義的信仰やデジレに現象する痴愚までをも病的現象として包摂して、変性症理論の波及作用の大きさとそれに伴う社会的脅威の拡大を否が応にも浮き彫りにさせるにいたる。

ところで、肺癆と神秘主義的信仰の相関関係は、ゾラの『征服』に 5 年先立つ 1869 年に、すでにゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』で詳述されていた。マルトの場合のカトリック信仰への傾倒はむしろ彼女を利用しようと目論むフォージャ神父への情熱にも多分に依存しているので、ジェルヴェーゼ夫人の時のように、肺癆の重篤化が意識的な狂信行為のエスカレーションとして相乗的に現れるように描写されているわけではない。その点ではゴンクール兄弟の作品に比較して、ゾラの『征服』は説話上でのダイナミズムを欠くかもしれない。だが『ジェルヴェーゼ夫人』では説話のダイナミズムの陰で犠牲になったものもあることは確かだ。ゴンクール兄弟は説話の大胆さを追求しようとするあまり、当時の医学を濫用して行き過ぎた利用の仕方をしたと言えなくもない。[30] それに対してゾラは説話法でも自然主義に徹して、同時代の医学に忠実であろうとしていたと言えるのかもしれない。

『征服』に続いて 1875 年に発刊された叢書第 5 巻『ムーレ神父のあやまち』［以下『あやまち』と略記］の主人公セルジュ・ムーレは、上述のマルトの子供として彼女の遺伝的影響を受け、しかも彼女以上に神父として神秘主義的信仰を露わにするにいたる。小説の主題自体が人間の自然的性行と規律の厳格なキリスト教の対立を浮き彫りにしようとしているので、セルジュの抱く信仰には狂信的性格がつきまとう。そして彼に死を余儀なくさせるのはやはり肺癆なのだが、それについては『あやまち』の中でなく、最終巻の『パスカル博士』になって初めてそれとなくパスカル博士の口を通して語らせているだけである

（p.1016［邦訳 p.128］）。したがって、マルトの場合と異なり、肺癆と神秘主義的信仰の関係はこの作品中で明白なかたちで言及されることはない。

ところで、セルジュは説話の重大な転換点に当たる『あやまち』第一部の最後で熱病によって昏倒し、記憶喪失という重大な後遺症を発生させる。「草案」から判断するなら、その熱病は腸チフス（fièvre typhoïde）である。[31] それにこの熱病は、セルジュの伯父であるパスカル博士に原始的自然に恵まれたパラドゥーで彼の看病をアルビーヌにゆだねるそもそもの原因となったから、肺癆とは比較できないほど、この小説における説話の展開に大きな影響を持っている。またセルジュを記憶喪失によって狂信的信仰から解放し、楽園パラドゥーでアルビーヌとともにアダムとエヴァを思わせるカップルとして自然を謳歌させるきっかけを作ったのだから、腸チフスは狂信と一体的な関係にあるとされていた肺癆とは正反対の役割を負わされていると言える。

５．遺伝類型と肺癆

ムーレ家にあってセルジュは最初の肺癆患者ユルシュールの孫に当たるのだが、セルジュの従妹でやはりユルシュールの孫であるジャンヌもまた彼女と同じく肺癆を患う。叢書第 8 巻『愛の一ページ』（1878 年刊）は、そのユルシュールの 2 番目の子供であるエレーヌを主人公にいただき、彼女が医者アンリ・ドゥベルルとのあいだで起こすいわば不倫の恋愛を主題にしている。ジャンヌはそのエレーヌの娘で、1842 年生まれ、思春期になりかけの 12 歳の時、「神経の発作」によって肺癆を急激に重篤化させると、それからまもなく早世してしまう。

先のユルシュール＝マルト＝セルジュの場合は親子関係で連続している。それで、肺癆は血縁を通じて出現していることになるので、遺伝の結果だと見なされても何ら不思議はなかろう。ところでユルシュールの娘エレーヌは遺伝類型から言うと「自発様遺伝」（innéité）と分類され、両親からの遺伝的な影響は識別できないと見なされる。そこで遺伝から見たジャンヌの肺癆は、祖母のユルシュールから母親のエレーヌを飛び越えてジャンヌのところに現れたことになり、俗に言う隔世遺伝である。

しかしエレーヌの夫グランジャンも「肺癆に冒されやすい体質」（prédisposé à la phthisie）で、彼女と結婚（1841 年）後 10 年あまりたった 1853 年に「気管支炎」で死去している。それは娘の死からわずか 2 年前に起こった出来事であった。[32] ジャンヌの遺伝類型に関しては後述するが、その遺伝類型を云々する前に、ジャンヌがすでに家族病としての肺癆を抱え込む家庭環境にあったことは留意しておかなければならないだろう。

さて、物語も終盤に近づいた頃、死に瀕した少女の診断を終えたところで、母親エレーヌの情人であった医者のドゥベルルが心中でこんな所見を語っている。

> 男は急性肺癆（phtisies aiguës）の電撃的な進行の経過を思い浮かべていた。それは、彼がこれまでに多くの時間を割いて研究してきた症例の一つだったのだ。粟粒結核（tubercules miliaires）は大変な勢いで増殖していくはずだ。呼吸困難が進行し、ジャンヌはおそらく 3 週間とはもたないだろう。[33]

「粟粒結核」というのは結核の一種で、現代のたとえば『最新医学大事典』（医歯薬出版）

によれば、結核菌が血液によって全身に広がって、多くの臓器に結核結節を作り出す重篤な症状を指す。ゾラの時代にはどうだったかというと、ドゥシャンブルらによる 100 巻本『医学百科辞典』の「肺癆」の項では、コッホの結核菌発見（1882）前夜に当たる頃の粟粒結核に関する症候学の情況が詳述されている。そこでは慢性肺癆と対置される「急性肺癆」の別名として粟粒結核は二種類に区別される。一つは高熱を特徴とし、腸チフスを想起させる、多臓器に粟粒結核を生じさせる型、つまり「全身性粟粒結核」で、もう一つは肺－気管支を特に傷害させることによって、前者の血液感染に因るよりも、呼吸器感染が顕著であることを指し示す型「肺－気管支粟粒結核」である。[34] 上述のジャンヌの粟粒結核は、ドゥベルルと同じく彼女の診断をした老医師ボダンが腸チフスとの間で診断を躊躇していたことから分かるように、前者に分類される。

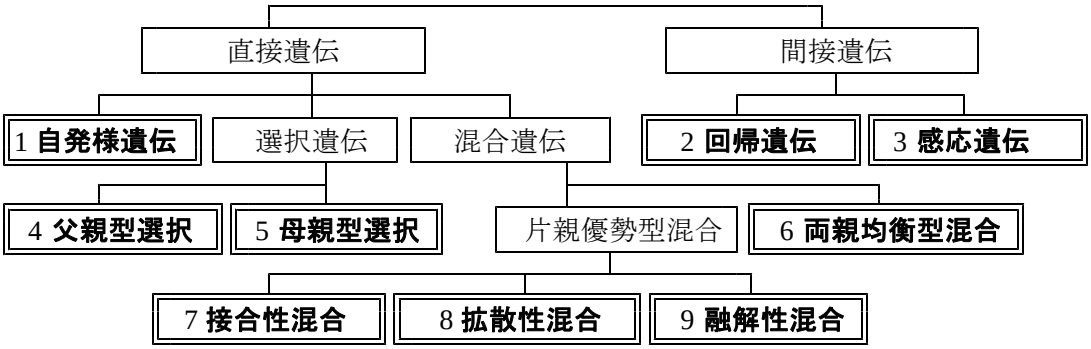
「叢書」中でルーゴン＝マッカール家に属する肺癆患者は以上の 4 名だけであるが、そこでわれわれはムーレ家の系統だけが肺癆患者を続出させているという歴然たる事実を見せられたわけである。何度も繰り返すが、この時代にはまだ肺癆は遺伝病と見なされていた。したがって、V 章で見てきたデュビューシュやギローの家族と同じようにムーレ家の何人かが肺癆を患い、肺癆が遺伝を通して家族病の様相を呈するにいたったのだとしても特別視するようなことではないだろう。だがその遺伝病としての肺癆がどうしてムーレ家以外のルーゴン=マッカール一族に広がらないのか。そこでわれわれは、ムーレ家だけに肺癆患者を限定させるためにどのような合理的なメカニズムがはたらいているのかを問わなければなるまい。また同時にそこに何らかの説話論的意図が隠されているのではないかと疑っておくことも必要だろう。

「ルーゴン＝マッカールの家系樹」には家系に属する個々の人物について――健康であった者を除いて――遺伝病やそれとおぼしき病気の簡単な記述が掲載されていた。またそこには遺伝の症例記述のほかに、リュカの『遺伝概論』に基づいて、[35] 構成員全員について洩れなく身体と精神の両面に関する遺伝類型が書き加えられていた。

その遺伝類型を「家系樹」などから帰納的に推論してみると、[36] まず父母の形質が直接子供に反映する直接遺伝、おじやおばの形質が反映する間接遺伝の二つに大別される。間接遺伝には、通称＜隔世遺伝＞（atavisme）と称される(2)＜回帰遺伝＞（hérédité en retour）、(3)＜感応遺伝＞（influence）が挙げられる。直接遺伝にはさらに 3 段階の下位分類があり、まず第 1 段階が(4)父親型か(5)母親型の、どちらかの＜選択遺伝＞（élection）か＜混合遺伝＞（mélange）、それとどちらにも似ずまるで自然発生的に生じたかのような(1)＜自発様遺伝＞（innéité[=combinaison]）に分かれる。混合遺伝については第 2 段階で両親の遺伝形質が均衡して混合している(6)両親均衡型とどちらか片方の親の遺伝形質が優っている場合があり、後者について第 3 段階としてその混合度の粗密に応じて(7)＜接合性混合＞（soudure）、(8)＜拡散性混合＞（dissémination）、(9)＜融解性混合＞（fusion）という三つに区分される。

これらの遺伝類型は「家系樹」とまったく同じような次のようなツリー上の概念図として表すことができる。別に考察を要することだが、家系や遺伝類型で図式化が可能なように、こうしたツリー状の思考パターンこそがゾラの叢書の体系を根本で規制しているのであろう。

遺伝類型



ルーゴン＝マッカール家の「家系樹」に掲載され「叢書」に登場している人物たちは、上で図示した九つのタイプ（二重枠部）のどれかに属していることになる。[37]

こうした遺伝類型やその基になった遺伝理論は、まもなく陽の目を見るメンデルの近代的な遺伝理論によって否定され、現在では学説史上の価値しかもっていない。ここで特に驚かされるのは「3 感応遺伝」という類型で、たとえばナナ（正式な名前はアンナ・クーポー）のように「身体的に」見ると、実の父親クーポーでなく、母親ジェルヴェーズの最初の恋人ランチエ似とされている。ただしこの感応遺伝という概念も『１９世紀ラルース』の第２補遺の「遺伝」の項で堂々と言及されているところをみると、当時は半信半疑ながらも理論的には認められていたようだ。

ここで現代科学の高みから当時の遺伝理論が抱える欠陥を、それもゾラの小説に関して難詰してみてもあまり生産的ではなかろう。『パスカル博士』でパスカルが自分で作成した「家系樹」のことを、「自ら定めた遺伝法則が明確で完璧に適用されている」「このような全体、一つとして欠陥のない、決定的で完璧な記録資料は美しいと思わないかい？」[38] と述べたとしても、それはわれわれにとってあくまでも遺伝理論上のことではなく説話論上のこととして理解しておかなければなるまい。

さて「家系樹」では、ユルシュールの遺伝類型は「精神的に母親が優勢の」「7 接合性混合」型に分類され、「身体的にも母親に類似している」。その母親アデライド・フークの方は、「気が狂ってチュレットの精神病院に 1851 年に入院すると、1873 年にそこで脳卒中に倒れて 105 歳で死去する」［1893 年版「家系樹」］。このアデライド・フーク（ディードおば）こそが一族全体に影響を及ぼす「起源の神経症」を患っていたのであった。そしてすでに引用した通り、「ユルシュールは 1839 年に死んだ、［・・・］それで兄の不吉な予言を現実のものにしてしまった。母親の神経症が彼女にあってはゆっくり進行する肺癆に変わり、それが彼女を徐々にむしばんでいった。」

元々はムーレ家の血を受け継いでいないが、夫のフランソワの従妹でムーレ家に嫁いできたマルト、彼女の遺伝類型は「一世代を飛び越えた［2］回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」と先のユルシュールの場合と同じように、ディードおばに結びつく。1893 年版の「家系樹」によると「神経発作を呈して死去」としか記されていないが、われわれが見たように、彼女の死因は肺癆であった。

セルジュの遺伝類型は「［8］拡散性混合型。精神的、身体的に母親の特徴をより際立たせた類似を示す。神経症の遺伝は宗教的偏執［78 年版］／神秘主義的信仰［93 年］に

変化する」とされ、問題のセルジュに支配的な影響を与えることになったのは母親のマルトの方であり、セルジュは遺伝的に言うと母親を介してやはり一族の起源であるディードおばに繋がる。彼はパスカル博士が「家系樹」を書いた時点では存命中ということなので、1893 年版「家系樹」に彼の死に関する記述はない。ただしパスカル博士が小説の本文中でセルジュは肺癆による死を余儀なくされていると報告していた［前出 15 ページ］。

ジャンヌは「2 世代を飛び越えた［2］回帰遺伝。アデライド・フークに精神、身体ともに類似」。マルトの場合とまったく同じように「回帰遺伝」によって彼女はディードおばと結びついている。なお彼女については 1893 年版「家系樹」に「神経の発作を起こしたあと、1855 年に死去」という文が付け加えられているが、神経病が直接の死因なのではなく、すでに見た通り急性肺癆が彼女の命取りとなった。

ムーレ家に属する 4 人の肺癆患者、ユルシュール、マルト、セルジュ、ジャンヌにおける遺伝類型を通してみると、いずれもルーゴン=マッカール家の祖先アデライド・フークに結びつき、彼女の神経症の影響を直接・間接に色濃く受けている。そして共通しているのは彼らが肺癆によって死去したことである。とは言っても、一方では、すでに述べてきたように、ディードおばの神経症は様々な現れ方をし、彼女の遺伝疾患がいつでも肺癆に変化するとは限らないし、また他方ではムーレ家の中にも、たとえばシルヴェールのように例外的に肺癆を免れている人物も存在している。

このシルヴェールは「母親の［5］選択遺伝」。したがって母親のユルシュールを介して甥のセルジュのようにディードおばに結びつくのだが、それでも遺伝病としての肺癆に罹ることはなかった。けれども彼は故郷プラッサンが 1851 年のナポレオンのクー・デタ騒ぎに巻き込まれると、共和派に与して闘い、憲兵の凶弾に倒れた。まるでディードおばの遺伝病がセルジュらとは別の形で彼の運命を支配していたようだ。したがって、ディードおばの遺伝病は彼にあっては他のムーレ家の肺癆患者たちと異なって一見何らの影響も及ぼしていないようなのだが、しかし様態は異なるとは言え、シルヴェールもまた他のムーレ家の人々と同じようにディードおばの遺伝的影響を受け、同じように死去して家系を絶やすいたったという結果に対して、やはり説話上の意図を看取せざるをえない。

その共通点についてすこし詳しく見てみよう。フランソワとマルトの家庭には 3 人の子供がいた。そのうち母親のマルトを通して遺伝的にディードおばにつながる二男のセルジュは司祭として独身のまま死ぬであろうし、その妹のデジレは「神経症が痴愚（imbécilité）として遺伝」したので、子供を産むことなどとても望めるような状態ではない。事実『パスカル博士』の時点でも、兄セルジュのところに身を寄せたままで、結婚とか出産という類の情報は全くない。ユルシュールの生んだ 3 人の子供のうち、長女のエレーヌは「自発様遺伝」なので、ディードおばに結びつくことはない。しかしエレーヌの娘ジャンヌは「回帰遺伝」によってディードおばの不吉な影響を免れがたく、12 歳で早世してしまった。エレーヌはジャンヌと死別した後ランボー氏と再婚したのだが、二人のあいだに子供はできなかった。ゾラはそのことについてわざわざ触れて、「それは一種の罰のようだ」と書き残し、[39] 彼女のところでも家系が断たれることを強調している。ユルシュールの二男だったシルヴェールが銃殺されたのは 17 歳のときで、もちろん彼に子供はいなかった。

結局、ムーレ家の中ではフランソワとマルトの長男オクターヴだけが 1 男 1 女をもうけ、血筋を途切れさせることはない。オクターヴがムーレ家の中でただ一人このような特権を

享受しえた理由は、遺伝の観点からすると彼だけが「父親の選択遺伝」で、またその父親のフランソワが同じ「父親の選択遺伝」なので、ディードおばからの悪影響を回避できたからだ。そしてオクターヴの血筋が将来的にもムーレ家の未来を担えることを約束するのは、彼の結婚相手で彼の子供たちの母である「ドゥニーズ・ボーデュが健康で精神的に安定している」（1893 年版「家系樹」）と遺伝的に保証されているからである。

このように一族の消長を恣にしている遺伝を前にして、「叢書」において肺癆の果たしている説話的機能を問い直すと、肺癆というのは変性的疾患の一つとして呪われた自らの血／神経を自滅に追いやるように働いているということである。この点で肺癆と比較すべきなのはマッカール家をむしばんだアルコール中毒である。

叢書第 7 巻『居酒屋』（1877）の主人公クーポーとジェルヴェーズの夫婦は二人ともアルコール中毒による悲惨な生涯を遂げた。最初にジェルヴェーズとその恋人ランチエとのあいだにできた子供たち、クロード（第 14 巻『作品』、1886）、ジャック（第 17 巻『獣人』、1890）、エチエンヌ（第 13 巻『ジェルミナル』、1885）、またクーポーとの間に生まれた娘アンナ（ナナ）（第 9 巻『ナナ』、1880）は、子孫を残さなかったか（ジャック）、子供をもうけてもすぐに死ぬか（クロードとアンナ）、あるいは最終的にニューカレドニアに渡ってその地で結婚したため消息不明となり（エチエンヌ）、現実的に「家系樹」上で子孫を絶やす結果となっている。このようにマッカール家のなかでアルコール中毒に冒された子孫が第 5 世代で壊滅すること、ムーレ家の肺癆患者たちが第 4 世代で根絶やしにされてしまうこと、それはアルコール中毒症と肺癆が「叢書」中でいみじくも同じような自然淘汰の否定的原理として機能していることを指し示しているのである。[40]

６．気質と肺癆

病気の原因がまだ科学的に明らかにされていない場合、病気が遺伝のせいだということと並んで患者の性格が引き起こしたとする見方も一般的にはよくされることである。これと同じ時代的情況の中で、肺癆についてもやはり遺伝と並んで、性格が問題とされるのは必然的な成り行きだろう。それについてソンタグは肺癆と性格の単なる関連だけでなく、さらに病因論的なところまで踏み込んで、「近代以降の病気（昔の結核）について言えば、病気は性格（character）を表現するというロマン派的な観念は、どうしても拡大されて、性格が病気を引き起こすという主張に通じてしまう」（『隠喩としての病』、p.47［邦訳 p.70］）と指摘している。ゾラの「叢書」の肺癆も性格と無縁ではない。ただし彼の場合性格はもっと生理的に、自然主義的に捉えられて、性格は「気質」（tempérament）として格上げされ重要性を強調されることになる。

そこでまずこの時代の一般的な気質に関する定義を見ると、当時の気質の定義は生理学的という近代的な装いを凝らしているが、旧弊なヒッポクラテスの体液の考え方を多分に引きずっている。『19 世紀ラルース』によると、気質は血液（sang）過多の「多血質」（sanguin）、神経（nerfs）の勝る「神経質」（nerveux）、胆汁（bile）の優勢な「胆汁質」（bilieux）、そして最後にリンパ（lymphe）過多の「粘液［リンパ］質」（lymphatique）という、四種類に分類される。ちなみにそれ以前の時代だと、「神経質」やリンパに左右される「粘液質」の代わりに、粘液（pituite）の優勢な「粘液質」（f［ph］légmatique）、黒胆汁（atrabile）過多の「憂鬱質」（mélancolique）があって、それらの方が後の 2 者よりも一般的であったよ

うだ。気質の構成要素である体液や神経ならだれにも見られるように、『19 世紀ラルース』は、この定義の最後で四つに大別される気質も純粋な形で存在するのはまれであると、留保を付け加えることを忘れていない。[41]

ゾラは「叢書」以前、『テレーズ・ラカン』の「第 2 版への序文」で文学作品における気質の意義をすでに強調し、また「叢書」第 1 巻『繁栄』の序文においても繰り返しそれに言及して、彼にとって気質が説話法上の重要な構成要素であることを公言していた。[42] さらにその序文では、気質の重要性を指摘してから、基本的な四つの気質の中でとりわけ「多血質」と「神経質」を特に話題にする。

> 生理学的に彼ら［ルーゴン＝マッカール家の人々］は、神経と血液に因る偶発症候（accidents nerveux et sanguins）の緩慢な連続を形成している。それは最初の器質障害（lésion organique）に続いて一族の中でさまざまに発病し、また家系に属する各人のところではそれぞれの環境にしたがって、感情、欲望、情熱というような、ありとあらゆる人間的、自然的、本能的な表現を決定づけている。その結果生じてくる事態が美徳と悪徳などおきまりの呼称を頂戴するのである。
> （『繁栄』、p. 3［邦訳 pp.2-3］。傍点は筆者）

『19 世紀ラルース』に記された気質とゾラの「叢書」の気質との間に並行関係を見ようとすれば、「多血質の人々の際立った特徴として愛の快楽を求める傾向がある」ということからルーゴン家の人物たちのことを思い浮かべることができるし、また「神経質な気質を持った人々の中に、身体・精神的な昂揚から極端な意気消沈と無感覚へ突如変化することほど共通に見られる特徴はない」という記述から浮沈の極端なマッカール家の一族をすぐに想起させられる。

おおよそルーゴン家に優勢な多血質、マッカール家に顕著な神経質に対して、ここまで肺癆患者として問題してきたムーレ家は気質的にはどのように規定されるだろうか。『19 世紀ラルース』には四つの気質に特徴的な疾病についての記述がある。多血質なら充血や出血など血液に関係する病気。神経質な人々はもちろんヒステリー、ヒポコンドリー、精神病など、神経に関わる神経症である。肺癆に関わる記述では、「粘液質の人々は瘰癧、佝僂病、肺の結核結節形成（tuberculisation pulmonaire）に陥る素質を有している」とされる。　性格が病気を引き起こすというロマン主義の因果関係的思考を決定論的に適用しようとした場合、肺癆を罹患するという特徴を持ったムーレ家の人々は、「他の気質の人々ほど感覚が鋭くなく、それに普通決断をするのが非常に遅い」（『19 世紀ラルース』）と記される粘液質に分類されることになる。しかし上で引用した気質に関するゾラの文章によれば、血液と神経に対して粘液質の基本的構成要素であるリンパは考慮の対象とされていない。

そこで実際に「叢書」中の気質の使用例を拾うと、「粘液質」を指す単語は «lymphatique» よりも古い方の «flégmatique» が使用されている。しかしそのいずれの使用もムーレ家の人々を対象にしているのではない。そもそも肺癆という病気をディードおばの神経症から転化した変性的遺伝疾患と想定し、「ある人物から別の人物へ数学的に導かれる一本の糸を見いだしそれを追跡しようと努めよう」として遺伝の法則性に「叢書」全体の指導原理

を見ている限り、ムーレ家の人々の気質を規制しているのはマッカール家の人々と同じく神経だと考えるほうが整合的であろう。それを裏書きするように、作品中で神経症的症状を呈することが多いマルト（『征服』）、セルジュ（『あやまち』）、ジャンヌ（『愛の一ページ』）に関しては、彼らの性格や挙措動作の描写に «nerveux» やその同族語が頻出して神経質的気質が強調され、特にセルジュについては「非常に神経質な気質」（『征服』、p.1037［邦訳 p.193］）と直接に気質がはっきり記述されている。

そこであらためて気質と病気の関係を問い直してみると、ゾラや『19 世紀ラルース』は、血液と神経そのものを病気を発生させる要因の一つに挙げているにしても、単純に神経や神経質がたとえばヒステリーに直結すると、また血液や多血質ならヒステリーを発症しないと考えているわけではない。加えて、個々人が唯一で純粋な気質に限定され、さらにそれを終生持ち続けると想定しているのでもない。つまり体液などの気質の構成要素と気質との関係、あるいは気質と病気との関係は機械的で決定論的な因果関係で結ばれてはいないのである。これをミシェル・セール風に表現してみれば、[43] 神経や血液はたしかに「叢書」の登場人物たちの気質や病気の構成要素として、言い換えれば実験小説の素材として不可欠だが、結果として現象してくる気質や病気にいたるには偶然と選択とからなる過程があって、環境などの様々なパラメーターの影響を蒙らざるをえないので、両者の関係を因果関係で考えるとしても、それは確立論的な関係にあるとしか解釈しえないのである。

したがってムーレ家の肺癆と気質の関係は性格が病気を引き起こすというような単純な因果関係の中で捉えるのでなく、むしろ気質を説話的機能と関連づけて考え、その上で肺癆を問題にする方が自然主義の気質のとらえ方として有効であろう。「叢書」に先立って書かれた『テレーズ・ラカン』（1867）の中に気質が果たす説話的機能を明示した語り手のことばがある。そこで気付かされるのは、J-L・カバネスの指摘するように、[44] 気質の相補関係と拮抗関係がテレーズとロランのカップルに魅力と反目の愛憎関係を演出していることである。

> テレーズの、そっけなく、神経質な性質（nature nerveuse）が、ロランのずぶとく、多血質な性質（nature sanguine）に、異様な影響を及ぼしていた。かつて、情熱にかられていた時期には、二人の気質（tempérament）の差異が、むしろこの男女を力強く結ばれたカップルにして、それぞれの肉体を補完し合い、その間で一種のバランスを形成していた。男が血液を女は神経を与えていた、［・・・］。だが、その調子が狂ってしまったのだ。テレーズの興奮しすぎた神経が、相手を圧倒してしまったのである。いつのまにかロランは、異常な神経興奮症（éréthisme nerveux）におちいっていた。若い女の強烈な影響で、彼の気質は、少しずつ、急性の神経症にさいなまれる少女のごとき気質になっていった。このようにして、ある一定の状況でときにある種の身体に生じる変化を研究するのは、興味深いことであるにちがいない。[45]

「叢書」中で、『テレーズ・ラカン』のように異なる気質の関係を説話法として利用し、肺癆にいたる過程を描く代表的な作品と言えば、フランソワとマルトの夫婦が登場する『征服』であろう。一方のフランソワは「血液過多で少しばかり鈍重」（『繁栄』、p.133［邦訳

p.163］）だった。彼の気質については 1869 年版の「家系樹」でもすでに「多血質（tempérament sanguin）」とはっきり規定されていた。他方でマルトはディードおばから「回帰遺伝」で神経症を受け継いで、肺癆と併せて神経病を発病し、1893 年版の「家系樹」で「ヒステリー症」と記されるように、気質的には神経質の典型である。すでに「3.肺癆と蕩尽の情熱」の節で述べたように、表面的には「夫婦は互いに似通い」（1878 年版・1893 年版「家系樹」中のフランソワに関する項）、夫婦仲は平穏であった。だがフォージャ神父が、「二人の存在の奥底では、私生児の酵母や、もつれ合い、反目をいつも繰り返す血のせいで、両者の異なった気質が対立を募らせている」ことを見抜き、マルトの気質に働きかけることによって、恋愛感情を刺激し信仰心を吹き込んで狂わせたあげく、ついに彼女に肺癆故の死を余儀なくさせたのだった。

『愛の一ページ』のジャンヌの場合も、彼女の運命を暗転させるのに気質が大きく関与する。ジャンヌはマルトと同じで「回帰遺伝」によってディードおばの神経質な気質に分類される。『19 世紀ラルース』によれば、神経質に属する性格的な特徴に「ねたみ」（envie）がある。ジャンヌの性格的な特徴を強調するためにもっともよく利用される語の一つは、その「ねたみ」の同義語である「嫉妬深さ」（jalousie）である。第 1 章で神経発作を起こした娘ジャンヌについて、母親のエレーヌが駆けつけたドゥベルル医師に対して、「とても繊細で、とても神経質（nerveuse）な娘なんです・・・いつも言うことを聞かせられるわけではありません。ほんの些細なことでも、この子は喜んだり悲しんだりして、それがわたしには不安でしかたないのです。感情の起伏が激しくて・・・わたしをとても愛してくれているのですが、わたしがちょっとよそのお子さんをなでただけで、しゃくりあげて泣きだすくらいやきもちやき（jalousie）なのです。」（『愛の一ページ』p.809［邦訳 p.20］）と、紹介している。

作品もそろそろ終わりに近づいた頃、一緒に連れて行って欲しいという娘の哀願を振り切って、母親のエレーヌはドゥベルル医師との密会の場に赴く。家に一人取り残されたジャンヌはその時激しい嫉妬を感じながらも、そのせいで想像をたくましくする。

> けれども、彼女は顔面を蒼白にしながら、そうだったのか、と思い当たることがあり、少しずつ嫉妬深い怒り（colère jalouse）に満たされていった。母親には自分以上に愛する人たちがいて、わたしのことをあんなに激しく突き飛ばしてまで、その人たちのもとに走ったのだ。そう思った瞬間、少女は両手を胸に押し当てた。今は、もうすっかり分かってしまった。ママはわたしを裏切っているのだ。（『愛の一ページ』p.1030［邦訳 pp.429-430］）

ジャンヌは唯一の絆である母親から捨てられたという深い絶望に陥る。それから自暴自棄になり、窓から吹き込む雨になおも打たれ続けるとやがてそのまま昏倒した。これが彼女には命取りだった。その後すぐ急性肺癆を発症して、彼女は急逝する。

ジャンヌの場合、ロマン主義文学が表現したように、性格が直接肺癆に結びついたのではない。彼女が急性肺癆に倒れるためには、彼女の最愛の対象でまた唯一の支えであった母親のエレーヌが医者のドゥベルルと不倫に走るという重大な契機が必要不可欠であった。それが原因となって彼女の気質を規制する神経がひどく揺すぶられ、その致命的な結

果として急性肺癆に倒れたのである。ジャンヌの神経質な気質は環境の課す偶然と選択の過程を経てその気質に親和的な病気である肺癆を引き起こすにいたった、そのような過程を生理学に描写することこそがロマン主義作家とは立場に異にする自然主義作家たるゾラの真骨頂であったと言えそうである。

VII 章　結び

本論の出発点は、ゾラの「叢書」に相当数見いだされる肺癆の記述が文学に造詣の深い医学史家たちから無視され、またソンタグのあの『隠喩としての病』にも一言も言及がなかったことから湧いてきた疑問であった。たしかにゾラが「叢書」中で肺癆の遺伝病説を感染病説に変えてしまったことは、簡潔でなおかつ実証的な記述を求められる医学史の立場からすれば、彼に対する言及をためらわせる要因であったにちがいない。だがそのような医学史の観点を離れて文学史の立場に立つとすれば、われわれが詳細に検討してきた通り、ゾラの肺癆は黙殺して構わないどころか、ロマン主義的肺癆観とは別の自然主義的肺癆観を示す特記すべきものと言ってよい。にもかかわらず、ゾラの肺癆は現実には、一部のゾラ研究者をのぞいて、一般的にそれにふさわしい扱いをされてこなかったのである。

ゾラの肺癆を無視してきたソンタグを筆頭とする文学批評家たちの軽率さを非難しても何も始まらない。それよりもわれわれはどうしてこのような事態にいたったのか、そうした見落としを許すような特質をゾラの肺癆が抱えていたのではないかと問うことの方が結果的に有益であった。

ムーレ家に集中していた肺癆患者たちの中で特にマルトとジャンヌに関しては、彼女らが早すぎる死を余儀なくされただけに、致命的な死病である肺癆の果たす役割は大きかった。しかし肺癆の文学的な価値というのは、いうまでもなくそれが登場人物の生命を断ち切ったことによって量られるわけではない。作品中で肺癆がどれだけ物語の展開を左右したか、要するに説話的な価値によってその重要性を評価しなければならない。

マルトの場合はかなり早くから肺癆の疑いは兆していたのだが、彼女を死へと追い込む際に前面に出て説話を先導していたのはむしろフォージャ神父に対する異様な情熱、それと綯い交ぜになった狂信的信仰であった。それに対して肺癆はそうした情熱と狂信を舞台裏でささえる生理学的な解釈の役割に甘んじていた。ジャンヌの場合、急性肺癆は作品の終盤に出てきて、彼女の命を奪って物語を閉じさせるという意味では重要だが、最初から作品の説話を左右するというものではなかった。個々の作品を取り上げてみる時、残念ながらゾラの肺癆は、バルザックの『あら皮』、デュマ・フィスの『椿姫』、ゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』における肺癆ほどの迫力を持っていなかったことは否定できない。その点では大方の批評家たちが示したゾラに対する否定的反応はある程度いたし方のないことかもしれない。

ところがこうしたまとめ方からは、ゾラの「叢書」における肺癆の際立った特徴が欠落している。ゾラの肺癆というのはルーゴン=マッカール一族の始祖ディードおばに起源を発する変性的遺伝疾患とみなされる点に特徴があったはずだ。変性的遺伝疾患としての肺癆は、「叢書」中でマッカール家の子孫を苦しめたアルコール中毒と同じように、ムーレ

家の肺癆患者たちを死に追いやり、その子孫を絶やさせた。死去したムーレ家の肺癆患者たちというのは遺伝を通してディードおばのプロテウス的な不吉な神経症を受け継いだものたちばかりであった。したがって起源の神経症を介して見れば、死病として発現する肺癆は自滅の原理として機能している。またルーゴン=マッカール家全体の消長を見渡せば、ディードおばの呪われた遺伝病を拭い去るための、自然淘汰の原理として機能している。

ゾラの「叢書」における肺癆というのは、このように「叢書」全体を通してみた時、言い換えればディードおばに始まる『ルーゴン=マッカール家の人々』という一個の大河小説として見た時、それが持つ特徴的な説話機能の全貌を初めて明らかにしてくる。肺癆は第 3 の家系であるムーレ家の人々の運命を支配し、死病として一族の呪われた遺伝の種子を最終的に断絶させるように物語を誘導した。この時肺癆は本来の病理学とは無縁の変性的遺伝と自然淘汰といういわば亜流の科学的論理に取り込まれてしまっているが、にもかかわらず神話的な効果は十分に発揮している、ということはとりもなおさず説話的な機能を十分にはたしている。「叢書」の肺癆に特徴的なこのような説話的機能は、個々の作品をばらばらに読むだけではなかなか把握しがたいことだ。ゾラの肺癆が慧眼な批評家たちの眼に留まらなかったのはどうやらこのあたりに原因がありそうだ。最後に付言するなら、小論のもつ意義というのは、肺癆に関してそうした見落としを補完しえたところにあるだろう。

＜対象テクストの邦訳＞

本論考ではゾラのフランス語原典とともに下記の邦訳テクストを参考にした。訳者の方々には御礼を申し上げたい。ただし引用個所の訳文については、邦訳テクストをほとんどそのまま借用したものから、病名を中心に本論の文脈と整合させたため、元の邦訳とはかなり異なったものまである。それについてはいちいち記さないが、その代わり本論中には参考のため邦訳テクストの該当ページをカギ括弧で付しておく。

１．*Thérèse Raquin*：『テレーズ・ラカン』宮下志朗訳、『初期名作集』所収、藤原書店、2004 年
２．*La Fortune des Rougon*：ルーゴン=マッカール叢書第 1 巻『ルーゴン家の誕生』［本論では『ルーゴン家の繁栄』］伊藤桂子訳、論創社、2003 年
３．*La Conquête de Plassans*：叢書第４巻『プラッサンの征服』小田光雄訳、論創社、2006 年
４．*La Faute de l'abbé Mouret*：叢書第５巻『ムーレ神父のあやまち』清水正和・倉智恒夫訳、藤原書店、2003 年
５．*Une page d'amour*：叢書第８巻『愛の一ページ』石井啓子訳、藤原書店、2003 年
６．*L'Œuvre*：叢書第１４巻『制作』上・下［本論では『作品』］清水正和訳、岩波文庫、1999 年
７．*L'Argent*：叢書第１８巻『金（かね）』野村正人訳、藤原書店、2003 年
８．*Docteur Pascal*：叢書第２０巻『パスカル博士』小田光雄訳、論創社、2005 年

【注】

1. ルネ・デュボス、ジーン・デュボス『白い疫病――結核と人間と社会』北錬平訳、財団法人結核予防会、昭和 57 年、pp.65-67［Original edition: Rene & Jean Dubos, *The White Plague. Tuberculosis, Man and Society*, Little, Brown and Company, Boston, 1952］。Pierre Guillaume, *Du désespoir au salut: les tuberculeux aux 19e et 20e siècles*, Aubier, 1986, pp. 99-101.
2. Émile Zola, *L'Œuvre in Les Rougon-Macquart. Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, t. IV, coll. Pléiade, Gallimard, 1966, p. 313［邦訳、下巻 p.226］. 以下本作品からの引用は作品名を『作品』と記し、引用ページを付加するにとどめる。
3. 「瘰癧」は別名「腺病」とも言われたが、現在は「頸部リンパ節結核」の名称を与えられ、結核菌がリンパを介して頸部リンパ節に侵入して起こる結核の一種として定義づけられている。この頃はまだ依然として「瘰癧」は「肺癆」とは独立した別の疾病と見なされていた。『19 世紀ラルース大辞典』の「瘰癧」に関する項も、1890 年発行の「第 2 補遺」になって初めて、両者の同一性が疑われ出したことを記している。
4. Les notes (NAF10316, fos 1-3[*Le plan général*] et 219) d'Émile Zola *in Op. cit.*, pp. 1363-1364. 清水正和『ゾラと世紀末』、国書刊行会, 1992、pp. 47-51.
5. Émile Zola, *Docteur Pascal in Les Rougon-Macquart*, t. V, coll. Pléiade, Gallimard, 1967, p. 955［邦訳 p.49］. 以下本作品からの引用については『パスカル博士』と作品名を記し、引用ページを付加するだけにとどめる。
6. La note d'Émile Zola, *in Ibid.*, p. 1581.
7. Pierre Darmon, *L'homme et les microbes, XVIIe-XXe siècle*, Fayard, 1999, pp. 168-169［ピエール・ダルモン『人と細菌』寺田光徳・田川光照訳、藤原書店、2005 年、p.231］.
8. *Ibid.*, pp. 98-99［邦訳 pp.132-133］ et Pierre Guillaume, *Op. cit.*, pp. 108-114.
9. Émile Zola, *La Conquête de Plassans in Les Rougon-Macquart.* t. I, 1960, p. 1201［邦訳 p.418］. 以下本作品からの引用は作品名を『征服』と略記し、引用ページを添えるだけにとどめる。
10. Henri Mitterand, «Étude» *in Ibid.*, p. 1651.
11. J. Moreau de Tours, *La Psychologie morbide dans ses rapports avec la philosophie de l'histoire ou De l'influence des névropathies sur le dynamisme intellectuel*, Victor Masson, 1859, p.105. 傍点個所は原著ではイタリック。
12. Émile Zola, *L'Argent in Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, p. 182［邦訳 p.248］.
13. *Ibid.*, p. 395. なお『金』の時代設定は 1864 年から 1869 年である（La note d'Émile Zola, *in Ibid.*, pp. 1271-1272）。
14. Y. Malinas, *Zola et les hérédités imaginaires*, Expansion Scientifique Française, 1985, p. 137-138.
15. Susan Sontag, *Illness as metaphor*, Penguin books, 1991（1st publishing in 1978）, p.69 ［邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982 年、p.102］. 以下本書からの引用は書名を記して、引用ページを付加するにとどめる。なお訳文は以下も同じく上記邦訳書から借用した。

16. 否定的な評価と肯定的な評価はそれぞれ下記の文献に見出すことができる：Alain Contrepois, *L'invention des maladies infectieuses. Naissance de la bactériologie clinique et de la pathologie infectieuse en France*, Éditions des archives contemporaines, 2001, pp. 107-108 et Y. Malinas, *Op. cit.*, p. 139-140.
17. Émile Zola, *La Fortune des Rougon*, *in Les Rougon-Macquart*, t. I, *Op. cit.*, p. 132［邦訳 p.161］. 以下本作品からの引用は作品名を『繁栄』と略記し、引用ページを付加するにとどめる。
18. 「ルーゴン=マッカール家の家系樹」は 1869 年の二つの版（La note (NAF 10345, f°130) d'Émile Zola, *in La Fabrique des Rougon-Macquart. Éditions des dossiers préparatoires*, pub. par Colette Becker avec la collab. de Véronique Lavielle, Honoré Champion, 2003, pp. 158-163 et *Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, pp. 1777-1779）、それから 1878 年に『愛の一ページ』とともに発表されたもの、1893 年に『パスカル博士』とともに発表されたものと、都合四つを数える。そのうち 1869 年の二つは出版社ラクロワにゾラが叢書の構想を示す際に手渡されたもので、一般には公表されなかった。またその時は執筆前ということから登場人物名も定着せず、全体も 10 巻構成として計画されていたため、後の叢書の読者に明らかにされた二つの版と大きな相違を見せている。ただし名前、生没年、職業、それに問題の遺伝類型と遺伝の症例という記述内容の構成は四つのヴァージョンを通して変わることはない。
19. Augustin Grisolle, *Traité de pathologie interne*, 1862 cité in Alain Contrepois, *Op. cit.*, p. 41.
20. La note (NAF10345, f° 61) d'Émile Zola, *in* «Docteur Lucas. Hérédité naturelle», *La Fabrique des Rougon-Macquart. Op. cit.*, pp.88-89 et *Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, p. 1694.
21. La note (NAF10345, f° 106) d'Émile Zola *in La Fabrique*, *Op. cit.*, pp. 134-135 et *Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, p. 1722.
22. Jean Borie, *Mythologies de l'hérédité au XIXe siècle*, Éditions Galilée, 1981. Jean-Louis Cabanès, *Le corps et la maladie dans les récits réalistes*, 2 vols, Klincksieck, 1991. Isabelle Delamotte, *La médecine, le malade et le médecin dans l'œuvre de Zola*, Atelier national de reproduction des thèses, 2003.
23. B. A. Morel, *Traiaté des dégénérescences physiques, intellectuelles et morales de l'espèce humaine et des causes qui produisent ces variétés maladives*, J. B. Baillière, 1857 et J. Moreau de Tours, *Op. cit.* また B・A・モレル、モロー・ド・トゥールについてゾラ自身が残した断片的ノートが、最近 C・ベッケールによって公刊された：«Physiologie[*sic*] morbide (Moreau de Tours» (NAF10295, f°s 132-138) *in La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol II, pub. par Colette Becker avec la collab. de Véronique Lavielle, Honoré Champion, 2005, pp. 298-305. «Traité des dégénérescences de l'espèce humaine par B. A. Morel» (NAF10295, f°s 139-141), *Ibid*., pp. 306-309.
24. B. A. Morel, *Op. cit.*, p. 125.
25. ゾラの手になる「変性症」の記述は上記注(23)のモレルの著作に関するノートに見ることができるのだが、「叢書」の作品に関してだと、『ムーレ神父のあやまち』の登場

人物のための準備ノートのなかに、ムーレ家の三人の子供について、「それにセルジュ、デジレ、オクターヴの三人とも変性症である」（NAF10294, f° 17 *in La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol II, *Ibid*., p. 125）という一文が残されており、また「正真正銘のルーゴン、マッカールというのが、この子供たちなんだ。この一族の最後尾になって、究極の変性症が生じるのだから」（Émile Zola, *La Faute de l'abbé Mouret*, *in Les Rougon-Macquart*, t. I, *Op. cit.*, p. 1454［邦訳『ムーレ神父のあやまち』p.368］）と、作中でゾラを代弁するパスカル博士が吐く一節を皮切りに、それ以降の作品でこの「変性症」という当時の遺伝学的専門語が散発的に使用されるにいたる。

26. Georges Gusdorf, *L'Homme romantique*, Payot, 1984, p. 292.
27. *Nouveau dictionnaire de médecine et de chirurgie pratiques*, 35 vols. sous la direction du Dr Sigismond Jaccoud, J.B. Baillière et Fils, 1864-1883, vol. 27 (1879), pp. 514.
28. Émile Zola, La note (f° 10 de NAF10280) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol II, *Op. cit*., p. 28.
29. Émile Zola, «Documents et Plans préparatoires» *in* la note (NAF 10345, f°130) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart. Éditions des dossiers préparatoires*, *Op. cit.*, pp. 158-163 et *Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, pp. 1777-1779.
30. ゴンクール兄弟は、マニー亭での会食仲間で当時フランス医学界の権威の一人であったロバン博士に専門家の意見を請い、それを自分たちの作品で濫用して憚らない一面をのぞかせている。次の一節はロバン博士に『ジェルヴェーゼ夫人』について専門的知識による意見を求めた後で、返されてきた校正刷りを見て漏らした彼らの自信に満ちた述懐である：「私たちは自分たちの書いた肺癆の部分を何度も読み返した。この部分はマニー亭の不毛な雰囲気の中で、漠然としてはいるが霊感に満ちた頭から洩れてきた断片で、興奮でうなりを発しているロバンの言葉と知識の一部だったのだが、もしも私たちが文字にして定着し、生命を与えなかったとしたら、それは存在するにはいたらなかったかもしれない。なぜなら私たちがこの部分に明確さと個性を付与したのであり、彼から発したときには私たちの手になる文体や大胆さで彫琢されていたわけでは決してなかったから。彼が送り返してきた校正刷りを見ると、彼は私たちの原稿を前にだらだらと迷い続け、それから怖じけたように訂正を加えたのだと思われる。」 (le 5 février 1869, *Journal* II (1866-1886), Texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Robert Laffont, 1956, p. 197.)
31. La note (f° 2 de NAF10295) d'Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol II, *Op. cit.*, p. 108. ちなみにエベルスが腸チフスの病原となる腸チフス菌を発見したのが 1880 年のことなので、腸チフスの病因論は肺癆のそれと同様『あやまち』の発行当時にはまだまったく不完全であった。『19 世紀ラルース大辞典』によれば、この病気はそれまで風土病の一種と考えられていたようである。
32. 1893 年版「家系樹」のエレーヌの項。なおこの夫グランジャンが「肺癆に冒されやすい体質」だったという記述は、本論 V 章のゾラが肺癆遺伝病説をいつ放棄したかという議論に深く関係してくる。グランジャン自身が登場する『愛の一ページ』（1878）に付けて公表された「家系樹」にはまだこのような記述が見あたらず、『パスカル博士』（1893）

とともに公表された「家系樹」で初めてこのように表記されたことを勘案すると、ゾラの肺癆遺伝説の放棄はやはり 1891~93 年頃であるという可能性が一段と高まる。

33. Émile Zola, *Une page d'amour* in *Les Rougon-Macquart*, t. II, 1961, p. 1063［邦訳 p.491］. 以下本作品からの引用は作品名を記して、引用ページを付加するにとどめる。

34. *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, sous la direction de Raige-Delorme et A. Dechambre, Victor Masson, 100 vols, 1864-1889, t. 24, p. 672.

35. Prosper Lucas, *Traité philosophique et physiologique de L'hérédité naturelle dans les états de santé et de maladie du système nerveux*, 2 tomes, J.B. Baillière, 1847 & 1850.

36. 以下のルーゴン＝マッカール家の人々に関する遺伝類型のシェーマ化は、リュカの『遺伝概論』に関するゾラ自身のノート（Les notes (NAF10345, f°s 57-115) d'Émile Zola, «Docteur Lucas. Hérédité naturelle», *in La Fabrique des Rougon-Macquart*, t.1, *Op. cit.*, pp. 84-143 et *Les Rougon-Macquart*, vol. V, *op. cit.*, p. 1692-1728.）、「ルーゴン＝マッカール家の家系樹」およびそれを整理した金森修「仮想の遺伝学」（『ゾラの可能性』小倉孝誠・宮下志朗編、藤原書店、2005 年、pp. 105-131）に基づいている。

37. これらの遺伝型 9 タイプは図上ならびに理論上では当然相互に排他的であるが、ゾラは遺伝形質を身体と精神に分けて記述しているので、たとえばナナのように「接合性混合遺伝」として両親からの直接的遺伝を前提としながらも、同時に「身体的には」母親の最初の愛人であるランチエの「感応遺伝」型が見いだされる場合も生じる。「家系樹」中では、このようなケースはナナの他にクロチルド・ルーゴン（母親型選択遺伝でかつ母方の祖父の回帰遺伝）、シルヴェール・ムーレ（母親型選択遺伝でかつ身体的に自発様遺伝）の 2 例ある。

38. Émile Zola, *Docteur Pascal*, *Op. cit.*,, p. 1006［邦訳 pp. 114-115］

39. La note (NAF10290, f° 125) *in Les Rougon-Macquart*, t. V, Op. cit., p.1648.

40. Cf. Delamotte, *Op. cit.*, p. 277.

41. ゾラと同時代の辞典『19 世紀ラルース』や『リトレ大辞典』（Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, 7 vols）によれば、「気質（tempérament）」が類義語の「性格（caractère）」や「性質（nature）」に対してもっている際立った特徴というのは、今見たように、生理的物質である体液によって定義されている点にある。したがってこの語は専門的に規定されていた用語である。これに対して「性格」や「性質」の両者はごく一般的に利用される語である。基本的には「性格」が精神面における特徴を指すのに対して、「性質」は身体的特徴を指す場合が多い。そのことは、「性質」が「体質 «complexion»」とのあいだで共通性を持ち、両方の語を定義する際互換的に利用されることからも窺うことができる。また「性質」は、「生まれつき」を «de nature» やその形容詞形 «naturel» で表現するように、それが持っている不変性を強調される傾向にある。

42. 「テレーズとロランという、二人の主人公を思いつくと、わたしは、みずから進んでいくつかの問題を提起して、それを解こうとした。たとえば、この異なる二つの気質（tempérament）のあいだに生じる奇妙な結びつきを説明しようと努めて、多血質（nature sanguine）が神経質（nature nerveuse）と接触すると、どれほど深刻なトラブルが生じるかを示してみた。小説を丹念に読んでいただければ、各章が、生理学の珍しい実例となっ

ていることがわかるはずなのだ。」（*Thérèse Raquin*, in *Œuvres complètes*, t. 1er, Cercle du livre précieux, 1962, p.520［邦訳『テレーズ・ラカン』、pp.274-275］）

「気質（tempérament）と環境からなる二重の問題を解くと同時に、ある人物から別の人物へ数学的に導かれる一本の糸を見いだし、それをたどることにしたい」（『繁栄』、p. 3.［邦訳 p.2］）

43. Michel Serres, *Feux et signaux de brume. Zola*, Grasset et Fasquelle, 1975［『火、そして霧の中の信号――ゾラ』寺田光徳訳、法政大学出版局、1988 年］.

44. Jean-Louis Cabanès, *Op. cit.*, 1er vol., p.282.

45. Émile Zola, *Thérèse Raquin*, *Op. cit.*, p.613 ［邦訳 p.170］.

第　2　編

「ルーゴン=マッカール叢書」のアルコール中毒［改訂版］*

＊　本論考は同名のタイトルのもとに前・後編に分けて『熊本大学文学部論叢』98 号（2008 年 3 月）と『熊本大学社会文化研究 6』（2008 年 3 月）に発表された。しかしその後の調査・研究によってゾラによるモローの『変性症』参照に関する筆者の過誤が明らかになったことなど、かなりの修正が必要であることが明らかになった。そこで発表済みの前論考に代えて、ここには大幅な修正を施した改訂版を掲載する。

「ルーゴン=マッカール叢書」のアルコール中毒［改訂版］

はじめに

エミール・ゾラの『居酒屋』（1877）はアルコール中毒を作中に大々的に取りあげたことでよく知られている。しかし『居酒屋』研究の中でアルコール中毒がしきりに話題にされたとしても、不思議なことにアルコール中毒をテーマにして『居酒屋』を含む「ルーゴン=マッカール叢書」［以下適宜「叢書」と略記］をまとめあげた研究がなかった。おそらくその最大の原因は、ゾラが「叢書」中でアルコール中毒を遺伝病のひとつとみなしているので、それが今では荒唐無稽も甚だしいとして現代人から見向きもされないところにあるのだろう。科学的に成立しがたい理論に基づいて書かれたテーマなど考慮に値しないし、誤りであることを承知で検討するのは最初から意気阻喪させる話だ、というのは理屈としてよくわかる。ただし、ゾラが「叢書」を書いた 19 世紀後半は近代的な遺伝学の礎を築いたメンデルの法則すらいまだにその真価が認められていなかった。したがって高名な医学者すら遺伝における基本的な知識として優性遺伝と劣性遺伝という概念を持ち合わせておらず、また疾病分類においても先天性疾患と遺伝疾患の区別もされていなかったというのが実情である。さらには、肺癆のところで見てきたように、感染症の大半は病因の細菌やウイルスが発見されていないために、遺伝病と見なされていたのである。このように、アルコール中毒の遺伝以外にも、科学的観点からするとゾラの作品に限らず彼と同時代の作品についてはいくらでも誤りをあげつらうことはできるし、しかもまた現代の作品についても後世の人々から見れば同じ運命は免れえないだろう。

そこでわれわれがゾラの「叢書」におけるアルコール中毒を考察するにあたってわきまえておかなければならないことは、ゾラが自らの作品でアルコール中毒遺伝に関する理論を主張しようとしたのではなく、アルコール中毒遺伝を自らの作品を語るために利用したのだということである。ゾラのアルコール中毒遺伝を科学的理論として扱うなら無駄な話だが、そうではなくてここではあくまでも文学作品における説話論のテーマとして検討することが目的である。

Ⅰ章　『ルーゴン家の繁栄』における飲酒癖

１．アントワーヌ・マッカールの生涯

1871 年に出版された「叢書」第 1 巻『ルーゴン家の繁栄』［以下『繁栄』と略記］には、飲んだくれのアントワーヌ・マッカールが登場する。彼はルーゴン=マッカール家の始祖アデライド・フークが愛人マッカールとの間にもうけた子供で、ユルシュールという同じ庶子の妹、そして異父兄で嫡出子のピエール・ルーゴンとともに、三人兄妹としてルーゴン家で育てられてきた。

アントワーヌ・マッカールの家庭環境は少々複雑なので説明しよう。母親のアデライド・フークは 1786 年にルーゴンと結婚し、1787 年にピエールを生んだが、翌 1788 年には

夫を亡くす。そこで隣に住んでいたマッカールを愛人にすると、1789 年にはアントワーヌを、1791 年には娘のユルシュールを生んだ。アデライド・フークは隣家のマッカールのもとへ通いはするものの、三人の子供は自分の元に引き取った。愛人のマッカールはというと、彼は放浪癖があって、人の噂では密輸入か密猟で収入を得、人前に姿を現したときには「恐ろしいほど酒をがぶ飲みした。居酒屋の奥でたった一人テーブルにつき、毎晩ふぬけのように自分のコップを凝視し、まわりの話に耳を傾けることも見まわすこともなく、正体をなくすほど酔っていた。」(『繁栄』、p. 42 [p. 51]) [1] そして 1810 年には密輸入の最中、国境で役人に撃ち殺された。

『繁栄』は南フランスの架空の都市プラッサン（ゾラの生地エクス=アン=プロヴァンスがモデルとされている）が舞台で、ルイ・ナポレオンがクー・デタを起こした 1851 年 12 月当時の騒然とした状況を背景にしている。そこで話の中心になっているのは、ルーゴン=マッカール家の第二世代に属するピエールとアントワーヌの異父兄弟の確執、そして共和派の蜂起行動に参加して若い命を落とす、ユルシュールの遺児シルヴェールの行動である。

ピエール・ルーゴンはその頃すでに 64 歳で、生業の油商を引退していた。そこから 40 年前に時をさかのぼるが、殺害された愛人マッカールの家に引きこもる母親を尻目に、ピエールはルーゴン=フーク家の長男として家計の実権を握り、母親に家の地所を売らせ、そこから 5 万フランを自らの懐に入れる。そして 1810 年にフェリシテ・ピュエックと結婚し、彼女の家業をその資金でもって立て直した。こうして引退後も何とか年金暮らしをできるようになっていたのだが、当時のクー・デタ騒動に乗じて幸運をつかみ取ろうと、手ぐすね引いて時期を待っていたのである。

それに対してアントワーヌは庶子でも母親からユルシュールとともに認知されていたから、母親の財産を譲り受ける権利があったのだが、兵役で家を不在にしていたため、詐欺まがいの手でピエールに相続財産をまんまとせしめられてしまった。こうした恨みからアントワーヌは長兄のピエールに対してことあるごとに反目してきた。1851 年 12 月、ルイ・ナポレオンのクー・デタの帰趨がどちらに転ぶかわからない状況の中でも、ボナパルティストとして暗躍しているピエールに対して、彼は共和派の跳ね上がりとして真っ向から敵対した。小説の山場に当たるプラッサン市役所占拠の場面では、兄弟が敵味方に分かれ、アントワーヌはピエールに取り押さえられ、ボナパルティストを中心とするプラッサンの保守反動派の捕虜にされてしまう。

アントワーヌが共和派に与するようになったのは、ピエールに対する反発に加えて、元来働くのが嫌いで、そのため常に貧乏暮らしを強いられ、金持ちを憎悪するようになったからである。1815 年に兵役を終えてプラッサンに帰ってきてからは、柳籠の職人として気分が向けば仕事をした。1826 年にジョゼフィーヌ・ガヴォーダンと結婚すると、彼女の働きで飲み食いし、その後生まれた三人の子供ジャン（1831）、リザ（1827）、ジェルヴェーズ（1828）が働けるようになれば、ジャンやジェルヴェーズからもしょっちゅう給金を巻き上げる始末であった。

結局アントワーヌは、『繁栄』中では、兄ピエールを筆頭とするボナパルティストに掌握されたプラッサンから国外に逃亡せざるをえず、その騒動のほとぼりが冷めてからプラッサンの近郊チュレットに舞い戻る。「ルーゴン=マッカール叢書」の最終巻『パスカル博士』には、酒浸りの一生を送ってきたアントワーヌにふさわしい最期の場面が用意され

ている。たばこをすったまま居眠りしていた彼は、そのたばこの火が服に落ちたことにも気づかず眠り続けた。アルコール漬けで燃えやすくなっていた彼の体に服の火が燃え移り、最後に人が気づいたときには彼の姿はなく灰だけが残されていたのである。この物議を醸した自然発火（combustion　spontanée）という異様な出来事が起こったのは 1873 年のことで、ナポレオンのクー・デタ騒ぎから 20 年たった、アントワーヌが 84 歳になってからのことであった。

２．アントワーヌ・マッカールの遺伝性酩酊癖

ここからは特にアルコール中毒に焦点を絞って、アントワーヌを見ていこう。アルコール中毒に関係して注目しておきたいアントワーヌに関する記述は、次の通りである。

> 16 歳のとき、アントワーヌはすでにマッカールとアデライドの欠陥が融解した（fondus）ように現れている大きな悪童だった。しかしながらその放浪性、酩酊癖（ivrognerie）、すぐかっとなる性格からすると、マッカールの血筋の方が勝っていた。それにそうした悪徳も父親においてはある種の多血質（sanguine）として明白な現れ方をしていたが、息子においてはアデライドから神経質な（nerveuse）影響を受けて偽善、欺瞞に満ちた陰険さを帯びていた。毅然とした意志の完全な欠如、またどんな汚らわしい褥（しとね）でも気楽に寝そべり、ぬくぬくと寝られさえすれば、受け入れてしまうような好色女のようなエゴイズムからすると、アントワーヌは母親の血筋であった。（『繁栄』, p. 47［p. 56］）

ゾラがルーゴン=マッカール叢書を書くに際して、当時の遺伝学、とりわけプロスペール・リュカの遺伝学に依拠したことは周知の事実である。そのことはゾラがリュカの著作『遺伝概論』のレジュメを残していることで知ることができるのだが、[2] そのレジュメはまたリュカの著作のどの点にゾラが興味を引かれたのかということについてもわれわれに教えてくれている。そのリュカの著作のなかで、上記の『繁栄』からの引用に見られる遺伝に関する「融解した（fondus）」は、その名詞形「融解（fusion）」とともに、遺伝類型で言うと、片親優勢型の混合遺伝（mélange）に分類される専門用語である。[3] ゾラ自身のことばで定義すると、「混合遺伝は常に単純な凝集であり変形を伴わない。このような凝集がもっとも完全な形を呈するものが融解である。そこでは、両親から受け継いだものは平均的に融解し、珍しい中間的な現れ方をする。」[4] 先のアントワーヌに関する引用部分では父親のマッカール、母親のアデライドの遺伝的性格が、このようなリュカの定義に沿うように記述されていると見ることができる。

ところでルーゴン=マッカール家構成員の遺伝については、小説とは別にゾラ自身が簡便な形で一覧できるようにしたものが「ルーゴン=マッカール家の家系樹」［以下「家系樹」と適宜略記］として残されていた。それは 1878 年に叢書第 8 巻『愛の一ページ』の巻頭で掲載され、その一部を修正したうえで第 20 巻『パスカル博士』とともに 1893 年に公刊された。しかし、公にされることはなかったが、ルーゴンマッカール叢書に取りかかる前の 1869 年に作成された家系樹、そして出版社ラクロワに手渡されたその異本が存在している。[5]

先の『繁栄』にあったアントワーヌの遺伝に関わる記述について、すこし生成論的な関心から検討を加えてみると、いずれの家系樹でも、遺伝類型は「融解性混合」型で、書き方に多少のずれはあるものの、「精神的には父親似が優勢で、身体的にも父親と類似」（1878年、1893年）と父親の影響だけが強調されているのだが、その家系樹の記述に比べると、作中の記述の方は母親から伝えられた性格を丁寧に書き添えてあり、母親からの遺伝的影響も無視できないリュカの遺伝類型の定義「融解性混合」の概念的定義に沿ったものになっている。

酩酊癖については、1878 年の家系樹が中ではもっとも明確に「父親譲りの酩酊癖（ivrognerie）の遺伝」と表現しており、1893 年にはそれまでの飲んだくれ（ivrogne）や酩酊癖に代わってアルコール中毒患者（alcoolique）ということばが使用されている。この書き換えの原因を『19 世紀ラルース大辞典』（1866-1879 年発行、以下『19 世紀ラルース』と略記）の《ivrognerie》およびその補遺第２版（1890 年）の《alcoolisme》のそれぞれの記載内容の比較から推論してみると、アルコール中毒が大きな社会問題化することによって、どうやら中世から使い古されて、「飲んだくれ」や「酩酊癖」という一般的な意味も含んだ《ivrognerie - ivorogne》よりも、世間の動向に合わせて、専門的で明確な病理学的定義を与えられた、しかも人々の注意を引きやすい《alcoolisme - alcoolique》（『プチ・ロベール仏語辞典』によると前者は 1858 年、後者は 1789 年初出）を利用する方が、遺伝症例の記述というゾラの意図にかなっていたからだと推測される。

ところでここではそれより注目しておきたい他の点がある。それは、ゾラの記述においても、彼が依拠したリュカにしても（ゾラのレジュメに「酩酊癖の遺伝」とはっきり記されている[6]）、そして 19 世紀後半の学術ならびに一般常識を反映する『19 世紀ラルース』でも、アルコール中毒が一様に遺伝疾患として認められていたことである。『19 世紀ラルース』に言及したついでに述べておくと、アントワーヌ死亡の直接原因となった自然発火という現象についても、「酩酊癖」の項で触れられている。

３．ジェルヴェーズのアルコール中毒

慢性アルコール中毒症に陥ったアントワーヌ・マッカールが、『19 世紀ラルース』で振戦譫妄（*delirium tremens*）と並んで中毒症患者を死に至らしめる、まれに起こるという自然発火によって最期を遂げたとしても、ゾラが遺伝疾患と見なしたアルコール中毒は、もちろんそこで終わるのではなくその後もマッカール家の血を通じて生き続ける。

アントワーヌには三人の子供がいた。中でアルコール中毒に関係する人物はジェルヴェーズである。『繁栄』の執筆前に構想された家系樹では、彼女については親の「酩酊中に身ごもられた」ために足が不自由（boiteuse）、それから後に「酩酊癖」のあるランチエと結婚すると記されているだけで、彼女自身が直接遺伝性アルコール中毒症を患っているという記述はない。興味を引くのは夫婦の交接時の状況がそのとき胚胎した子供に影響を与えるという憶説にゾラが執心して、ジェルヴェーズの片足を引きずる先天的な障害をそのときの「再現」と見なし、最初から家系樹中に一貫してそのことを記していることである。これについてもまたゾラはリュカの『遺伝概論』に依拠しているのではあるが[7]・・・。

『繁栄』の本文中では、ジェルヴェーズのその先天的障害とともに、後に彼女自身が酩酊癖に陥っていく可能性を窺わせる一節が見られる。

［・・・］次女のジェルヴェーズは生まれつき足が曲がっていた。酔っ払っているとき、おそらくは夫婦が殴り合いをする例の恥ずべき夜に授かった子供だったので、彼女は右の腿が湾曲していて細く、奇妙な遺伝的再現だった。一時間にもおよぶ闘いと猛り狂った泥酔状態の中で母親が耐えなければならなかった暴行の痕であった。ジェルヴェーズはいつまでも身体が弱かったので、娘が本当に蒼白くひ弱そうなのを気にしていたフィーヌ［ジョゼフィーヌ、ジェルヴェーズの母親］は彼女にアニス酒の飲酒療法を施し、申し訳のようにあんたは力をつけなければだめだからだと言った。
（『繁栄』, p. 124［pp. 150-151］）

幼いジェルヴェーズの体力強壮のために与えられたアニス酒というのは、とにかくアルコール度数の高いリキュールなので現代人からするととんでもない療法なのだが、その当時はまだ地域により昔の「アルコールは百薬の長」的な信仰が残っていたらしく、ジョゼフィーヌがひ弱な娘のために施した民間療法もそれほど突飛だとは言えない。だがジョゼフィーヌ自身が無類のアニス酒好きで、「彼女は憂さ晴らしにアニス酒を一リットル買い、［・・・］娘と一緒に毎晩ちびちび飲んでいた。」時には「このようにちびちびやっているうちに酔っ払ってしまい、［・・・］この母親と娘はばかのようになって、薄ら笑いを浮かべ顔を見合わせているのだが、しまいにはろれつが回らなくなった。」（p.128［p.156］）ここまでくると母親が娘のジェルヴェーズにアニス酒を飲ませるのも、自分の飲酒癖のための口実にすぎないようで、そのためゾラも娘の体のひ弱さを「申し訳のように」引き合いに出してそのことを暗示する。アルコール中毒の観点からするなら、ジョゼフィーヌは罪作りな母親で、娘のジェルヴェーズに小さい頃からアニス酒を飲む習慣を付けてしまい、後の彼女の不幸な最期に向けて下地作りをしたと考えることができる。

先に触れたように、1869 年の「家系樹」では、ジェルヴェーズのアルコール中毒に関する遺伝の記載はなかったのだが、彼女が主人公として活躍し、不幸な最期を遂げる叢書第 7 巻『居酒屋』（1877）のあとに書かれた、1878 年の「家系樹」では「1869 年に貧困とアルコール中毒の発作で死去する」と記される。1893 年のそれでは「アルコール中毒の発作」が「酩酊癖」に改められる。この点では彼女の父親アントワーヌの場合と逆転している。先のアントワーヌのアルコール中毒に関する我々の推論によれば、「アルコール中毒」という語が 1890 年頃に専門語として病理学的定義を明確にされて使用されるようになり、ゾラもまたその例に漏れないということであった。すると「叢書」の最終段階でまとめられた「家系樹」において、父親のアントワーヌが病理学的現象としての「アルコール中毒」として記述され、彼の直接的死因がアルコール漬けの挙げ句の果ての自然発火だったとされたのときわめて対照的に、ジェルヴェーズの場合は「アルコール中毒」よりも一段カテゴリー的に軽微な「酩酊癖」に落ち着いたということは、「酩酊癖」が彼女の最期に決定的死因としてはたらいたというよりも、死に臨んだ際の彼女の断ちがたい「癖」に過ぎなかったいうことであろうか。

リュカによる遺伝類型について見ると、ジェルヴェーズのところには最終的に 1893 年に「父親の選択（élection）遺伝」と書き込まれている。この選択型という遺伝類型は、先にアントワーヌところで触れた「混合型」とカテゴリーを異にし、もっぱら片方の親か

ら遺伝を受け継ぐと定義される。[8] したがってゾラを含めた当時の人々が信じたアルコール中毒に関する憶説に沿ってアルコール中毒を遺伝疾患のひとつと見なすなら、ジェルヴェーズも当然アルコール中毒を遺伝的に受け継いでもおかしくはない。しかし「叢書」全体の生成論的な観点からするとこうした結論はまだ尚早だろう。『繁栄』ではジェルヴェーズに関する叙述ははなはだ少なく、そのことからするとゾラが彼女のアルコール中毒に関して遺伝的疾患を云々するほど意識していたとは考えにくい。このことがゾラの意識に明確に上ってくるのは、彼女の波乱の生涯を綴った『居酒屋』以降のことであろう。

４．アルコール依存症

われわれはここまでアルコール中毒の定義自体を問うことなしに『繁栄』に描かれたアルコール中毒症をめぐって議論を進めてきたが、特にアルコール中毒症を遺伝疾患と見なしていることなどに現れているように、現代と「叢書」が書かれた 19 世紀後半ではその定義にかなりずれがあることは明白である。有効な議論をするためには、議論する主体の我々とその対象であるゾラの「叢書」の立場の相違をわきまえることが必要なので、アルコール中毒の定義を簡単に試みておこう。

ゾラが叢書を執筆した当時の慢性アルコール中毒に関する定義を、『19 世紀ラルース』の病的「酩酊癖」（ivrognerie）とその補遺「アルコール中毒」（alcoolisme）の項によってまとめてみると、過度のアルコール摂取が常態化したために、身体や精神の諸機能に障害が発生した状態を言う。身体に関する障害の代表的なものには脂肪肝など肝臓の変性（dégénérescence）があり、精神の障害では一時的に幻覚や妄想を引き起こす譫妄（délire）がある。慢性アルコール中毒を代表する極限的な症状は何と言っても「振戦譫妄」であり、それは四肢の震え（振戦）とネズミなどの小動物幻視、幻聴などの身体、精神の異常症状を中毒患者に引き起こす。

加藤伸勝らによると、[9] 1974 年の世界保健機関（ＷＨＯ）の薬物依存委員会で「中毒」という症状は薬物が身体に急性の障害を生ずるものに限定されたので、中毒の名は急性アルコール中毒だけに残り、これまでここで述べてきたような慢性アルコール中毒は「アルコール依存症」とされた。そうしてアルコール依存に関わる医師の診断基準としては、飲酒を止められず、酒によって暴力をふるったり、仕事に支障を来すようになるような状態を「アルコール乱用」であり、それに離脱（禁断）症状が生じる場合が「アルコール依存症」として再定義されることになった。アルコール依存症の禁断症状にこれまでの振戦譫妄（アルコール離脱譫妄）やアルコール幻覚症が含まれるのは、かつての慢性アルコール中毒の場合と同じである。またアルコール依存症には先に指摘した肝臓を中心とする臓器障害がほとんどの場合随伴してくることは言うまでもないし、なお精神障害としてはアルコール健忘障害（コルサコフ病）、さらにそれが進んでアルコール性痴呆が指摘されている。ところでアルコール中毒の遺伝については現代人の常識からしても言下に否定されることであり、アルコール依存症の中で遺伝に関する言及がないのはきわめて当然なことである。

こうした現代のアルコール依存症の診断基準に則って考えると、『繁栄』に登場してきたアントワーヌ・マッカールはまだ「アルコール乱用」の段階であり、後の『パスカル博士』の頃になると「アルコール依存症」という病名を冠せられるであろう。またジェルヴ

ェーズや彼女の母親のジョゼフィーヌのアニス酒好きは病的段階になる前の単なるアルコール嗜飲癖と言ってよい。

この先の議論では従来通りアルコール中毒という語を用いるが、しかしそれでもそこには現代医学で定義されたアルコール依存症やアルコール乱用を対照的に念頭に置いておこう。

Ⅱ章 『居酒屋』の舞台背景

1.『居酒屋』の狙い

ゾラは叢書第 1 巻の『繁栄』で第二世代を中心にルーゴン=マッカール家の人々を登場させ、第二帝政下における一族の 5 世代にわたる今後の活躍の基礎を設定する。ゾラがアルコール中毒を遺伝疾患のひとつと考えていたとすれば、アルコール中毒の影響が出てくるのはマッカールの血を受け継ぐ人々の中ということになる。『繁栄』の中にマッカール家の長女リザが登場するが、彼女は母親型選択遺伝ということで、遺伝に関して言えば父親型選択遺伝と見なされるジェルヴェーズと対極的な位置にある。それを裏書きするように叢書第 3 巻『パリの胃袋』(1873) では、主人公のひとりとして登場するリザは母親の堅実な性格を受け継いでそれを極端に展開し、自らの家庭を守護するためにはエゴイズムを徹底して押し通すことも厭わない。もちろん彼女にはアルコール中毒のかけらすらも見られない。結局、第 7 巻の『居酒屋』まで、リザをのぞけば「叢書」の中にマッカール家に属する人物が前面に出て奮闘する物語はないから、アルコール中毒のテーマを追いかけるとすれば、アルコール中毒症の素地を抱えたジェルヴェーズを主人公とする『居酒屋』が我々の次なる検討対象となる。

ところで「叢書」全体から見たとき、第 7 巻『居酒屋』はどのような位置づけをされていたのだろうか？　そもそもゾラが第二帝政下の社会を対象とする「叢書」を執筆しようと企てたときに、まず労働者の世界はその不可欠の構成要素として念頭にあった。

彼は 1869 年に、「叢書」出版を引き受ける予定であったラクロワに対して、『居酒屋』を想起させる作品について次のような計画を語っている。『居酒屋』の生成を語るときには必ず引用される作家自身の証言である。

> 一つは労働者の世界を舞台とする小説で、主人公はルイ・デュヴァル[後にクーポー]、彼はベルガス［後にマッカール］の娘ロール［後にジェルヴェーズ］の夫。現代の労働者一家の活写。市門（barrières）と酒場（cabarets）という環境からよからぬ影響を蒙り失墜していくパリの労働者に関する内面の捉えがたい葛藤のドラマ。［・・・］真実を語り、事実を率直に開示することによって、下層階級のために大気と光と教育を要求していくことは勇気ある仕事だろう。[10]

これとともによく利用されるもうひとつの証言も添えておこう。それは『居酒屋』の書かれる直前にあたる 1875 年のノートである。

民衆の環境を示し、その環境によって民衆の風俗を説明すること。というのも、パリにあっては、酒に酔い、家族バラバラで、殴り合いの喧嘩をするなど、ありとあらゆる辱めや惨めさを甘受しなければならないのは、過酷な労働、雑居状態、無頓着等々、労働者の生活条件そのものから来ているからだ。一言で言えば、民衆の汚さ、だらけた日常、粗野な言葉遣いでもって、彼らの生活を正確に描き出すことである。[11]

こうして労働者の世界を描こうとすればアルコールは彼らと切り離しがたく結びついていた、それで『居酒屋』ではアルコール中毒を取り上げざるをえなかったというところが、ゾラをして『居酒屋』でアルコール中毒の問題と真正面から取り組ませるにいたった事情である。『居酒屋』におけるゾラは労働者の生活環境とのかかわりの中でアルコール中毒症を取り上げているので、ここまで遺伝との関連で話題にしてきた我々とは力点の置き所が異なる。たしかにジェルヴェーズの遺伝疾患としてのアルコール中毒症という問題も見られはする。だがアルコール中毒のテーマについては、ジェルヴェーズの夫クーポーが彼を取り巻く環境の圧力で最終的に振戦譫妄というアルコール中毒の典型的な症状によって最期を遂げるというところにこの作品の眼目がある。

２．市門と酒場

ところで上掲の最初の引用に出てくる、ゾラが労働者の環境を代表するものとして挙げた「市門」と「酒場」には少し注釈が必要である。『居酒屋』の物語が始まる 1850 年頃のパリは、「徴税請負人の壁」と呼ばれる 1784-1791 年に築かれた城壁によって周囲をぐるりと取り囲まれていた。南フランスのプラッサンから出てきたジェルヴェーズが、仕事を探しに行ったランチエの帰りを待ちわびるのは「ラ・シャペル大通りの、ポワソニエール市門の左手にある」（p.376 [p. 8]）[12] ＜親切館＞の 2 階の一室で、この住居はその城壁の外側に立っていた。当時のパリはまだ 12 区からなる時代で、ジェルヴェーズ一家が住むラ・シャペル大通りのある界隈はパリ郊外のラ・シャペル村に属す。パリが市域を拡大することは歴史的には古い城壁を破壊して、パリに編入された地域を新たに築いた城壁で再度取り囲むということを意味していたので、パリの城壁は一世紀のガロ=ロマンの時代から 6 回にわたって構築・解体されてきている。ちなみに、現在フォーブール・サン・トノレ街（Rue du Faubourg Saint-Honoré）などのように通りの名称の一部に残っている「フォーブール」は、もともと城壁外を意味したことばで、新たな城壁が築かれたことによっていつの間にか城壁内に組み込まれ、意味の上では矛盾を呈するようになった歴史的残滓でもある。また現在のラ・シャペル大通りを含む通称「郭外大通り」（boulevards extérieurs）も当時は文字通り城壁外にあった。そこでかつてのパリ外の住民はパリに入っていくために「市門」を通らなければならず、外部から商品をパリ市内に持ち込もうとするとそこで入市税を徴収されたのである。

南フランスからパリに出てきたジェルヴェーズがパリの北にある郭外のラ・シャペル村に身を落ち着けたことにもそれなりの理由がある。そこはジェルヴェーズ一家のような地方出身者が多かったからだ。この頃パリは産業革命の浸透で急速に発展し、地方からの労働力を多量に受け入れた。1851 年から 1856 年までにパリとその近郊で 26 万人の新たな流入人口があった。1846 年に早くも人口 105 万人を数えたパリだが、郊外を含めて、そ

の 4 分の 1 に当たる住民がそこにまた加わるという急激な人口増に見舞われている。さらにパリ周辺には 1852 年から始まるオスマンのパリ大改造の影響で、家賃高騰のあおりをくらい市中からも貧しい市民が移住を余儀なくされた。こうした新たな住民を迎え入れたラ・シャペル村では、先と同じ 1851-1856 年の期間中には 78 %の人口増加を示し、住民中で地方出身者の占める割合は 65-70 %に上ったという。[13] 仕事を求めてパリにやってきた地方出身者とパリ市内から追い出された人々からなるこうした郊外の住民たちは、当然のことながら大部分が貧しく、それゆえ狭苦しくて不衛生な住環境に押し込められ、劣悪な条件の中で生活することを強いられた。つまりゾラが一方の「市門」ということばで示そうとしているのは労働者たちの貧困と好ましからざる雑居状態なのである。

他方こうした労働者街にある「酒場」の理由はどこ見いだせるのかというと、入市税の最大の対象はワインやリキュールなどのアルコール類だったせいで、酒場の経営者たちが市内で税を徴収される前の安価なアルコールを提供し、多くの顧客を呼び込むこもうとすれば、最良の立地は郭外大通りということになる。[14] パリの酒場の数は人口の膨張とともに数を増し、ゾラが「叢書」を書き始めた第二帝政末期の 1869 年の時点で――すでに 1860 年にパリは 20 区となり、ラ・シャペル村もパリの一部となっている―― 2 万 2 千軒の酒場（小売店を含む）を数えるようになり、当然それはまた今述べた立地条件から郭外地区に集中した。さらに 19 世紀末になるとそれは 40 万軒に増えて、3 軒に 1 軒の家が酒場という極端な記述すら見いだせるくらいの数の多さであった。[15]

ただし酒場（cabaret）と言っても、酒を小売りし、食事時には簡単な料理も出す一般的な酒場から、もっぱら酒だけを提供し、当時は軽蔑的な意味合いも込めて居酒屋（taverne）と呼ばれたところ、またこれらに加えてレストランの役割も果たしたカフェまで入っている。ところでゾラの小説のタイトルとなっている「居酒屋」の原語《assommoir》は「鉛球がついた屠畜用の棍棒」を指しており、19 世紀の代表的な辞書である『19 世紀ラルース』や『リトレ大辞典』のどこにも居酒屋の意味はない。それはどうやら安酒がもたらす破壊的な作用から由来した酒場の名称で、この小説では普通名詞というより、コロンブ親父の酒場の店名、つまり固有名詞なのである。ちなみにジェルヴェーズは、《assommoir》について酒場の「悪い仲間づきあい」と関連づけて解釈している（p.417［p.71］）。

また J・ガイヤールの説明によると、当時の酒場は人々の生活に密着しており、庶民は家庭でワインを買い置きするよりも酒場に降りて飲みに行くし、労働時間が長いため、朝・昼の食事時に酒場がスープやワインを出すことから、時間が十分とれない人々は酒場で食事を済ますことが多かったらしい。[16] たとえばラ・シャペル村に 19 世紀半ばにできた 1407 人を擁する北部鉄道会社の機械・車両工場では、拘束時間は朝 6 時より夜 7 時までの 13 時間で、その内訳は 11 時間の労働と 2 時間の休息。時間帯の配分は 6-10 時（労働 3 時間、休息 1 時間）、10-15 時（労働 4 時間、休息 1 時間）、15-19 時（労働 4 時間）となっていた。[17] 当時の労働者がこのような過酷な労働条件に耐えていたとすれば、彼らが朝や昼に時間をかけて食事をすることなどとうてい無理な話であろうし、『居酒屋』に描かれているように朝から酒場に赴いてアルコールを食事の代わりにしたり、なかには日に 2 回の休憩の度にアルコールを口にする者が出てくることも窺い知ることができる。

３.『居酒屋』と城壁

『居酒屋』のなかでゾラは政治や社会に関する出来事を通して物語の時期がいつなのかをほのめかしているだけで、具体的な年号は記していない。しかし作品を 21 章に分かち――最終的にはそれが 13 章に変わるが、そこに各章の年代と内容を簡潔に記したプランが『居酒屋』のための資料に残されている。それとテクスト中に記された季節や月の記述とを照合して、物語は 1850 年 5 月にジェルヴェーズ一家がパリに出てきたところから始まり、彼女が悲惨な死を遂げる 1869 年の 1 月でもって終わる、とＨ・ミットランは推測している。[18]

この期間にパリ、特にこの『居酒屋』の舞台となる郭外大通りでは、光景を一変させるような出来事が起こっている。それが 1860 年の 12 区から 20 区へのパリ拡大に伴う「徴税請負人の壁」の撤去である。そこで 1863 年頃、ポワソニエール市門はなくなり、その後旧ポワソニエ通りの一部は拡幅されオルナノ大通り（現在はバルベス大通り）に吸収される（『居酒屋』、p. 737[p. 516] および『パリの歴史街路辞典』の《Chapelle》と《Poissonniers》の項参照）。[19]　『居酒屋』に即して言えば、物語も終盤に近い 11 章で市門付近の光景は一変することになる。

ところで主人公のジェルヴェーズの悲惨な生涯を予示するものとして、『居酒屋』第 1 章で彼女の目に映った市門付近の光景がよく引用される。

> 右手に目をやると、ロシュシュアール大通りの側である。そこには屠畜場がある。屠畜場の前には、血まみれの前掛けを付けた肉屋たちが立っている。ときおりそこから吹き寄せてくる冷たい風が悪臭を、屠られた獣の生臭いにおいを運んできている。左手に目をやると、長い並木道がある。この並木道は、ほとんど真正面、今建築中のラリボワジエール病院の白い建物のところで終わりとなっている。彼女は入市税関の壁に沿って端から端まで、ゆっくりと目で追ってゆく。夜には、入市税関の向こう側から、ときおり人の殺される悲鳴が聞こえてくることがある。短刀で腹を刺されたランチエの死体が見つかるのではないかしらとびくびくしながら、人気のない通りの角や、湿気と塵埃とで暗くて陰鬱な物陰を、目で彼女は探る。（p. 376[p. 9]）

ジェルヴェーズがパリで最初に居を構えたラ・シャペル大通りの＜親切館＞から、明け方まで帰らないランチエを待ちあぐねて、目の前を眺めやるシーンである。屠畜場と病院とそれらを結ぶ物騒な雰囲気を漂わせる城壁、ジェルヴェーズの目前の光景はすべて禍々しく剣呑な様相に覆われている。

ジェルヴェーズの目の前にあった城壁というのは、高さ 3.24-3.88 メートル、幅 0.97 メートルある。その内側つまり旧パリ市側に幅 11.66 メートルの巡察路、外側に郭外大通り 23.23 メートルが取り付けられていた。この城壁を挟む二つの道路は城壁取り壊し後に一緒にされて、現在もほぼそのままの 42 メートルの大通りへと変わった。[20] それからジェルヴェーズの右手遠くに見える屠畜場は現在のアンヴェール公園とジャック・デクール高校の敷地にまたがって立っており、1867 年新たにラ・ヴィレットに総合屠畜場ができるとまもなくとり壊されることになる（『居酒屋』、p.768[p. 560]および『街路辞典』、《abattoirs》の項、『モンマルトル』、pp. 92-93[p. 129]）。ジェルヴェーズの左手真正面で建築中だった

ラリボワジエール病院が出来上がったときには、「灰色の高い塀を張りめぐらした上に、規則正しく窓をくりぬいた陰気な翼館が扇形にひろがっていた。塀にある門は町じゅうをこわがらせていた。死者の門なのだ。裂け目ひとつない頑丈な樫の扉は、墓石のような厳粛と静寂をただよわせていた。」（p.768[p. 560]）

これらのことから考えてジェルヴェーズの目に映じた光景とは、彼女の視線を遮断して延びている、陰で殺人でも行われているのではないかと想像させるような高さが 3-4 メートルもある陰気な城壁、その城壁越しに見える建築中の高い病院と屠畜場、わずかにパリ市内を見透かせる城壁をうがつポワソニエール市門ということになる。

だがこのようにジェルヴェーズの目に映った情景を必要以上に強調してはならない。なにせジェルヴェーズは南フランスから出てきたばかりで、しかも彼女と一緒だったランチエからは見も知らぬパリの場末のアパルトマンに子供二人とともに置き去りにされ、心中不安で一杯で、頼みの綱である情夫の帰りを今か今かと待ちあぐねて、遂に明け方にまでなってしまったときの情景描写なのだから。しかも屠畜場とともに挙げられたロシュシュアール大通りといえば、現在では世界中に知られたパリ、モンマルトル歓楽街の一角にあってもっとも殷賑を極めた町のひとつになっているから、ジェルヴェーズの抱いた最初の印象は大いに割り引いて考えなければならない。

４.『居酒屋』の地理学

ところで郭外大通りは、それを眺めるジェルヴェーズに一方でこのような殺風景な眺望をもたらすにしても、その反対側の彼女が当分の間逗留するアパルトマンの並び、つまり中に郭外大通りを挟んで城壁と反対側には、歓楽の町モンマルトルのイメージを彷彿させる酒場や歓楽施設が当時から立ち並び、『居酒屋』のテクストにもそれが相当数記されているのである。大きなダンスホールの大部分はいまでも史実として確認されるほどゾラのリアリズムは徹底されているので、『居酒屋』研究外への思わぬ波及効果も考えられることから、以下煩瑣になるが作中の登場人物たちが訪れた場所を詳しく見ておこう［一部は 87 ページの略図も参照されたい］。

「コロンブ親父の＜居酒屋＞はポワソニエ通りとロシュシュアール大通りの角にある。」（p. 403[p. 51]）ところで、そのポワソニエ通りの南端に当たる郭外大通りにいたる部分は 1863 年から現在のバルベス大通り（当時はオルナノ大通り）に拡幅・再編されたので（p. 737[p. 556]）、現在の名称で言うとバルベス大通りとロシュシュアール通りの交差したところにその酒場は位置していることになる。ポワソニエ通り（現バルベス大通り）の延長線上で南に延びているのがそれと相称をなすフォーブール・ポワソニエール通りである。だから、先にジェルヴェーズの＜親切館＞のところで言及した「ポワソニエール市門」は、郭外大通りを挟んでコロンブ親父の＜居酒屋＞の向かいに位置する。ということは、この＜居酒屋＞は位置からして当時の典型的な「市門の酒場」であり、そうした立地に恵まれて物語の中でも昼日中の 12 時前から満員で、仕事の合間に立ち寄ったジェルヴェーズとクーポーのカップルが外へ出ていくにも難儀するくらい盛況だったのもうなずける話である（p. 412[p. 65]）。

繰り返すと、コロンブ親父の＜居酒屋＞は、東西方向では、東へ走るラ・シャペル大通り西へと向かうロシュシュアール大通り、南北方向では、北へ上るポワソニエ通り、市門

を介して南へ下るフォーブール・ポワソニエール通りの、四本の道路がなす交差点の北西角に立っている。つまり、この小説『居酒屋』の登場人物の行動範囲から考えて文字通り中心の位置を占めている。そこで、このコロンブの＜居酒屋＞を中心にして、登場人物たちの活動の場、とりわけ歓楽スポットを主にした『居酒屋』の舞台を地理的に限定しておこう。なお以下は『居酒屋』のテクストとプレイヤッド版へのH・ミットランの注記に依拠し、それらをＪ・イレレの『街路辞典』およびＬ・シュヴァリエの『モンマルトル』によって補足してまとめたものである。

まず東の方では、ダンスホール＜グラン=バルコン＞がラ・シャペル大通りの入り口のところ、つまりポワソニエ通りを挟んでコロンブ親父の＜居酒屋＞の向かいに立っている（p. 375［p. 7］）。当時のラ・シャペル大通りは現在の地下鉄の駅名で言うと、バルベス=ロシュシュアール駅からラ・シャペル駅までの大通りの呼び名である。ラ・シャペル駅のところからは現在北にマルクス・ドルモワ通りが延びているが、その呼称も改名の結果であり、『居酒屋』の時代はラ・シャペル通りであった。そしてこの旧ラ・シャペル通りが『居酒屋』の世界の東限を構成している。ラ・シャペル大通り上をその東限まで行くあいだに、ジェルヴェーズがランチエとの結婚の披露宴を催す酒屋＜銀風車＞がある（p. 432［p. 94］）。さらに東限のところの市門をラ・シャペル通りに沿って北に向いたところには、ジェルヴェーズよりも行動範囲の広いクーポーが行っていた封印付きの葡萄酒を出す＜カピュサン＞（p. 503［p. 191］）、その向かいに＜カドラン・ブルー＞（p. 619[p. 349]）がある。それから「サン=ドニ市門のところのところにある飲み屋」ということだから、それらの付近には＜咳する坊や＞（p. 412[p. 65]）もクーポーがアルコールに溺れてからよく出かける店のようである。

また同じくクーポーが足を運んだ＜ヴァンダンジュ・ド・ブルゴーニュ＞（p. 619[p. 349]）はラ・シャペル大通りから一本北の通り、ラ・シャペル通りから西に向かって延び、先でラ・グット・ドール通りにつながるジェサン通りにある。11 章になってクーポーとジェルヴェーズの娘ナナがモンマルトルのダンスホールを総なめするようになるが、そのなかで一番東にあるのがラ・シャペル通りの＜グラン・サロン・ド・ラ・フォリー＞である（p. 738[p. 517]）。

今度はコロンブの＜居酒屋＞から西に向かうとモンマルトルの歓楽の中心街ロシュシュアール大通りとなる。作中に掲げられているものだけに絞ると、先程の屠畜場の向かいで、スタンケルク通り（旧ヴィルジニー通り）の角にはダンスホール、＜エリゼ・モンマルトル＞が 1807 年から立っていたし、それから先のマルチール通りの角に至る前の 120 番地にあった＜ブール・ノワール＞は 1822 年の創設で、その後『ナナ』やゴンクール兄弟の『ジェルミニー・ラセルトゥー』にも登場してすっかり有名になった（p. 742[p. 524]）。これらふたつのダンスホールはともに 19 世紀前半からの長い歴史を持ち、モンマルトルの歓楽を代表する娯楽施設としてモンマルトル界隈の住民だけでなく郭内のパリジャンからもその名をよく知られていたことが、Ｌ・シュヴァリエの『モンマルトル』からは十分に窺うことができる。まだこのほかに『居酒屋』のテクスト中にはどうやらマルチール通りの角にあったらしいカフェ・コンセールに対する言及がある（pp. 628-630[pp. 362-364]）。ちなみにロシュシュアール大通りの 84 番地で、奇想に富んだ芝居で芸術家たちを引きつけた＜シャ・ノワール＞は、＜エリゼ・モンマルトル＞のすぐ隣に 1881 年末に誕生して

いるのだが、もちろん『居酒屋』の時代の後の話である。

この時期モンマルトルの歓楽の中心はロシュシュアール大通りにあったので、それに続くクリシー大通りはまだ世紀末以降のにぎわいを見せてはいなかったようだ。だがジェルヴェーズの夫クーポーと彼女の情夫だったランチエは連れだってクリシーよりまだ先のバティニョールまで出かけていった。だからこれが西の限界である。クリシー大通りでは＜ヴィル・ド・バール=ル=デュック＞（p.619[p. 349]）がランプルール通り（現ルピック通り）の角にある。Ｌ・シュヴァリエによれば、ロシュシュアールからクリシーを結ぶ大通りのダンスホールでひときわ異彩を放っていたのは、先に挙げたロシュシュアールの＜エリゼ・モンマルトル＞、＜ブール・ノワール＞、そしてクリシーのブランシュ広場にあった＜レーヌ・ブランシュ＞(p. 742[p. 524])である。なおこの＜レーヌ・ブランシュ＞はやがて不興をかこって閉鎖され、その跡地に 1889 年に誕生したのが後にモンマルトルの歓楽を代表するまでになる、世界に名を知られた高名なダンスホール＜ムーラン・ルージュ＞である。

郭外大通りから北へと上る通りで、『居酒屋』の世界の東限にあたるラ・シャペル通りはすでに見たが、次にポワソニエ通り（南端は後にオルナノ大通り、現在のバルベス大通りに併合される）はジェルヴェーズ一家の日常の生活圏に入る通りで、クーポーがよく立ち寄る酒場が目白押しに並ぶ。コロンブの＜居酒屋＞の他にも、フランソワの経営する、賭博もやっていた酒屋（p.516[p. 209])、おいしいプラム酒の飲める＜小さな麝香猫＞（p. 570[p. 280])、オルレアン産のワインがおいてあるバケおばさんの店（p. 570[p. 280])、御者たちのたまり場になっていた＜パピヨン＞（p. 570[p. 280])、オーヴェルニュ産のワインが飲めるルイばあさんの店（p. 625[p. 357]）などがある。またナナがいくらか上品な服装をして踊るダンスホール＜グラン・チュルク＞(p. 742[p. 524])は、現在のバルベス大通り 10 番地にあり、創設は 1806 年と古く、付近の人々の社交場としてにぎわっていた。

ポワソニエ通りから一本西へ移動するとクリニャンクール通りとなり、そこには 1845 年に開業したダンスホール＜シャトー・ルージュ＞(p. 742[p. 524])がある。場所は現在の地下鉄シャトー・ルージュ駅の西側に当たるので、かなり郭外大通りから中に入ったところである。またこの通りにはクーポーとランチエが連れ立って「バター焼きの腎臓に舌鼓を打った」レストラン＜金獅子＞と＜二本のマロニエ＞がある（p. 619[p. 349])。

これよりさらに西へ向かうと、郭外大通りからモンマルトルの丘へと登っていく一帯は歓楽街の後背地で、そこにある通りにもやはり歓楽施設があふれている。カドラン袋小路のダンスホール＜バル・ロベール＞(p. 742[p. 524])、それから当時のパリ市内からマルチール市門を経てモンマルトルの丘の西側へと延びるマルチール通りには、「みんなが満ち足りた気持ちで自由を楽しみ、だれにも邪魔されずに、奥で好きなように抱き合うことのできる」＜レルミタージュ＞(p. 742[p. 524])というダンスホールがあった。ランチエとクーポーに「仔牛の頭」を堪能させたレストラン＜リラ＞はやはりマルチール通りにあるが、Ｌ・シュヴァリはこのマルチール通りに「マルチール通りの大衆食堂」という一節を割いて、歓楽の前味、後味としてあったこの通りにひしめくレストランの特徴を強調している（『モンマルトル』p. 108[p. 154])。

歓楽街の西の果てに当たるブランシュ広場から北に走るルピック通り（南半分は旧称ランプルール通り）の奥まった 77 番地には、＜ムーラン・ド・ラ・ギャレット＞（p. 619[p.

349]）がもうすでにあり、料理やダンスでランチエやクーポーを楽しませた。

まとめると、歓楽を中心に見たとき東はラ・シャペル通り、西はブランシュ広場から発するランプルール通り、南は城壁があるため郭外大通り――ただしナナが大きくなって働き始めると、南限は郭外大通りからずっと南のグラン・ブルヴァールを越えたケール通り（現在の 2 区と 9 区の境界を構成するボンヌ・ヌヴェル大通りより南で、セバストポール大通りから西へ延びる通り）まで達する――、北はモンマルトルの丘を挟んでポワソニエ通りの＜シャトー・ルージュ＞とルピック通りの＜ムーラン・ド・ラ・ギャレット＞を結ぶ線あたりとなる。しかし北の方向についてはジェルヴェーズに思いを寄せるグージェの働く工場がマルカデ通りにあり、そこをジェルヴェーズが何度なく訪れているので生活の北限はまだ延びる。結局、『居酒屋』のテクストには、1841-1845 年に建てられたティエールの壁（Fortification de Thiers）［現在のパリ市の境界にほぼ匹敵する］、つまり「砦」（Fortifications）という言葉が 3 度ほど出てくるので、北限は現在のネイ大通りと見なすことができる。[21]

次に上述してきた歓楽街に囲まれている、ジェルヴェーズ一家の生活圏であるラ・グット・ドール通りとその周辺を見ておこう。

ジェルヴェーズは最初 3 階建てのぼろアパルトマン①＜親切館＞に滞在する、上階には未来の夫クーポーが住んでいた。クーポーと結婚後はポワソニエ通りの東隣に当たるヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通り（現在のデ・ジスレット通り）にある② 2 階建ての小さなアパルトマンに新居を構える。ここで隣家となるのがグージェ母子の一家であった。それからジェルヴェーズはクーポーの転落事故にもめげず一念発起して洗濯屋を開く。彼女が洗濯屋の開業にこぎ着けられたのは、彼女に一途な思いを寄せる誠実な隣人のグージェが、不足分を援助してくれたおかげであった。その洗濯屋はラ・グット・ドール通りにある③ 7 階建ての大きなアパルトマンの 1 階に開店する。7 階にはクーポーの姉アンナがロリユーと結婚して住んでいた。ジェルヴェーズは後に洗濯屋をたたんで住居を変わらざるをえなくなるが、死ぬまでこのアパルトマンを動くことはない。

以下にコロンブの＜居酒屋＞などとともに彼女の住居の周辺を図示する。

［Colette Becker, *Emile Zola. L'Assommoir,* p.55の図による］

①＜親切館＞　②２番目のアパルトマン　③洗濯屋兼住居　④共同洗濯場（第１章）　⑤ポワソニエール市門
⑥＜居酒屋＞　⑦ダンスホール＜グランバルコン＞　⑧シャルルの肉屋　⑨フランソワの酒場
⑩フォーコニエ夫人の洗濯屋　⑪クードルー夫人のパン屋　⑫ル・オングルの食料品店

Ⅲ章　クーポーのアルコール中毒

１．マニャンの『アルコール中毒』

「叢書」7 巻『居酒屋』は 1 巻の『繁栄』で登場したジェルヴェーズを一方の主人公に戴く。しかしそこには、アルコール中毒に関してジェルヴェーズの影をなからしめる人物として、ジェルヴェーズの夫クーポーが他方に登場している。クーポーは、最初こそ仕事熱心なブリキ職人だったのだが、いったん屋根から落ちるという大事故に遭ってから、徐々にアルコールに身を持ち崩していき、結局サン=タンヌ病院における振戦譫妄故の狂死という悲惨な最期を遂げ、それに呼応するようにして零落した妻ジェルヴェーズも程なく生涯を閉じる。そのため『居酒屋』は、パリの場末の一労働者がこれまで縷々述べてきた環境に影響され、最終的にはアルコール中毒に陥って悲劇的な最期にいたるという、アルコール中毒患者に関する一種の症例として読むことができる。

ところでゾラが『繁栄』を執筆している頃には、彼のアルコール中毒に関する知識は当時の一般常識の範囲を超えるものではなかった。しかしアルコール中毒を前面に押し出した作品を書くに当たって、彼はさすがにそれでは不備だと感じたのであろう、サン=タンヌ病院の実在の専門医ヴァランタン・マニャン（1835-1916）の、出版されて間もない『アルコール中毒』（1874）を読む。そしてそれをどのように参考したのかわれわれに少なからず推測させることになるような、マニャンが詳述したアルコール中毒の症状をクーポーに当てはめながら摘記したノートを残す。[22]

マニャンの著作は全 5 章からなる。そのうち『居酒屋』のクライマックスに当たるクーポーの振戦譫妄のシーンについては、第 3 章の「発熱性振戦譫妄」で詳述された諸症状が主に利用された。第 4 章「慢性アルコール中毒」には、知的、身体的機能に関する障害、痴呆、全身麻痺、半身不随や知覚脱失にいたる症状が、多くの症例とともに説き明かされ、これも参考になる。さらに作中の描写に効果的に医学テクストを利用しようとして、ゾラがどのような書き換えを行っているかを分類したＮ・スコールは、第 2 章「人のアルコール中毒性譫妄」中の症例記述から採った例を挙げている。[23] このようにゾラは『居酒屋』を書き進めるに当たって、当時のアルコール中毒に関する先端的な医学的知識、特に症候学的な記述を有益に利用した。ただしその医学的知識も小説の説話法との間で折り合いがつく限りにおいてであることは言うまでもなく、『居酒屋』がマニャンの説くところにしたがって演繹的に作品化したものと見なすことはできない。しかも、マニャンの『アルコール中毒』に関するゾラのノートを公刊した C・ベッケールは、小説の最終章におけるクーポーの断末魔の場面はマニャンの症例 14 からの発想だとするが、見方によっては逆に両テクストの隔たりの方がいっそう際立つようである。[24] むしろ『居酒屋』は当時の労働者の世界をつぶさに観察し、そこから労働者がいかにしてアルコール中毒に陥っていくのかをマニャンの著作を参考にしてゾラ自らが実証的にまとめてみせたのだろうし、医学

者の側からするならそこにアルコール中毒患者の生々しい、社会性に満ちた症例を見いだしうるだろう。結局医学者にとってゾラの『居酒屋』は、医学的な論証をさらに豊かにするために役立つひとつの症例として、さらには帰納的な観点から病因論を中心に医学理論に修正を迫る著作となりうる可能性すら持ちえよう。

我々はこれから『居酒屋』をアルコール中毒のひとつの症例のように読み込んでいくのだが、それはもちろんマニャンの説くアルコール中毒の理論を外挿法的に適用しようというのではない。それよりも『居酒屋』の説話の論理にしたがって、クーポーに見るアルコール中毒の症例を読み解いていくことになろう。

アルコール中毒の観点からすればクーポーが我々の考察の主要な対象となるにしても、彼の妻であるジェルヴェーズについても『繁栄』の時代から遺伝によるアルコール中毒症の傾向が見られた。すると遺伝の症例としてのアルコール中毒にも目配りをしようとするなら、ゾラは当然ジェルヴェーズもクーポーと並んで不可欠の考察対象としなければならないはずだ。そこで『居酒屋』執筆の頃に、ゾラがアルコール中毒と遺伝の関係をどう考えていたか、また彼の依拠したマニャンがどのような立場をとっていたかを先に簡単にまとめておこう。

すでに述べたように、『繁栄』を書く際に非公開の「家系樹」中で示したジェルヴェーズにはアルコール中毒という記述はなく、『居酒屋』後の 1878 年の「家系樹」で初めて「アルコール中毒の発作」、1893 年になると「酩酊癖」ということばが記載された。しかしながら、他方でジェルヴェーズが父親アントワーヌ・マッカールの選択遺伝型として分類されていること、それからゾラ自身がリュカの『遺伝概論』のレジュメ中に「酩酊癖傾向の遺伝」[6]という表現を残していたことを考え合わせると、父親のアルコール中毒が何らかの形で娘のジェルヴェーズに遺伝的な影響を与えることは当初から想定されていたものと推論される。

他方マニャンの著作を紐解いてみると、たとえば、慢性アルコール中毒患者の中でも身体的障害が消失してからも妄想（idées délirantes）を長い間引きずる患者について「[・・・] 神経系を患う患者にあっては、ふつう病毒物質のいっそう強力かつ継続的な作用を解き明かすのは遺伝性の病歴である。しかもこれらの患者たちはたとえ症状が改善されて精神病院から出られたにしても、すぐにも暴飲をしてしまうので、彼らにとっては中毒症の再発はおきまりのことだとも言える」としたり、「今日ではすべての著者が渇酒症（dipsomanie）とアルコール中毒を区別している。前者はたいてい遺伝に起源を見いだす、本能的な偏執症の特殊形式である。それに対してアルコール中毒症はだれにも同じように現れてくる単純な中毒症で、付言すると動物にも人間にも見られる。」と述べたりして、アルコールが神経を介する遺伝と結びついて子孫における抜きがたいアルコール嗜好癖を根付かせると見なしている。[25]

またその頃の知識を代表する『19 世紀ラルース』の「遺伝」の項には、M・デスキュレという医者の所説が紹介されていて、「特に両親が二人とも酩酊癖に冒されていた場合には、その酩酊癖は情念の中でも遺伝によってもっとも頻繁に伝えられることが観察されるものである」と説かれている。

こうしたアルコール中毒と遺伝の関係は、アルコール中毒がフランス社会全体を巻き込むほどの重大問題と化した 20 世紀初めの頃になると、効果的に社会に危険を警告しよう

としたこともあってか、ひどく誇張した主張をされるようになる。「以前飲んだら将来も飲む（酒の味を知ったらやめられぬ）」（Qui a bu boira）ということわざを文字通り地でいくように、たとえば「遺伝アルコール中毒症者」（hérédo-alcoolique）という造語を使うR・ロムは、アルコール中毒症者の子孫は親に輪をかけたアルコール中毒症者になると主張するまでになる。[26]

だがむしろ『居酒屋』のゾラは、マニャンの主張に依拠してアルコール中毒が遺伝する可能性があったと考えたにしても、アルコール中毒と遺伝の関係をアルコール中毒であれば必ず子孫に遺伝するかのような宿命的なものと見なすのでなく、あくまでも可能性の問題として捉えていたと想定しておかねばならない。「家系樹」中のジェルヴェーズのところでクーポーが「アルコール中毒の家系」と書かれていたり、またゾラ自身のノートの記述に「遺伝体質を抱えた病人。クーポー」とあるようにジェルヴェーズの場合と同じく遺伝の影響はあっても、[27] クーポーが環境に恵まれさえしたらそれでもアルコール中毒の陥穽に落ち込まない可能性は残されているようだ。そこでアルコール中毒の問題は『居酒屋』では遺伝よりも労働者の環境に依存することになる。

２．発端：ジェルヴェーズとクーポーのアルコール嗜好

物語が動き出してしばらくたった頃のことである。ジェルヴェーズは仕事を探しに行ったきり帰ってこないランチエにすっかり愛想を尽かしていた。そのうちに同じ＜親切館＞に住んでいたブリキ職人のクーポーと親しくなる。まもなくジェルヴェーズはそのクーポーから結婚をしようと口説かれるのだが、それはコロンブ親父の＜居酒屋＞での出来事だった。

場所が酒場なのでプラムをかじりながら二人の話題がアルコールにおよぶと、ジェルヴェーズはかつてアニス酒好きだった、「ところがある日それで死ぬ目にあって、以来大嫌いになった。酒など（liqueurs）いまでは見るのもいやだ」（p. 410 [p. 61]）と言う。これに相手も同調する。

> クーポーもみんながブランデー（eau-de-vie）をなみなみとついだグラスを何杯も流し込めるわけがわからなかった。時々、プラム酒（prune）一杯くらいなら悪くない。だが安物ブランデー（vitriol）、アブサン（absinthe）、そのほかいかがわしい安酒（cochonneries）、こいつはごめんだ！　そんなものいるもんか。仲間の連中からばかにされても平気さ。飲み助たちが安酒場へはいるときでも自分は戸口に残っている。父親はやはり同じブリキ屋だったが、ある日大酒を飲み、コクナール街の 25 番地で樋から落ち、敷石で頭をぐしゃりと砕いた。この思い出が家族みんなを賢明にしたんだ。コクナール街を通って父親の落ちた場所を見ると、飲み屋で振舞酒を飲むくらいならどぶ水を飲んだ方がましだといつも思うんだ。（p. 410 [pp. 61-62]）

二人はこのように酒嫌いを強調するのだが、手頃な場所がなかったとはいえわざわざコロンブの酒場に入ってこのように語り合っているところを見ると、彼らの主張もまったく額面通りに受取ることはできない。こうしたことを裏書きするように、直前にはこの＜居酒屋＞の仲間たちからクーポーは＜カシスの舎弟＞と呼びかけられる。後でジェルヴェー

ズにこの渾名の由来を訊ねられると、彼は「無理に飲み屋に連れ込まれたときには、おれはたいていカシスを飲むんでね」（p. 413[p. 66]）と答えている。

「カシス」というのはくろすぐりの実を原料とするフランスの代表的なリキュールであり、19 世紀半ばからは「クレーム・ド・カシス」という名でよく知られるようになった。甘みの濃いリキュールなので食前酒キールなどに利用されてカクテルとして出されることが多いが、アルコール度数はおよそ 20 度で、アブサンなどとは比べものにならないにしても（アブサンは普通 70 度位ある）、それでもストレートで飲むとなると度数は結構高い――ただしあまりにも甘すぎてストレートで飲む者などいるかという批判も出てくるかもしれないが・・・。クーポーの「カシスの舎弟」という渾名はそれだけでもすくなくとも彼がまったくの酒嫌いではなく、付き合い酒なら飲んでいたことを指し示すだろう。また引用中では親の死因がアルコールだと語られていたが、1893 年の「家系樹」に載せられたジェルヴェーズのところに「アルコール中毒の家系のクーポー」とはっきり酒飲みの家系出だったことが書き込まれている。クーポーがすぐにもアルコールに溺れ込むような環境と素地を持っていることは明白だ。

この＜居酒屋＞には名物である赤銅の大きなアルコール蒸留器があった。それは、この蒸留装置の「首の長い蒸留器や地下に潜っている螺旋管が、いかにも悪魔の台所といった感じで、酔っぱらった労働者たちがこの前にやってきては、ぼんやり夢想する」（p. 404[p. 52]）という代物だった。ジェルヴェーズとクーポーのカップルも、そうした酔っぱらいと同じように、それに興味を惹かれて店を出る前にしげしげと眺める。

> 蒸留器には奇妙な格好のガラス容器と、ぐるぐると数限りなく巻いた管がくっついていて、陰気くさい外見を呈している。煙ひとつ出ていなかった。内部の空気の動く音と地下のうなりがかすかに聞こえてきていた。陰鬱で強力で寡黙な労働者が真昼間にやっている深夜作業という感じであった。［・・・］銅器の鈍い光沢の蒸留器は炎ひとつあげず、陽気な影ひとつ見せず、ただひっそりと働きつづけてアルコールの汗を緩慢で執拗な泉のように吹き出していた。そのアルコールの汗は、そのうちこの部屋を浸して、郭外大通りの上にあふれ出し、パリという巨大な穴じゅうをいっぱいに満たしてゆくことになるのだ。そこでジェルヴェーズは戦慄を覚えてあとずさりした。だがそれでも、微笑をつくりながらつぶやいた。
>
> 「ばかね、私この機械のせいで寒気がするの・・・お酒はぞっとするわ。」
>
> （pp. 411-412[pp. 63-64]）

ジェルヴェーズにとってみれば恐いもの見たさのなせる業ということになるのだが、彼女の行く末を承知の上で蒸留器をこのようにゾラが描写していると想定する限りでは、そこには単なる比喩のレベルを超えて蒸留器には必要以上に生気が吹き込まれていることが見て取れるし、二人がやがては否応なしにそれに呑み込まれるという運命にあることが暗示されていると考えることができる。

ジェルヴェーズとクーポーのカップルに対して、その場に居合わせた＜居酒屋＞の常連である＜長靴＞はこの蒸留器を見て恐れもせず言う、「畜生め！　かわいいやつだぜ、こいつは！　この銅のでかいおなかにゃ、喉をさっぱりさせるものが一週間分つまってやが

るんだ。おい、だれかおれの歯にこの螺旋管の端を溶接してくれないか。そうすりゃ、できたての熱いブランデー（vitriol）がおれの五臓六腑にしみわたり、踵までいつまでも、いつまでも小川みたいに流れおちて、へ、すてきな気分だろうぜ。どんなことがあったって、おれはすわりこんでもう動かねえ」（p. 411[p. 63]）と。

アルコールを表向き否定してみせるカップルではあった。だが、そもそも酒場という二人の会合の場からしてそうだが、さらにそこでの二人の行動には、ことばと矛盾する点が種々露呈されている。隙あらば呑み込もうと構えている不吉な動物的イメージを漂わせている蒸留器を前にして、彼らは幸せそうな逢瀬に目がくらんで隙だらけの姿をさらしていると言える。やがて二人がこの怪物に隙をつかれるのは目に見えているだろう。

３．転落事故とアルコール嗜好のエスカレート

ジェルヴェーズとクーポーは結婚し、それから翌年ヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通りの新居に引越す。まもなく、1851 年 4 月末にはアンナ（愛称ナナ）が生まれる。ところがジェルヴェーズ一家を突然の悲劇が襲う。ナナが満 3 歳になったときの 1854 年 5 月、ジェルヴェーズがナナをつれてクーポーの仕事場にまわると、ナナに気をとられたクーポーが屋根から転落してしまったのである。しかし妻のジェルヴェーズは近所のラリボワジエール病院に入院させないで、自分の力で何とか夫の命を救おうとする。病院に入ったら最後命は取り戻せない、というのがこの頃の病院に対する一般人の評価であった。幸い一命を取り留めたクーポーは、ジェルヴェーズの献身的な看病のおかげで、2 カ月もすると起きあがれるようになった。それでも、その後の 2 カ月は歩き回るには松葉杖の助けが必要だった。

「うちの親父は酔っ払った日に首を折った。自業自得とは言えやしねえが、まあつじつまは合ってらあ・・・。ところがおれはしらふで、ばかみたいにおとなしくて、一滴の酒も体に入っちゃいなかったんだ。それなのに、ナナに笑顔を見せようと振り向いたとたん、落っこちてやがる！・・・　これじゃあひどいと思わないかい？　もし神様がおいでだとすりゃ、おかしなことをなさるもんだ。どう考えても合点がゆかねえ」と言って自分の不運を呪ってみせ、「足が治るにつれて、彼は何となく仕事を憎むようになってきた。」（p. 488[p. 171]）そして回復に要する期間はずるずると延びていき、半年たっても仕事場になかなか戻ろうとはしなかった。もちろんクーポーがこうした無為の日々を送れるのも、働き者のジェルヴェーズが一心に家計を支えていたからではある。ただし時に彼は仕事場へ顔だけ出し、帰りに仲間と酒場で憂さ晴らしをすることもあった。そのときの言いぐさはこうである。

> これくらいならべつに悪いことじゃないぜ。［・・・］ワインの一杯くらいで男一匹、殺されるわけでもあるまいしさ、以前みんながおれをからかったのもむりはないねえ。しかし彼は、ワインしか飲まないことを自慢して胸をたたいてみせた。いつもワインさ、ブランデー（eau-de-vie）なんて飲みやしない。ワインは寿命をのばす、健康にも悪くない、悪酔いもしない。（p. 490[p. 174]）

ワインはクーポーやその周囲にとってはアルコールのうちに入らない。それでもそれは

度を過ごせば、看過できないのは明らかだ。「仕事場から仕事場へ、酒場から酒場へ渡り歩いて、一日をのらくら過ごした後では、ほろ酔い機嫌で帰ってくることも何度かあった。」（p. 490[p. 174]）こうした酒飲み一流の口実は、クーポーにとっては一時の誘惑に対する言い訳にすぎないのだが、それが度重なれば酩酊癖へといたる格好の契機となることは言うまでもない。

続いて 5 章で 1855 年 6 月になり、彼がしたたか酔った日のことが書かれている。この頃彼はやっと働き始めていたが、「6 日のうち 2 日は途中で引っかかって仲間と飲んでしまい」（p. 503[p. 191]）、昼から帰宅するというありさまだった。この日も昼から帰ってきて、ジェルヴェーズがこの年の 4 月から始めた洗濯屋の作業場で、彼女と一緒にアイロンかけをして働く女たちをからかっていたが、意味ありげにブランデーは飲んではいけないということを突然言いだす。そして人から問われてもいないのに、「自分の首、女房の首、子供の首にかけて、ブランデーはただの一滴も体には入れちゃいないと誓う。」（p. 511[p. 202]）。それは彼がこの日あれほど自らに固く禁じていたブランデーに手を出したせいで、後ろめたさから思わずそう口走ってしまったのだ、とわれわれに推測させる。やがて深酒をするようになると、朝二日酔いにやられた日は仕事に出ない。しかし午後からは元気になるので酒場には繰り出す（p. 516[p. 208]）。

それから話は「クーポー一家がグット=ドール通りで過ごす 4 回目の冬」（p. 543[p. 244]）を過ごして、春をまた迎えてからのことである。ジェルヴェーズは夫のクーポーが例のコロンブの＜居酒屋＞で、「＜長靴＞、＜網焼きビビ＞や＜辛口＞、別名＜飲み助＞たちと安物ブランデー（vitriol）のおごりあいをしているところ」を見かけた。

> クーポーはすっかり手慣れた様子で、粗悪ブランデー（schnick）を小さなコップで喉に流し込んでいるところだった。じゃあ、あの人、嘘をついていたんだわ。今じゃブランデーなんだ！　彼女は絶望して、家へ帰った。ブランデーへの恐怖がふたたび彼女にとりついた。ワインなら許そう、働く者の滋養になるんだから。逆にアルコールは不潔な飲み物だ、働く者からパンの味を奪ってしまう毒だ。ああ、政府がこんないやらしい飲みものの製造を禁止してくれればいいのに！（p. 555[p. 260]）

このジェルヴェーズの述懐は先ほどのクーポーの自らに対する言い訳と一対をなしている。そこで目を引くのはワインとブランデーのあいだに良薬と毒物のあいだの明瞭な一線を引いていることだ。彼らのこうした主張の根拠にはそれらに含まれたアルコール度数の差異があることはもちろんだが、彼らがそのブランデーを常用するようになるとその先にはアルコール中毒という不吉な運命が待っていることをはっきり意識しているからでもある。こうしたいわば社会意識は現実にブランデーの引き起こす災禍が彼らの身のまわりで生起していることに由来する。

それにしても『居酒屋』の登場人物たちは、テーマがテーマだとは言え、ワインに限らず、リキュール、ブランデーとさまざまな種類のアルコールを男女の区別なしに機会あるごとによく飲んでいる。アルコールの整理をしながら、登場人物たちにブランデーの恐ろしさを意識させるようになった当時の事情を検討しておこう。

４．ブランデーとアルコール中毒

ブランデー（brandy）は蒸留酒の代表的なものだが、英語の製法を指し示す語源からすると「焼いたワイン」であり、元来はワインの蒸留酒である。しかし「フルーツ・ブランデー」という言い方もあるように、他の果実酒を蒸留したものもブランデーの中に分類される。ブランデーの製造法はワインなどを蒸留し、それをオークの樽で熟成させて作る。『19 世紀ラルース』などによると、[28] 蒸留法はすでに中世から実用化されていたが、最初はもっぱら薬用に用いられていた。飲みものとしてフランスで一般に普及するようになったのは、1678 年 1 月 20 日の高等法院決定で街路にテーブルや床几を出してそこでブランデーやリキュール漬けの果実を小売りすることが許可されてからであった。

高級ブランデーとしてはフランス産のコニャック、アルマニャックが有名である。そのほかにブドウの搾りかすを蒸留して作るマールがフランスではよく知られている。ブドウ以外では、リンゴの醸造酒シードルを蒸留したカルバドスがノルマンディーの特産品として名高い。プラムのブランデーはミラベル、それからフランスのノール地方からオランダ、ドイツ、イギリスなどで産出される大麦の蒸留酒にネズの実を香料に利用したジン、ドイツとの国境地方の特産であるサクランボのブランデーとしてキルシュがある。

なおアルコールの度数は蒸留後に産するスピリッツが 66-70 %あるものの、それを熟成させた後水を加えるため一般に 40-43 %程度で製品化される。

これに対してリキュールとしてまとめられる酒類は、醸造酒や蒸留酒を基酒にして、薬草や果実などの香味料、砂糖類を配合して作る。製造法としては日本の梅酒のように基酒にそのまま香味料を浸漬して香味や色素を浸出させる方法、基酒と一緒に香味となる薬草や果実を蒸留させる方法、それから基酒にエッセンスを配合する方法がある。蒸留する方法では先のブランデーとあまり変わりはなく、ただ決定的に異なるのはリキュールには多量の糖分が含まれているという点である。アルコール濃度は様々で、蒸留法で作られるたとえばシャルトルーズは 40-60 %にわたる。そのほか高濃度で知られるアブサンは 70 %にも及ぶのに対して、クーポーの「カシスの舎弟」という渾名の起源だったクレーム・ド・カシスは 20 %である。なお「クレーム」は糖分が多くてどろりとした状態から来た命名である。

ところでワインやビールのみならず、とりわけ高アルコール度のブランデーやリキュールが 19 世紀も特に後半になって急速に大量消費されるようになってきたことが歴史の証言によって確認される。産業革命の影響による都市への人口集中、それに伴う労働者の食生活の変化、鉄道を始めとする輸送手段の発達によって、地酒の域にとどまっていたワインや蒸留酒がどこでも飲めるようなったことなど､その原因はいくつか挙げられるだろう。ともかくこの頃のフランス人の飲酒に関する傾向について、D・ヌリッソンは「単一の飲み物を飲む習慣から、アルコール度の異なる他種類の飲み物を楽しんで飲む習慣へと変わっていった」とまとめている。[29]

こうした歴史の証言を裏付ける統計上の数字がある。フランス人全体の住民 1 人当たりの純アルコール消費量は 1859 年には 15.3 リットル、それが 1904 年には 19.7 リットルになっている[30]――ちなみにＷＨＯの 2000 ～ 2001 年の年間アルコール消費量はフランスが 13.4 リットル、日本は 7.4 リットルである。蒸留酒の純消費量についてはもっと詳細な数字が残っているのでそれを摘記すると、七月帝政の初期 1831 年に 1.1 リットルだった消

費量は、『居酒屋』の物語が始まると想定された 1850 年にはすこし伸びて 1.4 リットル、1860 年には 2.2 リットルになる。ところがゾラが『居酒屋』の構想をし出す 1875 年には 2.8 リットル、そこから 1880 年までは上がり方が急で 3.9 リットル、1899 年は消費のピークで 4.6 リットルにまで達する。その後世紀が変わると消費量は少し減少して、1904 年には 4.0 リットルまで落ちている。この数字から見るとアルコール全体の消費量は 1859 年から 1904 年の間に 30 %の伸びを示しているのに対して、蒸留酒の増え方はまったく異常で、1850 年から 1899 年までに実に 3.3 倍にも達している。またアルコール全体に占める蒸留酒の割合は 1860 年頃に 9 %だったものが 1904 年には 20 %に上昇しているのである。[31]

さらにまたこれらの統計はフランス人全体に関わるものなので、パリだけを取り上げればその数字は当然あがる。D・ヌリッソンの引いてくる数字では 1875 年のパリの住民 1 人あたりの蒸留アルコール摂取量は 5.6 リットルで、先ほどのフランス人の平均よりも 2 倍の摂取量である（D・ヌリッソン、前掲書、p.69[p. 65]）。すでに述べたようにパリの中でもモンマルトルの郭外大通り周辺には酒場が集中していたので、そこで過酷な労働に耐えている労働者が一時の慰安を求めてアルコールに走り、とくに時間も金もかけずに酔うことのできる粗悪なブランデーに救いを求めようとするのは想像に難くない。彼らだけのアルコール消費量や蒸留アルコールの消費量の統計は存在しないが、フランス人の倍がパリジャンだから、さらにこの地域の労働者はパリジャンから倍増する量を消費したと予測をたてても、それは誇張にはならないだろう。

フランス、特にパリはこのように酔っ払い天国となったのだが、当然ことはそれだけで収まらない。アルコール消費量が増大することによって、アルコール中毒患者が増大するという結果を惹起するのだ。アルコール中毒が社会問題と化し、アルコール中毒症がフランス社会を揺るがす社会病になっていく。結局、そのことが『居酒屋』の主人公たちの意識に反映して、ブランデーに対する恐怖として現出してきているのである。[32]

こうした社会問題がどのようなかたちで現れてきているのかを『19 世紀ラルース』の「アルコール中毒」の項で見ると、残念ながらフランスの数値は直接出ていないが、その代わりたとえばニューヨークでは直接間接を問わず死者の 3 分の 1 がアルコール中毒に関係すると驚くべき数値が上げられている。それよりも注目しておきたいのは、この項にはわざわざ「アルコール中毒性譫妄」という欄を設けて新しいアルコール中毒症の研究成果を紹介している点である。この頃にはアルコール中毒による精神障害は「てんかん性精神異常」、「老人性痴呆」などと並んで五大精神病のひとつに分類されるようになったという。それでアルコール中毒患者は精神病院に収容されていたし、そのような考え方に即してクーポーの死に場所としてゾラが選んだのが、精神病院として有名なサン=タンヌ病院だった。ということは、クーポーの軌跡はアルコール中毒患者のお定まりのコースだったわけである。『アルコール中毒』を書いたマニャンは当時ちょうどサン=タンヌ病院の医者をしており、彼が残した数字では、1867-1870 年の期間に、精神病院に隔離された患者のうちアルコール中毒による精神異常者の割合は、男性が 20.8 %、女性が 4.1 %だった。ところがすでに見たアルコール消費量がピークになる 1897 年から 1900 年では、その割合は男性が 31.2 %、女性は 9.1 %にもなっている（D・ヌリッソン、前掲書、p.181［p. 175］）。病院に収容してもアルコール中毒に対する有効な治療法はないので、結局予防法として飲酒しないように節酒、禁酒を呼びかけることしか有効な方法がなかった。こうした反アル

コールキャンペーンにおいて主導的な役割をはたす「フランス禁酒協会」がすでに 1873 年には設立されている（Ｊ-Ｃ・スールニア、前掲書、p.204）。

５．飲み仲間たち

ゾラの『居酒屋』へ戻って、クーポーのアルコール中毒への軌跡を再び追ってみよう。先ほどは行く末に不安を感じさせるブランデーに遂に口を付けだしたクーポーを見たが、普通アルコールに溺れるかどうかはもっぱら個人的な意識の持ちようで、欧米でスピリッツと称される高アルコールの蒸留酒類であっても節度を保ってほどほどにしておくなら、何もジェルヴェーズのように恐怖を覚えることもあるまい。だがあれほど自らに戒めていたクーポーがそれでもブランデーにいったん手を染め出すと、もはや彼が個人の意志の力ではとうてい拒否できないような、むしろそれとは反対に彼がそれに加速度的に溺れ込まざるをえないような環境条件が当時の労働者の世界には準備されている、とゾラは見ていた。

クーポーがブランデーに手を付けてから 5 年後の 1860 年 11 月頃のことが第 8 章で描写される。今では「ブリキ屋は仕事を投げ出し、何日も何週間もぶっつづけに飲みまわった。」（p. 619[p. 350]）それでも時には働こうという気が起きて、仕事に出かけようとする。ラ・グット・ドール通りにあるアパルトマンを暗いうちから起きて出かけるのだが、ポワソニエ通りに出ると＜小さな麝香猫＞が店を開けていた。一緒について来たランチエがまじめに働く前祝いにブランデー漬けのプラムをつまもうとクーポーを誘う。そこには前の日失職していた＜網焼きビビ＞がとぐろを巻いていたので、彼の不平を聞いてプラム酒をおごり慰めてやる。それから 3 人でひとしきり議論をしてから、揃って店を出る。外はやっと明るくなりかけていた。

ポワソニエ通りの先で郭外大通りのところに来ると、コロンブの＜居酒屋＞もすでに営業していた。そこに昨日から仕事を探しているという＜長靴＞がいた。クーポーは人手がいると親方から言われていたので、＜長靴＞を仕事に一緒に行こうと誘うと、逆に親方の悪口をさんざん聞かされてしまう。そんな悪い親方ならまず仲間同士で一杯やって、少々親方を待たせてもかまわないということになり、4 人での談論が風発するとともに 1 杯が 2 杯とおごり合いが重なり酒盛りの開始となる。陽が高くなるとクーポーは殊勝な気持ちから仕事場に向かおうとするのだが、その日は仕事の予定がない彼以外の 3 人がああだ、こうだと言って彼を引き留める。クーポーは＜長靴＞に落ち着かないからと促され、遂に肩にかけていた道具袋を下におろす。彼はこの時間じゃもう遅すぎる、昼飯を食べてからいくと決めてしまったのである。そうと決まればまだ 5 時間は自由でいられる、そこで彼らは連れだって＜鼻をすする蚤＞でビリヤードに興じながら安物ブランデー（schnick）を飲み干す。

昼飯近くなるとクーポーが率先して＜辛口＞を誘い出そうと言う。＜辛口＞はポワソニエ通りをずっと北に上ったマルカデ通りのボルト工場でグージェの同僚であった。彼は仕事中で昼の休憩時間にはまだ半時間以上間があるというのに、おかみさんの加減が悪いという理由でみんなに無理に連れ出されてしまう。再びポワソニエ通りをパリに向かって下って来てルイばあさんの店に入り、ひとしきりそれぞれの親方の悪口で花を咲かせる。昼の休憩時間も過ぎたので、クーポーが本気で仕事に出ようと言いだし道具袋を先ほどあず

けておいたコロンブの＜居酒屋＞に取りに行くと、みんながまたぞろついてきて最後にそこで一杯ということになった。もうそうなるとクーポーは仕事に行くのがばかばかしくなって、明日にすると言い出す。それからは全員もう何の差し障りもなくなり、連れだってポワソニエ通りをまた北上するとラ・グット・ドール通りの角にあるフランソワの店の小部屋に御輿を据え、トランプをやったり、ランチエの主導で政治談義をしたりして、したたか飲んだ。やがてランチエだけはこうした飲んべえたちに付き合いきれないので、逃げ出す。しかしクーポーのほうはそのまま飲み続け、いろんな酒場をほっつき歩いて、結局その日から 2 日過ぎてもラ・グット・ドール通りのジェルヴェーズの待つ家には帰ってこなかったのである。

ジェルヴェーズはこうしたアルコール中毒への道を否応なしに夫にたどらせる飲み仲間たちの影響力のことを早くから不安に感じていた。ゾラは早くも 2 章で彼女に「残念ながらあたし、いつもいつも利口な女だった訳じゃないの。そう言って 14 歳になるやならずの時の初産のことをほのめかした。それから昔母親といっしょにアニス酒を何リットルもからにした話にもどった。苦労のおかげですこしばかりましな女になった、というだけのことよ。あたしを意志の強い女と思ってはまちがい。逆にとても弱い女なの。だれかを苦しめるのがいやなばかりに、人の言うままになってきたの。あたしの夢はまじめなつきあいをして暮らすことよ。悪い仲間づきあいというのはまるで屠畜用の棍棒（assommoir）みたいなもので、人は頭をがんと割られてしまうし、女なんかあっという間にぺしゃんこにされてしまうから。」（p.417[p.71]）と言わせて、過去の反省と言うよりも、むしろジェルヴェーズや夫の将来に待っている不吉な運命を予示している。なお繰り返すが、「屠畜用の棍棒」というのは比喩的な意味に使われて＜居酒屋＞を指し示し、この小説のタイトルに利用されていた。

悪い仲間づきあいのせいでクーポーは今のジェルヴェーズの予感を実現してしまうのだが、クーポーの仲間うちでも、上述の「14 歳になるやならずの時（に）初産」をジェルヴェーズに体験させたランチエは特別であった。彼は物語の最初でいっしょにパリに出てきた彼女と 2 人の子供を見捨てて別の女とどこかに出奔してしまうかと思えば、今度は 7 章の 1858 年 6 月 19 日に街の知り合いたちも何人か呼んで盛大に行われたジェルヴェーズの誕生会をきっかけにまた彼女の前に現れる。彼はそこでそのままクーポー家に住み着いて、夫のクーポーと仲良くなって彼の破滅に手を貸す一方で、クーポーが飲んだくれてたびたび家を留守にする隙に乗じて断り切れないジェルヴェーズとも昔のよりを戻すことによって、他方では妻一人に情夫と夫といういかがわしい関係を作り出し、一家が社会的に非難を蒙るような元凶となる。それからジェルヴェーズが洗濯屋の家業に失敗すると、今度はそれを継いだヴィルジニーに乗り換え、やはり夫のポワソンをコキュにしてしまう。つまりランチエは、ジェルヴェーズ=クーポーの一家を経済的のみならず社会道徳的にも破綻させる、『居酒屋』の説話上では非常に重要な役割を持った人物で、しかもみんなから爪弾きにあうどころか彼らに上手に取り入って生き延びていける、どこかに不思議な魅力を備えた、クーポーの仲間うちでは異質な人物であった。

６．ドニ・プロの『崇高なる者』

ゾラが『居酒屋』の作成に当たって参考にした重要な文献には、すでに述べたマニャン

の『アルコール中毒』とともに、ドニ・プロの『崇高なる者』という「社会問題」に関する書物があった。これについても内容を摘記したゾラの簡単なノートが残されている[33]『崇高なる者』の著者は、労働者から工場主まで経験した 20 年間の労働者世界で、労働者の抱える問題をつぶさに見てきたので、第一部では「労働者階級の現在の病的な状態を正確に描き出すこと」、そして第二部ではその「病理学的診断」に基づいて社会制度をどのように再検討したらいいのかという提言をしている。[34]

一風変わった「崇高なる者」（Le　sublime）というタイトルの由来は、著者自身の説明によると、工場経営をしていた彼のところにやってきた労働者が、いっしょに酒を飲もうという誘いを断られた腹いせに放った捨てぜりふから来ているのだという。その捨てぜりふというのが「げすな野郎だな。おめえのようなのを柱も持ち上げられねえ貴族野郎ってんだ。ろくでなしめ。このくず鉄釘野郎め。三重まぬけめ。神のお気に入り、それが崇高な（sublime）労働者っていうのを知らねえか」で、酔っぱらいの労働者が自らを指し示すにまことにうってつけな言葉を使い、それがその後「なまけ者で乱暴で酔いどれの労働者」を指すのに著者にも好都合だったというわけである（『崇高なる者』、p.　125[pp. 41-42]）。ところでこの書物のユニークな点は何と言っても労働者の分類法にある。ドニ・プロは労働者を八つのタイプに分けて、1.真の労働者、2.労働者、3.折衷的労働者、4.単純なシュブリーム、5.前科のある、また没落したシュブリーム、6.真のシュブリーム、7.神の子、8.シュブリーム中のシュブリーム、と命名した。そうしてさらにそれらを大くくりし、初めの三つのタイプを一般の労働者、それ以下はすべてシュブリームで、そのうちの最初の三つのタイプを「不潔でいやみで乱暴、下品で無知、本能のままに行動する獣のようなシュブリミズム」に冒された労働者、「最後の二つのタイプ、これはかなり教養があり、教育も受けているシュブリミズムである。その知性は、しばしばばかげた理論、たいてい権力に関する理論に使われる。活動、精力は創造にではなく破壊に使われる。それより何より、その態度は、あの過激な使徒シュブリームたちの自由、友愛、平等のスローガンを裏切っているものだ」（同上、pp. 125-126[pp. 42-43]）と、まことに辛辣な定義付けをほどこしている。

この『崇高なる者』が労働者の日常生活、彼らの言葉遣いなど、ゾラの『居酒屋』に対して果たした貢献については計り知れないものがある。またわれわれのアルコール中毒という主題に関しても、ドニ・プロが労働者の生活でもっとも問題視しているのが彼らの酒浸りという日常なので、関わりは非常に深い。中でもここで特に注目しておきたいのは、ゾラが前項で見てきたクーポーを取り巻く労働者たちの人物造形に当たってドニ・プロの著作を大いに利用している点だ。

まず労働者たちが互いに仲間うちで呼び合う通称について、クーポーの＜カシスの舎弟＞（同上、p.　164[p.　106]）、グージェの＜黄金の口＞、通称でしか登場しない＜辛口＞、＜網焼きビビ＞、＜長靴＞（同上、p. 229-231[pp. 213-217]）はすべて『崇高なる者』が出所である。だがゾラにとってドニ・プロの著作が最も有効に働いたのは何と言っても労働者の分類法であろう。そのことは特にジェルヴェーズをめぐる 3 人の男たち、すなわちランチエ、クーポー、グージェがそれぞれ個性豊かに描き出されているところに現れている。

グージェの性格は作品を通じて一貫し、安定している。次は『崇高なる者』の「真の労働者」の説明から引用しているのだが、それがそっくりグージェの人となりの紹介として

通用する。グージェはドニ・プロの定義から逸脱するところはあまりないし、そのことから彼がドニ・プロの「真の労働者」のタイプに該当するのは明らかだ。つまり、ドニ・プロの「真の労働者」と同じく、『居酒屋』のグージェもまた「規律正しい習慣をもち、紳士的な態度をとり、良心的で知性があり、廉直な労働者であると同時に政治的な人間である。」(『崇高なる者』、p. 141[p. 67]）また「決して酔っ払うことはないし」（同上、p. 134[p. 54]）、「めったに仕事場の仲間とは親しく付き合わない。ほとんど友人は持たず、かろうじてごく少数と付きう程度であり、特に家族には親友しか紹介しない。」（同上、p. 139[p. 63]）「真の労働者」の備えるべき知性がグージェにもあるかどうかについてはつまびらかにされていないが、それでも彼はすくなくともクーポーに字を教えることができる教養は備えている（『居酒屋』、 p. 492［p. 176］）――ちなみにフランスで義務教育が制度化されたのは 1882 年のことである。

グージェと対極的な位置にいるのがランチエである。ランチエの仕事はドニ・プロに言わせると「シュブリーム中のシュブリーム」のタイプに多いとされる帽子屋だが、彼が働きに出かけるところなど見かけた試しはなく、典型的なぐうたら（feignant）だ。何で生活しているのかと言えば、パリに出てくるとまもなくアデール、次いで再びジェルヴェーズ、それからヴィルジニーと、女たちに働かせて生き延びている。ところでランチエはジェルヴェーズの家に引っ越してくるとき、ひと山の本や保存していた新聞の束を携えてきた。本の中にはルイ・ブランの『十年史』、ラマルチーヌの『ジロンド党史』、シューの『パリの秘密』と『さまよえるユダヤ人』などがあった（p. 606［p. 331］）。これらはその頃の知的労働者からよく読まれた書物なのか、それともゾラがドニ・プロから借用しただけなのか、やはり『崇高なる者』にも彼らの読書対象としてあがっている（pp. 135 & 143, [pp. 58 & 72]）。ランチエはこうしたとりわけ政治的な教養を人前でひけらかしたくてたまらないから、仲間に対してたとえば「軍国主義を撤廃して、人民の友愛を確立しろ・・・。特権、肩書き、独占を廃止せよ・・・。給料の平等化、利益の再分配を行い、プロレタリアの栄光をたたえよ・・・。すべての自由を求める、いいかすべてのだ・・・。それに離婚の自由もだ」（p. 606［p. 332］）と、政治的なスローガンを盛んにまくし立てる。それから酒場に入れば、カウンターにもたれて飲むことよりも、奥の小部屋に引きこもって新聞を読みながら仲間同士で気兼ねなく飲む方を好む。そして政治的な出来事を中心に新聞に出ている記事をみんなに解説してやる。ただし仲間の深酒のせいで座が荒れ出すと、いたたまれなくなってそこから姿を消す（p. 627[p. 361]）。酒場はきれいなところを好み、玉突きをしてもキューさばきは見事だ（p. 624[p. 356]）。このようにランチエはクーポーの飲み仲間内でも他人にはないところがたくさんあり、クーポーは結局彼に一目置かざるをえない。「もちろん彼はランチエをすこし高慢だと思っていたし、安物ブランデーの前ではいやにすましてると言って非難したし、本を読んだり、弁護士のようにしゃべると言ってからかったりはした。彼の言明するところでは、それを別にすりゃ、あいつはしっかりしたやつだ。ラ・シャペル中を探したって、彼ほどたよりになる男とはいないよ、ということだった。」（p. 618[p. 348]）要するに、ドニ・プロの分類からすれば、ランチエはすくなくとも教養がある点で「神の子」か「シュブリーム中のシュブリーム」どちらかのタイプだが、ゾラのノートからすれば「神の子」に分類される。[35] この第 3 の種類の労働者は教養があるせいで仲間に対する影響力が大きい、にもかかわらず実際の行動には問題

が多いとされるシュブリームである。

次にクーポーは労働者の分類でどれに当たるだろうか？　妻ジェルヴェーズと並んで彼の転落の軌跡が『居酒屋』の骨格を形成している、つまり物語の興趣はクーポー夫婦の浮沈に負うところが大きいので、男の労働者仲間では彼だけがドニ・プロの二つのタイプを明らかに移動している。彼は結婚当初は「労働者」か、それとも本を読もうという気はなく、人に影響されやすいところを見ると、どちらかと言えば「折衷的労働者」に分類される。「他人の言われるがままになりやすいこと、これは『折衷的労働者』を宿命的にシュブリミズムへ導くことになりかねない。つまり、それは彼のいる環境次第ということになるだろう」（『崇高なる者』、p. 156［p. 91］）、とドニ・プロもまさしくクーポーの軌跡を言い当てている。果たせるかな、彼は屋根からの転落事故を契機に、シュブリームのなかでも一番数の多いと思われる、彼の飲み仲間の＜長靴＞や＜網焼きビビ＞と同じ「単純なシュブリーム」に成り果て、しかもアルコールに毒されて狂死するという最悪のコースをたどってしまうのである。

７．クーポーに見るアルコール中毒の症例

好ましくない仲間づきあいもあって、クーポーがアルコールにどうしようもなく溺れ込んでいく一日の様子を先に示したが、それは彼がブランデーに手を付けてから 5 年後の 1860 年 11 月頃のことであった。しかしそれ以前からもクーポーにはアルコールの悪影響がすこしずつではあるが現れてきていた。クーポーがアルコール中毒に陥り、最終的に振戦譫妄によって亡くなるまでの様子を時間的な経過とともに見ておこう。

1861 年の夏の頃、ジェルヴェーズの洗濯屋はクーポーとランチエの散財のせいもあって傾きだし、借金や質屋通いでやりくりをしなげればならないような状況に陥っていた（9 章）。

> しかしこの飲んだくれの大将［クーポー］はふしぎと元気いっぱいだった。安物のワイン（pichenet）やブランデーが彼をめきめき太らせた。彼は大いに食い、酒は人殺しだと言って非難するやせっぽちのロリユを鼻であしらって［・・・］太鼓の皮のように脂肪でぴんと張った腹の皮をたたいてみせた。［・・・］そんなものは黄色い脂肪じゃないか、よくない脂肪だよと言われてもお構いなし、クーポーは体にいいんだと言って、ますます酔っぱらった。そのくしゃくしゃに乱れた胡麻塩の髪は炎のように逆立っていた。猿さながらの顎をした酔っぱらい面が、酒やけで黒ずんで紫のぶどう酒色になった。（p. 646[p. 387]）

やがてジェルヴェーズは店の家賃が払えなくなり、死んだクーポー婆さんの葬儀もあって、ついに店を手放すと、同じアパルトマンの 7 階に転居する。と言っても、ジェルヴェーズ自身も落胆からまじめに働く気も起きず、一家はますます困窮していった。

1863 年春、クーポーは田舎に働きに出かけて 3 カ月働いてきた。そのため血色も良く、健康になって帰ってくる。だがそれも束の間の話であった（10 章）。

1865 年冬、見えないところでクーポーの体をむしばんでいたアルコールの毒がついに危険な段階に達し、そのことが彼自身にも人目にも明らかになる。以下のテクストには、

たとえば『19 世紀ラルース』に見られるような、アルコール中毒の具体的な症状がほぼまんべんなく出ているので、すこし長いが引用しておこう。

> クーポーは体の具合が思わしくなかった。やくざなブランデー（cric）を飲んで顔色が良いというような時期はもう過ぎていた。彼はもう、酒の野郎のおかげでこんなに太った、などと腹をたたいていばってはおれなくなっていた。というのは、はじめのころのいやな黄色い脂肪が溶けて、骨と皮にやせ（sécot）、沼で腐ってゆく水死体のような緑がかった鉛色をおびてきた（se plombait）からである。食欲もなくなってきた。パンもしだいに食べたくなくなり、シチューにも唾を吐くようになった。うんとじょうずに作ったシチューなら食べられそうだったが、彼の胃袋はふさがり、歯はゆるんでものをかめなかった。体をもたせるためには、一日に半リットルのブランデーが必要だった。これが彼の一日分の食料であり、飲み物であり、彼が消化できるただ一つの栄養物だった。朝、ベッドからおりると、たっぷり 15 分は体を二つに折りまげたまま、咳をしたり（toussant）、骨をきしませたり、頭をかかえたりしながら、喉にこみあげてくるアロエ液のような苦い粘液（pituite）を吐きだしていた。［・・・］とにもかくにも迎え酒を一杯ひっかけないことには体がしゃんと立てず、腸に焼きつくような酒が彼にとっては、かけがえのない薬だった。しかし、昼間になると元気を取り戻した。まず最初、手足の皮膚がむずがゆくなり（chatouilles）、ちくちく刺すような感じ（picotements）がしてくる。［・・・］そうするうちに、脚が重くなってきて、くすぐったかったのが、肉を万力のように締めつけるひどい痙攣（crampes）に変わる。こりゃ冗談じゃないぜ。もう笑ってもいられない。耳鳴りがし（oreilles bourdonnantes）、火花が散って目先が見えなくなり（yeux aveuglés d'étincelles）、頭がぼうっとして（étourdi）、ふいに往来に立ちすくんでしまう。すると何もかも黄色く見え、どの家も踊りだす。彼は 2、3 秒ふらふらと歩くが、ぶっ倒れそうな恐怖におそわれるのだ。ときによると、真っ昼間の太陽を背骨に受けているのに、肩から尻へ冷水が流れるように、ぞっと寒気（frisson）がした。一番じれったいのは両手がぶるぶるふるえること（tremblement）だった。特に右手はなにか悪事をしたにちがないほどひどくふるえた。［・・・］彼ははげしく筋肉を緊張させてコップをつかむと、大理石の手で握ったみたいにじっと動かさずに持ってみせると言った。けれどもコップは、彼がいくらがんばっても、せわしく規則的に小さくふるえ、ばか踊りをやりだして、右へ左へ飛びはねた。そうなると、彼は怒って、こいつを何十杯も飲ましてみろ、指一本動かさずに樽を運んでみせるなどとわめいては酒を胃袋にぶちまける。
> （pp. 694-695[pp. 455-456]）

1866 年 3 月、クーポーは雨に濡れて帰ってくると、その夜に高熱を出して肺炎（fluxion de poitrine）になる。夫が運ばれていったラリボワジエール病院というのは、ジェルヴェーズがパリへ出てきたばかりの頃、自分の人生の凶兆のようにアパルトマンから見えていた病院であった。その翌々日ジェルヴェーズが病院を訪ねると、クーポーはとつぜんうわごとを言い出した（battu la campagne）ために、昨日のうちにすでにサン=タンヌ病院に移されてもぬけのからだった。サン=タンヌ病院はパリの南方（現在の 14 区）に 17 世紀か

らあり、当時から精神病院としてよく知られていた。何度も触れる実在の医師マニャンが長い間勤めていた病院でもある。すでに述べたようにアルコール中毒による譫妄症状も当時は精神病のカテゴリーの中に入れられていたから、彼がサン=タンヌに運ばれても何の不思議もない。

『居酒屋』には今言ったように二つの病院が出てくる。ラリボワジエール病院はジェルヴェーズに対して不吉な印象を与えていたとは言え、彼女の住むアパルトマンの近くにあり、夫を取り戻そうとする意志さえあれば、彼女にはそれが可能であったし、現に 10 年あまり前の転落事故の時は、ラリボワジエール病院に入れられそうになる夫を自らの手に取り戻して、手厚い看護によって夫の命を救ったのだ。しかし今度のサン=タンヌ病院に関しては、地理的にも、またそこで治療の対象とされる精神病という病気のカテゴリーの上でも、もはやジェルヴェーズの手の届かないところにある。それらに加えて何よりジェルヴェーズには、10 年前と違って、家庭を顧みないでアルコールに溺れ、彼女の誇りであった洗濯屋を手放させて、今は貧乏のどん底に一家をあえがせているクーポーに対する愛情がなかった。今やクーポーはだれの手も届かないところに連れて行かれ、だれからも見放されて最終的にはアルコール中毒の手にかかって最期を迎えるしかないだろう。

それでもジェルヴェーズが日曜日にサン=タンヌにクーポーの様子を見に行くと、肺炎から両手の震えまで病気の症状はほとんどなく、わずかに指先がぴくぴくする程度のわずかなものにおさまっていて、ネズミ（rats）が出てきたという幻覚（illusion）の話を落ち着いて彼女にやりだすほどだった。しかし夜になるとやはりまたネズミの幻覚にさいなまれるので、ジェルヴェーズは驚いて病院から飛んで帰った。数日後にはそれもなくなり、クーポーは退院を許可された。そのとき、酒さえ飲まなければ病気はぶり返さない、それでも酒を飲むようならば今度は命はない、後は本人の心掛けしだいだ、とクーポーは医者から因果を含められて退院した（ pp. 698-699[pp. 460-461]）。

もちろんアルコール中毒者が医者の忠告に素直にしたがって酒を断ったという試しはほとんど聞かない。アルコール依存から抜けきれないからアルコール依存症の名を冠せられるのであり、もしも医者の忠告に従って簡単にアルコールを断てるのであれば、語義矛盾と言うことになるであろうが・・・。ともかく、マニャンの『アルコール中毒』に出ている症例をみても、当時のほとんどの患者が、酒を飲んでは入院し、病院で療養をして病状が改善されると退院し、またアルコール浸りになって再入院をするという、入退院の繰り返しである。クーポーもまたそのようなアルコール中毒者の例に漏れない。退院した晩には家で早速消化のためという口実でブランデーを一杯飲む。その後彼は 1 週間ぐらいは我慢して控えていたが、2 週間後になるとまた元の酒量にもどってしまう。

最初のサン=タンヌ入院から 3 年たった 1868 年になると、クーポーはもう 7 回もサン=タンヌでの療養を繰り返すまでになっていた（11 章）。その頃の彼の病状がまた描写されている。

> 彼はすっかり声が変わって、強いブランデー（fil-en-quatre）が喉に新しい音を生んだようだった。耳も片方が聞こえなくなった（sourd）。それから何日か後に、視力が弱まった（sa vue baissa）。階段をおりるのに足をすべらせまいとすると、手すりにしがみついていなければならなかった。［・・・］頭はひどく痛み（maux de tête

abominables)、めまい（étourdissements）がして、目の先に火花がちかちか光った。突然、鋭い痛み（douleurs　aiguës）が手足をおそった。すっかり青ざめて、腰をおろさずにはいられなかった。そして何時間も椅子の上でぼんやりしていた（hébété）。そのうえ、こういう発作の後では、腕は丸一日しびれていた（bras paralysé）。[・・・]丸くなってふとんにもぐりこむと、手負いの獣のようにたえまなく荒い息（souffle fort）を吐いた。すると、サン=タンヌへご厄介になるときのような狂暴さがまたはじまる。疑いぶかく（méfiant）不安になり（inquiet）、激しい熱（fièvre ardente）にうなされて、怒り狂いながらころげまわり、仕事着を引き裂き、痙攣する口（mâchoire convulsée）で家具にかみついた。かと思うと、ひどく涙もろくなって、娘みたいな泣き言を並べてはすすり泣き（sanglotant）、だれからも愛されていないと嘆くしまつである。ある晩ジェルヴェーズとナナがいっしょに帰ってくると、ベッドに彼の姿が見えなかった。かわりに長枕がころがっている。彼女たちがベッドと壁のあいだに隠れているクーポーを見つけだすと、彼は歯をがちがちいわせて、だれかがおれを殺しにきやがる、と言う。[・・・]。

クーポーの知っている療法はたった一つ、つまり、やくざなブランデー（cric）を半リットル流し込んで胃袋をどやしつけることだけだ。それでやっと立ち上がれるようになる。彼は毎朝こうして胃の粘液（pituite）を洗い流していた。もうずっと前から記憶力はなくなり、頭はからっぽだった。彼は立てるようになると、すぐ病気をばかにして、おれは一度も病気になんぞなったことはないぞ、と言う。そうだ、自分ではぴんぴんしているつもりで、いつぽっくり死んでしまうかわからぬところまで病気が高じていた。（pp. 745-746[pp. 529-530]）

同じ 1868 年のことを描いた最終章では（13 章）、クーポーは一週間以上たっても家に帰らない。それからジェルヴェーズのところにサン=タンヌ病院から夫が危篤状態になっているとの知らせが届いたときの様子が記されている。そこではクーポーが示すアルコール中毒症の最悪で典型的な症状である重篤な振戦譫妄がこの小説の山場となり、彼のような一労働者がどのようにアルコール中毒に陥り、悲惨な最期を遂げるのかという主題を持った小説『居酒屋』にとってはまことにふさわしいと言える掉尾を飾っている。だがそのクライマックスに当たる振戦譫妄の場面は、H・ミットランの指摘するように、最初からゾラの執筆計画にはなかった。ゾラはマニャンの『アルコール中毒』を参考にしてから当初の執筆計画を修正し、[36] その場面とその後日談によって物語を終止させることに変更したのだが、そのことは『居酒屋』にとってマニャンの著作の影響力がいかに大きいものであったかを証していよう。

振戦譫妄という専門語を指し示すのにフランス語はラテン語《delirium tremens》をそのまま利用しているが、その意味から意識の譫妄状態に身体の震え（振戦）が伴った症状を言う。現代の専門的な定義によると、振戦譫妄は癲癇様痙攣発作，アルコール幻覚症と並んでアルコール中毒の禁断症状における典型的な症状のひとつであり、意識混濁状態に陥って，虫やネズミなどが多数現れる小動物幻視，複数の会話調幻聴などを伴う譫妄状態、手指の振戦（震え），場所・時間がわからなくなる失見当などの症状を現出させる。振戦譫妄の症状についてはマニャンの『アルコール中毒』や『19 世紀ラルース』の記述と現代

の百科事典などに見られる記述に大差はなく、症候学的にはゾラの頃からすでに完成されていたと言ってよい。『居酒屋』のクーポーはすでに見てきたように振戦譫妄を呈してサン=タンヌ病院に何度も収容されていたが、彼を死に至らしめる最後の振戦譫妄はその中でももっとも重篤な症例となっている。

さて、そのクーポーはジェルヴェーズが見に来たのにも気づかずにあたりにどなりちらしながら踊っていた。看護人の言うには 2 日前からずっと踊り続けているらしい。彼の収容された部屋には体を傷つけないように上から下までマットの詰め物で覆われ、床には藁のマットレスが 2 枚重ねて敷かれていた。彼の人相はすっかり変わり果て、目は充血し、唇はかさぶただらけで、皮膚からは脂汗が吹き出ていた。（pp. 783-784[pp. 581-583]）

翌日彼女がまた病院を訪れてみると、彼はやはり踊り続けていた。「きょうは、脚まではねていた。ふるえが手から足へおりたのだ。ちょうど、操り人形を糸で動かしているのにそっくりだ。胴体は木のようにしゃちこばって、手足だけがぴょいぴょい飛びはねる。」（pp. 786-787[p. 589]）看護をしていた医学生が喉が渇くと訴えるクーポーにレモン水を与えると、ブランデーの味がするらしくすぐ吐きだす。どんなものでもブランデーを飲んでいるように喉が焼けつくようになり、飲み物すら受けつけなかった。それから幻覚症状が始まる。最初に幽霊（fantômes）、壁には大きなクモの巣（toiles d'araignée）。そのクモの巣が網になって、網目を黒い玉が行き来する。玉はネズミ（rats）になって、壁から飛び出してくる。今度サル（singe）がクーポーに襲いかかってくる。やがてあたりは火事（feux）に包まれ、赤、緑、黄といろんな色の炎が燃え上がる。40 度の高熱が続いている。（pp. 787-788[pp. 589-590]）

翌々日、ジェルヴェーズの耳に聞こえてくるクーポーの動物幻視は最初ナンキンムシ（punaises）、それからしばらくすると、動物のオンパレードで、以前と同じようにネズミ、クモが出てきて、次いでモンマルトルの住民たちが熊、ライオン、豹、犬、猫に仮装して繰り出す。幻視の中のジェルヴェーズはクーポーの嫉妬の対象で、彼女が出てくると淫売とさげすまれ、彼女の情夫だったランチエとクーポーは仮想の乱闘をしだす。最後は恐怖におそわれてその場から逃げ出そうとし、悲痛なうめき声を上げると、マットレスに足を取られて仰向けにぶっ倒れた。眠りこんだクーポーだったが、「瞼を閉じたクーポーの顔全体は、神経的なこまかい痙攣がひきつらせていた。」「脚もあいかわらず踊りつづけていた。」診察している医者たちのようにジェルヴェーズもクーポーの体に触ってみた。

> 肉の奥までぴくぴく踊っている、骨だって飛びはねているに違いない。ふるえとうねりが遠くからおこっては、小川のように皮膚の下を流れていっていた。[・・・]。肉眼ではただ渦巻の表面のように、さざ波がくぼみをつくるのが見えているだけだったが、内部ではすさまじい破壊が行われているにちがいない。[・・・]。そこでがんがんと、つるはしを打ちこんでいるのはあの＜居酒屋＞の安物ブランデーなのだ。体中がそのためにびっしょり酒びたしになっている。でも、なんてむごいことだろう！その働きは、クーポーの全身をたえまなくゆさぶりつづけて、粉々に打ち砕き、命まで奪ってしまわなければ終わらないにちがいないのだ。（p. 794[p. 600]）

そうして数時間後、踊り続けていた脚が硬直して動かなくなった。それでクーポーは 4 日

間も踊り狂って遂に死んだのである。

Ⅳ章　アルコール中毒の説話法

ここまでは『居酒屋』の中でいかにクーポーがアルコール中毒に囚われていったかを見てきた。しかしアルコール中毒について、ゾラはすでに『居酒屋』のほかにも『繁栄』でマッカールについて言及していたし、また同時代の作家ではゴンクール兄弟がゾラよりも先に『ジェルミニー・ラセルトゥー』（1865）において労働者階級の悪弊としてかなりのページを割いて描写していた。したがってこのままだと『居酒屋』のアルコール中毒は、テーマの先見性の点ではゴンクール兄弟の後塵を拝し、小説中の扱い方の点では『繁栄』や『ジェルミニー・ラセルトゥー』の場合をさらに大がかりにしただけの程度問題に解消されてしまう。しかしながら単に一読しただけでも認められるように、『居酒屋』におけるアルコール中毒は『繁栄』や『ジェルミニー・ラセルトゥー』の場合と比較して程度のみならず質においてもまったく際立った印象を与えており、『居酒屋』の不可欠の要素として構造的レベルにおいてこの小説を組織的に支配している。以下ではその点について説話論（ナラトロジー）的な観点から検討を加え、『居酒屋』でアルコール中毒が内容的、形式的にいかに組織的に機能しているかを明確にすることにつとめよう。

G・ジュネット的なナラトロジーからすると、[37] 小説の説話にとってまず取り上げなければならないのは説話の順序であり、その順序を確かめる際には登場人物の属する物語内容（histoire）のレベルと語り手の属する物語言説（discours）のレベルの相違を考慮しておかなければならない。『居酒屋』は 13 からなる章で登場人物たちが印象的なエピソードを繰り広げることによって説話が展開されている。もっとも悲惨なアルコール中毒患者はもちろんクーポーだが、この小説にはクーポーや彼の飲み仲間のようにアルコールに溺れて、いつ中毒症を発症してもおかしくないような登場人物がまだいる。クーポーの軌跡と密接に関係しながら『居酒屋』の物語を進展させているので、クーポーに劣らず彼らのアルコール嗜飲癖について問うことは説話上では重要である。まず注目しなければならないのは、『居酒屋』以前から遺伝アルコール中毒の影響下にあるとゾラが見なしていたジェルヴェーズである。

１．ジェルヴェーズの嗜飲癖

ジェルヴェーズはクーポーと出会った当初、「昔プラッサンで母親といっしょにアニス酒を飲んでいたことを話した。ところがある日それで死ぬ目にあって、以来大きらいになった。酒（liqueurs）など今では見るのもいやだ。」と（p. 410［p. 61］）、過去のアニス酒好きに対する反省を口にして、自分にも、クーポーにも禁酒を誓っていた。しかし彼らにとってワインは酒のうちにはいらないし、どんな行事にも酒は付き物だしというので、彼女がまったく一滴もアルコールを近寄せなかったというのではもちろんなく、人との付き合い酒や人からのふるまい酒は拒まなかったことは言うまでもない。

彼女の嗜飲癖がはっきりと現れてくるのは第 9 章の 1861 年夏頃で、ジェルヴェーズが借金や質屋通いでやりくりをしなげればならない最中である。にもかかわらず、一方の夫

のクーポーはアルコール中毒が進行してきたことを示す脂肪症（stéatose）が目立つほどアルコール漬けがますます高じてきたし（前出 101 ページ）、他方で妻のジェルヴェーズも崩壊していく家庭の憂さ晴らしをするように酒にはけ口を求めるようになってきていた。そんなある日、ジェルヴェーズは以前洗濯屋を開こうとしていたとき自らに許した唯一の贅沢品で、勤勉な頃の象徴でもあった振り子時計すら、遂にクーポーばあさんに質屋に持って行かせた。25 フランと予定より 5 フラン多く借りられたというので、それは早速酒に化ける。こんな風にしてジェルヴェーズとクーポーの母親とは「今では、ブランデーとカシスを半々に混ぜたのを、2 人して仕事台の片すみでよくなめるようになった。」（p. 645［p. 387］）

1865 年に初めて夫がサン=タンヌ病院に収容されてからのことである（10 章）。時々は仕事にありついたクーポーが 2 週間分の給料を手に入れたのに、家に戻ってこない。そこで、ジェルヴェーズは＜居酒屋＞まで亭主を呼びに行き、いつもの仲間と飲んでいた夫からの誘いについのってしまう。

> ＜網焼きビビ＞が立ち上がって、彼女のためにアニス酒をとりにいった。彼女は椅子を寄せてテーブルについた。アニス酒をなめているうちに、突然、彼女の胸にある思い出がよみがえった。昔クーポーが言い寄っていたころ、この店の戸口のわきにすわっていっしょにつまんだブランデー漬けのプラムのことを思い出したのだ。あのとき彼女は、実のほうを食べたがブランデーは残した。ところが、いまになって、こんなふうにまた酒（liqueurs）を飲みはじめている。ああ、彼女は自分がよくわかった、銅貨 2 枚分の意志もないのだ、ちょっと腰をはじかれると、それだけでもう、お酒のなかへとんぼかえりをうって落ちてしまうのだ。それに、アニス酒は、すこし甘すぎて、ちょっと胸がむかついたが、とてもおいしかった。（p. 705［p. 470］）

甘いアニス酒の口直しにジェルヴェーズはなにか辛口のものがほしかった。背後には以前にあれほど彼女を恐れさせたブランデーの蒸留器があった。だがもうすでにこの悪魔の器械に魅入られてしまい、ジェルヴェーズは以前＜長靴＞がうっとりつぶやいたせりふと同じような思いに駆られる（p.411［p.63］）。

> この大釜のような器械は、太った金物屋の女房の腹のようにまんまるで、鼻をつきだしたりくねらせたりして、彼女の肩のあたりへ欲望と恐怖の入りまじった戦慄を吹きつけた。そうだ、それは、まるで大きな淫売婦か、胎内の火を一滴ずつ漏らしている魔女かなにかの金属でできたはらわたのようだった。みごとな毒の源泉で、地下室で隠れてやる作業だろう。それなのに、それはずうずうしく、いやらしいにもほどがある！　だが、それでもかまわない。そこへ鼻をつっこんでにおいをかぎ、そのけがらわしいものを味わってみたい。たとえ舌が火傷して、オレンジのように皮がむけてしまってもいい。（p. 706［p. 471］）

もうここまでくれば止め処がなかった。あれほど恐れていたブランデーだったにもかかわらず、それが運ばれてくると、彼女は一息で飲み干した。「2 杯目で、つらかった空腹

も感じなくなった。」「3 杯目の小さなコップを飲み干すと、彼女は両手にがっくり顎を落とした。」（pp. 706-707［p. 472］）

11 章で描写される 1866 年から 1867 年の冬の頃には、ジェルヴェーズはふるまい酒をあてにしてコロンブの店へ亭主を探しに行くのが楽しみになっていた。「彼女はいそいそとテーブルにつくと、最初の頃のように不機嫌な顔など見せないで、コップを一気にぐっと飲みほし、両肘ついて何時間もがんばり続け、そこを引き上げるときはどろんとした目つきをしていた。」（p. 727［p. 501］）

ところで、自分の洗濯屋をヴィルジニーに譲り渡して以降、ジェルヴェーズは以前の勤め先だったマダム・フォーコニエの洗濯屋に働きに行っていたのだが、この頃にはもうすっかりやる気をなくして仕事の方もまともにできなくなったので、マダム・フォーコニエのところからも追い出されてしまい、パリに出てきた当初にヴィルジニーと喧嘩騒ぎを起こしたヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通りの洗濯場に日雇いに出ていた。つまり彼女はこれで上昇と下降によって人生の浮沈の軌跡をひと巡りしたことになる。

1 章の 1850 年の時点で、ヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通りの洗濯場を経てマダム・フォーコニエの洗濯屋に雇われるようになり、懸命に働いて 5 章の 1855 年の時点ではラ・グット・ドール通りに自分の店を持つところまで行った。合計 13 の章からなる『居酒屋』のちょうど半ばに当たる 7 章の 1858 年、そのときは盛大に彼女の誕生会が祝われ、それが彼女の軌跡の絶頂であった。同じ 7 章で疫病神のランチエが姿を現し、8 章からの彼女はもう坂道を転がるように転落の軌跡を描いていく。9 章の 1862 年にクーポーばあさんの葬儀をした後、遂にジェルヴェーズは洗濯屋を手放してしまったのだった。もうそれからは誇りも失い、世間体もなくして落ちるところまで落ちるしかなかった。ジェルヴェーズは物語の始まる頃なめていた辛酸の域もはるかに越えて、徹底的に零落していった。そうした中ではアルコールが唯一の慰めにちがいなかった。

最後の 13 章ではクーポーのサン=タンヌ病院での死去の後日談が書かれている。

> その日［クーポーが死んだ日］からジェルヴェーズはよく正気を失った（perdait la tête）。彼女がクーポーのまねをしているのを見るのが、アパートの連中の楽しみの一つになった。もうわざわざ頼む必要もなかった。手足をふるわせ、無意識の小さな叫び声をあげて、彼女は見せ物を無料で見せてくれた。サン=タンヌ病院であんまりながいあいだ亭主を見すぎたので、こんな癖がついたのだろう。だが、彼女のほうは運がよくなかった。亭主のようには死ねなかった。（p. 795［p. 602］）

だれも彼女の死を看取る者はいなかったので、果たして彼女がクーポーのように振戦譫妄の発作で死んだのか、食べ物が手に入らず餓死したのか定かでない。だが、直接の死因はともあれ、すくなくとも彼女にも最後はアルコール中毒症と言ってよい症状がつきまとっていたのは間違いない。

２．ビジャールのアルコール嗜飲癖

『居酒屋』の主人公としてアルコール漬けになったあげくに悲惨な死を遂げたクーポーとジェルヴェーズの夫婦のほかにも、副次的登場人物の中に重要な説話法上の役割を持っ

た人物がまだ見つかる。それは錠前屋のビジャールとその娘ラリーである。ビジャール一家はジェルヴェーズと同じアパルトマンの住人で、特にジェルヴェーズが洗濯屋をたたんだ後にはアパルトマンの同じ B 階段 7 階に住む近所同士の間柄となる。

ゾラは何度も言及した執筆プランでこのビジャール一家に関するエピソードをすでに最初から 4 度繰り返してしかもどこに置くかまで明瞭に意識していた。[38] これほどゾラが彼らを重要視するのは、ビジャール一家が主人公のジェルヴェーズに自らの境遇を想起させたり、また自らの行く末を暗示したり、いわば説話の展開の上で先導的な役割を担わせているからである。[39]

第 5 章でジェルヴェーズの洗濯屋が動き出し、彼女が活気に満ちて働いていた頃、その店の下請けとして洗濯を受け持っていたビジャールのかみさんが入ってくる。そこでクーポーとジェルヴェーズのやりとりを目撃すると、彼女は亭主の錠前屋の酒乱を嘆く。彼女の夫は酒によって帰ってくるとひとが変わり、死ぬほど彼女を殴りつけるからである（p. 509［p. 199］）。

続いて 6 章でジェルヴェーズが目撃するのは、酔っぱらって野獣のようになったビジャールがかみさんに殴る蹴るの乱暴をはたらき、今にも殺してしまいそうになる場面である。その後自宅に戻ってすぐ、今度は彼女が自分の夫クーポーの酔態ぶりを目の当たりにし、以前のように酔いかたも陰湿になってきているのに気づく――もっとも夫の不機嫌は自分たち夫婦の目の前に彼女の昔の情夫であるランチエが現れたことに多分原因があると推測されるのだが・・・。そして先程見てきたビジャール家の光景が脳裡に浮かぶ。

> クーポーは戸口を押しそこなって、危うく肩でガラスを割るところだった。真っ青に酔って、歯を食いしばり、鼻をこわばらせていた。彼の顔色を青ざめさせた悪い血のなかには＜居酒屋＞の安物ブランデーがはいっているんだということが、ジェルヴェーズにはすぐわかった。彼女は、以前、彼がワインを飲んで、はしゃいでいたころのように、笑いながら寝かせようとした。ところが、彼はものも言わず、彼女をつきとばして、ひとりでベッドにたどりつこうとして、彼女にげんこつをふりまわした。まるで、なぐり疲れて上でいびきをかいているもうひとりの酔っぱらい［ビジャール］みたいだった。彼女は寒気を感じてその場にたたずんだ。（p. 557［pp. 253-254］）

8 章になるとついにビジャールは妻を殺してしまう。どうやら蹴られたところが悪くて内臓が破裂したようで、かみさんは 3 日間のたうち回ったあげくに死んでしまった。後は残された 8 歳にもならないラリーがまだ幼い 2 人の赤ん坊の面倒を見ることになる（p. 614[p. 342]）。

10 章で同じ階の住人同士になると、母親の変わりに家事をし、まだ 5 歳と 3 歳にしかならない弟妹の面倒を見ているビジャールの 8 歳の娘ラリーに、ジェルヴェーズは人一倍親しみを感じる。ところが父親のビジャールは彼女らの母親を虐待して殺してしまったにもかかわらず、反省もなく相変わらず酒を飲んでは母親の変わりに今度はラリーに暴力をふるい、御者用の鞭をどこからか手に入れてきてそれで彼女を打ちのめすまでになる。ジェルヴェーズはラリーに深い同情を感じたあげくに、酔っぱらわなければいい父親だとビジャールを許して、辛抱強く家事を切り盛りする彼女に感心して、彼女を見習おうという

気持ちまで持つにいたる。

ジェルヴェーズには、ラリーと同じく幼い頃プラッサンでやはり父親のマッカールに痛めつけられ、酒のために働いた給料までむしり取られた経験があった。また飲んだくれの父親を養うために実を粉にして働いた母親をすでに亡くしていた。彼女がパリに出奔してきたのも飲んだくれの父親の非道から逃れるためであった。それできっと過去の自分に重ね合わせてラリーを見ていたにちがいない。そしてまた現在陥っている我が身の惨状と引き比べて、「洗濯女は、いつか亭主がビジャールのように鞭をとって、自分に踊りをさせるときがくるにちがいないと思っていた。そして、不幸におびやかされているために、自然、少女の不幸に敏感になった。」（p. 694[p. 455]）

12 章ではついにラリーもビジャールの酒乱の餌食になってしまう。その悲惨な最期の姿を見届けた後、ジェルヴェーズは食いつなぐ金もなくなって、吹雪の夜の街を流して歩く。だが相手を見つけることができずにいたところ、最後になって声を掛けた男が彼女にずっと恋心を抱きつづけていたグージェだったという運命の過酷さを知る。グージェの部屋に呼ばれて食べさせてもらった帰り道、ビジャールの部屋をのぞくとラリーの死んだ姿が見えた。「彼女はやっと横になれてうれしいという表情で永遠の眠りを楽しんでいる」ように見えた（p. 779[p. 577]）。ラリーと同じようにジェルヴェーズにも、死はもっぱら救いとして映るようになっていた。

『居酒屋』のジェルヴェーズの立場に立てば、ビジャールはアルコールに溺れた夫のいくつかの側面を極端な形で彼女に突きつけたり、また夫の未来を暗示する不吉な形象を映し出していたし、その妻はやはり酔いどれの男たちに食いつぶされてしまった自分の母親や自らの姿を彷彿させるし、娘のラリーに対しては自らの幼い頃や現在の自分がおかれた境遇を重ね合わせたり、また彼女の死を見て自らの行く末を占うことができたのである。

３．説話論的形象

説話上では今見た登場人物たちがアルコールのエピソードの担い手としてもっとも重要だが、その他にも『居酒屋』には彼らに劣らず重要な役割を持った形象が文字通り万遍なくちりばめられている。たとえば 1 章でジェルヴェーズの目に映ずる不吉な雰囲気を漂わせた屠畜場やラリボワジエール病院というのは、結局ジェルヴェーズたちがアルコールのせいで家畜のように屠られたり、また無惨に死んでいくを運命を暗示する施設として早くから意図的に語り手がジェルヴェーズの視線を通して読者の目に提示したものだと見なすことができる。説話的に重要な意味を持ったこのような形象は、ジュネットのことばを借りると「布石」と名付けられるのだが、ゾラにあってはそれは将来に何らかの事柄の生起を約束するので、単なる布石よりも「予告」として格上げでき、それらを見慣れたゾラの読者に対して後々まで一種のサスペンス感を持続させてくれる。それゆえ、こうした形象は、本来的には物語内容に属するにしても、物語言説のレベルにある語り手が説話を展開するために登場人物の世界から意図的に選択した、物語内容を制御するための足場となる重要な形象だとみなせる。『居酒屋』はクーポー、ジェルヴェーズ、ビジャールという登場人物たちがアルコールの悪弊に溺れ込んでいく様を直接描写した章が大半だが、このような形象を勘案すれば、結局『居酒屋』13 章を通じて、アルコールに関わりのない章は

皆無となる。

以下「説話論的形象」名付けられうる重要な形象や出来事を説話的側面を強調しながら摘記しておこう。

2 章、1850 年 5 月か 6 月、コロンブの＜居酒屋＞でクーポーがジェルヴェーズに結婚の申し込みをする。ここにはすでに見てきたように不吉な予兆を漂わせる「蒸留器」が登場していた。「蒸留器」は後にジェルヴェーズのいやな予感通りにクーポーや彼女自身を破綻に追い込む。

3 章、1850 年 7 月 29 日、クーポーとジェルヴェーズの結婚式。宴席にアルコールは付き物である。ただしそれが度を超すと、人々に正気を失わせ、祝いの喜びをいがみ合いへと変えてしまう。ここで早くもアルコールの弊害がそれとなく示されている。

4 章、1854 年 5 月のクーポーが屋根から転落するという事故から夫婦の不幸の芽が萌えだす。

なぜなら、5 章で 1855 年 4 月に開業したジェルヴェーズの洗濯屋の活発な仕事ぶりを描いた場面で、クーポーはなかなか働こうとはせず、そのかわり最初はワインではあるが外でしこたま飲んでは酔っ払って帰ってくるからだ。やがてそれが高じてクーポーはあれほど固く自分にも人にも飲まないと誓っていたブランデーに手を出してしまう。ビジャールの酒乱の模様が話題にされて、すでにジェルヴェーズの周囲にはアルコール中毒の暗い影が差してくる。

6 章の最後は 1858 年の春のことである。ジェルヴェーズはコロンブの＜居酒屋＞でブランデーを飲んでいるクーポーを目撃すると、その足でビジャールが酔って妻を殴り倒す生々しい場面に立ち会い、その直後にまた家で酔って帰ってきた夫が暴力的な様子を示し始めたことに対して、ビジャールの姿を重ね合わせざるをえないという経験をする。ビジャールが夫クーポーの未来の姿を彷彿させる点では、ビジャールもまた先に示した「蒸留器」と同じ「予告」の類であり、またむしろ読者にとってはこのように予告の形象が作中に満ち満ちていることを勘案すれば、この場面はジュネットの物語言説における重要な概念装置としてある先説法（prolepse）の一種とも見なせる。ちなみにこの章では、ジェルヴェーズのところにかつての情夫ランチエが近所に姿を現したという情報がもたらされる。実はそれを彼女に教えたのはヴィルジニーである。ヴィルジニーは 1 章のヌーヴ=ド=ラ=グット=ドール通りの洗濯場でジェルヴェーズと大乱闘をし、今ではジェルヴェーズが以前新婚時代を過ごしたアパルトマンに住み、やがて 9 章になると彼女の後を襲って洗濯屋になるという、ジェルヴェーズと深い因縁を持った相手であった。このようにヴィルジニーの動静も、先の「予告」とは趣を異にすると言え、説話上では重要な伏線を構成して、説話のレベルから見ても重要な意味を持つ。

7 章、1858 年 6 月 19 日のジェルヴェーズの誕生会。誕生会の最後に彼女の目の前にランチエが 8 年ぶりに姿を見せる。夫のクーポーは彼に反発すると思いきや、表面的には彼と親しく付き合うようになってしまう。

8 章。1860 年夏ビジャールが酔ったあげくにかみさんを蹴り殺してしまったことが話題にされる。同じ年の 11 月初め頃のクーポーの様子が詳細に描写される。クーポーは家に同居するようになったランチエに誘われるがままに外で飲み食いして歩き、彼のほかにもコロンブの＜居酒屋＞などの悪い仲間づきあいにはまりこんで、アルコールにどっぷり漬

かりこんでいた。章の最後ではジェルヴェーズが夜ランチエと帰ってみると、酔って 3 日ほど家を空け帰ってこなかったクーポーが、酔いつぶれて夫婦のベッドを寝られないほど反吐で汚していびきをかいて寝ていた。とても彼の横には寝られないと、彼女はあっさりランチエの部屋で彼と同衾する。一般読者の顰蹙を大いに買うことになったにしても、ゾラはこのようにしてアルコールは道徳観をも麻痺させるということを赤裸々に示したかったにちがいない。

9 章、1861 年夏頃、ジェルヴェーズにはすでに以前の勤勉な面影はすっかりなくなり、洗濯屋の家賃支払いは滞るし、一家の日々の生活費も借金でしのがなければならなくなった。しかしそうした生活の憂さ晴らしをするためか、逆に酒にはけ口を見つけてカクテルの類とは言えアルコールに日常的に手を出すようになる。またクーポーの体には酒の飲み過ぎの影響が出てきた。脂肪によるいわゆる酒太りである。1862 年 1 月、ジェルヴェーズの洗濯屋はヴィルジニーの手に渡る。

10 章、1865 年 1 月頃、ビジャールの娘への虐待がアルコールに関するエピソードとして大きく取り上げられている。ジェルヴェーズはその娘ラリーを自らと同一視して、彼女に対する深い同情を禁じえなかった。他方でクーポーの体の変調は日増しに募り、明瞭な慢性アルコール中毒症として出現してくる。1866 年 3 月ついにクーポーはアルコール性譫妄のためラリボワジエール病院に入院する。高アルコール度のスピリッツ類に手を出して以来およそ 10 年後という計算になる。その後妻のジェルヴェーズも、ふと立ち寄ったコロンブの＜居酒屋＞でブランデーの味を覚えて、それに溺れるようになる。

11 章の 1868 年になると、すでにクーポーがアルコール中毒による入・退院を 7 度繰り返したと語られる。妻のジェルヴェーズも彼に劣らずアルコール狂いとなり、口実を設けてはコロンブの店でブランデーにありつこうとする。

12 章の 1869 年 1 月、ラリーは父親ビジャールの酒乱ために母親に続いて犠牲になってしまう。ジェルヴェーズは貧乏暮らしが底をつき、金があればすべて酒につぎ込んでしまう夫のクーポーからもそそのかされ、街で客を拾おうとする。

13 章の 1869 年におけるクーポーのサン=タンヌ病院での振戦譫妄による狂死、享年 44 歳。それに呼応するような妻ジェルヴェーズの餓死、享年 41 歳。

物語内容のレベルで見ると『居酒屋』には 1850 年から 1869 年までのおよそ 20 年間の出来事が叙述されている計算になる。各章を時間の経過と照合させると、1~3 章は 1850 年 5-7 月の出来事を描いており、比較的時間はゆっくりと経過する。4~6 章の間に 1851 年から 1858 年が経過しスピードは速まる。ちょうど真ん中に位置する 7 章は 1858 年 6 月 19 日に開かれたジェルヴェーズの誕生会の 1 日に当てられている。[40] 後半の 8~11 章までは 1858 年 1868 年が経過し、各章はそれぞれおよそ 3 年の間に起こった出来事をクーポーの飲んだくれの 1 日、クーポーばあさんの葬儀、父親からラリーが受ける虐待、ナナの早熟と放蕩などを示すエピソードを中心に展開される。12 章は 1869 年 1 月の酷寒の 1 日で、ラリーの臨終の場面とジェルヴェーズの客引きがその章の大部分を占める。13 章も前章のおよそ 1 週間後に起きたクーポーの数日間に及ぶアルコール中毒による狂死のために当てられている。

以上の簡単なエピソードの摘記から『居酒屋』の説話の順序における特徴として指摘できるのは、この小説が説話の速度に緩急はあるものの物語内容をほとんど時系列順に並べ

ており、たとえばプルーストの『失われた時を求めて』におけるように大がかりで組織的な時間的断絶ないし想起による時間的順序の逆転という説話の仕方は存在せず、その意味では単純で古典的と言える説話の仕方を採っている、ということである。

次にエピソードに関して言うと、ゾラが当初からアルコール漬けになった民衆の環境を描くことを『居酒屋』のそもそもの狙いとして掲げていたのだから当然のこととは言え、アルコールに関わるエピソードが圧倒的に多いことである。つまり類似のエピソードの繰り返しである。ところで説話論の観点からするなら、物語内容を指し示す登場人物たちの世界からこのようにアルコールに関する出来事が重点的に選択されているのは、もっぱら『居酒屋』の語り手が物語言説として行う実践行為の結果と見なすことができる。したがってこれらのエピソードのあいだには説話に関する関係が大前提になっている。上述したエピソードはすくなくともアルコールに直接関係するものだけだが、しかしたとえば6章の鍛冶工場におけるエピソードも、グージェが 40 ミリのボルト鍛造競争でクーポーの飲み仲間の＜辛口＞に勝つのは、彼がアルコールには決して溺れない「真の労働者」だからである、とアルコールに関係づけて読みとることができる。このように『居酒屋』には直接・間接にアルコールに関連させられるエピソードが、そうしようと思えばふんだんに散らばっているとみなせる。他方でアルコールに関する同一のエピソードはいずれも章を経るにしたがって深刻さの度合いを増幅させる。こうして作中のエピソード間の関係は、先に挙げた物語言説に欠かせない「布石」、「予告」、「伏線」――これらはジュネットのナラトロジーの概念体系では先説法に属する――の効果もあずかって、章を進むに連れて次第に肥大するネットワークと化し、物語内容では先行するものをも含めて周囲の一見すると無関係であるようなものを巻き込みながら、渦状の一体的な運動体となって最終章へと突き進んでいくように見える。

ところで、そもそも慢性アルコール中毒というのは、高アルコール飲料を多量に長期にわたって飲み続けることによって発生する病気であり、発生のメカニズムを別にすれば因果関係は単純でわかりやすい病気である。そしてその発病には時間が必須の要件なのだが、それも時間を単純に継起的に積み重ねていけば十分であった。このような慢性アルコール中毒をテーマにする場合、最適な説話の形式としてもっともふさわしいのは、言うまでもなく過去から未来へと向かう一方方向の単純な形式であろう。つまり物語内容を慢性アルコール中毒の進展に沿うように取捨選択して組織し、それを過去から順にアルコール嗜好から中毒症の発生、そして最終的に振戦譫妄による狂死にいたる一連の過程として提示することである。ゾラにとってこうした単線の一方向でのみ時間処理をする説話の形式が前提にあり、たまたまアルコール中毒というテーマがそれに見事に適合したと見なすか、それともアルコール中毒というテーマに適合させるために数ある中でも単純な説話形式を意識的に選び取ったと見なすかは別にして、すくなくともアルコール中毒というテーマと『居酒屋』の時間に関する説話形式は一体となって効果を上げていると言えるかもしれない。

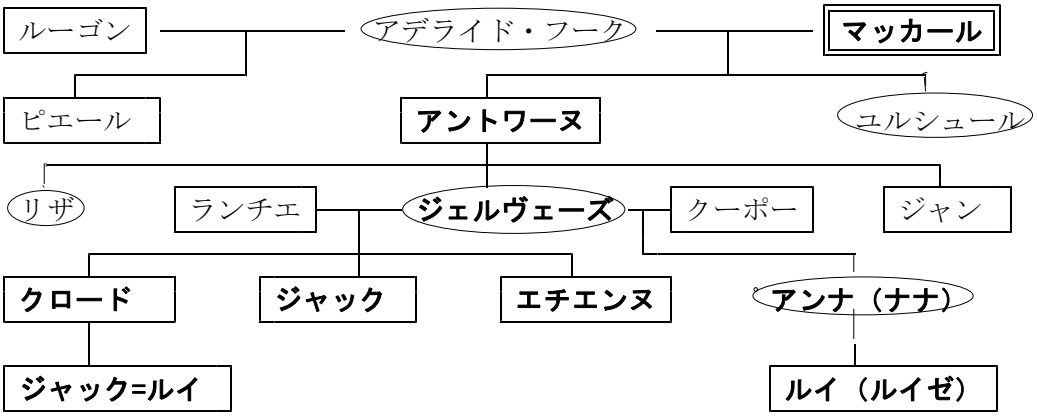
V章　『居酒屋』後のマッカール家の人々

１．アルコール中毒遺伝としての変性症

『居酒屋』の主人公クーポーには親からのアルコール中毒に関する遺伝的な影響があったとしても、われわれがここまで検討してきたかぎりでは、彼が親と同じようにアルコール中毒に陥ったのはあくまでもクーポーのような労働者の置かれた環境によると、ゾラが考えようとしていたことは了解されたであろう。しかし「叢書」全体を見渡すなら、アルコール中毒は『居酒屋』以前にも、それ以降もマッカール家の人々を苦しめ続ける。そこには社会問題とは別の新たな問題が提示されている。それはアルコール中毒に毒されるのがどうしてマッカール家の人々にかぎられるのかという問題である。このように『居酒屋』のアルコール中毒については、労働者の環境を中心とした社会問題としての一般的側面のみならず、われわれは特殊に「叢書」の説話論的な問題として検討することも余儀なくさせられるのである。

まず、これまで検討してきた登場人物を含めて、アルコール中毒と深く結びついているマッカールの家系を図示しておこう。

【マッカール家の系図】［アルコール中毒患者とその変性症遺伝患者はゴシック体で表示］



さて、マッカール家の子孫で第 4 代目にあたるアンナ・クーポー、通称ナナは、まだ両親がアルコール中毒に陥る前に生まれたにしても、遺伝の上で彼らがともにアルコール中毒の家系に属しているため、その影響をもっとも受けやすい人物と見なすことができる。ナナは『居酒屋』の 11 章でその後の淫奔ぶりを早くも窺わせていたが、「叢書」第 9 巻『ナナ』（1880）になると、主人公の高等娼婦として自らの肉体の魅力をいかんなく発揮して貴族たちを堕落の道に誘い込んでは、その目に余る無軌道、不道徳ぶりは周囲から多大の顰蹙をかうことになった。

彼女は「家系樹」によると、1869 年版の段階で「父親型選択（élection）だが、身体上は母親、次いで父親似。浮かれ女。悪徳の遺伝（Hérédité du vice）」として構想されていた。それが『居酒屋』と『ナナ』の出版の間に位置する「家系樹」（1878）では、「融解性混合（mélange soudure）。精神性は父親が優勢で、身体は母親似。ヒステリーに変化した酩酊癖遺伝。背徳状態（État de vice）」という記述へ変わり、「叢書」全 20 巻が完結したときの 1893 年版「家系樹」では「融解性混合。精神性は父親が優勢。身体は感応遺伝（influence）によって母親の最初の愛人ランチエに似る。精神・身体上で性倒錯（perversion）に変化したアルコール中毒遺伝。背徳状態」へとまた書き換えられている。

いくつかの表現については解説が必要だろう。まずナナの書き換えられた遺伝類型につ

いては、両親からの「混合遺伝」のうちで、「両親の要素が同一身体内において錯綜ないし併置されて結合した」「融解」[41]型として定義される［この遺伝型を含めたルーゴン=マッカール一族全体の遺伝類型一覧は第 1 編第三部「ルーゴン＝マッカール叢書の肺癆」中の「遺伝類型」図（60 ページ）を参照］。しかも最後の「家系樹」になると、この時代にまことしやかに語られていた、最初の男の影響力が別の男の子供にも及ぶという「感応遺伝」という憶説まで付加されている（『19 世紀ラルース』補遺、「遺伝」の項参照）。また「背徳」はナナに関して使用されるとき、売淫やナナの同業者サタンとのレスビアニスムないし性的放縦を指している。

しかしナナの遺伝における最大の問題は、アルコール中毒に関して「ヒステリーに変化した酩酊癖遺伝」とか「精神・身体の倒錯に転化したアルコール中毒遺伝」と、我々の常識ではまったく受け入れがたい記述がなされていることであろう。この点に関してはすでに第 1 編で述べておいたように、ゾラが自らの作品によかれと思って独自に荒唐無稽の遺伝神話を操ったからではなく、当時の病理学がそうした主張をして彼に裏付けを与えていたからにほかならない。

『19 世紀ラルース』の「遺伝」の項目を参照すると、アルコール中毒は、神経系を介することによって、同じ精神疾患のカテゴリーに属すると見なされた精神病、倒錯的欲望、犯罪性行、自殺願望にも転化する可能性を持つと記されている。それよりももっと専門的な知識でもってゾラの「叢書」の病理学思想に裏付けを与えていたゾラのアスクレピオスたちの中で、とりわけゾラ自身が断片的ノートを残した B・A・モレルの『変性症』(1857) は、[42] 人が内に抱えるようになった病的要素が遺伝を介して次第に変化・増幅していき、最終的には数世代を経過するあいだに、遺伝性欠陥のせいで早世や生殖不能によって血筋が途絶えてしまうという変性症（dégénéréscence）という亜流の医学理論を主張していた。後に民族滅亡のシナリオと恐れられたこの変性症は、[43] モレルによれば、神経系を冒す有毒物質を原因とする。当時は疾患も含めて遺伝的特質は神経系を介して親から子へと伝わると考えられていたから、モレルが変性症という自らの主張に関して神経を冒す中毒疾患のなかでもっとも重大なものとしてアルコール中毒を明確に名指して著書を構成したことは、[44] 彼の主張の説得性にその具体性と論理性を付与することになった。

モレルの変性症がゾラの「叢書」に与えた影響の著しさは、モレル自身が報告する症例によって測ることができる。4 番目の観察例ではある一家が「第 1 世代：不道徳、性的変態、過度のアルコール摂取、獣的な愚鈍。第 2 世代：遺伝の酩酊癖、躁病的発作、全身性麻痺。第 3 世代：節酒、心気症的（hypocondriaque）性行、憂鬱性精神病（lypémanie）、体系的迫害妄想、殺人衝動。第 4 世代：知能未発達、16 歳時の最初の躁病発作、愚鈍（stupidité）、白痴状態（idiotisme）への転化、そしてこの一族は決定的に消滅すると予測される」と紹介されていた。[45] ところでそれはちょうど、第 1 世代のマッカールからアルコールに溺れるアントワーヌ、ジェルヴェーズを経て、第 4 世代の妄想から殺人衝動に駆られる典型的なジャック（『獣人』）にいたり、最後に第 5 世代の子孫になると子供のうちに早世してしまって血筋を絶やす結果になった、マッカール家のジェルヴェーズの系統のモデルとしてうってつけであろう。

そこで話をナナに戻すと、アルコール中毒遺伝は彼女の場合「家系樹」にはっきり記されていたように、マニャンの言う典型的な遺伝疾患の「喝酒症」［前出 90 ページ］でなく、

当時病気の一種と考えられていた性的放縦さや道徳的堕落に姿を変えて現れている。したがってナナの人となりを遺伝との関係から紹介している下記のテクストも、フォシュリーという記者の書いた新聞記事であるから誇張された比喩的表現にすぎないと見るより、そこには当時の科学的憶説が披瀝されていると見なしたほうが適切かもしれない。

> 『金蠅』という題のフォシュリーの記事は、一人の娘の物語で、4、5 代酩酊癖（ivrogne）に冒された家系に生まれて、多年にわたる貧困と飲酒の遺伝のために血が汚され、それが彼女にあっては、性的な神経の変調（détraquement nerveux）という形で現れているというのだった。この娘はパリの場末の舗道の上で成長し、十分な肥料を施した植物のように、丈高く、美貌で、素晴らしい肉体を持っており、自分の祖先である乞食や浮浪者たちのために復讐の日夜を送っている。彼女を通じて、庶民の間に醸成された腐敗堕落の風潮は、貴族階級に及んで、これを腐敗させつつある。彼女自身にその意志はなくとも、その雪をあざむく腿の間でパリを腐敗解体させ、あたかも女が月々牛乳を変敗させるように、パリを変敗させる破壊の酵母、自然の力のごときものとなっている。［・・・］この女は、汚物から飛び立った一匹の金色の蠅である。路傍に放置された腐肉から死を取り来たって、羽音も高く踊り狂い、宝石のようにきらめきながら、宮殿の窓に飛びこみ、人々の上にちょっととまるだけで彼らを毒する金蠅である。[46]

ただし注意しておかなければならないのは、両親がアルコール中毒に冒されていたからと言ってその子孫にも必然的にそれが何らかの遺伝疾患として現れるのでなく、ゾラがクーポーやジェルヴェーズに関しても強調していたように、環境が大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。『居酒屋』の語り手はナナの道徳的堕落を何が何でも遺伝の結果と見なすのでなく、アルコール中毒と同じように、そこに環境の大きな影響を見いだしている。

> まったく、ナナは仕事場ですばらしい教育をうけたものだ！ なるほど、彼女にはもともとそういう下地があったにちがいない！ だが、貧乏と悪徳（vice）にむしばまれているたくさんの娘たちと交わることで、それがすっかり完全になったのだ。そこで、おたがいが折り重なるようになって堕落していった。いくつか腐ったリンゴがあると、籠全体のリンゴが腐ってしまうようなものだ。(『居酒屋』、p. 717［pp. 486-487］)

クーポーとジェルヴェーズの子供であったナナと同じように、ランチエとジェルヴェーズから生まれた 3 人の子供もマッカール家の遺伝による根深い影響は免れがたかった。長男のクロードは「叢書」第 14 巻『作品』（1886）で主人公の画家として登場している。彼は「母親似で、母親選択型。神経質な芸術家で、天才的知性が自らをむしばむ」（1869 年の「家系樹」）。それが 1878 年には「融解性混合（mélange fusion）型。精神は母親が優勢で、身体も母親似。芸術的天性に変化した神経症の遺伝」と変更され、それがそのまま彼が主人公として活躍した後の 1893 年の「家系樹」にも引き継がれている。クロードは結局自らが希求していた理想的作品を完成させられずに自殺する、つまり自らの天才的知性によってむしばまれて自滅する。クロードの場合母親のアルコール中毒は神経症というい

わば神経系の総称的な疾患を病名に当てられている。元をたどれば、それは母親のジェルヴェーズから祖父アントワーヌ・マッカールを経て、さらにルーゴン=マッカール家の始祖アデライド=フーク（ディードおば）までさかのぼる、一族の根元的宿痾であった。

三男のエチエンヌは、「叢書」第 13 巻『ジェルミナール』（1885）で、ノール炭田地帯のモンスー鉱山で働き、そこでストライキを指揮して活躍する。エチエンヌに関する遺伝の記述は最初の 1869 年に「母親選択型、身体は最初母親、後に父親に似る。殺人者。狂気に変化した酩酊癖の遺伝／両親の酩酊癖の影響で殺人に導かれる［異本］」で、それが 1878 年版では後半だけ「殺人狂に変化した酩酊癖の遺伝。犯罪的段階」と改められるが、最後の 1893 年の家系樹にはこれらに類する遺伝疾患の記載は省かれ、その代わり簡単に「拡散性混合（mélange dissémination）型。身体は最初母親、後に父親に似る」と記される。ここで言われている「拡散性」というのは、両親から伝えられる性質が子供に「融解性」ほど目立たない程度に、所々で見られるという意味である。ところでエチエンヌのところで遺伝疾患の記述が最後の 1893 年になって消されたのは、「叢書」第 17 巻『獣人』（1890）を執筆するにあたって、ゾラがそれ以前には想定されていなかった次男のジャックを急遽案出して主人公としたことが原因である。つまり、当初エチエンヌに想定されていた「殺人狂に変化した酩酊癖の遺伝」は、『獣人』の主人公ジャックの遺伝疾患としてそっくり移行することになり、ジャックに関して「母親型選択、身体は父親似。殺人狂に変化したアルコール中毒の遺伝。犯罪的段階」（1893 年の家系樹）と記されると同時に、エチエンヌの欄からは削除されるにいたったのである。だがこうした改変が後追いであった証拠に、『ジェルミナール』のエチエンヌに関する遺伝の記述には何度か『獣人』のジャックと重なるところが出てくる。ゾラが「叢書」全体の整合性を図ろうとしても、すでに『ジェルミナール』が出版されてしまった以上、それはできない相談であった。

エチエンヌとジャックに共有されざるを得なかった、こうしたアルコール中毒遺伝に関するテクストの一例を挙げよう。エチエンヌがアルコールによって駆り立てられる怖れのある殺人の狂気を自分から口にする場面である。

> 「たしかにおれは酒を飲んでいた。酒を飲むとまるで気違いになっちまうんだ。自分にも、他人にも噛みつくようになるんだ・・・。まったく、コップ 2 杯飲んだだけでも人に噛みつかなきゃいられねえんだから・・・。それから 2 日間はまるで病人さ。」［・・・］
>
> 「酒はだめね」と彼女［カトリーヌ］は真顔で言った。
>
> 「いや、こわがるこたあねえさ、自分のことをよく知ってるから！」
>
> そう言って彼は頭を振った。ほんとにブランデー（eau-de-vie）を憎んでいたのだ。それは飲んだくれ（ivrogne）の血筋の最後の子孫の憎しみであり、彼にとっては一滴の酒でも毒となったほど、アルコールにひたり、そのために狂った祖先全部のために自分の身体で苦しんでいたのだ。[47]

5 部 7 章でシャヴァルを倒したときのエチエンヌの満足感は、『獣人』でセヴリーヌを殺害したときに感じ取るジャックの充足感と同一である。他方、『獣人』の 2 章で、ジャックもまたアルコール中毒遺伝に起因する怖れをつぎのように独白していた。

ところで彼は酒は飲まないし、ほんの一滴のアルコールでも自分が狂ってしまうと気づいてからは、コップにちょっとブランデーを飲むのでも断ってきた。それから彼は他の人たちのために、酒飲みの父親や祖父たちのために償いをしているのだと思うにいたった。代々酔っぱらい（ivrogne）の先祖のせいで、血は損なわれ、身体にはだんだんと毒が回り、野生返りをして、女を食べるオオカミたちとともに森の奥へと連れ戻されているんだ。[48]

エチエンヌは目の前でカトリーヌが暴行されているのを見てやむにやまれぬ義憤からシャヴァルを殺害したのだから（『ジェルミナール』7 部 5 章）、エロティシズムの暴力的な昂揚から自分の恋人セヴリーヌを殺害するジャックの場合（『獣人』11 章）と事情はかなり異なる。だがゾラの筆致からは、遺伝の症例記述にしたがって、2 人の主人公には同じように「獣的な」殺害衝動の無意識的欲求を満たさせようとした意図をはっきり窺うことができる。

アルコールは人を狂わせる。だがジャックやエチエンヌはアルコールを断っても狂わせられる。彼らにあってはアルコール中毒遺伝のため神経を侵されてしまっており、アルコールを飲まなくても狂気が発動されてしまうのだ。これこそ「殺人狂に変化した酩酊癖遺伝」の発現以外の何ものでもない。

マッカール家はこうして遺伝アルコール中毒症によって代々荒廃させられ続ける。第 1 代アデライド・フークの愛人であった飲んだくれのマッカール、「精神的にも、身体的にもその父親似」（1878 年、1893 年の家系樹）で、最後はアルコールの自然発火によって燃え尽きた第 2 代アントワーヌ・マッカール、第 3 代のジェルヴェーズ、そうして「選択」型であれ「混合」型であれ、いずれにしろ遺伝によってジェルヴェーズの毒された血を受け継いだ 4 人の子供たち、彼らそれぞれの生涯が程度の差こそあれその荒廃を赤裸に物語っていた。

この呪われた血はまだその先の第 5 世代の子孫にも決定的な影響を与えている。「母親型選択」遺伝とされたナナの子供ルイゼは最初から病弱で、当時流行した天然痘にひとたまりもなくたおれてしまう（『ナナ』14 章）。ルイゼの享年はわずか 3 歳であった。もう一人クロードの子ジャック=ルイは「父親型選択」遺伝で、したがってアルコール中毒の呪われた血を受け継ぎ、9 歳でやはりルイゼのように若死にする（『作品』9 章）。死因は水痘症（hydrocéphale）だが、この水痘症も当時の病理学によれば、アルコール中毒の症状のひとつとされた水腫（hydropisie）のカテゴリーに属している（『19 世紀ラルース』補遺、「アルコール中毒」の項参照）。ジャックは格闘の末動く機関車から転落死し、子孫は持たなかった。エチエンヌは『ジェルミナール』で描写されたモンスーのストライキ後パリ・コミューヌに参加し、それで有罪とされてニュー・カレドニアのヌーメアに流刑となる。現地で結婚して何人か子供をもうけたらしいが、その子については不明ということである（『パスカル博士』5 章）。「叢書」の舞台とされたフランスという限定つきだが、結局アルコール中毒症というルーゴン=マッカール家を荒廃させてきた悪性遺伝の血は第 5 世代ですべて尽き果てたのである。

２．結び：説話法としての進化論とアルコール中毒

これまで我々の見てきたマッカール家の人々は、まさしくエチエンヌやジャックの述懐通り、第 1 世代から第 5 世代まで遺伝の悪弊に苦しみ、それから逃れようとしてもがき、そうした彼らの抵抗もむなしく終わる。一言で言うなら彼らの遺伝アルコール中毒は一族の上にまるで人類の原罪のようにとりついている。そうしてみると遺伝というのはまるで負のベクトルとしてしか機能しないように見える。

「叢書」最終巻で医者のパスカル博士は自らもその一員であるルーゴン=マッカール家の人々について語り、そうした宿命的なアルコール中毒遺伝を含めて、ゾラの依拠した遺伝に関する当時の医学思想を思わせる見解を披瀝している。

> 確かにそうなのだ、［・・・］一族の人々は変性症に侵された（dégénèrent）。ここにあるのはまったくの衰弱、急速な退化（déchéance）だ。まるで私たち一族は享楽に駆られ、欲望を満足させながら、あまりに早く燃えつきてしまったかのようだ。ルイゼは幼くして亡くなった。ジャック=ルイは半ば知恵遅れで、神経を病んでいた。ヴィクトールは野蛮状態に逆戻りし、どのような闇の中を駆けているかわからない。あの哀れなシャルルはあまりに美しくてひ弱だ。これが家系樹の梢なのだ。[49]

なるほどパスカルは、アルコール中毒のような悪性の遺伝疾患のため一族が衰退を繰り返し、これから先には消滅してしまう可能性すらある、と不吉な予言を述べている。それは自らが長年医者として遺伝の研究に取り組んできた結果得ることのできた科学者的な予言でもある。彼の述べた一族の消滅に関する仮説はまたルーゴン=マッカール家のような一家系の枠を越えて、やがてフランス人のように一国民全体をも、そして人類全体をも襲うと考えることもできるかもしれない。こうした人類滅亡のシナリオは、B・A・モレルの『変性症』の跡を受けた医学者や思想家たちが説いたものだ。ルーゴン=マッカール家の第 5 世代に位置して、悪しき遺伝疾患を先祖から生まれながらに植え付けられた子孫は滅亡した。したがって、ルーゴン=マッカール一族消滅という仮説を拡大解釈すれば、この「ルーゴン＝マッカール叢書」は遺伝のために滅亡に向かう人類のアレゴリーというわけだ。

だが、ゾラの「叢書」を「変性症の理論」の具体的適用だとみなして終わることのないように、我々に発せられた警告めいた反証が存在している。「叢書」のルーゴン=マッカール家最後の第 5 世代の中には、一族の生命の火が燃え尽きるように早世していった象徴的な末裔ルーゴン家のシャルル・ルーゴン、それからすでに見たマッカール家のジャック=ルイとルイゼの他に、彼らと対照的に『パスカル博士』の最後で、クロチルドが人類の未来への希望を託そうとする、パスカルとの間に誕生したまだ名もない子供が存在している。その乳呑み児の小さな口に乳房を含ませながら、母親のクロチルドは夢想する。

> クロチルドの心には母性的な情熱の衝動が湧き上がった［・・・］。それは願いであり、祈りであり、未知の神に向けるかのように、未知の子供に向けられていた。明日を生きる子供に、きっと生まれてくる、次の世紀が待ち望んでいる、民衆を疑いと苦しみから救い出してくれるだろう、天性に満ちた、救世主のような子供に向けられて

いた。国家を再建する仕事のためにその子供は生まれてくるのではないだろうか？
実験を再開し、家を再建し、とまどう人間に確信をもたらし、正義の都を築くだろう。
そこでは労働という唯一の法が幸福を保証するだろう。[50]

クロチルドの乳呑み児はこれまで我々のたどってきたアルコール中毒の呪われた血を受け継いではいない。だからこそその子供は、「ルーゴン=マッカール叢書」の枠を越えて生き延びることができるし、また一族の未来を、ひいてはフランス国民や人類の未来をも託せる可能性を持っている。またマッカール家の中にもアルコール中毒遺伝を免れていた第二世代のユルシュール・マッカール、第三世代ではジェルヴェーズの姉弟リザ・マッカール、ジャン・マッカールがいたし、その中の特にナナやクロードのいとこに当たる子孫は健全な身体や精神の持ち主として育っている。

マッカール家に猖獗をきわめるアルコール中毒やその変性的遺伝疾患に目を奪われると、「叢書」に影響を与えていた同時代の遺伝思想の一面だけが浮き彫りにされて、その全体像のほうは見失われかねない。一方で呪われた遺伝疾患によって子孫の消滅を引き起こし、それと対照的に他方で遺伝の悪影響を免れて人類の未来を託すことのできる子孫の繁栄を促すような、言い換えれば本論のテーマであるアルコール中毒の弊害とその重大な遺伝的影響を包摂しながら、それに抗して人類の未来を展望もしうるような遺伝理論が、結局は「叢書」の説話を全体として支配するような遺伝理論がないものだろうか。

近代的な遺伝学の礎を築いたメンデルの法則はすでに 1865 年に発表されていたにもかかわらず、1900 年にオランダのド・フリースがその意義を見いだすまで、その真価を認められることはなかった。とは言え 19 世紀後半は近代遺伝学にとってもその誕生の前夜に当たり、遺伝に関する所説はにぎわいを見せていた。フランスの遺伝学界もその例に漏れず活況を呈し、ゾラが主に依拠したリュカを始め、すでに触れたモレル、そして狂気と遺伝の関係の究明に努めたモロー・ド・トゥールなどの名前がすでにゾラの「叢書」の執筆時には人々の口から盛んに語られていた。ドラモットの指摘に従うなら、この三者は同時代に著作を発表し、同じ思考の体系を共有している。そして彼らの理論の特徴は、遺伝がとりわけ病的性格や欠陥しか伝えず、さらに悪いことにはそれらをもっぱら変貌、増幅させる方向にしかはたらかないとみなしていることだった。[51]

こうした一方的に淘汰という負のベクトルのみを強調する遺伝理論に対して、それと表裏一体の関係にある生存の持続をも積極的に肯定する理論、すなわち双方を自然淘汰ないし適者生存という概念で説き明かそうとする遺伝の一般理論が同時代に人々の大きな支持を集め始めていた。それがダーウィンの進化論である。彼の主著『種の起源』はイギリスで 1859 年に発行され、そのフランス語版が 1866 年に出版されている。ダーウィンの進化論は「ダーウィニズム」としてフランスへ急速に普及・浸透していった。何度も引く『19 世紀ラルース』は 1866~1876 年に出版されているが、そこには「ダーウィニズム」がダーウィンに先行したラマルクなどの進化論から説き起こされて、7 ページにわたって詳細に説明されている。出発点にあったダーウィンの理論が動植物の性質や形態の変異現象に関する実証的で、厳密な研究であり、しかもそうした変異が遺伝を通して種として確立される途方もなく長い時間を前提としていることは言うまでもない。しかしダーウィニズムが駆使した自然淘汰（sélection naturelle）ないし適者生存（survivance des mieux adaptés）と

いう概念装置や生存競争（concurrence　vitale）と命名された生物種の盛衰からなる自然史の観点が人間社会にもすぐ適用され、ハーバート・スペンサーの著作を通して社会進化論として早くも 1870 年代からフランスでも流行の兆しを見せ始めていた――スペンサーの『総合哲学体系』全 10 巻（1862 － 1896）の第 1 巻『第一原理』（1862）は 1871 年に仏語版が公刊された。

ダーウィンの名がゾラの「叢書」に登場するのは『パスカル博士』の第 2 章でパスカルが遺伝理論の歴史を簡単に紹介するときと、ダーウィニズムの社会への適用を『ジェルミナール』において例示するときである。

> エチエンヌは今ダーウィンにたどり着いたところだった。彼は 5 スーの一冊本に縮め通俗化したその断片を読んだ。そしてこのよくはわからない読書から生存闘争（combat pour l'existence）についての革命的な解釈を作り上げ、痩せた者が太った者を食い、強い民衆が蒼ざめたブルジョワをむさぼりつくすと説いた。しかしスヴァーリンは激昂し、貴族的な哲学者たちだけに都合のいい有名な淘汰説（sélection）を説く、ダーウィンというあの科学的不平等論の使徒を受け入れる社会主義者どものばからしさを滔々と攻撃した。それに対し相手は頑固に理屈を述べようとした。[52]

ゾラは、エチエンヌのように階級闘争のために都合よく解釈したダーウィニズムに与することはないし、またロシアのアナーキスト、スヴァーリンのようにダーウィンの理論を一顧だにしない、ということでもない。

ところで科学哲学者のミシェル・セールはまったく独特な見地から「叢書」の最も重要な相関テクストのひとつにダーウィンを挙げている。ただしそれはすでに見たリュカの場合のようにだれの目にも明らかな直接的な利用という意味においてでなく、ダーウィンの語りがゾラの「叢書」の語りに対して、結晶学で化学組成は異にしても結晶構造がほとんど同じものを指すときに使われる用語で表現して、類質同像（homéomorphe）として機能していると言う。[53] そこで改めて我々もまたルーゴン=マッカール叢書全体を直接的な物語内容よりも説話のレベルで見直すと、わずか 20 年足らずの第二帝政の期間が対象とされているにしても、ルーゴン=マッカール家の人々がそこでさまざまの生き方を通してダーウィン的な生存競争を繰り広げ、それがまたダーウィン的な自然淘汰ないし適者生存と命名してよい人間模様として描写されていることに気づかされるであろう。

そこで最後に「叢書」における遺伝アルコール中毒症に関する結論を述べておこう。マッカール家のアルコール中毒に冒された子孫は第 5 世代で壊滅したのだが、それはダーウィニズム的に言うと環境に適応できずに自ずと淘汰されたと言い換えることができる。アルコール中毒症は一部のマッカール家の血統を滅亡させることによって説話のレベルではまさしく自然淘汰の否定的原理として機能した。このようにしてアルコール中毒とその遺伝の変性症は「叢書」の説話法としてマッカール家の呪われた子孫を消滅に導いたと結論づけることができよう。

【注）

1. Émile Zola, *La Fortune des Rougon, in Les Rougon-Macquart,* vol. I, coll. Pléiade, Gallimard, 1960, p. 43［邦訳『ルーゴン家の誕生』伊藤桂子訳、論創社、2003 年、p.51］. 以下、本作品からの引用については、本文中に題名を『繁栄』と略記し、それにページ数を付けるだけにとどめた。また訳文は不都合のない限り上記邦訳をほとんど利用した。［　］内はその邦訳の該当ページを示す。
2. Prosper Lucas, *Traité philosophique et physiologique de L'hérédité naturelle dans les états de*
santé et de maladie du système nerveux, 2 vols, J.B. Baillière, 1847 & 1850. Émile Zola, «Docteur Lucas. Hérédité naturelle» *in Les Rougon-Macquart. Histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire,* vol. V, coll. Pléiade, Gallimard, 1967, pp. 1692-1728 & *La Fabrique des Rougon-Macquart. Éditions des dossiers préparatoires,* [vol. I] pub. par Colette Becker avec la collab. de Véronique Lavielle, Honoré Champion, 2003, pp. 84-143.
3. ルーゴン=マッカール家の構成員に振り分けられている遺伝類型の一覧はツリー状にまとめて前掲論考「第 1 編第三部　ルーゴン=マッカール叢書の肺癆」中の 60 ページに掲載している。参照されたい。
4. Émile Zola, *Op. cit., Les Rougon-Macquart,* vol. V, p. 1711 & *La Fabrique des Rougon-Macquart,* pp. 116-117.［NAS. 10345, f° 89］.　以下ゾラの草稿については、［　］内にフランス国立図書館草稿部門所蔵の草稿分類番号と丁付けノンブルを付記した。
5. Émile Zola, «Premier arbre généalogique» *in Les Rougon-Macquart,* vol. V, *Op. cit.,* inséré entre les pp. 1776-1777 & «Tableau généalogique», p.1779; *La Fabrique des Rougon-Macquart,* [vol. I], *Op. cit.,* pp. 158-163 ［NAS. 10345, f° 130］.
6. 《Hérédité du penchant à l'ivrognerie》, *Ibid.,* p. 1702 & pp. 102-103［NAS. 10345, f° 74］.
7. *Ibid.,* pp. 1719, 1728, 1733 & pp. 130-131, 142-143, 48-49 ［NAS. 10345, f°s 102, 115 et 21］.
8. *Ibid.,* p. 1711 & pp. 114-115 ［NAS. 10345, f° 87］.
9. 『日本大百科全書』小学館、『世界大百科事典』平凡社、『最新医学大事典』医歯薬出版株式会社、1996 年。
10. Émile Zola, *Les Rougon-Macquart,* vol. II, 1961, p. 1540 & *La Fabrique des Rougon-Macquart,* pp. 314-315.［NAS. 10303, f° 60］.
11. Émile Zola, *Émile Zola. L'Assommoir* du Colette Becker, PUF, p.34 & *La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol. II, 2005, pp. 936-937［NAS. 10271, f° 158］. ゾラは『居酒屋』に付した 1877 年 1 月 1 日付の「序文」でも同様の趣旨のことを語っている。「私は、パリの場末の汚濁した環境の中での、ある労働者一家の宿命的な失墜を描こうとしたのである。酩酊癖と怠惰の末に生まれる家族関係の解体、猥雑な雑居状態、誠実な感情の加速度的な忘却、そして、あげくの果ての汚辱と死。これこそ、生きた教訓で、それ以外のものではない。」（Émile Zola, *L'Assommoir, in Les Rougon-Macquart,* vol. II, p. 373［邦訳『居酒屋』古賀昭一訳、新潮文庫、1970 年、p. 5］この部分以下、本作品からの引用訳文については、拙稿の文脈との整合性の点で不都合のない限り上記邦訳を利用した）
12. Émile Zola, *L'Assommoir, in Les Rougon-Macquart,* vol. II, p. 376 ［邦訳、p. 8］. 以下、本作品からの引用については、題名『居酒屋』も適宜省略し、ほとんどの場合引用文後

にページ数を付けるだけにとどめた。

13. Jeanne Gaillard, 《Réalités ouvrières et réalisme dans *l'Assommoir*》, *Cahiers naturalistes*, n° 52, 1978, p. 33.
14. 喜安朗『パリの聖月曜日』平凡社、1982 年、pp. 9-30.
15. R. Romme, *L'alcoolisme et la lutte contre l'alcool en France*, Masson & Gauthier-Villars, sans date[1912], p. 80.
16. Jeanne Gaillard, Art. cit., p. 36.
17. 喜安朗、前掲書、pp. 214-215.
18. Émile Zola & Henri Mitterand, *Les Rougon-Macquart*, vol. II, pp. 1550-1553 (et la note concernant la p. de 749, p. 1597) & *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 760-763［NAS. 10271, f°s 2 & 3］. 『居酒屋』のテクストにはジェルヴェーズ一家の出来事に関わる具体的な年代の記述はいっさいない。したがって本論考中の年代はすべて推定年代であり、ミットランのプレイアッド版注記における推定とほぼ一致する。下記にテキストなどからこの年代推定の根拠を抜き出し、表にして整理したものを示す。なお表中でクーポーばあさんやラリーに関する記述に関しては、ゾラ自身が思い違いをしたのであろうか、計算が合わない。

章	『居酒屋』の記述	出版前のプラン	家系樹	ミットランの推定	史実
『繁栄』	ジェルヴェーズ 1828 年生れ		ジェルヴェーズ 1828 年生れ		
1	クロード 8 歳、エチエンヌ 4 歳(376)、5 月(377)、ランチエ 26 歳(380)、ジェルヴェーズ 22 歳(381)	1 章 1850 年 5 月	クロード 1842 年生れ、エチエンヌ 1846 年生れ		
2	クーポー 26 歳(404)、［クーポーばあさんは先月 3 日 62 歳］(413)、6 月末(418)、6 月(420)、6 月(423)、［7 月 29 日の結婚式予定］(429)	2 章			
3	クーポーとジェルヴェーズの結婚式(7 月 29 日)	3 章 1850 年 7 月 29 日	1852［1851--éd. de 1869］年ジェルヴ		5 月 31 日の法律(455)

			ェーズとクーポー結婚		
4	過酷な労働の 4 年(463)、4 月の末に新居へ引っ越し(465)、ナナ 4 月 30 日誕生(467)、3 年間無事過ぎた(475)、エチエンヌ 8 歳(476)、ナナ 3 歳(477)、5 月［クーポーが転落事故］(479)、［グージェが 9 月上旬結婚式予定］、クーポーは事故から 2 ヵ月(487)、さらに 2 ヵ月(488)、6 ヵ月経過(490)	4 章 1851~54 年 5 章 1854 年	ナナ 1852［1851--éd de 1869］年生れ		12 月 2 日の暴動、2 月と 6 月の見せしめ(475)
5	4 月［ジェルヴェーズ店を借りる］(492)、ジェルヴェーズ 28 歳(501)、6 月のある午後(503)、ラリー 2 歳(509)、7 月の夜(517)、エチエンヌ 12 歳、夏の終わり、ナナ 6 歳(518)、10 月末(521)、クーポーばあさん 67 歳(522)、3 年過ぎた(524)	6 章 1855 年 7 章 1858 年		1855~1858 年	
6	秋のある午後(526)、グット・ドール街の 4 度目の冬、12 月、1 月(543)、春(553)、ラリー 4 歳(557)	8 章 1858 年		1858 年	
7	ジェルヴェーズの誕生日 6 月 19 日(558)、6 月の宵 (570)	9 章 1858 年			
8	ランチエ 35 歳(597)、11 月初旬(599)、春(601)、6 月初め(604)、1 年過ぎた(610)、夏のさなか(611)、11 月初め頃(620)	10 章 1859 年 11 章 1859~60 年		1858 年 冬~1860 年 12 月	
9	12 月、クーポーばあさん聖アントワーヌの祝日[1 月 17 日]に 73 歳(633)、さらに 1 年間、夏(644)、秋、12 月(649)、1 月 1 日以前(650)、12 月一杯、1 月(652)、クーポーばあさん死去(653)	12 章 1860 年 13 章 1861 年		1860 年 12 月~1862 年初め	
10	13 年も時間が逆戻り、冬、3ヵ月(677)、6 月、ナナまもなく 13 歳	14 章 1862 年		1863~1865 年	

	(678)、それから 2 年、12 月、最初の冬、次の冬、1 月の家賃(683)、1 月のある晩(688)、ラリー 8 歳(689)、3 月クーポーアル中で入院(695)	15 章 1863 年			
11	ナナ 15 歳(708)、夏(709)、7 月(715)、冬(726)、11 月のある夜(738)、3 年間に 7 回入院(745)、［先の夏］(745)、初霜、冬(746)、6 月、7 月(747)、	16 章 1864~66 年 17~19 章 1867~68 年		1866~1868 年	ポワソニエール市門が壊され、マジャンタ通りとオルナノ通りが開通(737)
12	1 月 12 日か 13 日(749)、冬(753)、1 月の酷寒(761)、［長靴が夏の終わりに結婚］(762)、たった 20 年(766)、［グージェの母親が 10 月死去］(775)	18~20 章 1867~68 年		1869 年 1 月	屠畜場の取り壊し(768)
13	翌日(780)、1 週間(781)、クーポーがサン・タンヌ病院で狂死(794)、数ヵ月経過(795)、ジェルヴェーズ餓死(796)	21 章 1868 年	1869 年ジェルヴェーズ、アル中で死去		

（ ）はプレイアッド版『居酒屋』のページ、［ ］は想起、予定、ないし筆者の補足

19. Jacques Hillairet, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, 2 vols, Minuit, 1985［9e édition］. 以下本書への参照については、題名を『街路辞典』と略記する。
20. Louis Chevalier, *Montmartre du plaisir et du crime*, 1980, Robert Laffont, la note de la p. 94[p. 131] ［『歓楽と犯罪のモンマルトル』河盛好蔵他訳、文芸春秋、1986 年］. 以下本書を参照する際、題名を『モンマルトル』と略記し、参照ページについては上記邦訳の該当ページも［ ］内に付した。
21. Henri Mitterand, la note pour la p. 709 d'*Assommoir*, *op. cit.*, p. 1594,
22. Valentin Magnan, *De l'alcoolisme. Des divers formes du délire alcoolique et de leur traitement*, Delahaye, 1874. Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 870-877［NAS. 10271, fos 93-99］.
23. Naomi Schor, 《Saint-Anne, Capitale du délire》, *Les cahiers Naturalistes*, no 52, 1978, pp. 97-108.
24. La note de C. Becker *in* Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, p. 870.
25. Valentin Magnan, *Op. cit.*, pp. 3 et 256. ちなみにアルコール中毒が病毒物質（agent toxique）によって神経系を冒されたために発症するというアルコール中毒に関する病理学は、19 世紀半ば以来の疾病分類学を踏襲している（Cf. Alain Contrepois, *L'Invention des maladies infectieuses*, Éditions des archives contemporaines, 2001, p. 40.）。

26. R. Romme, *Op. cit.*, p. 100.
27. Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 874-875［NAS. 10271, f° 97］.
28. この部分に関しては、『19 世紀ラルース大辞典』、『世界大百科事典』（平凡社）の「ブランデー（eau-de-vie）」と「リキュール（liqueur）」の項を参照。
29. Didier Nourrisson, *Le buveur du XIXe siècle*, Albin Michel, 1990, p. 63[『酒飲みの社会史』柴田・田川・田中訳、ユニテ、1996 年、p. 59]. 訳文は上記邦訳による。
30. *Ibid.*, p. 65[p. 63]
31. これらの統計数字はジャン・スールニアの蒸留酒消費量に関する統計表（『アルコール中毒の歴史』本田文彦監訳、法政大学出版局、1996 年、p. 99）から小数点第 2 位を四捨五入して記したものである。ただしそこにはない 1904 年の数字については、同種のＤ・ヌリッソンのグラフ（前掲書、p.64[p. 62]）から割り出して付加した。
32. 『アルコール中毒の歴史』を書いたスールニアは、先に引用したコロンブの＜居酒屋＞の蒸留器について、それが酒場に置かれ始めたのはゾラが『居酒屋』を書いた 1876 年頃のことだとはっきり述べている（前掲書、pp. 98-99）。同じことが『居酒屋』の登場人物たちの社会意識についても言えるとしたら、彼らのブランデーに対する恐怖は 1875 年から 1880 年までのもっとも蒸留酒消費量が急増した時代の意識を反映していると言えるだろう。
33. Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 916-929［NAS. 10271, f°s 142-151］.
34. Denis Poulot, *Question sociale. LE SUBLIME ou le travailleur comme il est en 1870 et ce qu'il peut être*, Maspero, 1980, éd. originale publiée en 1870 [『崇高なる者。19 世紀パリ民衆生活史』見當尚人、岩波文庫、1990 年]. 以下、本書からの引用については、本文中に題名を『崇高なる者』と略記し、それにページ数を付けるだけにとどめた。また訳文は不都合のない限り上記邦訳を利用した。［ ］内はその邦訳の該当ページを示す。
35. Émile Zola, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 924-925［NAS. 10271, f° 148］.
36. Henri Mitterand, 《Étude》*in Les Rougon-Macquart*, vol. II, *Op. cit.*, pp. 1550-1555.
37. Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972［『物語のディスクール』花輪光・和泉涼一訳、水声社、1985 年］. なお上記から引用した語の和訳については邦訳書を利用した。
38. Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, vol. II, pp. 1550-1552. 正確に言うと、ゾラはプランの 7 章、12 章、15 章、19 章でそれぞれビジャール家のエーピソードに言及することを予定していた。それが本文中で示したように改められた章の中で、ただし言及する個所をさらに増やして取り入れるという結果になった。
39. ジャック・デュボワは構造主義的文学分析におけるグレマスの行為項《actant》という分析ツールを用いて、このビジャール、特に娘のラリーの役割に言及している（Jacques Dubois, *L'Assommoir de Zola. Société, discours, idéologie*, Larousse, 1973, p. 36-37）。
40. 『居酒屋』の全体構成については、主人公ジェルヴェーズの人生におけるの浮沈の軌跡にあわせて、彼女がパリ郊外のラ・シャペルで生活を開始する 1 章から彼女の 30 歳の誕生会が盛大に行われる 7 章にいたるまでを上昇曲線を描く前半とし、今度はその

7 章から下降曲線を描いて最後に 13 章においてジェルヴェーズが貧窮のどん底に陥ったあげく 41 歳の死で幕を閉じる後半として、形式的にシンメトリーで整然と組み立てられていると言われる。しかし、ジェルヴェーズの栄華を示す 7 章の誕生会は、よく見ると、象徴的ではありえても、経済的な観点からすればすでに彼女のピークを通り越しており、見せかけにすぎない。なぜならジェルヴェーズは近所の知り合いや親戚まで入れて 14 人も招待した結婚の披露宴と比べられるくらいの大宴会を企てたものの、すでにそのために肝心の金が底をつき、自分の結婚指輪までわたしてクーポーばあさんを質屋に走らせ 25 フランを借りてこなければならなかったし、またそもそも大そうな宴会を催すのは意趣晴らしをしようとたくらむヴィルジニーの口車に乗せられて、稼いだ金がクーポーのせいで酒に全部消えるのだから自分がごちそうを食べたとしてもかまわないという口実に妙に納得してしまったからだ。

41. Émile Zola, *Les Rougon-Macquart,* vol. V, p. 1712 & *La Fabrique des Rougon-Macquart,* [vol. I], *Op. cit.,* pp. 118-119［NAS. 10345, f° 90］.
42. Émile Zola, «Traité des dégénérescence de l'espèce humaine par B. A. Morel» (NAF10295, f°s 139), *La Fabrique des Rougon-Macquart,* vol. II, *Op. cit.,* pp. 306-307.
43. ジャン・スールニア、『アルコール中毒の歴史』、前掲書、「第 7 章　社会と民族を脅かす悪徳」、pp. 170-200.
44. Bénédict Auguste Morel, *Traité des dégénérescences physiques, intellectuelles et morales de l'espèce,* Arno Press, New York, 1976 [éd. orig. par Ballière, 1857]. 本書の第 I 章は「中毒物質による変性」であり、その章がすべてアルコール中毒に当てられている。
45. *Ibid.,* p. 126.
46. Émile Zola, *Nana, Les Rougon-Macquart,* vol. II, pp. 1269-1270［『ナナ』上・下、川口・古賀訳、新潮文庫、昭和 31·34 年、上、p. 264］. 訳文は一部変更個所をのぞき上記邦訳を利用した。
47. Émile Zola, *Germinal, Les Rougon-Macquart,* vol. III, p. 1170［『ジェルミナール』、『世界の文学 23』、河内清訳、中央公論社、昭和 39 年、p. 42］. 訳文は一部変更個所をのぞき上記邦訳を利用した。以下も同じ。
48. Émile Zola, *La Bête humaine, Les Rougon-Macquart,* vol. IV, p. 1043［『獣人、ゾラ・セレクション 6』、寺田光徳訳、藤原書店、2004 年、p. 78］. 訳文は上記邦訳を利用した。
49. Émile Zola, *Le Docteur Pascal, Les Rougon-Macquart,* vol. V, p. 1017［『パスカル博士』、小田光雄訳、論創社、2005 年、p. 128-129］. 訳文は以下も含めて一部変更個所をのぞき上記邦訳を利用した。
50. Émile Zola, *Le Docteur Pascal, Op. cit.,* p. 1219［p. 390］.
51. Isabelle Delamotte, *La médecine, le malade, et le médecin dans l'œuvre de Zola,* Atelier national de reproduction des thèses, 2003, pp. 256 et 497.
52. Émile Zola, *Germinal, Op. cit.,* p. 1524［p. 409］.
53. Michel Serres, *Feux et signaux de brume. Zola,* Grasset, 1975, p.189［『火、そして霧の中の信号』寺田光徳訳、法政大学出版局、1988 年、pp. 261-262］.

第　3　編

筆者は 1999 年に『梅毒の文学史』（平凡社）を上梓し、19 世紀のフランス文学における梅毒のあらましを既に考察済みである。したがって以下の論考は、その著作から洩れたエミール・ゾラ（1840-1902）の作品を考察対象にしており、既刊拙著の補遺という位置づけになる。

その後の梅毒

クロード・ケテルの『梅毒の歴史』が教えているように、[1] ゾラが「ルーゴン＝マッカール叢書」［以下たいていの場合「叢書」と略記］を執筆していた時期（1868-1993 年）に、梅毒は彼の同僚作家たちを苦しめ、また世間を恐れさせ始めるに及んで、われわれが先に検討してきた肺癆やアルコール中毒と並んで三大社会病の名を冠することができるくらいになろうとしていた。また梅毒は文学の主要なテーマである恋愛の裏面をなすもので、梅毒文学は特に 19 世紀に隆盛で、それ故に筆者が『梅毒の文学史』という著書によって検討を加えることが可能なほどであった。したがってゾラが病気に関して同時代の状況を自らの「叢書」に書き込もうとすれば、当然梅毒は肺癆やアルコール中毒と同じように重要な考察の対象となり、それなりの比重で作中に登場してくるはずであろう。

だがそうした予測に反して、ゾラの「叢書」には梅毒の語が「遺伝梅毒」（syphilis héréditaire）としてわずかに一個所、『金（かね）』の中に見られるだけで、[2] それも叢書の主役を務めるルーゴン=マッカール家の人々に関わって使われているのではないのである。ちなみにゾラの「叢書」の中でこの梅毒のテーマにもっとも似つかわしい登場人物といえば高等娼婦のナナであるが、期待に反してナナに関しては「梅毒」（grande vérole）が一向に話題にならずに、その代わりに梅毒の姉妹語と言っていい「天然痘」（petitie vérole）が、彼女の致命的な病気として登場しているにすぎない。

ゾラが社会問題と化していた梅毒に肺癆やアルコール中毒ほどにどうして「叢書」中で関心を示さなかったかという点については解きえない不思議な問題として残されるが、ともあれここでは「叢書」の中の梅毒の痕跡だけでも拾って、検討を加えておこう。

１．マクシムの運動失調症

梅毒の症状のひとつに運動失調症（ataxie locomotorice）がある。これは梅毒の典型的な重篤障害である脊髄癆（tabès dorsal）を原因とする神経障害で、それ故梅毒感染の晩期（第三期ないし変性梅毒期）に現れ、特に起立時や歩行時の下肢の平衡障害を引き起こす。平凡社の『世界大百科事典』（CDROM 版、日立デジタル平凡社、1998 年）を見ると、「脊髄癆労性失調症」（ataxie tabétique）の他に、現代では「小脳性失調症」や「迷路性失調症」もそのカテゴリーの中にはいるのだが（「運動失調症」の項目は岩田誠執筆）、狭義ではもちろん「脊髄癆労性失調症」を指している。

運動失調症の病因について、ゾラの時代の『19 世紀ラルース大辞典』の最初の版（1866-1876）では運動失調症は梅毒の症状に組み込まれていなかったのだが、1890 年出版の第 2 補遺では近年の研究成果だとして運動失調症が梅毒症候の一つに挙げられている。また 1864-1889 年発行のドゥシャンブルらによる 100 巻本『医科学百科辞典』の「梅毒」の項では、高名な梅毒学者アルフレッド・フルニエ（1832-1914）によって 1875 年以来「運動失調症」の原因に梅毒があることが主張されていると記される。[3] つまりゾラがマクシム・ルーゴン［／サッカール］を運動失調患者として叢書最終巻『パスカル博士』

（1893）に登場させたときには、それが梅毒の症候を示すものとして医学界では認め始められていたのである。

「ルーゴン=マッカール家の家系樹」中でも、マクシムについて「失調症」という記述は 1878 年版には見られなかったのに、『パスカル博士』に付けられた最後の 1893 年版になると初めて「1873 年失調症で死去」と記述されることになる。ちなみにそこでは、彼の遺伝類型は「拡散性混合型。精神的には父親が優勢で、身体的には母親に類似」と紹介されている。[4]

このマクシムはルーゴン=マッカール家の第 4 世代に当たり、『パスカル博士』で主人公のパスカルとのあいだにまるで聖書のルツとボアズの伝説を再現しているかのような若い娘クロチルドの実兄でもある。しかしむしろ彼の性行が詳細に語られているのは叢書第 2 巻『獲物の奪い合い』（1872）中においてである。そこでのマクシムは「女っぽい」（air fille）外観や性格を示し、「奇妙な両性具有者」（hermaphrodite étrange）と形容され、17 歳だというのに女中のジュスティーヌ・メゴとのあいだに子供を作り、また父親アリスティード・ルーゴン［／サッカール］の再婚相手で、彼自身とはわずかに 4 歳しか違わない義母のルネと相姦関係を持つなど、性的な放縦ぶりを印象づけている。その後 1863 年に 23 歳でルイーズ・ド・マローユと結婚し、その妻がその年に死去したため彼女の莫大な財産を受け継ぎ、アンペラトリース通りの邸宅にたった一人で有閑暮らしを営むにいたる。

彼が叢書 18 巻の『金』（1891）に再登場したときは、まだ 25 歳であるにもかかわらず「悪習（vice）のために早々に老けて」（p. 49[p. 59]）しまい、体の不調を早くも訴えていた。そこで彼自らが不調の原因に挙げていたのはリュウマチ（rhumatisme）であった（p. 123 [p.165]）。そのリュウマチの中でも、どうやらマクシムが患っているのは「慢性関節リュウマチ」（rhumatisme articulaire chronique）らしい。当時の病理学的状況を知るためにいつものように『19 世紀ラルース』を繙くと、リュウマチは神経病のカテゴリーに入り、体質が原因の、したがってたいていは遺伝に支配される病気と見なされている。リュウマチの病因として、この時代には、もちろん現代のように、免疫異常、遺伝子、およびホルモンの影響が話題になるにはいたっていない。リュウマチの代表的な症状としては関節が傷害されて運動機能に支障が生じるのだが、その他に『19 世紀ラルース』に記され、マクシムの描写にも利用されているのは、「年寄りじみた哀れな外観」（triste apanage de la vieillesse）である。

さて、叢書最終巻『パスカル博士』の舞台は南フランスの旧都プラッサン（エクス=アン=プロヴァンスがモデル）の近郊スレイアード、そこでは主人公のパスカル博士が研究にいそしんでいる。この小説の時点で 32 歳になったマクシムがパリから彼の伯父にあたるパスカルの家に立ち寄り、「このところの両足の激しい痛みで彼はもう自由に動けなくなり、肘掛け椅子に釘付けの状態だった。彼はそれをリュウマチだと思いこんでいた。」[5]と紹介されている。彼の運動機能障害は以前よりもさらに目立って悪化していたのである。

本人はもちろん、『金』の際の父親やパスカルのところに身を寄せていた妹のクロチルドも、マクシムのこの運動機能障害をリュウマチのせいだとみなしていたのに対して、医者のパスカルはめざとく彼の病気を「運動失調症」が原因だと見破っている。

「彼をよく見たが、歩き方が気になる。まず間違いない・・・つまり、あの青年は運動失調症（ataxie）に脅かされている。」

彼女は蒼白になって繰り返した、「運動失調症。」

まだ若かった、隣人の無惨な姿が浮かんできた。彼女は 10 年の間その青年が小さな車に乗せられ、召使いに引かれているのを見ていた。身体の自由がきかなくなるのは最悪で、生きる者から斧の一撃で生命を奪うのと同じではないだろうか？

「でも」と彼女がつぶやいた、「兄さんはリュウマチだとしか言ってないわ。」

（『パスカル博士』、p.979［pp.79-80］）

マクシムは本人や親、妹が思っているようなリュウマチのせいで体がきかなくなっているのではなく、医者のパスカルがここで言うように、運動失調症を患っている。リュウマチと運動失調症が紛らわしいのは、両者の痛みが共通して季節の変化や一日の時間の推移に左右されがちであることからも推測できる。[6] だがこの先小説では、マクシムの病気のことに触れる際、リュウマチではなくすべて運動失調症として処理されているし［pp.1136 & 1144 を参照］、またパスカルの手になると想定された「ルーゴン=マッカール家の家系樹」にもそのように明記されている。

リュウマチと間違われた運動失調症の症状を具体的に見よう。すでに引用した個所でマクシムの状態は「このところの両足の激しい痛みで彼はもう自由に動けなくなり、肘掛け椅子に釘付けの状態だった。」（『パスカル博士』 p. 966［p.63］）と述べられていた。両足の電撃痛（douleur fulgurante）は運動失調症の前駆症状としてよく言われるところであり、またその結果としての歩行困難も当然の結果であろう。その他の個所では脊髄が取りあげられている。

それに彼女［フェリシテ。パスカルの母親］はクロチルドの兄マクシムのことを誇りに思っていた。彼は終戦後に再びボワ=ド=ブーローニュ通りの館に居を構え、妻が残した財産を食いつぶし、骨髄（moelles）をやられた人間によくある慎重さから用心深くなり、せまりくる麻痺（paralysie）を何とか切り抜けようと策を弄していた。

（『パスカル博士』、p.928［p.15］）

「骨髄をやられた」というのは、運動失調症もその一つの症状に数えることのできる梅毒の第三期（英米系では第四期に分類）症状で、神経梅毒の典型である「脊髄癆」（tabès dorsal）を指し示していると考えられる。

また「麻痺」は「脊髄癆」と並んで梅毒の代表的な第三期症状である「進行麻痺」（paralysie générale）とは区別しておかなければならない。進行麻痺では痴呆症状など深刻な精神症状が身体症状と併発するからで［平凡社『世界大百科事典』、「進行麻痺」の項（加藤伸勝執筆）参照］、マクシムの場合は最後まで顕著な精神症状が指摘されることはなかった。マクシムの場合神経性身体麻痺と見なしてよかろう。

さてそこで想起されるのは、マクシムのいわゆるリュウマチを話題にするとき必ずといってよいほど原因としてほのめかされる彼の性的に放埒な生活である。『パスカル博士』の最後の方でも彼の性癖はあいかわらずで、34 歳で死ぬ間際にもまた若い娘ローズに溺

れてしまい、あれほど気を付けていたにもかかわらず彼女を派遣した父親サッカールに財産を巻き上げられてしまった。もちろんリュウマチが放蕩に起因することは考えられないので、語り手が放縦な生活によってほのめかそうとしているのはリュウマチではなく、パスカルが見抜いた運動失調症との因果関係である。するとわれわれが最初から想定していたとおりに、彼はその性的放埒さのゆえにどこかで梅毒にかかって運動失調症を発症したのだろうか。兄の介護のためにクロチルドが南仏からパリのマクシムの屋敷にわざわざ駆けつけたのに、それから数カ月語に運動失調症で斃れてしまうところをみると、どうしてもリュウマチや単なる運動失調とは考えられない。

２．マクシムは梅毒か

運動失調症が梅毒故の症候だとすると、マクシムははたしていつその梅毒に感染したか念のため問うておかなければならない。梅毒に感染する可能性が最も高いのは梅毒感染者と交接することである。その点に関してマクシムの場合は年代的にはっきり確認される。

> 彼はひどく賢明そうでブルジョワ的な様子の、この 32 歳のたくましい女性［ジュスティーヌ・メゴ］を目にしてとても驚いた。二人とも同い年の 17 歳になろうかというときに、彼が初めて異性を知ることになった（il s'est déniaisé）恋に狂う少女の面影は、彼女のどこを見てもまったくなかったのである。(『パスカル博士』、p.979［p.79］)

もちろん健康さに満ちあふれたマクシムの初恋相手ジュスティーヌが梅毒感染していたというわけではないし、そんなことはどこにも書かれてはいない。そうではなくてこの引用文が重要なのは、マクシムの感染はすくなくとも彼が 17 歳時のジュスティーヌとの初恋体験以降のことを指し示しているからである。

さて、彼は 25 歳でリュウマチを理由に不調を訴えていた。それが実は梅毒のせいだとして、ありえないことだが彼がジュスティーヌとは別の女性から最も早くて 17 歳の時に感染したと仮定すれば、まだ感染から 8 年しか経過していないことになる。最大で 8 年というのは第三期症状の運動失調症を発症するには早すぎる。なぜなら、現代の確立された梅毒の病理学からすれば、脳・神経梅毒症状として典型的な進行麻痺や運動失調もその一症状に数えられる脊髄癆が発生するのは感染後 10 年以上経ってからである。[7] ちなみにゾラの時代に感染後どのくらい経過して神経梅毒症状が発生すると見なされていたのか、何度も参照している『医科学百科辞典』の「梅毒」の項を見ると、梅毒感染の動かし難い証拠である「硬性下疳」(chancre induré）の発生後 1 年以内で神経梅毒症状が 168 症例中 31 パーセントにあたる 53 例で見られ、また全体の 75 パーセントが 10 年未満で発症しているとの統計例が報告されている（vol. 93, p.351)。この点からすれば現代の梅毒病理学を直接適用してゾラの考えを判断することは控えなければならないかもしれない。

だがそれにしても、梅毒病因論の 20 世紀に入ってからの劇的変化ならいざ知らず――梅毒の元凶であるトレポネーマ・パリドゥムの発見が 1905 年、進行麻痺を梅毒が原因だとする決定的な証拠としてトレポネーマ・パリドゥムが大脳皮質中に発見されたのが 1913 年、したがってそれまでは進行麻痺の特徴である精神疾患は必ずしも梅毒のせいだと見なされていなかった――、梅毒の臨床像（tableaux cliniques）を研究する症候学自体

がそれほど変化することは考えられないから、先ほどの統計報告の方が例外的なのであって、常識的に見ればやはりマクシムの運動失調症を即座に梅毒のせいだとするのは困難であろう。

またマクシムの場合、すくなくとも作中の叙述から判断する限りにおいて、梅毒の症候学からすれば第三期に位置する運動失調症が、第一期の特徴である硬性下疳、第二期のバラ疹などの皮膚疾患、第三期の代表的皮膚疾患であるゴム腫もなしに、いきなり発症しているという点が特異である。梅毒病理学からすればマクシムの症例はどうしてそのような典型的な皮膚疾患などを発症しないで運動失調症に直接いたることができたかを解決しなければならないし、先に取りあげた運動失調症の発症時期の問題も含めて解決しなければならない難点が多すぎる。しかもまたこれらの難点を克服する何らかの証拠を当時の資料から探し出してきたとしても、あまりにもマクシムのそれは特殊な症例になるということで、ゾラがそのような梅毒の特殊例を採用する何らかの理由があるのかということも問われるようになるだろう。

ゾラの「叢書」は始祖アデライド・フークに始まるルーゴン=マッカール一族に関する遺伝研究がテーマであった。それと大いに関係すると思われる梅毒に関する遺伝については、ちょうど 19 世紀末から遺伝梅毒が梅毒学者フルニエによって大々的に唱えられ始めていた。そこでマクシムについても遺伝梅毒に感染して運動失調症を発症したとみなされた可能性は考えられないだろうか。なるほど父親のサッカールは金にも快楽にも飽くなき欲望を示していたので、梅毒感染の機会はふんだんにある。だがそのような父親であっても、また彼の最初の妻でマクシムの母親アンジェルについても、「叢書」中に梅毒感染を疑われるような記述がこれといって存在しない。しかも作中に現れないマクシム胚胎時の親の梅毒感染や乳母からの感染という先天性梅毒――『医科学辞典』では「遺伝性」（héréditaire）と並べて「先天性」（congénital）という用語を定義中に初めて取り入れ、それまで曖昧だった遺伝性梅毒に対して先天性梅毒として明確な概念規定を与えようとする先駆的な試みをしている（vol. 93, p. 535）――の可能性も、すくなくとも作中から見る限りでは否定的だと言わざるをえない。

しかしその遺伝性梅毒とは別に、「叢書」の説話にとって鍵となる遺伝がマクシムの運動失調症に大きな影響を与えている点を見逃してはならない。ゾラに特に影響を及ぼしたプロスペール・リュカなどの遺伝学によれば遺伝病は神経を介して遺伝するから、[8] 運動失調症が典型的な神経病である限りにおいては遺伝が大きな影響を与えていると考えても不思議はないからである。『医科学辞典』では、運動失調症の病因の一つに遺伝を挙げている（vol. 93, p. 382）。したがってマクシム運動失調症は、遺伝類型からすると直接的原因が梅毒であるかいなかを問わず、その誘因となる異常な快楽嗜好を父親アリスティードから確かに受け継いだためであり、他方その快楽の悪影響で被害を蒙りやすい身体的な虚弱性は母親アンジェルから引き継いだからだと考えてよかろう。

再び梅毒の問題に戻って、もう一つマクシムの梅毒感染の否定的見解を取ることについて決定的なのは、医者パスカルないし小説の語り手の口からマクシムの病気について一度も梅毒という言葉を聞けないことである。彼らに梅毒を口にすることを妨げさせる理由はこれといって考えられないではないか。

ここで「叢書」の医療に関して詳細を検討している先行研究を紹介しておこう。最初は

自身が医者で、もっぱら当時の医学研究の状況と対比させて「叢書」に現れたゾラの医療記述を検討しているＹ・マリナスの主張である（『ゾラと想像上の遺伝』、1985）。

> ゾラはマクシム・サッカールに関して、当時の理論に応じて運動失調を性的放蕩に起因する一種の変性病（une maladie de dégénérescence）と見なしながらも、神経梅毒の進行を控え目であるが正確に記述し、それで数カ月語には急死してしまうところをざっと描いている。彼は二人の若者［兄マクシムと妹クロチルド］のあいだに印象的な対照関係を作り出し、厳密な遺伝法則が多様な仕方で実現するところを見たかったのである。ゾラがクロチルドを通して予感させようとしているのは、［遺伝の］呪いを断ち切って、未来にルーゴン＝マッカール一族の最たる健全さを保証してくれるような女性なのである。[9]

この引用の含蓄は深い。最初は運動失調症に梅毒とは別の性的放蕩を起因とする見方が当時あったことを示唆している点である。『医科学百科辞典』の「運動失調症」中にある「病因論」では、「梅毒の影響が疑われている」と比較的軽く触れられているに対して、「過度の性的快楽追求は脊椎病の原因の最たるものと見なされていた」（vol. 7, p. 57）と、以前からむしろこちらの病因論の方がはるかに一般に受け入れられていたことが明らかにされている――というのも過度の性行為によって脊髄の髄質が失われると考えられていたから。この病因論は相当な影響力を持っており、現にゾラがマクシムの破局的な病状を説明するために決定的な原因としてあげているほどである。

> しかしながら彼がとりわけ嘆いているのは自ら冒してしまったある過ちのことだった。それは褐色の髪のきれいな娘を拒みきれず、自分のところに迎えてしまい、彼女の腕の中に自分の残りの髄質（le reste de moelles）をゆだねるようになったことである。（『パスカル博士』、p.1136［p.282］）

つまり、運動失調症にはマクシムの放蕩な性行に合致し、しかも必ずしも梅毒に原因を求める必要のない病因論が当時存在していた、ということである。

第 2 のマリナスの重要な指摘は、マクシムの運動失調症が梅毒が原因でないと見られるにもかかわらず、神経梅毒ではないかと考えられるほどマクシムの死が急だった点だ。

一見すると矛盾しているマリナスのこの二つの主張は、しかしながら彼のように当時の梅毒病理学の不十分さに原因を求めれば両立させることができる。すなわちゾラは現代なら当然末期梅毒の歴然たる症候と診断される運動失調症をマクシムに見いだしているのだが、当時の病理学の不備からそこに梅毒病因ではなく異常な性的快楽嗜好を見ようとしたのである。

３．「ルーゴン＝マッカール叢書」における運動失調症の意味

結局マクシムの運動失調症は、表面的には当時の病理学にしたがって彼の異常な快楽嗜好が原因とされているが、実際には梅毒を病因と考えざるをえないというのがマリナスの主張である。しかしそれでもなおそこには、われわれが確かめてきたように、梅毒病理学

にのっとれば普通に見られる症状が欠落しており、いつまでも梅毒が原因ではないのかという疑問は解消されえない。同じくゾラ作品を医療の観点から研究した J-L・カバネスは、その点ではやはりマクシムが梅毒であったと断言するのをためらっている。[10] これに対して、比較的最近ではＩ・ドゥラモットがもっと積極的に、運動失調症のみならず、「麻痺」（paralysie）を「進行麻痺」と解して梅毒説を主張しているが、彼女が我々の提示した疑問を解消しているわけではないので、彼女の梅毒説に与するわけにはいかない。[11]

われわれはここまで、われわれの論考の主題が梅毒であるがゆえに、ゾラの「ルーゴン=マッカール叢書」でマクシムが患った致命的な運動失調症が梅毒であるか否かということにこだわってきた。しかしながらゾラが実際にマクシムの運動失調症の病因を梅毒であると明言しなかったのは、彼にとってマクシムが梅毒であるかどうかはそれほど問題でなく、彼が性的快楽の追求という致命的性行を父親から遺伝的に受け継ぎ、その結果として運動失調症で斃れたのだと示すことが最大の関心事だったのだろう。

ゾラは『パスカル博士』について残した「素描」でこう述べている。

> マクシムは病が重篤になったら自分のもとに彼女［クロチルド］を呼び寄せることが必要になろう。彼は体が不自由で（impotent）、失調症になってしまった（遺伝から生じる病）。医者［パスカル］は病気の予後の判断がつけられたし、彼がマクシムのそばにクロチルドを送り出すのは彼女が間もなく遺産を受け継ぐようになると分かっているからだ。[12]

先のマリナスの引用でも読みとれたことだが、妹のクロチルドの子の未来とは対照的に、兄のマクシムは自らが抱える遺伝が根本的原因の欠陥のために、自らの早すぎる死のみならず、そのせいで結局は「一族枯渇の最終表現」（「ルーゴン=マッカール家の家系樹」）で、血友病で死に絶えるシャルルしか子孫を残せなかったこともまた、ゾラがマクシムの運動失調症という変性的遺伝疾患を通して語りたかったことであり、またそのことこそ「叢書」の説話の展開にとってもっとも重要だったと思われるのである。

それでは梅毒は「叢書」にとってどれほどの意味を持つことになるのだろうか。マッカール家でその被害の甚大ぶりを露わにしていたアルコール中毒、それに劣らずムーレ家で猖獗をきわめた肺癆は、それぞれ一族の遺伝的悪影響を免れえなかった構成員やその末裔をあからさまに殲滅させた。それに対して梅毒はルーゴン家のマクシムという名の梢に半透明な影をわずかに現しただけで、その説話に対する影響力はアルコール中毒や肺癆と比ぶべくもないほど微々たるものである。あれほど当時のフランスの医療に敏感に反応していたゾラであったにもかかわらず、アルコール中毒や肺癆と並んで 19 世紀末のフランスで三大社会病と並び称されるようになる梅毒については、どうしてこれほど言及を差し控えたのか逆に大きな謎として残されたままである。

【注】

1. Claude Quétel, Le mal de Naples. Histoire de la syphilis, Seghers/Robert Laffont, 1986［『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、1996 年］.

2. Émile Zola, *L'Argent, in Les Rougon-Macquart*, t. V, coll. Pléiade, Gallimard, 1967, p. 149［邦訳『金（かね）』野村正人訳、藤原書店、2003 年、p.202］. 以下本作品からの引用については『金』と作品名を記し、引用ページを付加するだけにとどめる。なお訳文は上記邦訳を参考にしたが、文脈の都合で改めたところがある。
3. *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, sous la direction de Raige-Delorme et A. Dechambre, Victor Masson, 100 vols, 1864-1889, vol. 93, p. 379. 以下この辞典への参照は巻数とページ数のみ本文中に表記するにとどめる。
4. 「ルーゴン=マッカール叢書」の遺伝類型に関する詳細は前掲論考「第 1 編第三部 ルーゴン=マッカール叢書の肺癆」中の「遺伝類型と肺癆」（p.58）で述べている。参照されたい。
5. Émile Zola, *Docteur Pascal in Les Rougon-Macquart*, t. V, *Op. cit.*, p. 966［邦訳『パスカル博士』小田光雄訳、論創社、2005 年、p.63］. 以下本作品からの引用については『パスカル博士』と作品名を記し、引用ページを付加するだけにとどめる。なお訳文については上記邦訳を参考にしたが、文脈の都合で改めたところがある。
6. «Ataxie locomotrice progressive» *in Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, *Ibid.*, vol. 7, p. 57. 以下この辞典への参照は、(3)と同様、巻数とページ数のみ本文中に表記するにとどめる。
7. 寺田光徳『梅毒の文学史』、平凡社、1999 年、pp.15-16。
8. Les notes d'Émile Zola, *in* «Docteur Lucas. Hérédité naturelle», *La Fabrique des Rougon-Macquart*, pub. par Collette Becker avec la collab. de Véronique Lavielle, Honoré Champion, 2003 [NAF10345, f° 61, pp.88-89 et NAF10345, f° 106, pp. 134-135] et *Les Rougon-Macquart*, t. V, coll. Pléiade, Gallimard, 1967 [NAF10345, f° 61, p. 1694 et NAF10345, f° 106, p. 1722].
9. Y. Malinas, *Zola et les hérédités imaginaires*, Expansion Scientifique Française, 1985, p. 158.
10. Jean-Louis Cabanès, *Le corps et la maladie dans les récits réalistes*, 2 vols, Klincksieck, 1991, p. 417.
11. Isabelle Delamotte, *La médecine, le malade et le médecin dans l'œuvre de Zola*, Atelier national de reproduction des thèses, 2003, p. 208 *et passim*.
12. La note d'Émile Zola [f°s 37-46 de la coll. Bodmer], *in* «Étude pour *Le docteur Pascal*» d'Henri Mitterand, *Les Rougon-Macquart*, t. V, *op. cit.*, p. 1590.